

沖縄県立博物館紀要

第 26 号

BULLETIN OF
THE OKINAWA PREFECTURAL
MUSEUM
No.26

2000

目 次

前田真之：視覚障害者とミュージアム アクセス	1
与那城義春：メジロの繁殖	21
嵩原建二・池長裕史・金城道男・渡久地豊・金城輝雄・庄山守： 沖縄県内において野外観察や傷病鳥の保護及び 博物館収蔵標本等により確認された興味深い鳥類の記録について	27
宮城朝章・嵩原建二：末吉公園の植物とオオコウモリの餌植物について	47
伊波悦子：教育普及の実践：高等学校の取り組みを通して	85
園原 謙：沖縄県の文化財保護史－昭和初期から琉球政府時代の活動を中心に.....	113
仲底善章：博物館における三線づくり	157
園原謙：ハワイ在の三線について	173
多良間利絵子・喜久川智子：博物館文化講座考Ⅱ －高校生博物館意識調査アンケートより－	183
與那嶺一子・山田葉子：〈史料紹介〉吉濱家文書「紬関係書類」より紬関係資料九題	219 (1)

沖 縄 県 立 博 物 館
OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM

沖縄県立博物館紀要

第 26 号

沖 縄 県 立 博 物 館

目 次

CONTENTS

前田真之：視覚障害者とミュージアム アクセス	1
Masayuki MAEDA : People with Vision Problem and Museum Access	
与那城義春：メジロの繁殖	21
Yoshiharu YONASHIRO : Notes on the Breeding <i>Zosterops japonica</i> in Chinen High School of Yonabaru Town, Okinawa Prefecture	
嵩原建二・池長裕史・金城道男・渡久地豊・金城輝雄・庄山守： 沖縄県内において野外観察や傷病鳥の保護及び 博物館収蔵標本等により確認された興味深い鳥類の記録について	27
K. TAKEHARA, H. IKENAGA, M. KINJYO, Y. TOGUCHI, T. KINJYO and M. SHOYAMA: Interesting Birds Records that were Observed recently in the field on Okinawa Prefecture, Given Medical Care by Okinawa Zoo and Specimen Owned by Okinawa Prefectural Museum	
宮城朝章・嵩原建二：末吉公園の植物とオオコウモリの餌植物について	47
C. MIYAGI, and K. TAKEHARA, : Flora and Plants of the Flying Fox Sueyoshi Park in Naha - City	
伊波悦子：教育普及の実践：高等学校の取り組みを通して	85
Etsuko IHA : The practices of the Educational Activity for the Students of Senior High School	
園原 謙：沖縄県の文化財保護史－昭和初期から琉球政府時代の活動を中心に.....	113
Ken SONOHARA : A Concise History of the Protection of Cultural Properties by the Okinawa Prefectural Government:Covering the Preservation Activities from Showa Era to the Government of Ryukyu Islands Period	
仲底善章：博物館における三線づくり	157
Yosiaki NAKASOKO : Museum Workshop : Making a Sansin	
園原謙：ハワイ在の三線について	173
Ken SONOHARA : In Relation to Sanshin Research in Hawaii	
多良間利絵子・喜久川智子：博物館文化講座考Ⅱ —高校生博物館意識調査アンケートより—	183
Rieko TARAMA and Tomoko KIKUGAWA : Evaluation on Research from the Students of Senior High Schools	
與那嶺一子・山田葉子：〈史料紹介〉吉濱家文書「紬関係書類」より紬関係資料九題	219 (1)
Ichiko YONAMINE and Youko YAMADA : Nine Historical Records Concerning <i>Kumejima-</i> <i>Tsumugi</i> Included in Documents of YOSHIHAMAS	

視覚障害者とミュージアムアクセス

解説の試みをとおして

前田 真之

(沖縄県立博物館)

People with vision problem and museum access

Masayuki MAEDA

(Okinawa Prefectural Museum)

はじめに

近年 博物館においては、すべての人に利用していただきため、来館者の多様なニーズにきめ細やかに対応できるあり方が論議されるようになってきた。

とりわけ障害者への対応については、それぞれの館でどのような形で実現が可能であるのか、この課題の検討が差し迫ったものとなってきている。この課題については、それぞれの館の実状に即しながら可能な方向を探っていくことが必要であることは言うまでもないが、その手がかりとしてアメリカの70年代以降の状況などを参考にすることも必要である。

アメリカにおいては、障害者対応に関連して1973年にリハビリテーション法(Rehabilitation Act)が制定されている。そこでは、全ての人がプログラムの恩典を享受できるよう平等な機会提供を行うこと^(注1)の重要性が指摘され、そのために施設構造やプログラム活動を通してアクセスが配慮されなければならない^(注2)と定めている。同法504条では「ハンディキャップを有するアメリカの人々は、ハンディキャップを有するという理由のみにより、参加を排除されたり便宜を拒絶されたりしてはならないし、また連邦からの財政的支援を受ける活動やプログラムのもとでは差別を甘受する必要もない」^(注3)と定め、障害者を特別視するのではなく、全ての人に平等な機会提供を行うという考えが貫かれている。しかし同法にはアクセスを保障するための具体的な規定は見られず、その後の法律の制定を待つことになる。

1988年の公民権法(Civil Rights Restoration Act)^(注4)でも「いかなる施設のプログラムも、連邦の支援を受ける場合は、そのプログラムに全ての人が接近可能でなければならぬ」と規定されたが、その後1990年に制定された障害者法(Americans with Disability Act: 通称はADA法)^(注5)が、物的な面のみならず人的な面に於いて、全ての人が公共施設を利用できるよう具体的な内容を盛り込むようになった。そこでもリハビリテーション法と共に

する考え、すなわち障害者だけを特別に扱うというのではなく、“全ての人に平等な機会を提供する”という考えが貫かれていることは言うまでもない。しかしその社会的な背景としては、ベトナム戦争後に問われたアメリカの博物館のあり方があることには気をつける必要がある。^(注6)

一方、日本の博物館における障害者対応はどのような状況にあるのだろうか。

日本に於いては、東京にあるトムギャラリーが視覚障害者を対象とする展示企画に意欲的に取り組んできたが、そのほかにも名古屋市美術館が1989年と1992年に「手で見る」展覧会を企画^(注7)、さらに1994年にも「心で見る美術展 私を感じて」を開催している。また1996年には東京大学でパネルディスカッション「視覚障害者のミュージアムアクセス」が開催され、さらに1998年3月にも、神奈川県立博物館でシンポジウム「ユニバーサル・ミュージアムをめざして—視覚障害者と博物館—」が開催されている。これらの展示やシンポジウムは、それまで障害者への対応が不十分にしか取り組まれてこなかった状況を前提にするならば、大きな意義を有することは言うまでもない。しかしその試行錯誤的な試みの中には、これから改善を必要とする点も幾つか出てきている。

名古屋市美術館が「心で見る美術展」において視覚障害者のために用意した解説テープを、琉球大学及び沖縄国際大学の「博物館経営論」の授業の中で学生に聞かせ、それをとおして“学生がどれだけイメージ化できるのか”作業を行わせたところ、解説の内容の情報過多、説明対象に関する全体と部分との相互関係の不十分さから、解説の対象がどのようなものであるのかイメージ化するのが困難であった。障害者に対する意欲的な取り組みという点では評価できるが、解説の内容はイメージ化できるまでには十分なものとはなっていない。その原因は、ジュリア・カセムの言葉によるならば「作品を見ることができない人が、頭の中ではっきりしたイメージを作れるよう、描写をする上で不可欠な要素は何か」^(注8) ということが十分配慮されず、過剰な情報が提供されているためである。

また神奈川県立生命の星地球博物館でのシンポジウムでは、主として自然系の博物館における障害者対応が話され、そこでは骨格標本等の裸展示や体験のできる展示の取り組みが紹介された。しかし古文書などを扱う歴史などの人文社会科学分野での障害者対応については、参加者の関係で十分な論議が行われなかった。

全ての博物館資料が触れるものではないことを前提にするならば解説の持つ役割には無視できないものがあり、今後とも実践を深めていく中で、解説の質を問うことがますます必要になってくると思われる。1997年に全国の博物館・美術館に対して視覚障害者・聴覚障害者への配慮水準アンケート調査を行った村上良知氏は、アンケートへの回答から「博物館スタッフは、設備の充実を前提にしつつ、人的対応を重視している。財政的に設備を充実できない代償という面がないわけではないが、柔軟できめ細かく分かり易い解説がで

きるという点で機器設備より優れていると認識されている。」^(注9)と結論づけている。

村上氏の指摘しているように、“柔軟できめ細かく分かり易い解説”に向けての取り組みは、消極的な意味のみならず積極的な意味においても、注目に値するものといえよう。

本稿では、“視覚障害者に対し解説をとおしてどのような試みができるのか”という観点から、とりわけ“対象に関して部分と全体との統合をどれだけ意識してイメージ化した解説が行えるのか”、沖縄国際大学の学生に実験的に試みた内容を紹介し、それをとおしてこれから解説のあり方を検討しようとするものである。

1. 視覚障害者の認識方法

視覚障害者が、対象に関する認識をどのように獲得していくのかについては、筑波大学の鳥山由子先生が次のように述べている。

「『一目瞭然』という言葉があるように、視覚はすばやく全体を把握することに優れた感覚です。視覚に障害があるということは、この「全体像」の把握に手間ひまがかかるということになります。

指先で一度に触れる範囲は限られますから、両手を使って手を動かしながら、部分を触り、それが全体のどこにあたるかを確認し、また部分を触るという作業を繰り返して、頭の中に全体像を作り上げていかなければなりません。」^(注10)

鳥山先生の指摘にもあるように、視覚障害者にとって触るということが彼らの認識において大変重要な役割を持っていることが分かる。そしてこの触る活動を通して、頭の中で「部分と全体」との統合がはかられ、全体像が形成されることが分かってくる。ここで述べていることは触れることができる対象を前提にしての話ですが、触れることができない場合にも、頭の中では絶えず部分と全体との統合をはかり、それをとおして確かな全体像を作り上げていく同様な作業が行われていることが推察できる。グロフとガーディナーも、その著に於いて、「視覚障害者は晴眼者と異なる方法で対象を考察する。視覚障害者は、細かな部分からスタートしてその次のところに移動するなど、対象を連続して考察している。彼らが対象を考察するときの順序は、個々の部分からなる全体像を確実なものにするため（たとえば左から右へとか、あるいは中心から周辺へというように）固定的かつ体系的なものとなっている。彼らは、詳細部分について確かめたあとに、全体像を形成するのである。」^(注11)と述べている。

2. 視覚障害者への対応：解説における部分と全体の統合一学生のレポートから

沖縄国際大学の博物館経営論の授業の中で、二つの課題を与えた。

一つは、誰でもすぐ手に入れることのできる“ビールの缶”を素材にしたスケッチとそ

れをもとにした“目をつぶってもイメージ化できる解説”の試みである。

二つ目は、一の課題実践を参考にしながら、実際に自分の選んだ博物館・美術館に出かけ、館の資料を対象にして解説を試みることであった。

① ビールの缶を素材にした解説の試み

まず一つ目の課題として与えた解説の試みについては、“目をつぶってもイメージ化できる”という以外には特別の指示を与えず、学生がどのような解説文を作るのかを見ることにした。レポートの提出者は63名。このレポートの中で、“ビールの缶が上面、側面、底面の三つからなり、これから行おうとしている解説がどの部分の解説なのかを意識し、それをとおして全体像の形成につながるような文づくりを行っているのか”を評価の視点とした。64名のうち43名（67%）が缶の全体像に触れ、その中で部分の説明を行っている。残りの20名（33%）は、いきなり細かな説明に入り、この説明が缶のどのあたりの説明なのか分からぬ状態となっている。

下記に紹介した資料2の解説を見ることがある。

この解説の良いところは、「全体的な形は円柱である」と全体の形を先に説明し、その後の大きさの説明やタブの形状についても単位を示すcmで表したりせず、手の大きさをたとえにしたような具体的なものになぞらえて説明していることである。側面についても、見る人を中心に正面と裏側に分け、正面はさらに真ん中、その上、さらに上という形で場所をはっきりさせながら説明を行っている。あとはY. エドワーズが言う解釈するわち「ものに対する新たな見方、新たな熱意、そして新たな興味」^(注12)を生み出す方向に来館者を仕向けていくため、どこに着目させるのかという課題が残るだけである。

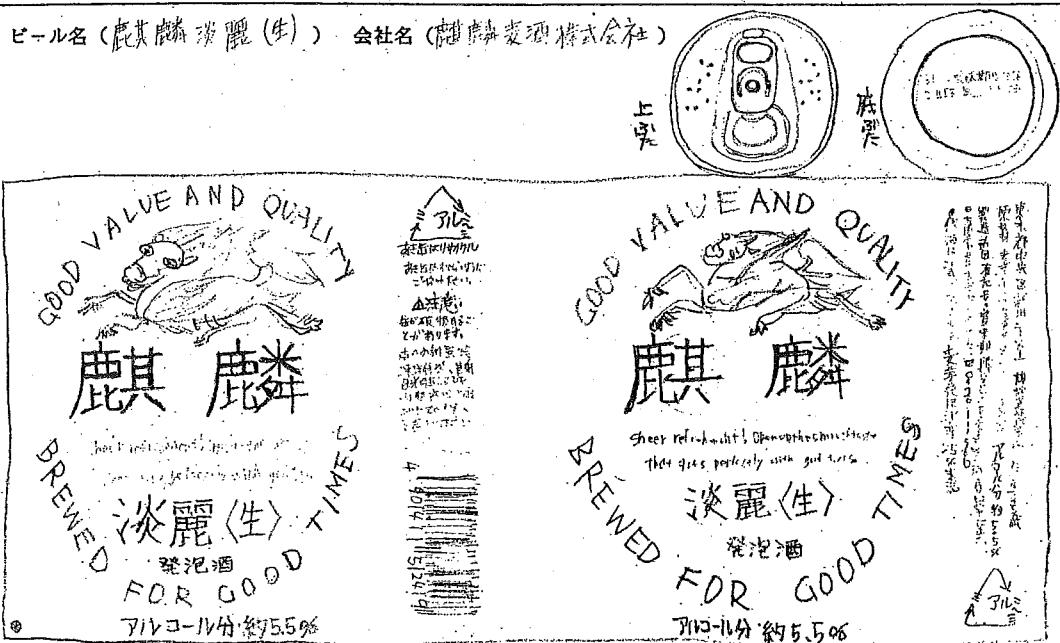
資料 1

ビール缶の質問づくり

No.1

沖縄国際大学 学籍番号() (I・II)部() 学部()年 名前()

*与えられた資料をスケッチしたあと、その資料を観察して質問をつくりましょう。(11/13の授業時に提出)



*質問が20以上にわたる場合は、用紙の裏に書いて下さい。

1	ビールの缶とビンとでは味はどちらがうのか。
2	ビールのふたのところのふつぶつは何をいみするのか。
3	ビール生のながせはいつまでもいいのか。
4	ビール生の上部にかけてハレヌリタナフミ、といふのはなぜか。
5	なぜ缶の底に賞味期限が書かれてないのか。
6	ビールの原材料はなにか。
7	発泡酒とはどうりう意味で普通のビールとはちがうのか。
8	瓶ビールとたてのビールとは何がちがうのか?
9	ビールにはなぜ酸酵剤が入っているのか。
10	その炭酸の効果はいか。
11	ビールはなぜにがいのか。
12	そのにがさへいいところは何か。
13	ビールにアルコールは絶対に必要なのか。
14	ビールは空腹を満たすのか。
15	カロリーは高いのか。
16	ビールは1日にどれくらい飲んだ方が健康的にいいのか。
17	ビールはどこで生まれたのか。
18	ビールはなぜ世界中の人気者なのか。
19	ビールはどの国、地域で多く飲まれているのか。
20	国内のビール会社はなぜ少數に限られているのか。

資料 2

No. 2

沖縄国際大学(I・II)部 () 学部 () 年 学籍番号 () 名前 ()

課 题

ビールの缶について作った質問を参考にして、目をつぶってもイメージ化できる解説を試みよう。

全体的な形は、円柱である。太さは、両手で握りこみ出来るくらいで、片手でも持ちこなす。底は、平ニスボルを少しカットしたくらいのドーム状のへこみがある。上の面は、真ん中にデジタル時計の日のような形をしたタブ、つまりヒゲがあり、その両わきには、点字のようなぶつぶつが、うつづつ立っている。それと、この円柱は、まる胴とした円柱ではなく、上の面と底の面に角があり、少しくびれている。そのくびれの幅は、つめの高さくらいである。

この缶の全体の色は、黒色よりも白色である。そして、缶を自分の前に置いたとき、正面と、裏側には、同じ絵柄がある。その絵柄の内容は、真ん中に横書きの漢字で、鹿児島と大字で書かれており大きさは、大人の男性の親指をあてても少しひねりで、客くらい大きめに書かれている。その上には、架空の鹿児島の絵が書かれている。その下には、左側で車に乗って走っているか、車は、右側で走っている。さらにその上には、アーチ状に、GOOD VALUE AND QOLITYと大文字で書かれている。そして、真ん中の鹿児島の字の下には、小文字で、Sheer refinement! Open up the smooth taste that goes perfectly with good times.と二行で書かれている。また、その下には、真ん中の鹿児島の文字の大きさの1/4くらいで、淡麗(せうり)と中央に書かれ、さらにその下には、この淡麗(せうり)の1/4の大きさで、アルコールと瓶中央にある、その下には、上のアーチ状の英語とつながるかのように、逆さのアーチ状で、BREWED FOR GOOD TIMESと大文字である。

一番下には、アルコール分 約5.5%と書かれている。

次に、この絵柄の横の側面には、一方には、会社名や原料などと書かれており、もう一方には、アルミのリサイクルマークや、バーコードがあり、注意書きは、木箱書きである。最後に、この缶はアルミづくりで、指で側面をあすと、ホコホコとへばり、強くにぎるとつぶれるようなおもしろい感触である。

おわり。

② 博物館・美術館を訪ねての解説の試み

ビールの缶を素材にした解説の試みのあと、今度は実際に博物館・美術館を訪ねて解説の文づくりを行わせることにした。そこで課題は、自分で選んだ博物館・美術館を訪ね、ガラスケースの中に入っている資料を3点選び、①スケッチをすること、そして②目の見えない人でも3点の資料についてイメージ化できるような解説を試みるということであった。レポート提出者は62名であった。ここでも解説にあたり、“部分と全体との統合が解説の中でどのように行われているのか”を評価の視点とした。62名中57名（92%）が部分と全体との関係に配慮しながら解説文づくりを行っており、前回に比べると25%の増となっている。このレポートの中から全体の形状に関する説明を以下に挙げてみる。

資料4 開元通寶の説明	日本円の10円玉よりひと回り大きいくらいの円形
資料5 離頭鈎状骨製品の説明	大きさは、一般の女性の人差し指くらいの長さの円柱で、太さはその小指ほどで細い。全体的に4等分づつで区切られており先端の方はとがっている。そして、その先端に向かって区切りごとに細くなっています。まるで4つの円錐を差し込み積み重ねたような感じである。
資料6 貝錘の説明	大きさは手のひらサイズのものから握りしめられそうなものまでいろいろある。そして貝の模様は、横に波うつようにギザギザしたものもあれば、きれいに縦ラインの入った貝もある。
資料7 荻道式土器の説明	くちの部分はとても大きくあいていて下へいくにつれて細くなっています。くちの部分はひし形の上半分形のようにとがっています。
資料8 玉元輝政作品の説明	この作品の形は典型的な壺の形はしておらず、まるでバイオリンのような形をしています。
資料9 ノロの勾玉の説明	いわゆる首にかけるネックレスで親指～小指ほどの玉が25こ小さな穴にヒモをとおしてつながっています。
資料10 南蛮瓶の説明	人が両手で抱きかかえて持つほどの大きな壺です。口の部分は全体の割には小さく、口からすぐに斜め下横に広がり、全体の1/5くらいのところでまたすぼまっています。底は口の部分よりは一回り大きいくらいです。口の回りに4つ、東西南北の位置に取つてをかざりにしたような親指の長さほどのものがついています。
資料11 銅鏡の説明	昔の古い手かがみで手の平ほどの円形の下に柄がついています。
資料12 闘牛の水墨画の説明	2頭の牛がつのとつのをからませて、まさに今闘っている最中の絵が描かれています。
資料13 裸婦デッサンの説明	一人の全裸の女性が背中を向けて両手を頭の上でクロスさせて座り込んでいる。

全体の形状については、資料8の「まるでバイオリンのような形をしています」のような具体的なものになぞらえた説明が、イメージ化しやすい。

資料 3

沖縄国際大学「博物館経営論」課題レポート（担当：沖縄県立博物館教育普及課長 前田真之 ☎ 884-2243）

課題

「博物館あるいは美術館を訪ね、ガラスケースの中に入っている資料を3点選び、①スケッチをしよう。②そして目の見えない人でも3点の資料についてイメージ化できるようそれぞれにあなたなりの解説をこころみて下さい。」

（見学の計画）

- ① 見学に行く博物館・美術館を決める。レポートには見学に行った博物館・美術館名を必ず記載すること。
名前記載のないものは、評価の対象としないので気をつけて下さい。

- ② ガラスケースの中に入っている資料のみを対象に選んで下さい。

- ③ スケッチは、線描で済いめに書いて下さい。

（レポートの提出期限）

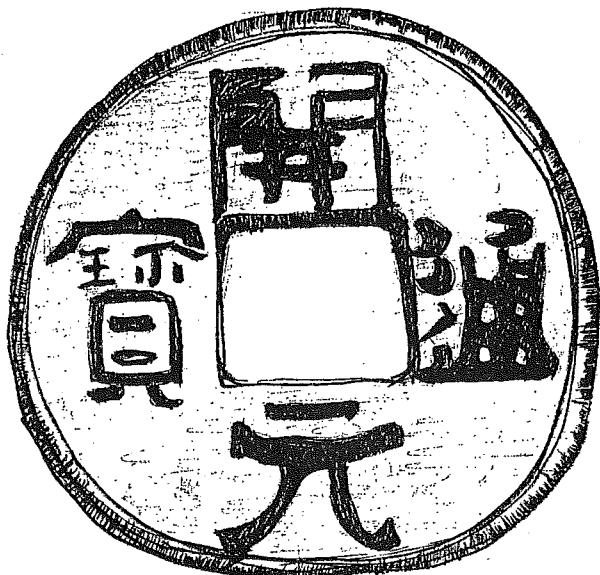
* 11月27日（土）の「博物館経営論」最終講義の日に提出すること

資料 4

沖縄国際大学(I・II)部 () 学部 () 年 学籍番号 () 名前 ()

*見学先の博物館及び美術館名 (宜野湾市立博物館)

ガラスケースの中にある資料①のスケッチ



開元通寶 621年（翁長良明氏寄贈）

目の見えない人がイメージ化できる解説を試みる

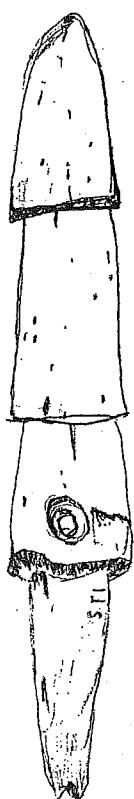
中国の唐の時代に使われていたお金らしく、西暦621年から約228年間
つくられていたものである。大きさは、日本円の10円玉よりひとまわり大きいくらいの円形で、
厚みは、10円玉と同じくらいにせえた。このお金は、1959年に沖縄島嘉手納町
の野原貝塚で発見されたもので、全体的に錆びた感じで、焦げ茶色
をしている。そして、真ん中には四角の穴がありしている。その穴の大きさは、玉を
縦に三等分、横に三等分したときの9つの部分の真ん中を取ったような大きさ
である。さらに、上下左右には、文字が彫られており、上には「開」、下には
「元」、右には「通」、左には「寶」と漢字で浮き彫りになっている。また、
千年以上のお金であるせいか、その文字はところどころ欠けている。
↑

宜野湾市立博物館

ガラスケースの中にある資料②のスケッチ

リムカリ いわはせひん
角住頭金鉛杖骨製品

(新城下原遺跡出土)



目の見えない人がイメージ化できる解説を試みる

ジュゴンの肋骨で作った金舌である。貝塚時代のBC8000～10c頃使われていた。大きさは、一般の女性の人差し指くらいの長さの円柱で、太さは、他の小指ほどで細い。全体的に4等分つつて区切られていて、先端の方はとがっている。そして、その先端に向かって匹切カリごとに細くなっており、まるで、4つの円錐を、差し込み、重ねたような感じである。（未端の方は先端ほどではないが、とかりきめてある。）この金舌の使われ方が、魚に向かって投げつけ刺すものであったから、金舌が魚から抜けないようにするために工夫された形である。また、金舌が魚に刺さると柄から離れる仕組みとなっていたらしく、4等分に分けたうちの先端からを目にまぶしくりぬかれた跡がある。その穴にひもか何かを通して、そのひもは、釣り糸のように使われていたと思われる。色は骨色（白）である。

資料 6

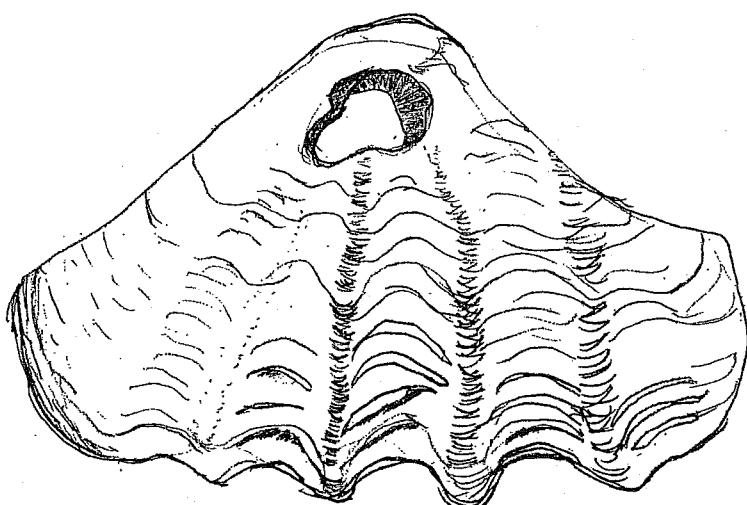
宜野湾市立博物館

ガラスケースの中にある資料③のスケッチ

かいすい

貝錘

(真志喜安座間原第1遺跡出土)



目の見えない人がイメージ化できる解説を試みる

魚をとる網にぶら下げる、おもりとして使われていた二枚貝である。大きさは手の平サイズのものから握りしめられる程度のものまでいろいろある。そして貝の模様は、横に波うつようにギザギザしたのもあれば、きれいに縦ラインの入った貝もある。今回ここにスケッチした貝は、手の平くらいの大きさで、扇形をしていて、爪の部分が波うつようにくねくねしている。そして表面に、手の指の切れた爪のようだが、爪と平行に、波うつ併列も並んでいて、その爪は爪に向かってだんだんと大きくなっている。そして、この貝は網にぶらさげられるように扇形の取手の部分の場所に穴が空いている。沖縄の浜ですぐ“つけられ”て小さなしゃこ貝に穴が空いたおもは“白い貝貝”である。

資料 7

沖縄国際大学()Ⅱ部 ()学部 ()年 学籍番号 () 名前 ()

読谷村立美術館

*見学先の博物館及び美術館名(読谷村立歴史民俗資料館)

ガラスケースの中にある資料①のスケッチ



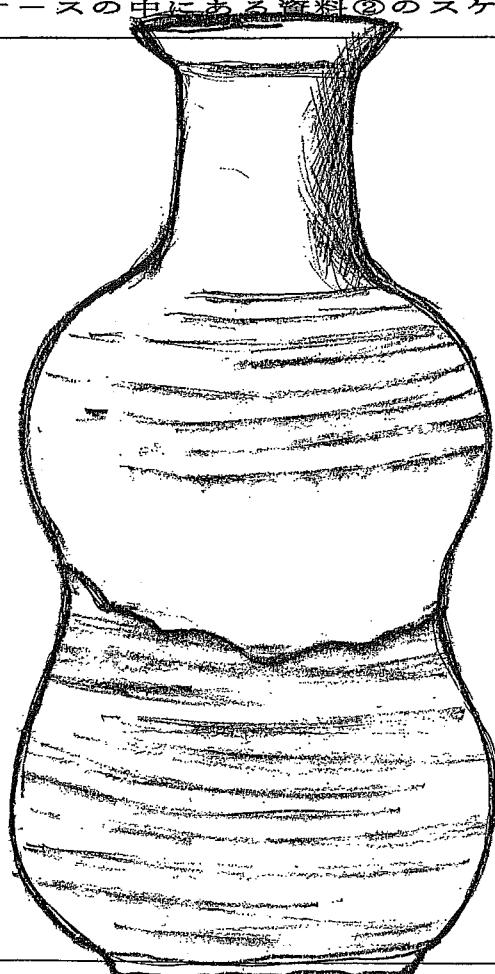
目の見えない人がイメージ化できる解説を試みる

この作品は、深鉢山形口縁土器といいます。渡具知木糸島原遺跡で発見されました。この土器は、石破片をあわめて、たりながら部分は赤土のようなものでつなぎ合わされて、復元されています。石破片は大きなものから小さなものと様々です。数的にはおよそ16枚程度です。くちの部分はとても大きくありて口程度です。くちの部分はとても大きくなっています。下へいくにつれて細くなっています。復元なのできれいな形ではありません。くちの部分はひし形の上半分の形のようになります。この作品は底が安定してなりたため三脚のようなものでささえられています。

資料 8

読谷村立美術館

ガラスケースの中にある資料②のスケッチ



目の見えない人がイメージ化できる解説を試みる

この作品は、玉元輝政さんの作品です。この作品の形は、典型的な壺の形をしておらず、まるで「ハイオリン」のような形をしています。くちの部分は親指を水平にのばした程度の長さです。その下には、5cmくらいの細い筒状の部分が続いています。そして、最初のふくらみが壺の半分を占めその真ん中がくびれていて、次にまたふくらみがきます。色はとてもうすい水色で、真ん中の所に白い波のようなものが下にむかって流れています。

資料 9

沖縄国際大学（I・II）部 （ ）学部 （ ）年 学籍番号（ ） 名前（ ）

*見学先の博物館及び美術館名（沖縄県立博物館）

ガラスケースの中にある資料①のスケッチ

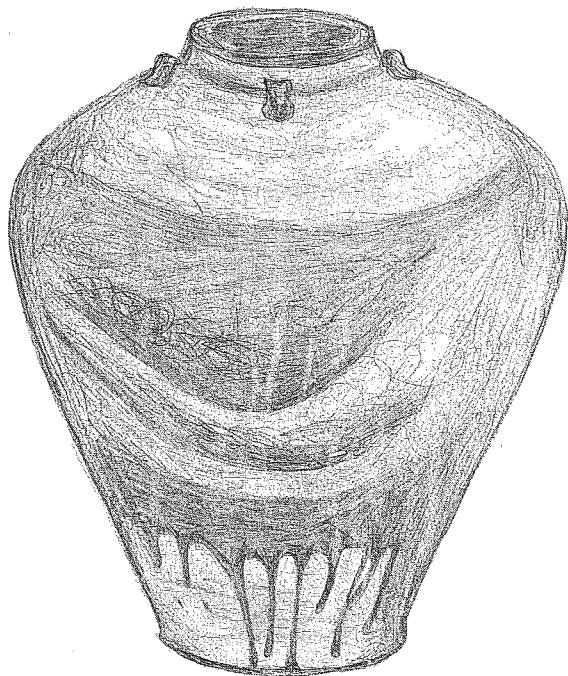


目の見えない人がイメージ化できる解説を試みる

いわゆる、首にかけマネックレスで“親指～小指型”的玉が25こ小さな穴にヒモを通してつながっています。25この中には半透明でキラキラ光っています。25この玉の中には、いたけちがう石がつけられていて、他の玉の2倍くらいの大さじ型丸ではなく、「く」の字を反対にして曲線で描いたかんじで、丸みをおびています。色は深い緑色でとてもきれいなものです。これも、みがかれたかんじで“せか”あります。

沖縄県立博物館

ガラスケースの中にある資料②のスケッチ



目の見えない人がダイメーション化できる解説を試みる

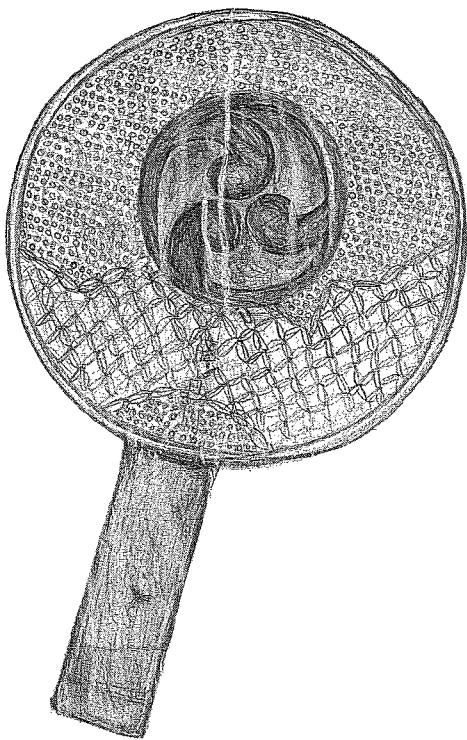
大人が両手で抱きかかえて持つほどの大
きな壺です。
ハッとした感じでとても重量感があります。
口の部分は全体の割りには小さく、口から
すぐには斜め下木賀に伝がり、全体の各
くらいいのところでまたすぼまっています。底は、
口の部分よりは一回り大きいくらいです。
口の凹りに4つ、東西南北の位置に、
取てをかせりにしたヒンナ、棘半径の長さほどの
ものがついています。色は黒にちがいこげ茶で
うわぐすりが下の部分ではたれていて
あらあらしい感じをうけます。

火葬きの具合が全体的に一定ではなく
太い横じまのようともよがり
あります。

資料 11

沖縄県立博物館

ガラスケースの中にある資料③の文ヶッチ



目の見えない人がイメージ化できる解説を試みる

昔の古い手ががせて、手の平らな円形の下に柄があり、円より少しもち短い(少し)ついています。柄の太さは2cmほどです。

緑と茶をませたかんじのいろをしています。

円の部分には文様があり、まず円のまん中に少し上の位置にまた円の本ぐらの大きさの円があり、その中には、三方からうすまき状にひいて形があります。糸会ではなく、もりあがたかんじにしています。

中の小さな円の外側は不規則に上方と下方にわかれていて、上方は主よけし先くらの突起があり規則的に細かく並んでいます。下方では、Xの形のやうな

ものがまた規則的におて、さらに下に、さきあた突起物が重しつがります。

資料 12

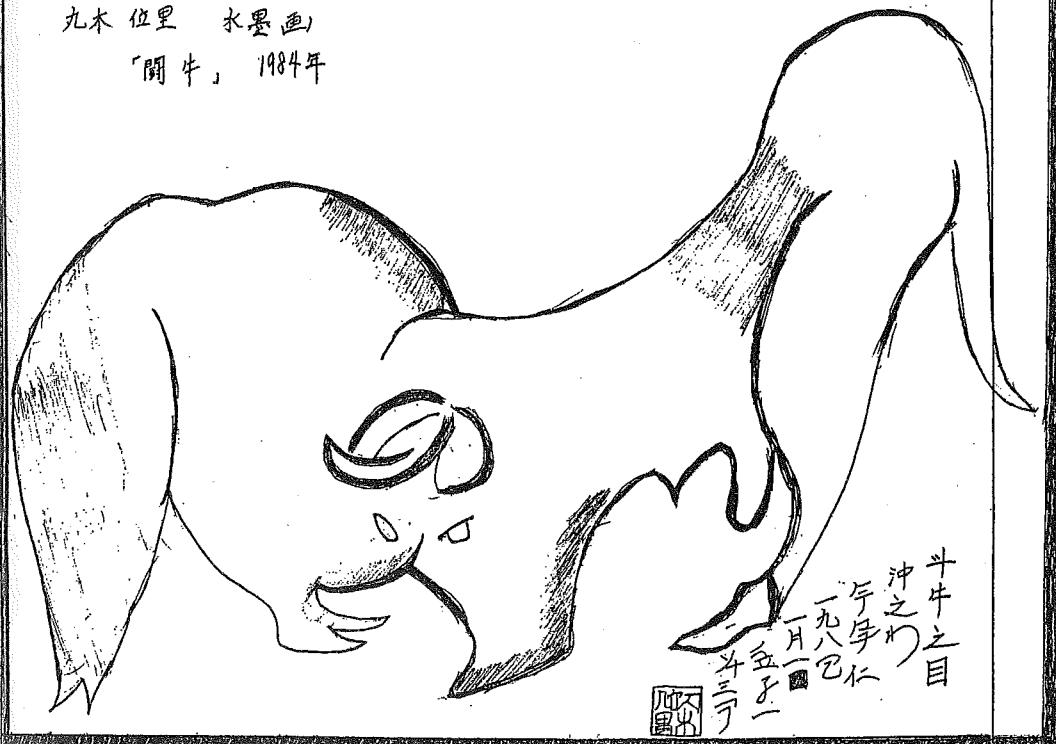
沖縄国際大学(I・II)部 () 学部 () 年 学籍番号 () 名前()

*見学先の博物館及び美術館名(佐喜眞美術館)

ガラスケースの中にある資料①のスケッチ

九木 位里 水墨画

「闘牛」 1984年



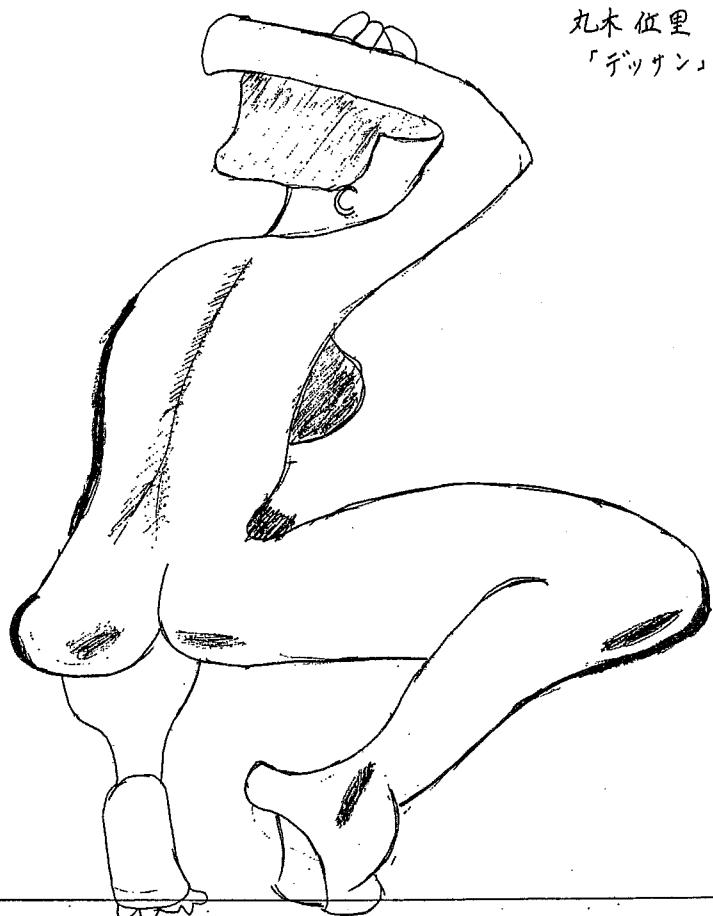
目の見えない人がイメージ化できる解説を試みる

この絵は、水墨画であり、絵の題名は「闘牛」となっている。その題名の通り、2頭の牛が一つとつのをからませて、まさに今闘りしている最中の様子が描かれている。左側の牛は目がつり上がり、体も太っていて、いかにも気性が激しそうで闘志をむき出していけるように見える。一方、右側の牛はさつき挙げた左側の牛とは違う、目もやさしくて、性質もおだやかそりな牛で、体も幾分細く、仕方なく相手の挑戦をやんわりと受けているといった印象がある。墨で描かれて、白と黒の2色だけのシンプルな絵であるが、闘牛の雰囲気がそのままじかに伝わるような絵である。

佐喜眞美術館

ガラスケースの中にある資料②のスケッチ

丸木 佐里 水墨画
「デッサン」 1986年



目の見えない人がイメージ化できる解説を試みる

一人の全裸の女性が背中を向けて両手を頭の上でクロスさせて座り込んでいる。顔は見えるか見えないか、微妙な部分を残して、手で隠されている。髪形は、取より少し上のセミロングである。両方の手と、両手をあげたままの体勢を保っているので、この絵の題名である「デッサン」の通り、この絵の女性はきっと思いをしてモデルをしていると思う。また、これも水墨画で描かれている。

3. これからの課題：部分と全体との統合をもとに、物そのものへ着目させる

ジュリア・カセムの著「光の中へ」において、エドワーズの解釈の定義が紹介されている。彼によると「‥解釈というものは、案内すること、教育すること、宣伝すること、そして人の感性を呼び起こすという、4つの要素からなり、『ものに対する新たな見方、新たな熱意、そして新たな興味』を生み出すものである」と定義している。^(注13)

この定義の中出てくる新たな見方、新たな熱意、新たな興味を、「物」そのものからどのように導きだしてくるのかが、これからの課題となってくる。

資料5の離頭鈎状骨製品の解説を行った学生は、その中で何気なく見過ごしてしまった細かな部分をよく観察して次のように述べている。「全体的に4等分ずつで区切られていて、先端の方はとがっている。そしてその先端に向かって区切りごとに細くなっておりまるで4つの円錐を差し込み、積み重ねたような感じである。この鈎の使われ方が魚に向かって、投げつけ刺すものであったから、鈎が魚から抜けないようにするために工夫された形である。また鈎が魚に刺さると柄から離れる仕組みとなっていたらしく4等分に分けたうちの先端から3区目にまるくくりぬかれた跡がある。その穴にヒモか何かを通して、そのひもは釣り糸のように使われていたと思われる。」この解説の中出てくる「4つの円錐」と「丸い穴」への着目が、何気なく見過ごしそうなものへの関心を呼び起こすきっかけにつながるのではないかろうか。

部分と全体との統合を意識し、さらに物そのものへの細かな観察をもとに、發問を工夫していくことが、視覚障害者への解説を考える上で大きなステップとなってくるのではなかろうか。

本稿作成にあたり、レポートを使用させていただきました棚原奈々枝さん、川野しづのさん、比嘉暁子さん、大川恵理さんには、心から御礼申し上げます。

[脚注]

注1 Gedra Groff with Laura Gardner, What Museum Guides Need to Know, American foundation for the Blind, at 16 (1990)

注2 Gedra Groff, 前掲書, 16p~

注3 Gedra Groff, 前掲書, 16p~

注4 Gedra Groff, 前掲書, 16p~

注5 John P. S. Salmen, Every one's Welcome : The Americans with Disability Act and Museums, Americans Association of Museums, 1998で詳しく紹介されている。

注6 前田真之「インタープリテーションとボランティアガイド」『沖縄県立博物館研究紀要』20号, 52頁以下参照。イギリスの現況については「全科協ニュース」130巻1

号、安井亮「イギリスの博物館でのバリアーフリーの現状」を参照のこと。

注7 「名古屋市美術館研究紀要」第7巻（1997年）1頁以下参照～

注8 ジュリア カセム「光の中へ：視覚障害者の美術館博物館アクセス」小学館、71頁（1998年）

注9 村上良知「視・聴覚障害者の認識支援について—全国調査における博物館スタッフの意見から」（神奈川県立生命の星・地球博物館『ユニバーサルミュージアムをめざして—視覚障害者と博物館—』）（1999年）198頁

注10 鳥山由子「触ることの意義と触るための教育」、神奈川県立生命の星地球博物館前掲書、78頁以下

注11 Gedra Groff、前掲書、31頁

注12 G. W. Shape, *Interpreting the Environment*, John Wiley and Sons, at 4 (1976)

注13 注12の前掲書を参照のこと

メジロの繁殖

与那城 義 春

(沖縄県立博物館)

Notes on the Breeding of *Zosterops japonica*

in Chinen High School of Yonabaru Town, the Okinawa Prefecture

Yoshiharu YONASHIRO

(Okinawa Prefectural Museum)

はじめに

メジロ *Zosterops japonica* の生息場所は平地林や低山地の森林である。特に温暖地域の常緑広葉樹林には多数の本種が生息している。食餌は昆虫類やクモ類を捕食するほか、花蜜や完熟期の果実も大好物であり、採餌のために人家付近の樹木にも飛来する。メジロの目の周囲には白色の輪があるので目立つほか、清澄な美声で鳴くので多数の人々に好印象を与えていている。

メジロ *Zosterops japonica* の分布は朝鮮南部、中国中南部、日本、台湾、インドシナ北部を含む広範囲であり、殆どの分布地域では留鳥として繁殖する。だが、日本では留鳥又は漂鳥として概ね全国的に分布しており、冬季になると北部地域や山地の本種は温暖地に移動しているようである。

本邦ではメジロの繁殖に関する研究が宮下（1975）によって報告されている。

沖縄県のメジロ *Zosterops japonica* は多数の島々で殆ど留鳥として生息し、繁殖している。本種の生息・繁殖場所は平地や低山地の常緑広葉樹林であるが、時には住宅地域のガジュマルやカンヒザクラなどの樹木でも繁殖している。

県内に生息するメジロの繁殖に関する調査・研究は殆どなく、断片的な観察記録が散見されるのみである。

筆者は身近な留鳥として多数の県民に知られているメジロの繁殖生態（1993年）を調査したので、その繁殖状況を報告する。

1. 調査地の概況

メジロの繁殖調査は沖縄本島南部地区与那原町内の東部に位置する県立知念高等学校の校内で実施した（図1）。校内の南部地域には大部分の校舎が建設されているほか、その附近には栽培されているカンヒザクラ、デイゴ、ホルトノキなどの各種樹木も成育していた。

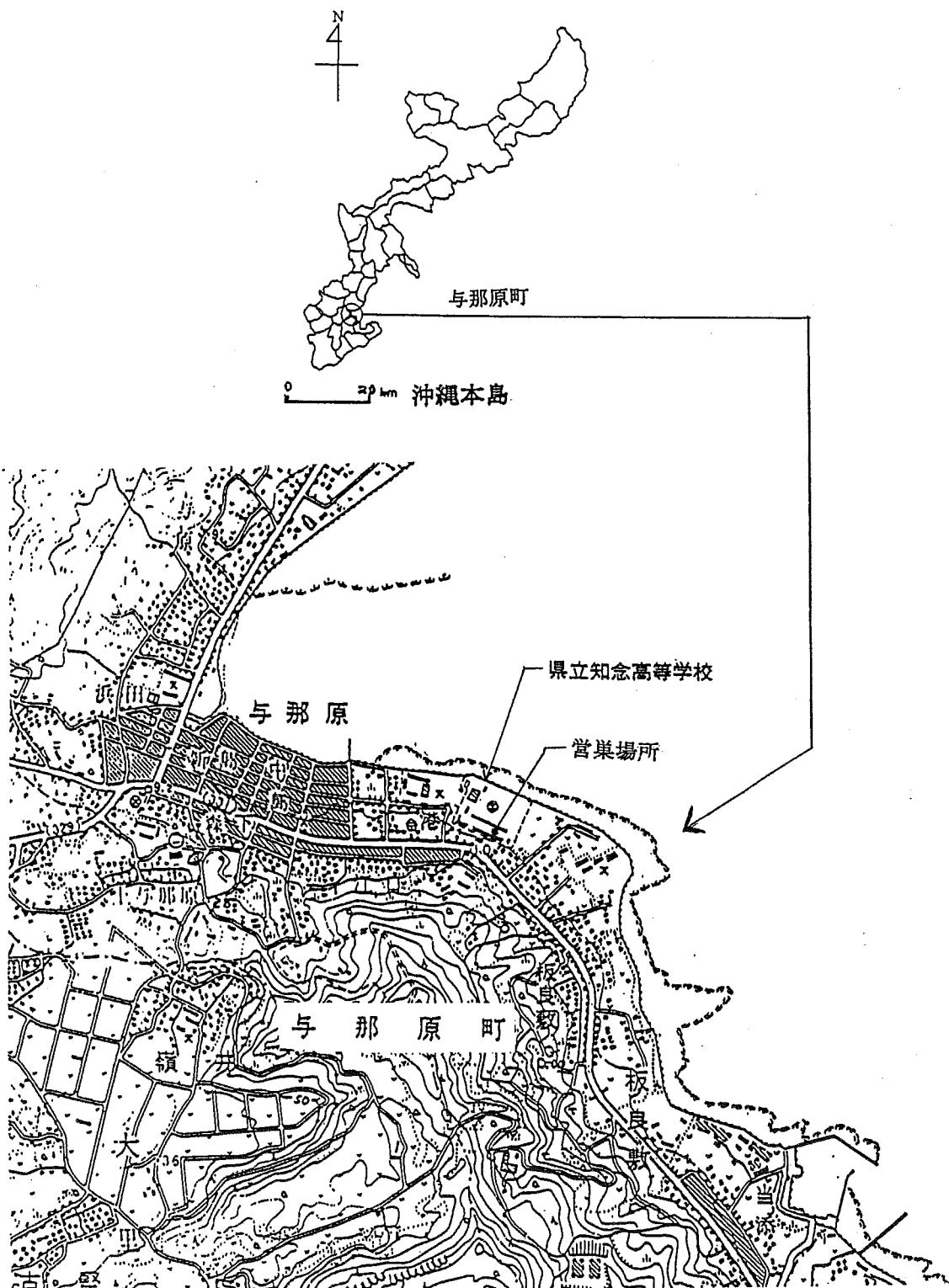


図1. 県立知念高等学校と調査場所の位置図

メジロの営巣木は職員室の裏側に栽培されているデイゴである。その樹高は約11mであり、職員室上部の3階にある生物教室のベランダ付近で枝葉が相当繁茂していた。

メジロの巣はデイゴの小枝の先端部から二叉状（V字形）に伸びている2本の細い葉柄に吊り下げられており、地上高約7.5mの位置にあった。

営巣木のデイゴは繁茂している枝葉で巣の周辺を殆ど被覆している状態であるが、その樹木に隣接して体育系の部活動準備室（トタン小屋）があり、放課後になると多数の生徒達が頻繁に入出するので多少騒々しい状態になる時もあった。

2. 調査方法

今回、メジロの繁殖調査は巣を中心に、造巣期から産卵・抱卵期、育雛・巣立ち前までの実態を定点観察で実施した。観察場所は校舎の3階にある生物教室裏窓側のベランダに設定し、自然状態でメジロの繁殖実態を定点観察した。本種の繁殖調査時には必要に応じて双眼鏡（8×30）を使用した。

3. 調査結果と考察

(1) 造巣期

1993年7月9日午後1時30分、メジロが校舎3階にある生物教室のベランダ付近に伸びているデイゴの樹枝に飛来している。観察を継続していると、2個体の本種が交互に巣材を嘴で運搬していた。メジロがデイゴの樹枝上から飛去した後、造巣の位置や使用されている巣材を確認するためにベランダから双眼鏡で観察した。造巣の初期と思われる極めて粗雑な巣がデイゴの小枝の先端部から二叉状（V字形）に伸びている2本の細い葉柄にクモの糸でススキの穂とビニールの細い紐等を接着して吊り下げられてあった。

午後4時10分、造巣の進捗状態を確認するために生物教室のベランダに出ると、営巣木のデイゴ近辺にある体育系の部活動準備室内から生徒達の賑やかな声が聞こえてきた。双眼鏡で観察すると、メジロの巣は楕円形であり、巣材はススキの穂やビニールの細い紐、チガヤの穂をクモの糸で接着しているが、チガヤの穂は殆ど産座に使用されていた。

ところで、本日の放課後の観察時にメジロは巣や営巣木の樹枝にも全然飛来しなかったが、その営巣木付近の一時的な状況変化による影響を受けているかも知れない。しかし、その巣は概ね完成しているようであり、今後の繁殖行動に備えて雌雄とも他の場所で採餌している可能性もある。

沖縄本島内でメジロの巣材は殆どススキの穂やビニールの細長い紐、チガヤの穂をクモの糸で接着しているが、そのほかにチガヤの細長い枯れ葉や枯れている雑草（イネ科植物）の細長い茎などが使用されていることもある。造巣期のメジロは生息場所付近で使用可能な巣材を巧妙に活用するようである。

(2) 産卵・抱卵期

7月10日午前7時55分、繁殖行動を確認するために生物教室のベランダから観察すると、メジロが巣の中に座っていた。多分、産卵するために雌が入巣しているのであろう。そのメジロは約10分後に巣から東側の雑木林付近に飛去してしまった。巣の中を双眼鏡で観察すると、産座に1個の白色卵が確認された。

7月12日午前7時40分、入巣しているメジロは殆ど動かない状態で座っているが、約15分後に別個体が巣付近の樹枝に飛来すると、巣の中にいたメジロは東側に飛去した。その後双眼鏡で巣の中を観察すると、産座に3個の白色卵が確認された。間もなく、樹枝上のメジロが入巣して抱卵した。多分、本日の早朝に最終卵（3個目）を産出した雌のメジロは産卵直後から抱卵開始し、雄親が飛来した時に抱卵を交代するのであろう。

7月14日午前7時50分、生物教室のベランダから巣を観察すると、メジロの親鳥は抱卵に専念しているようであり、巣の中で殆ど動かない状態であった。約10分後、別個体が巣付近の樹枝に飛来したため、そのメジロは直ちに巣から飛去してしまった。巣の中を双眼鏡で観察すると、7月12日に確認されている産卵数と同数の3個であった。その後、デイゴの樹枝上に飛来していた別個体のメジロが入巣して抱卵交代した。

午後1時20分、校内は昼食時間であり、食事のために多数の生徒達が歩き回るようになる。メジロの営巣木付近も生徒が往来している。その時、生物教室のベランダから双眼鏡で巣を観察すると、メジロは抱卵に専念しており、生徒の往来による影響は受けてないようである。約17分後、本種の別個体が巣付近の樹枝に飛来したので、抱卵していた親鳥は飛去した。間もなく、樹枝上の別個体が入巣して抱卵交代した（写真①）。

7月21日午前7時45分、メジロの親鳥が抱卵開始してから10日目である。双眼鏡で観察すると、今朝もメジロは抱卵中のようにあり、巣の中で殆ど動かない状態を維持している。約5分後に別個体が巣付近の樹枝に飛来したので、巣の中にいる親鳥は飛去した。その時、産座には3個の未孵化卵が確認された。間もなく、樹枝上の別個体が入巣して抱卵交代した。

抱卵期間のメジロは空腹感等によって卵を放置したりせず、雌雄交代で絶えず抱卵を継続していた。



写真① 抱卵中のメジロ

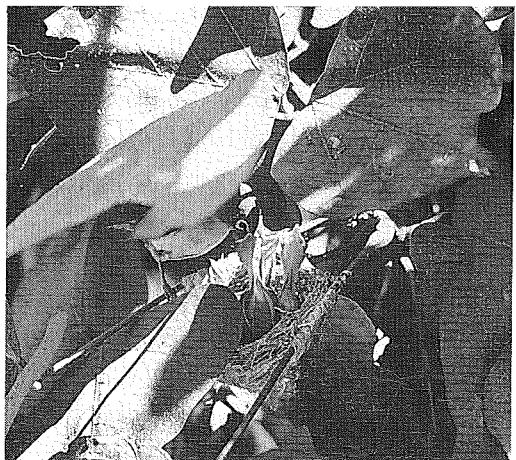
(3) 孵化・育雛期

7月23日午前7時30分、双眼鏡で観察すると、入巣しているメジロの親鳥は中腰の体勢であり、時々ゆったりとした状態で身体を左右に動かしたりしている。約20分後、別個体のメジロが巣付近の樹枝に飛来したので、巣の中の親鳥は直ちに飛去した。その時、産座には孵化した3羽の雛が確認された。雛の身体は淡紅色であり、羽毛は3羽とも未だ生えてなかつた。円形の突起状である目は黒青色であった。間もなく、別個体が樹枝上から巣に移動すると、3羽の雛は頭頸部を持ち上げながら嘴を開けて食餌の要求行動を表示したので、その親鳥は3羽の雛に1回ずつ給餌(写真②)した後で抱雛した。

7月27日午前7時45分、メジロの雛の羽毛は頭頂から後頭部、背面の中央部、肩の部分に生え始めている。しかし、目は孵化直後と同様ような状態であり、鳴き声も出してないようである。でも、3羽の雛は帰巣する親鳥の気配や鳴き声等に敏感であり、巣の中で頸部を上方に伸ばしながら嘴を開けて餌を要求している。

7月31日（土）午後1時10分、メジロの雛は孵化日から9日目であり、巣立ちが近づいているのであろう（写真③）。親鳥は不在であるが、雛は3羽とも巣の中で頸部を上方に伸ばした状態で嘴を開けて食餌の要求行動を表示している。雛は概ね順調に成育しているようであり、その羽毛は背面や翼、胸部から腹部にかけて殆ど密生している。ところが、目の周辺や頸側部、後頸部の羽毛は疎らな状態であり、淡紅色である皮膚の露出部分も観察されたのである。

8月2日午前7時40分、3羽の雛は巣の中で立ち上がった体勢を維持し、頸部を伸ばした状態で嘴を開けて食餌を要求している。時々、雛は翼を広げて羽ばたいたりしている。約8分後、帰巣したメジロの親鳥は立ち上がって3羽の雛に給餌したが、給餌の終了直後に飛去してしまった。



写真② 雉に給餌するメジロの親鳥



写真③ 巣立ち前のメジロの雛

(4) 巣立ち

8月3日午前7時25分、生物教室のベランダから双眼鏡でメジロの巣を観察したが、3羽の雛は既に巣立ちした後であった。営巣木のデイゴや付近の樹木でもメジロの親子は観察・確認されなかった。

今回、メジロの雛の巣立ちは孵化日から11~12日目であった。

要 約

1. 平地林や低山地林に留鳥として生息するメジロ *Zosterops japonica* の繁殖生態調査を1993年に沖縄本島南部地区与那原町内にある県立知念高等学校の校内で実施した。

本調査はメジロの造巣期から抱卵期、雛の巣立ちまでの繁殖生態を可能な限り自然状態で定点観察した。

2. メジロの営巣木はデイゴ（樹高約11m）であり、雌雄によって地上高約7.5mに位置する小枝の先端から二叉状（V字形）で伸びている2本の細い葉柄に造巣された。メジロの巣は小型の椀形であり、巣材はススキの穂や細いビニール、チガヤの穂などをクモの糸で接着して葉柄に吊り下げられてあった。

メジロの造巣は短時間（3時間前後）で完成させるようであるが、今回の所要時間は未確認である。

3. メジロの産卵数は3個であった。これまでに沖縄本島内で確認されている1巣の産卵数は通常3~4個であるが、時には5個を産卵することもある。

4. 今回、メジロの抱卵日数は11~12日であった。親鳥は空腹感等によって途中で卵を放置したりせず、雌雄交代で絶えず抱卵していた。

5. 育雛期の親鳥は給餌活動を雌雄で実施し、給餌後の抱雛行動は孵化日から概ね3日目まで観察されたが、雛の就眠後に親鳥は直ちに飛去した。

育雛中期頃までの親鳥は頻繁に給餌活動を実施していた。しかし、巣立ち前になると親鳥は給餌回数を減少させることによって雛の巣立ちを促進させているようであった。

雛の巣立ちは孵化日から11~12日目であった。

文 献

日本鳥学会編、1974. 日本鳥類目録 P.91. 学習研究社. 東京

羽田健三監修、1975. 野鳥の生活 P.91~95. メジロ（宮下稔 執筆）築地書館. 東京

清棲 幸保、1978. 日本鳥類大図鑑 I P.79~82. 講談社. 東京

高野 伸二、1981. 日本産鳥類図鑑 P.365. 東海大学出版会. 東京

沖縄県内において野外観察や傷病鳥の保護及び 博物館収蔵標本等により確認された興味深い鳥類の記録について —「沖縄県産鳥類目録」補遺—

嵩原建二⁽¹⁾・池長裕史⁽²⁾・金城道男⁽³⁾
渡久地 豊⁽⁴⁾・金城輝雄⁽⁵⁾・庄山守⁽⁶⁾

Interesting Birds records that were observed recently in the field on Okinawa
Prefecture, Given Medical Care by Okinawa Zoo and Specimen owned by Okinawa
Prefectural Museum

(K.Takehara, H.Ikenaga, M.Kinjyo, Y.Toguchi, T.Kinjyo and M.Shoyama)

Abstract: After the checklist of birds of Okinawa (McWhirter *et al.*, 1996) have been issued, several new bird species and new information of bird were recorded in Okinawa prefecture. Five species mentioned in this paper are as following; Large Hawk Cuckoo, Black-and-White Cuckoo, Whinchat, Philippine Glossy Starling and Ashy Drongo were newly recorded in Japan. Four species; Black Bittern, Japanese Crane, Band-bellied Crake and Meadow Pipit were described as new record in Okinawa prefecture. Some new distribution and interesting records are also mentioned. Addenda of the checklist of birds of Okinawa were listed from various source of information.

はじめに

沖縄県内で記録された鳥類については、1996年にMcWhirterら(1996)によって暫定的な「沖縄県産鳥類目録」が作成され、418種の鳥類記録が報告されている。しかしながら、同報告以降においても、県内では野外観察による新たな記録が増加している。また、傷病鳥として保護された個体や博物館収蔵標本の中にもこれまで国内や県内で報告されていない鳥類が見い出されている。

本報告ではこれら国内や県内における新記録種や新分布種等の興味深い観察記録をまとめ、上記「沖縄県産鳥類目録」の補遺として追加加筆したものである。

なお、本報告における和名の扱いは、山階(1986)に従った。

⁽¹⁾ 沖縄県立博物館・⁽²⁾茨城県つくば市在住・⁽³⁾沖縄フィールドワーク

⁽⁴⁾ あかひげ工房・⁽⁵⁾(財)沖縄子どもの国・⁽⁶⁾西表中学校

1. 沖縄県内で確認された稀な鳥類の記録

(1) 日本初記録種

1) オオジュウイチ *Cuculus sparverioides sparverioides* [Large Hawk Cuckoo]

カッコウ目カッコウ科 Cuculidae

1989年10月2日に石垣島に所在する石垣市立川平小学校（図1）で窓ガラスに衝突死した個体で、著者の一人である庄山によって沖縄県文化課へ送付された。その後沖縄県教育庁文化課により剥製標本が製作され、1990年4月に沖縄県立博物館へ寄託された標本である（写真1）。

今回採集された標本は、翼長が240mmとジュウイチ *C. fugax* やホトトギス *C. canorus* などに比べ大型で、くちばしはやや下方にカーブし長く、頭部は黒灰褐色で背中は茶褐色である。喉から前胸部に荒い茶褐色の縦すじがあり、下腹部に横斑が見られる。尾羽は灰褐色で、上面に4条、下面に6条の横帶が見られ、尾端部の横帶は太い。また、下尾筒は無斑で灰色である。これらのことから、中国や台湾などに生息するオオジュウイチ *Cuculus sparverioides sparverioides* と判断された。

カッコウ属 (Genus *Cuculus*) の中で、東南アジア地域に生息するジュウイチ類 (Hawk-cuckoo) は、翼の大きさ等により4種に分けられ、その中の1種であるオオジュウイチ *C. s. sparverioides* は、ヒマラヤから中国南部、セレベス島、フィリピン、海南島、台湾などに広く分布している (King and Dickson 1975 · Howard and Moore 1991)。また、中国や台湾においては2000m以下の森林地域に夏鳥として普通に飛来する (顔ら 1996. 王ら 1991)。

本種の日本における確認例はこれまでに皆無と思われ、本報告が国内における初めての記録になるものである。なお、表1に各部位の計測値を示し種同定の参考とした。

表1. オオジュウイチ *C. s. sparverioides* の計測値 (単位: mm)

Measurements (備考: 標本計測)

跗 跖 長	露 出 嘴 峰 長	自 然 翼 長	尾 長
Length of tarsus	Length of culmen	Length of Wing	Length of tail
24.8	24.6	240	210

2) クロシロカンムリカッコウ *Cucurus jacobinus* [Black-and-White Cuckoo]

カッコウ目カッコウ科 Cuculidae

1997年5月31日及び6月1日に西表島浦内川西方の湿地（通称クモッタ、図1）で観察され、同年6月1日に西表島在住の蒲田愛美氏によってビデオカメラで撮影されている

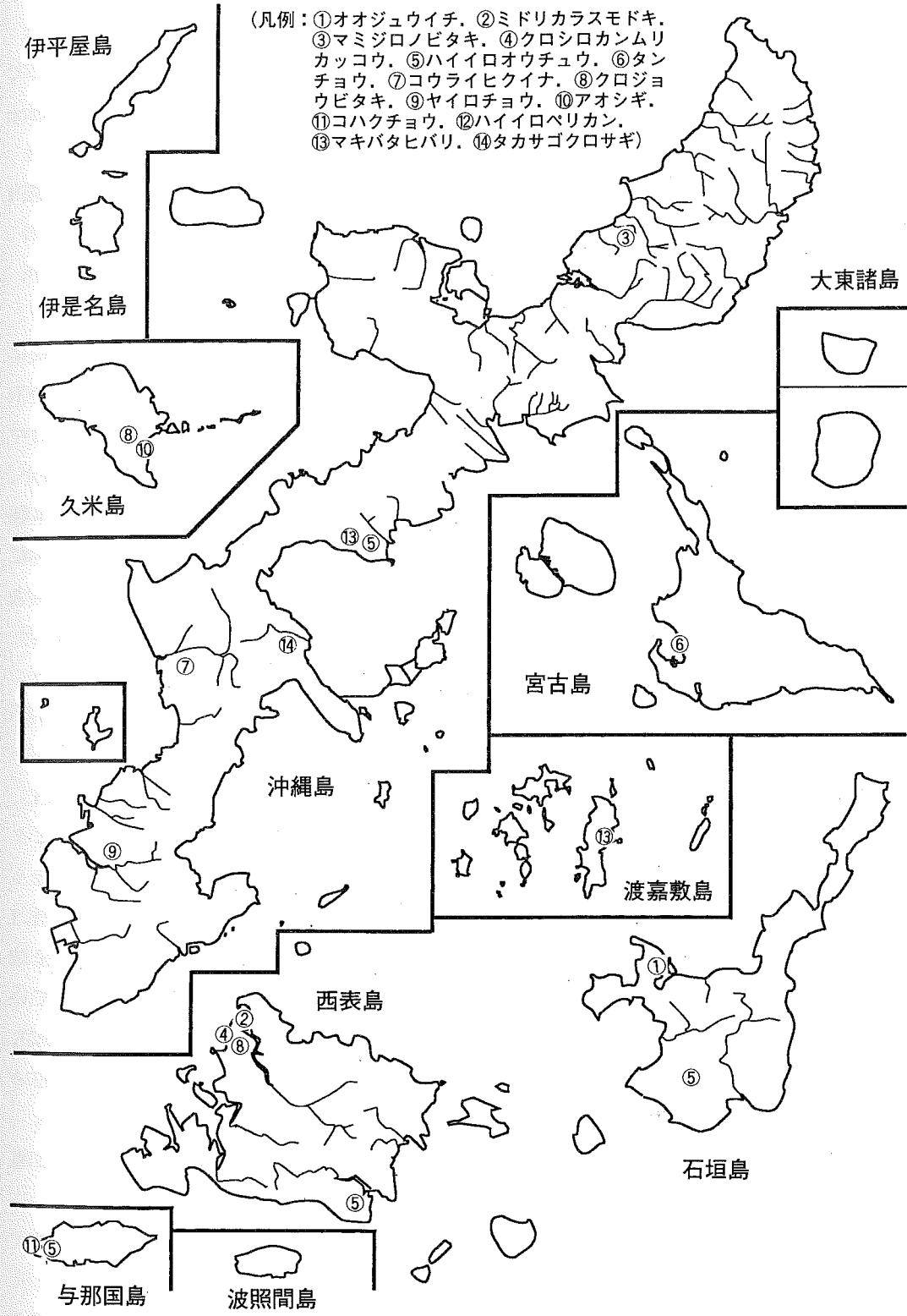


図1. 沖縄県内における興味深い鳥類の確認地

(写真2)。極めて特徴のある色模様であるため本種と容易に判別できた。

本種はインドからイラン、アフリカなどにかけて分布するカッコウ類で、東南アジアではビルマ中央部から北部にかけて雨期（5月から11月）に見られる（King and Dickson 1975）。また、中国南部では夏鳥として飛来するとされる（顔ら 1996）。

沖縄県内では夏季に迷鳥として飛来した個体が観察されたものと思われ、これまで国内での報告が見られないので、今回の迷行記録が国内初記録になるものと思われる。

3) ミドリカラスモドキ *Aplonis panayensis* [Philippine Glossy Starling]

スズメ目ムクドリ科 Sturnidae

1998年3月27日に、西表島浦内橋付近（図1）で1個体が有山智樹、中山文仁両氏により観察、写真撮影された。14:05にバス停前の電線に止まり、その後、近くのデイゴの木に止まった。14:15頃に付近の山林に飛去し、14:37に山林から飛び立ち、浦内川河口のマングローブ林方向へ飛び去ったという（大西敏一氏私信 1999年）。写真撮影されているが、今回は図示できなかった。光沢のある濃緑色の羽毛と赤い目、及びその嘴の特徴から本種の♂成鳥であると容易に判断できた。本種はマレーシア、インドネシアからフィリピンにかけて広く分布しており、テリムクドリ属 *Aplonis* では最も北まで生息している（Feare & Craig, 1999）。

国内ではこれまで、本種の確認報告はないので、この記録が国内初記録と思われる。

4) マミジロノビタキ *Saxicola rubetra* [Whinchat]

スズメ目ツグミ科 Turdidae

1998年9月23日に、大宜味村喜如嘉（図1）で1個体が有山智樹、小林竜也、中山文仁、他1名の各氏らによって観察、写真撮影された。14:30頃、造成地上で発見され、ノビタキ *Saxicola torquata* の行動パターンとは異なり、杭などには止まらず地面を素早く走っていたと言う。同日夕方まで確認されたが、翌日は見つからなかった（大西敏一氏私信 1999年）。写真撮影されているが、今回は図示できなかった。本種はヨーロッパのはば全域からロシアにかけて広く分布している（Knystautas, 1993）が、中国からは記録されていない。今回の個体は第1回冬羽と思われ、近縁種であるノビタキの冬羽と類似しているが、眉斑が際立っていること、腰から上尾筒にかけて黒い軸斑が明瞭なこと、尾の基部が白いことなど（Beaman & Madge, 1998）から本種と断定した。

これまで、本種の国内での記録は見られないので、本報告は国内初記録になるものと思われる。

5) ハイイロオウチュウ *Dicrurus leucophaeus* [Ashy Drongo]

スズメ目オウチュウ科 Dicruridae

1996年9月26日に著者の一人である金城道男によって与那国島（図1）で初めて目撃さ

れ、その後1997年10月には著者の一人である嵩原によって与那国島久部良で再認されている（写真3）。また、東京在住の二階堂全滋氏（1999.私信）によって1997年2月に西表島大原、沖縄野鳥研究会の金田昌士氏らによって1998年3月に石垣島パンナ岳入口、1998年9月には沖縄野鳥研究会の比嘉邦昭氏らによって沖縄島金武町並里でそれぞれ1個体が確認されている。さらに、1998年10月には嵩原によって沖縄島西方に位置する粟国島で2個体が確認されている。したがって、沖縄県内では少なくとも与那国島で2例、西表島、石垣島、沖縄島、粟国島の各島でそれぞれ1例の合計6例が確認されている。

ハイイロオウチュウ *Dicrurus leucophaeus* は、世界で14亜種が生息していることが知られている（Howrd and Moor, 1994・Mayr and Greenway, 1962など）。このため国内で数例の確認記録があるものの亜種が確定せず、日本鳥学会目録編集委員会（1997）においても、日本産鳥類リストへの掲載が見送られ、その採用を検討中としている。

最近、森岡（1999）によって本種の亜種の同定が試みられ、1997年10月に与那国島で撮影されたハイイロオウチュウの亜種名を *Dicrurus leucophaeus leucogenis* としている。沖縄県内で目撃されている個体は、石垣島での亜成鳥と思われる個体を除き、いずれも目の回りに白色部を有する個体であったことから、本報告では森岡（1999）にしたがい、沖縄県内で目撃されたハイイロオウチュウの亜種を *D. l. leucogenis* とした。これまで国内においては、本亜種の目撃情報はあるものの公式的な報告は見られないで、1996年9月の与那国島における観察記録が国内初記録と思われる。さらに本報告はそれぞれの島における新分布記録となるものである。

（2）沖縄県内初記録種

- 1) タカサゴクロサギ *Dupetor flavigollis flaviollis* [Black Bittern]
コウノトリ目サギ科 Ardeidae

1996年3月1日に沖縄環境保全研究所の新垣宏氏（私信）によって、沖縄島中部の具志川市天願川（図1）で観察・撮影された（写真4）。県内では他に1997年6月19日に伊良部島で1個体が保護され（宮古野鳥の会 2000）、さらに1998年9月14日には土方秀行氏によって沖縄島北部大宜味村喜如嘉で1個体が観察されていると言う（福田篤徳氏私信）。

本種は本来ネパール、スリランカ、中国の中部から南部、東南アジア、フィリピン、台湾などに分布し、国内では迷鳥として1981年5月4日に新潟県粟島で初めて記録されている（小林 1983）。本種はこれまで県内における確認例がなく、具志川市における観察例が県内初記録になるものと思われる。なお、本種は鹿児島県十島村宝島においても、1993年5月31日に写真撮影されている（五百沢ら 2000）。

2) タンチョウ *Grus japonensis* [Japanese Crane. Red-crowned Crane]

ツル目ツル科 Gruidae

1997年11月16日に宮古島与那覇湾で(図1)、宮古野鳥の会の新垣邦雄氏及び砂川栄喜氏によって1個体が観察され、写真撮影されている(写真5)。

本種は国内では北海道地方で繁殖分布しているが、国外ではシベリア東北部や中国東北部で繁殖したものが、朝鮮半島や中国中部などで越冬する(小林 1983)。このことから、本個体は中国大陸からの迷行もしくは国内での漂鳥としての飛来と思われる。

本種の県内における飛来記録はこれまでに皆無と思われ、宮古野鳥の会20周年記念誌(宮古野鳥の会, 2000)に掲載されているように、今回の記録が県内初記録となり、宮古島においても新分布記録となる。

3) コウライヒクイナ *Porzana paykullii* [Band-bellied Crake]

ツル目クイナ科 Rallidae

本個体は1998年10月2日に沖縄島中部の嘉手納町水釜(図1)の民家車庫内で発見され、1998年10月3日に傷病鳥として「沖縄子どもの国(動物園)」に届けられた。

本個体は保護時においてはヒクイナ *Porzana fusca* の若鳥と考えられ、下腹部の横紋や雨覆部の淡い白斑の出現は認められなかった。保護飼育後、約4ヶ月後頃から下腹部の横紋が出現し、約9ヶ月から10ヶ月後に雨覆部にうすい白斑が出現してきた(写真6, 7)。これらの特徴から、1993年5月25日に北海道渡島大島で標識調査中に捕獲され(山階鳥類研究所 1993・Birder 編集部 1999)、国内で最初の確認とされるコウライヒクイナ *Porzana paykullii* の可能性が考えられた。

本種 *P. paykullii* は、中国北東部から朝鮮にかけて普通に夏鳥として渡来、繁殖するとされる(顔ら, 1996)。また、本種は大雨覆と小雨覆の先端に淡い白斑が出現し、初列風切に白色部を有するとされる。さらに、下腹部と下尾筒に白と黒の横しまがある。

表2. コウライヒクイナ *Porzana paykullii* 各部計測値(単位:mm)

Measurements (計測者: 山階鳥類研究所尾崎清明氏)

跗 跖 長 Length of tarsus	露 出 嘴 峰 長 Length of culmen	自 然 翼 長 Length of Wing	尾 長 Length of tail
39.3	21.0	117	45+
全 長 Total Length	体 重 Body Weight		
220+	83g		

(備考:+は一部欠損により参考値)

今回保護された個体は、*P. paykullii* 同様雨覆部に淡い白斑が出現し、下腹部に横縞が認められる。しかしながら、幼鳥であるためか初列風切には白斑部分認められなかった。また、腹部の横縞はヒクイナ *Porzana fusca* と異なり、尾や下尾筒に近い部分ではなく、脚部のやや前方下腹部より始まっている（写真8）。さらに、本種に酷似するナンヨウオオクイナ *Rallina fasciata* について、Ripley (1977) 及びTaylor and von Perlo (1998) に示された図版等により比較すると、特に下腹部の横縞模様の始まり部分がナンヨウオオクイナの場合、脚部より前方の下胸部部分から始まっており、その縞模様も太く荒いように見える。また、雨覆部分の白斑も大きくより明瞭である。これらのことから総合して今回保護された個体は、コウライヒクイナ *Porzana paykullii* と判断された。したがって、本報告が前述した北海道での記録に次ぐ国内2例目と思われ、また本種の確認記録は、県内における初めての記録である。なお、表2に各部位の計測値を示して種同定の参考とした。

4) マキバタヒバリ *Anthus pratensis* [Meadow Pipit]

スズメ目セキレイ科 *Motacillidae*

1998年12月に沖縄野鳥研究会の仲宗根励氏によって金武町並里（図1）で1個体が観察された。その後、1999年1月22日には沖縄野鳥研究会の金田昌士氏らによって、慶良間諸島の渡嘉敷島（図1）で1個体観察されている（写真9）。

本種は中国西部からヨーロッパまで広い範囲に生息分布を持つセキレイ科の鳥である。国内では1997年1月31日に福岡県で国内初めての確認例がある（岡部 1998）。今回の記録は国内2例目と思われ、沖縄県内では初めての記録となる。

(3) 沖縄県内新分布記録種

1) ハイイロペリカン *Pelecanus crispus* [Dalmatian Pelican]

ペリカン目ペリカン科 *Pelecanidae*

本種はこの数年間に県内で複数の観察記録が得られている。那覇市在住の渡久地政武氏によって1997年1月に沖縄島浦添市牧港で1個体、著者の一人である金城道男によって1998年1月に沖縄島中部の与那城町照間で1個体、同年2月に鳥景会の伊礼新治氏によって沖縄島中部の読谷村長浜ダムで1個体が観察された。その後同年3月9日には石垣島のアンバルで川勝敏雄氏により1個体が発見され、3月14日まで観察された。この個体は西村直人氏、古屋篤史氏及び佐藤進氏によって写真、ビデオ撮影されている（川勝・西村・古屋・佐藤各氏私信）。その後、1999年12月7日に与那国中学校の多和田眞修氏によって与那国島の久部良ミト（図1）で1個体が目撃、撮影されており（写真10）、同一個体と思われるものが2000年1月1日に石垣島磯部川河口で観察され、同3日には石垣ダムで写真撮影された（小山慎司氏私信 2000年）。同個体は同月11日にもアンバルで見つかって

いるという（琉球新報 2000年1月13日付記事）。一方、宮古群島の伊良部島でも2000年1月8日に1個体の飛来が宮古野鳥の会によって確認されたが、同個体はその後同月11日に伊良部島佐和田の浜で確認された。しかし、同月12日に動けなくなったところを宮古野鳥の会会員によって傷病鳥として保護され、（財）沖縄こどもの国に輸送されたが、到着時にはすでに死亡していた。こどもの国では直ちに各部位の計測を行い、1月14日に死因解明のため解剖に付された。

表3に各部位の計測値と主要な解剖所見を示した。この所見の結果から、採食は死亡前2日から3日は行われておらず、消化管にも異物は検出されないことから、直接の死因は心嚢内に液体が貯留（心内膜炎）による心不全と考えられた。また、心内膜炎は滲出液の細菌検査でも細菌や真菌の検出されなかつことにより非細菌性心内膜炎と診断された。

表3.ハイイロペリカン *Pelecanus crispus* [Dalmatian Pelican] の計測値と解剖所見

Measurements (mm)

<u>跗蹠長</u> Length of tarsus	<u>露出嘴峰長</u> Length of culmen	<u>自然翼長</u> Length of Wing	<u>尾長</u> Length of tail
115	425	740	250
<u>全長</u> Total Length	<u>翼開長</u> Wingspread	<u>体重</u> Body Weight	
1810	2520	7.56kg	

〈主要解剖所見〉

性別：雄

心嚢内に透明黄褐色の液体充満（心内膜炎）し、貯留液にはフィブリン析出（炎症反応）を呈する。肝臓は鬱血し、やや硬度あり。左後し第3指先端関節部よ離断し化膿及び壞死（やや慢性所見）。左後し第2、3指間の水かき破れ化膿及び壞死。胃内容物空虚、腸管内容もごく少量で腸管鬱血。

なお、同個体の標本は平良市総合博物館に剥製として保存される予定とのことである（沖縄タイムス,2000年1月13日付記事）。

本種は県内では迷鳥として飛来し、これまで石垣島での古い記録が見られる（八重山野鳥の会 1983）。今回の記録は近年の記録として貴重であり、沖縄島と与那国島での記録は本種の新たな分布記録となる。

また、本種は1998年3月の石垣島での記録以来、1999年4月まで日本列島の各地ではほぼ連続的に観察されたが、それらが全て同一個体であったか否かはわかつていない。

なお、参考記録として同時期の国内における記録を付記する（福田篤徳氏私信）。

鹿児島県別府川河口 1998年3月中旬。佐賀県大授揚 1998年4月5日。山口県阿知須干拓 1998年4月11日。山口県阿知須町土路石川河口 1998年4月12日。島根県宍道湖 1998年4月19～26日。富山県常願寺川大日橋 1998年10月17日。石川県河北潟 1998年10月25日。石川県七尾西湾 1998年10月26～11月12日。新潟県鳥屋野潟 1998年11月20日。茨城県涸沼 1998年11月26日～12月6日。静岡県富士川河口 1998年12月5日～30日。茨城県涸沼 1999年1月1日～4月6日。この間、千葉県小櫃川河口で1999年2月4日の記録有り。

2) コハクチョウ *Cygnus columbianus jankowskii* [Tundra Swan]

カモ目カモ科 Anatidae

与那国島の久部良ミト（図1）で、1999年12月7日に与那国中学校の多和田眞修氏によって1個体が観察されている（写真11）。本個体は若鳥で野外識別の面でオオハクチョウと酷似しているため、当初はオオハクチョウ *C. cygnus* とされていたが、体色が全体に白色がかり、首もやや短めであることから本種と判断された。

本種は迷鳥として県内各地に飛来してくるものと考えられ、県内における観察記録については、1979年12月に名護市（友利 1977）と石垣島（八重山野鳥の会 1983）での記録が見られる。また、沖縄野鳥研究会（1986）は、確認日付が不明ながら、伊是名島、北大東島、小浜島の3島での記録を示している。最近では1993年12月に沖縄島の浦添市で1個体と沖縄市で2個体が観察されている（嵩原 1994）。したがって、与那国島における本種の確認記録は報告されていないので、同島初記録となる。

3) アオシギ *Gallinago solitaria japonica* [Solitary Snipe]

チドリ目シギ科 Scolopacidae

1999年10月31日に（株）久米製糖の嘉手苅初子氏によって、久米島仲里村立仲里中学校裏手にある水路（図1）で、採餌中の1個体が写真撮影された（写真12）。

本種の県内における生息状況は、稀な旅鳥や冬鳥として飛来してくるものと思われるが、これまでの観察記録は、1993年10月10日に粟国島で捕獲標識され（山階鳥類研究所 1993）、また、1996年1月5日に沖縄島北部の大宜味村喜如嘉において、筆者のひとりである金城道男及び渡久地によって観察と写真撮影がされている。したがって、今回の久米島における観察記録が同島での初記録になるものと思われる。

4) ヤイロチョウ *Pitta brachyura* [Fairy Pitta]

スズメ目ヤイロチョウ科 Pittidae

本種は1997年9月5日に沖縄島南部の那覇市古波蔵にある那覇市漫湖公園の県道路上（図1）で弊死体として拾得され、沖縄県文化課により剥製標本が作製された。その後

同標本は1999年4月に沖縄県立博物館に寄託された完全剥製標本である（写真13）。

本種は国内では局所的に渡来する夏鳥として、九州や四国、本州の山地森林地域で繁殖している。しかしながら、県内では迷鳥もしくは稀な旅鳥として飛来（通過）するものと考えられ、1979年7月15日に名護市屋我地で玉城克彦氏による1例の観察例がある（嵩原1990）が証拠となる写真はなかった。おそらく、今回の記録が県内における2例目の記録であり、物証となる初めてのものである。なお、表4に各部位の計測値を示して種同定の参考とした。

表4. ヤイロチョウ *Pitta nympha* の計測値（単位：mm）

Measurements

跗 跖 長	露 出 嘴 峰 長	自 然 翼 長	尾 長
Length of tarsus	Length of culmen	Length of Wing	Length of tail
38.3	25.5	126	42

5) ケロジョウビタキ *Phoenicurus ochruros rufiventris* [Black Redstart]

スズメ目ツグミ科 Turdidae

1999年3月24日の朝9時20分頃、久米島仲里村比嘉にある仲里村役場前中庭で（図1）、植栽のわきの芝地や草地に降り立ち、餌をついばんでいる雄1個体が確認された（写真14）。

本種は大きさ約14cmの小形ツグミ類で、中国西部・チベット・ネパール・シッキム（以上が今回確認された亜種の生息分布）に生息し、その仲間はバイカル西部からアルタイ・ヒマラヤ西部・パキスタン・アフガニスタン・イラン・イラク・ヨーロッパ中部以西一帯・アフリカ北部などに広く繁殖分布する（黒田 1980）。また、朝鮮半島や台湾などにおいて迷鳥として飛来することがある（王ら 1991）。

本種の日本における初記録は、1984年4月15日に石川県舳倉島での記録とされ、その後1985年4月29日から30日にかけて山口県見島、1986年29日から30日に北海道知床半島、1987年3月と1988年1月から3月に埼玉県浦和市で確認記録が見られる（Brazil 1991）。その後、1995年1月8日に千葉県取手市や1996年4月21日には石川県輪島市舳倉島で写真撮影されているなど国内の観察記録は多い（亀谷辰郎氏私信 1999）。

県内では1996年4月6日に西表島で雄1個体が初確認されている（庄山 1997）。今回の確認は県内2例目となり、沖縄諸島では初めての記録と思われる。

2. 沖縄県産鳥類目録補遺

本編はMcWhirterら (1996) の「沖縄県産鳥類目録」(以下「目録」と略記) 以降において新たに県内確認された鳥類や見落とし等により目録から漏れている鳥類の中で、前述した詳細な観察記録等でまとめた12種の鳥種以外の種についてまとめたものである。その記入の順序は、「目録」における番号・科名・種名・個体数・学名・英名・観察期日・観察場所・観察者・発表(文献)その他(備考)の順とした。その内訳は県内新記録種と新分布記録、希種の参考記録と分けてまとめ、上記「目録」の補遺とした。

なお、一部の学名の扱いは日本産鳥学会目録編集委員会 (1997) に準拠した。

1) 県内新記録種、()は個体数

A-063の後

科名：カモ科 ANATIDAE

種名：カリガネ (1)

学名：*Anser erythropus*

英名：Lesser White-fronted Goose

観察日：1998年4月25日

観察地：西表島

観察者：蓑口靖

発表その他：「日本の鳥1998」

文一総合出版 (1999) p95.

B-123の後

科名：ハヤブサ科 FALCONIDAE

種名：アカアシチョウゲンボウ (1)

学名：*Falco amrensis*

英名：Eastern Red-footed Falcon

観察日：1994年10月22日

観察地：石垣島平田原

観察者：矢田新平

発表その他：「*Birder*」96号. 文一総合出版
(1995) p17.

C-182の後

科名：シギ科 SCOLOPACIDAE

種名：コキアシシギ (1)

学名：*Tringa flavipes*

英名：Lesser Yellowlegs

観察日：1999年10月2日

観察地：沖縄島那霸市漫湖

観察者：大西敏一

発表その他：大西敏一私信. 写真無し

D-323の後

科名：ツグミ科 TURDIDAE

種名：ハシグロヒタキ (雄1)

学名：*Oenanthe oenanthe*

英名：Wheatear

観察日：1996年4月17日

観察地：西表島浦内 (通称クモッタ)

観察者：庄山守

発表その他：「*Birder*」125号. 文一総合
出版. (1997) p44.

E-361の後	F-393の後
科名：ヒタキ科 TURDIDAE	科名：アトリ科 FRINGILLIDAE
種名：コチャバラオオルリ（1雄）	種名：アカマシコ（2雌）
学名： <i>Niltava sundara</i>	学名： <i>Carpodacus erythrinus</i>
英名：Rufous-billed Niltava	英名：Scarlet Rosefinch
観察日：1997年10月23日（傷病鳥保護）	観察日：1999年10月12日
観察地：沖縄島北部国頭村伊地林道	観察地：粟国島
観察者：久高将和他	観察者：森河隆史・宮城国太郎
発表その他：写真あり（久高将和私信）	発表その他：松村伸夫私信、写真有り
<hr/>	
2) 新分布記録種、()は個体数	B-050
A-035	科名：サギ科 ARDEIDAE
科名：グンカンドリ科 FREGATIDAE	種名：カラシラサギ（1）
種名：オオグンカンドリ（3）	学名： <i>Egretta eulophotes</i>
学名： <i>Fregata minor</i>	英名：Chinese Egret
英名：Greater Frigatebird	観察日：1996年9月22日
観察日：1999年7月19日	観察地：南大東島
観察地：石垣島新川川河口	観察者：鹿嶋雄二
観察者：松村伸夫	発表その他：「Birder」125号、文一総合出版（1997）、p48.
発表その他：松村伸夫私信、写真有り	
<hr/>	
個体数：1（前記と同一個体と思われる）	C-065
観察日：1999年12月4日	科名：カモ科 ANATIDAE
観察地：石垣島新川川河口	種名：サカツラガン（1）
観察者：嵩原建二	学名： <i>Anser cygnoides</i>
発表その他：写真あり。同時期西表島仲間川 でも観察記録有り	英名：Swan Goose
個体数：1	観察日：1997年12月7日
観察日：1999年9月22日（傷病鳥保護）	観察者：新垣邦雄・仲間章郎
観察地：波照間島	発表その他：宮古野鳥の会（2000）
観察者：西里正善	個体数：2
発表その他：波照間中野鳥クラブ（1999）	観察日：1999年3月9日

C-065(続き)	G-128
観察地：与那国島	科名：ツル科 GRUIDAE
観察者：粒谷大地・坂口陽一郎（写真撮影）	種名：ナベヅル（1）
発表その他：谷川智一私信	学名： <i>Grus monacha</i>
D-095	英名：Hooded Crane
科名：カモ科 ANATIDAE	観察日：1997年12月14日
種名：カワアイサ（1）	観察地：伊良部島
学名： <i>Mergus merganser</i>	観察者：新垣邦夫
英名：Common Mergnser	発表その他：宮古野鳥の会（2000）
観察日：1997年12月28日	H-136
観察地：宮古島島尻干潟	科名：クイナ科 RALLIDAE
観察者：新垣邦雄	種名：シマクイナ（1）
発表その他：宮古野鳥の会（2000）	学名： <i>Coturnicops exquisitus</i>
E-114	英名：Yellow Rail
科名：タカ科 ACCIPITRIDAE	観察日：1998年2月13日
種名：クロハゲワシ（若1）（写真15・16）	観察地：西表島古見
学名： <i>Aegypius monachus</i>	観察者：川崎康弘
英名：Black Vulture	発表その他：福田篤徳私信.
観察日：2000年1月20日	I-204
観察地：石垣島バンナ岳	科名：シギ科 SCOLOPACIDAE
観察者：太田義憲（私信）	種名：コシギ（1）
発表その他：2000年2月保護・同年3月18日放鳥	学名： <i>Lymnocryptes minimus</i>
F-122	英名：Jack Snipe
科名：ハヤブサ科 FALCONIDAE	観察日：1996年10月3日
種名：ヒメチョウゲンボウ（雄1）	観察地：沖縄島金武町並里
学名： <i>Falco naumanni</i>	観察者：仲宗根勲・比嘉邦昭他
英名：Lesser Kestrel	発表その他：「Birder」125号. 文一総合出 版（1997）. p49.
観察日：1999年7月5日. 7月6日	
観察地：与那国島東崎、祖内	
観察者：五百沢日丸	
発表その他：Birder 157号30-32. 文一総合 出版（2000）.	

J-205

科名：セイタカシギ科 RECURVIROSTRIDAE
種名：セイタカシギ
学名：*Himantopus himantopus*
英名：Blak-winged Stilt
観察日：1998年7月
観察地：沖縄島糸満（埋め立て地）
観察者：山城正邦他
発表その他：初繁殖

K-207

科名：セイタカシギ科 RECURVIROSTRIDAE
種名：ソリハシセイタカシギ（2）
学名：*Recurvirostra avosetta*
英名：Avocet
観察日：1998年9月14日
観察地：石垣島蒲田原
観察者：熊澤正継（私信）
発表その他：「Birder」149号。文一総合
出版（1999）。p71.

観察個体数：1

観察日：1999年4月22日
観察地：沖縄島金武町
観察者：金田昌士・比嘉邦昭他
発表その他：琉球新報朝刊1999.4.25。

観察個体数：1

観察日：1996年3月29日
観察地：伊良部島長浜野鳥観察園
観察者：新垣邦雄
発表その他：琉球新報朝刊1996.4.2.

L-312

科名：モズ科 LANIDAE
種名：タカサゴモズ(1)
学名：*Lanius schch*
英名：Long-tailed Shrike
観察日：1998年1月1日
観察地：西表島住吉（牧場）
観察者：小川慎司
発表その他：小川慎司私信

個体数：1

観察日：1999年3月29日
観察地：石垣島平久保
観察者：北條京子
発表その他：北條京子私信

個体数：1

観察日：1999年3月9日
観察地：与那国島
観察者：粒谷大地・坂口陽一郎（写真撮影）
発表その他：谷川智一私信

M-354

科名：ウグイス科 SYLVIIDAE
種名：キクイタダキ
学名：*Regulus regulus*
英名：Goldcrest
観察日：1997年11月20日
観察地：宮古島狩俣
観察者：新垣邦雄
発表その他：宮古野鳥の会（2000）

M-354続き	3) 稀種の参考記録
個体数：1	A-068
観察日：1998年1月27日	科名：カモ科 ANATIDAE
観察地：沖縄島那覇市弁が岳	種名：リュウキュウガモ（1）
観察者：金城道男	学名： <i>Dendrocygna javanica</i>
発表その他：沖縄県公衆衛生協会編（1999）	英名：Indian Whistling Duck
個体数：3	観察日：1999年3月11日
観察日：1998年10月4日	観察地：西表島浦内川
観察地：栗国島	観察者：時田賢一・内田聖・森下恵美子
観察者：嵩原建二	東淳樹
発表その他：写真有り	発表その他：写真無し、琉球新報朝刊。
N-361	1999. 4.18
科名：ヒタキ科 TURDIDAE	B-096
種名：チャバラオオルリ（1雄）	科名：カモ科 ANATIDAE
学名： <i>Niltava vivid</i>	種名：コウライアイサ（1♂2♀）
英名：Vivid Niltava	学名： <i>Mergus squamatus</i>
観察日：1998年3月24日	英名：Chinese Mergnser
観察地：与那国島祖納	観察日：1996年12月19日
観察者：青木一夫・本若博次・福田篤徳他	観察地：西表島浦内川
発表その他：写真あり	観察者：庄山守
C-282	発表その他：「Birder」125号、文一総合 出版（1997）、p49.
科名：ヒバリ科 ALAUDIDAE	
種名：クビワコウテンシ（1）	
学名： <i>Melanocorypha bimaculata</i>	
英名：Bimaculated Lark	
観察日：1998年2月13日	
観察地：沖縄島金武町並里	
観察者：比嘉邦昭・大城亀信他	
発表その他：金田昌士私信	

謝　　辞

本報告をまとめにあたり、鳥類調査や鳥類情報の提供に協力していただいた沖縄野鳥研究会の山城正邦氏、金田昌士氏、仲宗根励氏、比嘉邦昭氏、大城亀信氏の各氏、宮古野鳥の会の久貝勝盛氏、砂川栄喜氏、新垣邦雄氏、日本野鳥の会八重山支部の崎山陽一郎氏とやんばる支部の久高将和氏、山階鳥類研究所の尾崎清明氏、仲里村教育委員会の松田史郎氏、県立博物館ボランティアの金城俊夫氏、渡久地政武氏、久米製糖の嘉手苅初子氏、西表島在住の蒲田愛美氏、与那国中学校の多和田眞修氏、沖縄環境保全研究所の新垣宏氏、茨城県つくば市の福田篤徳氏、鳥景会の伊礼新治氏、文一総合出版の亀谷辰朗氏、(株)野生生物保全研究所の大西敏一氏、京都在住の川勝敏雄氏、大阪在住の西村直人氏、松村伸夫氏、福岡在住の古屋篤史氏、埼玉在住の佐藤進氏、奈良在住の小山慎司氏、波照間中学校の西里正善氏、石垣島在住の大田義憲氏に対し厚く感謝申し上げる。また、中国語の翻訳に協力していただいた沖縄県中央保健所の新城安哲氏、地図や写真の活用に便宜を計っていた県立公文書館の当山昌直氏、英文のチェックをしていただいた沖縄県立博物館の前田真之氏、本報告のまとめに有益な助言をいただいた森岡照明氏、帯広畜産大学の藤巻裕蔵教授、国立科学博物館名誉研究員の森岡守之氏に深く感謝申しあげる。さらに、鳥類記録について発表の機会を与えていただいた博物館資料の寄託者である沖縄県教育庁文化課に対し深甚より感謝申し上げる。

<引用文献>

- Brazil M.A. 1991. The Birds of Japan. Christopher Helm.446pp.
- Beaman, M. and Madge, S. 1998, The Handbook of Bird Identification for Europe and Western Palearctic. Princeton University Press, Princeton New Jersey. 868pp.
- Birder編集部 1999.日本のクイナたち.Birder151:14-15.文一総合出版.
- Feare, C and Craig, A. 1999. Starlings and Mynas. Princeton University Press, Princeton New Jersey. 285pp.
- Howard D. and Moore A. 1991. A coplate checklist of the Birds of the world, 2nd ed. Academic Press,London.
- 波照間中学野鳥クラブ 1999.波照間島で見られた野鳥. 74pp.
- 五百沢日丸他 2000. 日本の鳥 5 5 0 , 水辺の鳥. 文一総合出版. 351pp.
- 小林桂助 1983. 原色日本野鳥図鑑 (改訂増補). 保育社. 261pp.
- 顔重威他 1996. 中國野鳥図鑑. 翠鳥文化事業有限公司. 521pp.
- King, B. Fand Dickinson E.C. 1975. A field guide to the birds of South-East Asia. 480 pp. Houghton Mifflin. Boston.

- 黒田長禮 1980. 新版鳥類原色大図鑑 I . 講談社.
- Knystautas, A. 1993. Collins Guide Birds of Russia. Harper Collins Publishers、London.
256pp.
- 日本鳥学会 1974. 改訂日本鳥類目録. 学研
- 日本産鳥類目録編集委員会 1996. 日本産鳥類リスト. Jpn . J.Ornithol 46:59-91.
- Mayr, E.and J. C. Grennway,Jr. 1962. Check-list of the Birds of the World. vol. XV.
Museum of comparative Zoology ,Cambridge, Massachusetts.
- McWhirter D, Ikenaga H.,Iozawa H.,Shoyama M. and Takehara K. 1996. A Check-list of
the Birds of Okinawa Prefecture with notes on recent status including hypothetical
records. Bulletin of the Okinawa Prefectural Museum. (22):33-152.
- 宮古野鳥の会編 2000. 宮古群島の鳥類目録. 宮古野鳥 20周年記念誌.
- 森岡照明 1999. 新しい識別の試み, 与那国島のハイイロオウチュウ. Birder 154:62-
65.文一総合出版.
- 二階堂善二 1999.ハイイロオウチュウ. Birder145:26.文一総合出版.
- 王嘉雄他 1991. 台湾野鳥図鑑. 台湾野鳥資訊社. 274pp.
- 岡部海都 1998.マキバタヒバリ, 写真集日本の野鳥1997.文一総合出版.p90.
- 沖縄野鳥研究会 1993.改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版. 299pp.
- 沖縄県公衆衛生協会編 1999.那覇市域生物環境調査. 那覇市環境保全課.
- Ripley S.D. 1977. Rails of the World. M.F.Fehely,Tront,Ontario..
- 庄山守 1997. クロジョウビタキ. 1996年, 日本に舞い降りた鳥類たち. Birder125:44.
文一総合出版.
- Taylor B. and von Perlo B. 1998. Rails—A guide to the Rails,Crakes,Callinules and Coots
of the World. PICA PRESS,sussex.600pp.
- 嵩原建二 1990. 名護市鳥類目録. 名護やんばるの野鳥. 18-23.名護博物館.
- 嵩原建二 1994. 最近沖縄で目撃および保護された興味深い鳥類.
沖縄県立博物館紀要 20:141-146
- 友利哲夫 1977. 哺乳類・鳥類・昆虫類. 名護市動植物総合調査報告書. 名護市教育委員
会. 84-128.
- 八重山野鳥の会 1983. 10周年記念誌. 八重山野鳥の会. 74pp.
- 山階芳麿 1986. 世界鳥類和名辞典. 大学書林. 1140pp.
- 山階鳥類研究所 1993. 環境庁委託調査,平成 5 年度鳥類観測ステーション報告. 山階鳥
類研究所標識研究室. p14.

<写真図版 1>



(1) オオジュウイチ
Cuculus sparverioides
(Large Hawk Cuckoo : 標本)



(2) クロシロカンムリカッコウ
Cucurus jacobinus
(Black-and-white Cockoo : 蒲田愛美氏
撮影 ; VTRテープからのプリント)



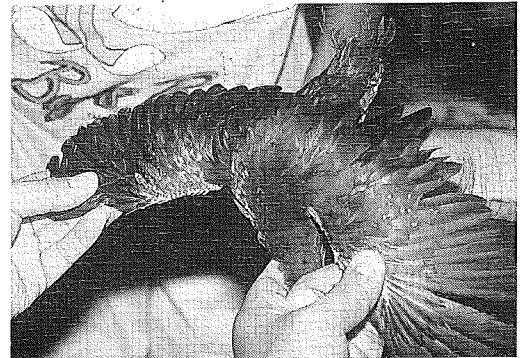
(3) ハイイロオウチュウ
Dicrurus leucophaeus leucogenis
(Ashy Drongo)



(4) タカサゴクロサギ
Dupertor flavigollis flaviollis
(Black Bittern : 新垣宏氏撮影)



(5) タンチョウ *Grus japonensis*
(Red-crowned Crane : 砂川栄喜氏撮影)

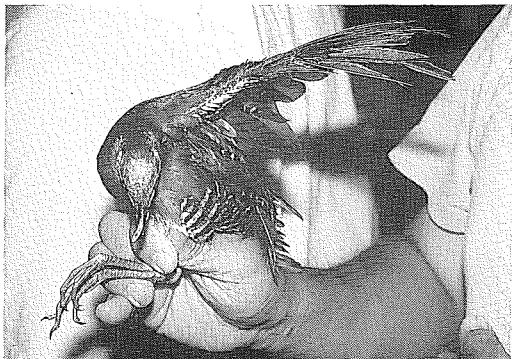


(6) コウライヒクイナ
Rallina paykullii 全身（背面）
(Band-bellied Crake)

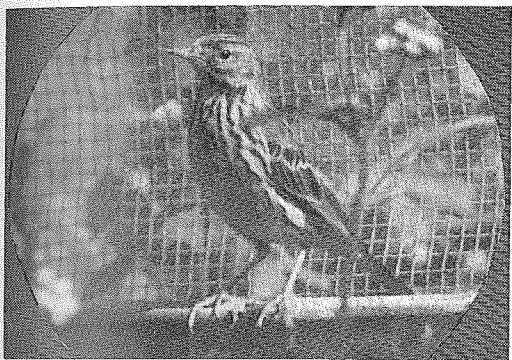
<写真図版 2 >



(7) コウライヒクイナ
Rallina paykullii 雨覆（背面）
(Band-bellied Crake)



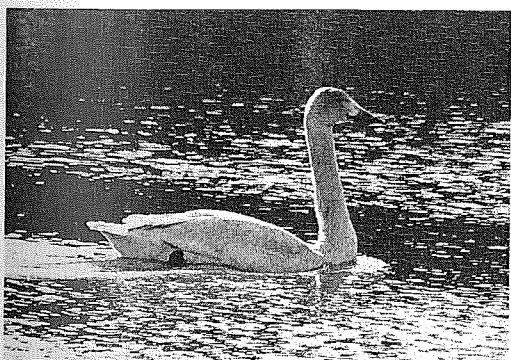
(8) コウライヒクイナ
Rallina paykullii (下腹部)
(Band-bellied Crake)



(9) マキバタヒバリ *Anthus pratensis*
(Meadow Pipit : 金田昌士氏撮影)
[琉球新報 1999年2月1日付記事改変]



(10) ハイイロペリカン
Pelecanus philippensis crispus
(Dalmatian Pelican : 多和田眞修氏撮影)

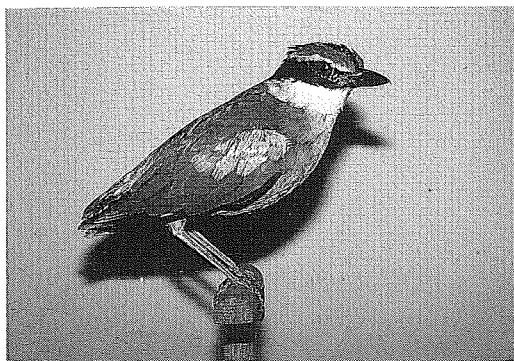


(11) コハクチョウ
Cygnus columbianus jankowskii
(Tundra Swan : 多和田眞修氏撮影)



(12) アオシギ
Gallinago solitaria japonica
(Solitary Snipe : 嘉手苅初子氏撮影)

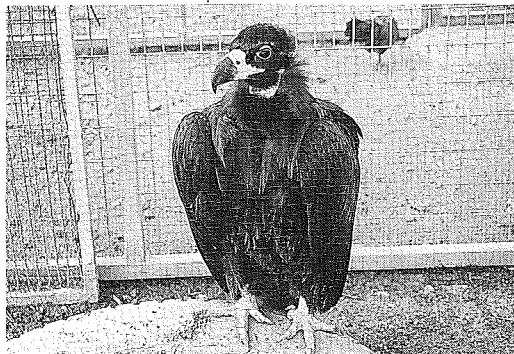
<写真図版 3 >



(13) ヤイロチョウ *Pitta nympha*
(Fairy Pitta : 標本)



(14) クロジョウビタキ
Phoenicurus ochruros rufiventris
(Black Redstart)



(15) クロハゲワシ
Aegypius monachus
(Black Vulture : 石垣市大本小で撮影)



(16) クロハゲワシ
Aegypius monachus
(Black Vulture : 大田義憲氏撮影)

末吉公園の植物とオオコウモリの餌植物について

宮城朝章⁽¹⁾・嵩原建二⁽²⁾

Flora and food plants of the flying fox on Sueyoshi Park in Naha-city

Miyagi C. and Takehara K.

はじめに

那覇市市民環境部環境保全課においては、市域の自然環境にかかる諸計画や環境教育の基礎資料を作成する目的で、1996～1999年に生物環境調査が実施された。本報告はその調査の一環として行った末吉公園の植物相の調査と、1997年から機会あるごとに調査してきたオオコウモリの餌植物についてのまとめである。

末吉公園は、那覇市内で最も規模の大きい自然林が残存する所で、古くから多くの植物研究家の調査・研究や児童・生徒の野外観察の場として親しまれてきた。また、最近は散策、ジョギング、レクレーションの場として多くの市民に利用されている。

公園内の植物に関する報告は、著者らの手元にある文献では、佐久本ら（1978）が公園一帯の植物群落について、宮城（1984）が公園の植物の観察についてそれぞれ報告している。また、大城（1994）は地域の自然環境の教材化に関する研究において、公園内のシダ植物と種子植物の詳細な植物目録を作成している。

植物相の調査は、これらの文献を参照し、シダ植物と種子植物の他にコケ植物も調査の対象にして実施した。

また、植物相の調査以外に園内に生息するオオコウモリの利用する餌植物についても、調査を実施し、園内における食痕やペリット等で採食の確認を行った。

南西諸島に生息が知られるクビワオオコウモリ類には、薩南諸島の口之永良部とトカラ列島の中之島、宝島などにエラブオオコウモリ、沖縄島及びその周辺離島などにオリイオオコウモリ、八重山諸島の石垣島や小浜島、西表島、与那国島などにはヤエヤマオオコウモリ、さらに大東諸島にはダイトウオオコウモリがそれぞれの地域に分かれて生息分布している（太田、1992）。

これらの種の扱いについては、阿部ら（1994）によると包括的にクビワオオコウモリ *Pteropus dasymallus* としているが、本報告では太田（1992）にしたがい、本地域に生息するオオコウモリを亜種オリイオオコウモリ *P. d. inopinatus* とした。

南西諸島に生息する亜種の中で、エラブオオコウモリの食性については、船越（1989）

⁽¹⁾那覇市首里儀保町4-11. ⁽²⁾沖縄県立博物館（那覇市首里大中町1-1）

の先駆的な研究がある。さらにダイトウオオコウモリについては、池原（1973）、下謝名（1978）などによる報告と、最近では横田ら（1992a, 1992b）による餌植物の植物季節に関する研究が見られる。また、ヤエヤマオオコウモリについては、高良（1981）などの報告がある。

沖縄諸島に生息するオリイオオコウモリの食性については、丸山（1992）によって飼育下における報告がみられるが、野外においての知見は、池原ら（1981）、高良（1975）、横田ら（1992）、嵩原（1994, 1995, 1998）などによって断片的な報告がなされている。

著者らは、末吉公園内において、オオコウモリが利用する餌植物について、断片的ではあるが若干の知見を得たので報告する。本報告が公園内における植物相とそれを利用する動物の関係を理解し、野生生物と共に存するためのいくばくかの資料となれば幸いである。

調査にあたっては、元琉球大学教授の新城和治先生、同大学教育学部の玉城和香子氏、那覇市公園緑地課主査の金城茂夫氏、末吉公園管理事務所工長の新垣栄行氏には調査に同行され、種の同定などにご協力を頂いた。また、琉球大学名誉教授の島袋敬一先生にはシダ植物、広島大学理学部の山口富美夫博士にはコケ植物の同定や確認をして頂いた。

さらに、県立具志川高校校長の上門清春先生にはオオコウモリの餌植物についての情報を賜った。ここに厚くお礼申しあげる。

調査地の概況

末吉公園は那覇市首里の北西にあって、公園のほぼ中央を安謝川が流れ、川の両側は段丘状の地形になっている。北側の段丘の頂上近くに琉球八社の一つである末吉宮（標高約80m）が位置し、その西の方に市の史跡に指定されている宜野湾御殿の墓がある。

また、公園内は、地形的に高い所には琉球石灰岩が分布し、低い所は泥岩層あるいはその風化土壌であるジャーガルからできている。

次に植生を見ると、末吉宮一帯から滝見橋付近までの崖沿いと急斜面にクスノハカエデ、ホルトノキ、ヤブニッケイ、ホソバムクイヌビワなどを主な構成種とする二次林が成立し、広い面積を占めている。

林内には石灰岩の転石が多く、その上にハマイヌビワ、アコウ、ガジュマルなどの高木が枝を広げ、根元にホラカグマ、ホウビカンジュ、オニヤブソテツなどのシダ植物が茂っている。また、ノアサガオ、オキナワセンニンソウ、テリハノブドウなどのつる植物が林冠を覆い、からみ合ったつるが林内に垂れ下がっているのが人目を引く。

じめじめした川沿いの泥岩地には、アカギやオオバギが優占する林分が見られ、太いアカギの樹幹にオガサワラクサリゴケ、カラヤスデゴケなどのコケ植物が着生する。

また、川を見渡すと冠水域は生活排水で汚れているが、転石上にはオオイワヒトデ、ゴウシュウタニワタリ、アリサンミズ、クワズイモなどが生育し、川原にはシユロガヤツリ、ヤナギバルイラソウ、シロノセンダングサなどの草本が群落を形成している。

さらに、入園者がよく利用する遊歩道や広場は手入れが行き届き、その周辺にはククイノキ、ホウオウボク、ヒカンザクラ、シマサルスベリなどの花木やヤシ類が植栽され、種類も多い。

調査方法

今回の植物相の調査では、調査地を現在開園されている所と末吉宮周辺に限定し、出来るだけくまなく踏査を行ない、現地で実見したシダ植物と種子植物の植物名を記録した。コケ植物は標本を作製し、種の同定を行なった。

植物目録は調査の結果、生育が確認された植物を基にして作成した。なお、シダ植物と種子植物については、より正確な資料を提供するために文献に記載されている植物の中で、今回確認できなかったものも含めた。

また、植物目録の科の配列と学名・和名については、維管束植物は、主に初島住彦・天野鉄夫の「琉球植物目録、1994」、コケ植物のセン類は、Zennoske Iwatsukiの“Catalog of the Mosses of Japan, 1991”、タイ類とツノゴケ類は、古木達郎・水谷正美の「日本産タイ類及びツノゴケ類の分類体系、1994」と「日本産タイ類・ツノゴケ類チェックリスト、1993」に基づいた。さらに文献に記載されている植物の中で、今回生育が確認できなかつたものは、和名の後に*印をつけて示した。

調査結果

(1) 植物相の調査

調査の結果、公園内にはコケ植物が25科41属57種、シダ植物が10科15属21種、種子植物が116科380属521種、合計151科436属599種が生育することを確認した。

文献に記録された植物のなかで、今回生育が確認できなかつた植物は6種である。この6種を今回確認した599種に加えると末吉公園に生育する植物は、表1に示すように151科440属605種（亜種、変種、品種などを含む）になる。

表1 末吉公園で生育が確認された植物の種数

分類群	科	属	種
コケ植物	2 5	4 1	5 7
セン類	1 6	2 6	3 9
タイ類 (ツゴケ類を含む)	9	1 5	1 8
シダ植物	1 0	1 5	2 2
種子植物	1 1 6	3 8 4	5 2 6
裸子植物	5	6	7
被子植物	1 1 1	3 7 8	5 1 9
双子葉植物	9 5	2 8 3	3 8 7
单子葉植物	1 6	9 5	1 3 2
合計	1 5 1	4 4 0	6 0 5

次に、605種のうちで特記すべき種を挙げると、下記の10種である。

1. セイタカスズムシソウ (キツネノマゴ科)

高さ1m位になる低木状多年生草本で、コノハチョウの食草として知られている。ヤンバルの山地に生育し、島尻一帯では希産種である。

2. コモウセンゴケ (モウセンゴケ科、食虫植物)

ウラジロカンコノキ (トウダイグサ科、高さ約1m、1株)

両種ともヤンバルには多いが島尻地域では希少な植物ある。

3. ヤマゴボウノキ (ヤマゴボウ科)

南米原産の常葉高木。4月頃、長さ15cm位の総状花序が垂れ下る。県内ではあまり見かけない植栽樹である。

4. キブリハネゴケ (セン類)

中国、台湾、ベトナム、フィリピン、日本（本州、四国、九州）に分布し、石灰岩上に褐色がかった群落をつくる。これまで沖縄では記録されていなかったが、今回公園内の岩上に生育しているものを確認した（沖縄新産）。

5. フガゴケ (セン類)、アミバホウオウゴケ (セン類)、ヒモヨウジョウゴケ (タイ類)

オキナワサイハイゴケ (タイ類)、ヤワラゼニゴケ (タイ類)

この5種は「沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物・レッドデータ おきなわ」において、希少種のカテゴリーに掲載されているコケ植物である。

以上が今回得られた結果であるが、もっと精細に調査すれば、種数はさらに増加する可能性が高い。また、園芸植物の中には、同定が不十分なためリストに載せなかつたものが数種ある。これらについては、今後の課題にしたい。

植物目録

BRYOPHYTA コケ植物

Musci セン類

Fissidentaceae ホウオウゴケ科

<i>Fissidens bogoriensis</i> Fleisch.	イリオモテホウオウゴケ
<i>F. bryoides var. esquirolii</i> (Thér.) Iwats. et T.Suzuki	スナジホウオウゴケ
<i>F. maceratus</i> Mitt.	アミバホウオウゴケ
<i>F. subangustus</i> Fleisch.	ニセサクラジマホウオウゴケ
<i>F. taxifolius</i> Hedw.	キャラボクゴケ
<i>F. tosaensis</i> Broth.	チャボホウオウゴケ
<i>F. zippelianus</i> Dozy et Molk.	サクラジマホウオウゴケ

Dicranaceae シッポゴケ科

<i>Dicranella coarctata</i> (C.Müll.) Bosch et Lac.	ホウライオバナゴケ
---	-----------

Pottiaceae センボンゴケ科

<i>Barbula arcuata</i> Griff.	フソウネジクチゴケ
<i>B. indica</i> (Hook.) Spreng.	トウヨウネジクチゴケ
<i>B. javanica</i> Dozy et Molk.	セイタカネジクチゴケ
<i>Hyophila involuta</i> (Hook.) Jaeg. et Sauerb.	カタハマキゴケ
<i>H. propagulifera</i> Broth.	ハマキゴケ
<i>Weissia edentula</i> Mitt.	ホソバトジクチゴケ
<i>W. newcomeri</i> (Bartr.) K.Saito	

Funariaceae ヒヨウタンゴケ科

<i>Physcomitrium splaericum</i> (Ludw.) Brid.	アゼゴケ
---	------

Splachnaceae オオツボゴケ科

<i>Gymnostomiella longinervis</i> Broth.	フガゴケ
--	------

Bryaceae ハリガネゴケ科

<i>Brachymenium exile</i> (Dozy et Molk.) Bosch et Lac.	ホソウリゴケ
<i>Bryum argenteum</i> Hedw.	ギンゴケ
<i>B. cellulare</i> Hook.	オンセンゴケ
<i>B. coronatum</i> Schwaegr.	ナガハハリガネゴケ
<i>B. leptocaulon</i> Card.	ナガハリガネゴケ

Bartramiaceae タマゴケ科

Philonotis sp.

Orthotrichaceae タチヒダゴケ科

Macromitrium japonicum Dozy et Molk. ヤマトミノゴケ

Rhacopilaceae ホゴケ科

Rhacopilum aristatum Mitt. ホゴケ

Trachypodaceae ムジナゴケ科

Duthiella wallichii (Mitt.) C.Müll. オオノコギリゴケ

Neckeraceae ヒラゴケ科

Neckeropsis nitidula (Mitt.) Fleisch. リボンゴケ

Pinnatella makinoi (Broth.) Broth. キブリハネゴケ

Hypopterygiaceae クジャクゴケ科

Hypopterygium tenellum C.Müll. ヒナクジャクゴケ

Thuidiaceae シノブゴケ科

Claopodium gracillimum (Card. et Thér.) Nog. ホソハリゴケ

Haplocladium microphyllum (Hedw.) Broth. コメバキヌゴケ

Haplohymenium pseudo-triste (C.Müll.) Broth. コバノイトゴケ

Thuidium bonianum Besch. イボエシノブゴケモドキ

Brachytheciaceae アオギヌゴケ科

Eurhynchium savatieri Schimp. ex Besch. ヒメナギゴケ

Entodontaceae ツヤゴケ科

Entodon macropodus (Hedw.) C.Müll. ツクシツヤゴケ

Hypnaceae ハイゴケ科

Ectropothecium zollingeri (C.Müll.) Jaeg. オオヒラツボゴケ

Hypnum plumaeforme Wils. ハイゴケ

Taxiphyllum taxirameum (Mitt.) Fleisch. キヤラハゴケ

Vesicularia ferriei (Card. et Thér.) Broth. リュウキユウフクロハイゴケ

Hepaticae タイ類

Jungermanniaceae ツボミゴケ科

Jungermannia sp.

Geocalycaceae ウロコゴケ科

Heteroscyphus planus (Mitt.) Schiffn. ツクシウロコゴケ

Frullaniaceae ヤステゴケ科

Frullania muscicola Steph. カラヤステゴケ

Lejeuneaceae クサリゴケ科

<i>Archilejeunea planiuscula</i> (Mitt.) Steph.	ナンカイヒメゴヘイゴケ
<i>Cololejeunea planissima</i> (Mitt.) Abeyw.	ミヤジマヨウジョウゴケ
<i>C. raduliloba</i> Steph.	ナガシタバヨウジョウゴケ
<i>C. schwabei</i> Herz.	ヒモヨウジョウゴケ
<i>Lejeunea anisophylla</i> Mont.	オガサワラクサリゴケ
<i>L. japonica</i> Mitt.	ヤマトコミニゴケ
<i>Pycnolejeunea minutilobula</i> (Amak.) Amak.	オキナワシゲリゴケ
<i>Trocholejeunea sandvicensis</i> (Gott.) Mizut.	フルノコゴケ

Wiesnerellaceae アズマゴケ科

Dumortiera hirsuta (Sw.) Nees ケゼニゴケ

Aytoniaceae ジンガサゴケ科

<i>Asterella liukiensis</i> (Horik.) Horik.	オキナワサイハイゴケ
<i>Reboulia hemisphaerica</i> (L.) Raddi	
<i>subsp. orientalis</i> Schust.	ジンガサゴケ

Marchantiaceae ゼニゴケ科

<i>Marchantia emarginata</i> Reinw. et al.	
<i>subsp. tosana</i> (Steph.) Bischl.	トサノゼニゴケ

Monosoleniaceae ヤワラゼニゴケ科

Monosolenium tenerum Griff. ヤワラゼニゴケ

Anthocerotaceae ツノゴケ類

Anthocerotaceae ツノゴケ科

<i>Folioceros fuciformis</i> (Mont.) Bharadw.	ミヤベツノゴケ
<i>Phaeoceros laevis</i> (L.) Prosk.	ミヤケツノゴケ

PTERIDOPHYTA シダ植物

Psilotaceae マツバラン科

Psilotum nudum (L.) Beauv. マツバラン

Selaginellaceae イワヒバ科

Selaginella luchuensis Koidz. ヒメムカデクラマゴケ

Osmundaceae ゼンマイ科

Plenasium banksiifolium (Pr.) Presl シロヤマゼンマイ

Schizaeaceae フサシダ科

Lygodium japonicum (Thunb.) Sw.

var. *microstachyum* (Desv.) Tard. & C.Chr. ナガバカニクサ

Cyatheaceae ヘゴ科

Sphaeropteris lepifera (K.Sm.ex Hook.) Tryon ヒカゲヘゴ

Pteridaceae イノモトソウ科

Adiantum capillus-veneris L. ホウライシダ

Pteris dispar Kunze アマクサシダ*

P. ensiformis Burm. ホコシダ

P. ryukyuensis Tagawa リュウキュウイノモトソウ

P. vittata L. モエジマシダ

Davalliaceae シノブ科

Nephrolepis auriculata (L.) Trimen タマシダ

N. biserrata (Sw.) Schott ホウビカンジュ

Aspidiaceae オシダ科

Ctenitis eatoni (Bak.) Ching ホラカグマ

Cyrtomium falcatum (L.f.) Presl オニヤブソテツ

Tectaria devexa (Kunze) Copel. ウスバシダ

Thelypteris acuminata (Houtt.) Morton ホシダ

T. parasitica (L.) Fosb. ケホシダ

T. torresiana (Gaud.) Alston アラゲヒメワラビ

Aspleniaceae チャセンシダ科

Asplenium australasicum (J.Sm.) Hook. ゴウシュウタニワタリ

Polypodiaceae ウラボシ科

Colysis pothifolia (Don) Presl オオイワヒトデ

C. wrightii (Hook.) Ching ヤリノホクリハラン

Microsorium scolopendria (Burm.) Copel. オキナワウラボシ

S P E R M A T O P H Y T A 種子植物

G y m n o s p e r m a e 裸子植物

Cycadaceae ソテツ科

Cycas revoluta Thunb. ソテツ

Podocarpaceae マキ科

Nageia nagi (Thunb.) O.K. ナギ

Podocarpus macrophyllus (Thunb.) Sweet イヌマキ

Araucariaceae ナンヨウスギ科

Araucaria heterophylla (Salisb.) Franco コバノナンヨウスギ

Cupressaceae ヒノキ科

Juniperus chinensis L.

var. *tsukusiensis* Masam. ツクシビヤクシン(カイヅカイブキ)

J. taxifolia Hook. & Arn.

var. *lutchuensis* (Koidz.) Satake オキナワハイネズ

Pinaceae マツ科

Pinus luchuensis Mayr リュウキュウマツ

A n g i o s p e r m a e 被子植物

D i c t y l e d o n e a e 双子葉植物

A r c h i c h l a m y d e a e 古生花被区

Casuarinaceae モクマオウ科

Casuarina equisetifolia J.R. et J.G. Forst. トキワギヨリュウ(モクマオウ)

C. glauca Sieber ex Spreng. グラウカモクマオウ

Saururaceae ドクダミ科

Houttuynia cordata Thunb. ドクダミ

Piperaceae コショウ科

Peperomia japonica Makino サダソウ

Piper kadzura (Choisy) Ohwi フウトウカズラ

Salicaceae ヤナギ科

Populus nigra L. var. *italica* (Munchl.) Koehne クロヤマナラシ(ポプラ)

Myricaceae ヤマモモ科

Myrica rubra S. & Z. ヤマモモ

Fagaceae ブナ科

Quercus phillyraeoides A.Gray ウバメガシ

Ulmaceae ニレ科

Celtis boninensis Koidz. クワノハエノキ

Moraceae クワ科

Artocarpus incisus (Thunb.) L.f. パンノキ

Broussonetia papyrifera (L.) L'Herit. ex Vent. カジノキ

Fatoua villosa (Thunb.) Nakai クワクサ

Ficus ampelas Burm.f. ホソバムクイヌビワ

F. benjamina L. シダレガジュマル(シロガジュマル)

F. elastica Roxb. ex Hornem. インドゴムノキ

F. erecta Thunb. ex Kaempf. イヌビワ

var. *beecheyana* (Hook. et Arn.) King ケイヌビワ

F. microcarpa L.f. ガジュマル

F. pumila L. オオイタビ

F. rubiginosa Desf. ex Venten cv. 'Australis' フィッカスハウイ

F. septica Burm.f. オオバイヌビワ

F. superba (Miq.) Mig. var. *japonica* Miq. アコウ

F. virgata Reinw. ex Bl. ハマイヌビワ

Morus australis Poir. ヤマグワ(シマグワ)

Urticaceae イラクサ科

Boehmeria densiflora Hook. & Arn. ヤナギヤブマオ

Boehmeria nivea (L.) Gaudich.

var. *nippononivea* (Koidz.) W.T.Wang カラムシ

f. viridula (Yamam.) Hatusima ノカラムシ

Nanocnide lobata Wedd. ヤエヤマカテンソウ

Pilea aquarum Dunn アリサンミズ

var. *brevicornuta* (Hayata) C.T.Cheu コゴメミズ

Pilea microphylla (L.) Liebm. コケミズ

P. peploides (Gaudich.) Hook. & Arn.

Pouzolzia zeylanica (L.) Benn. & Brown ヤンバルツルマオ

Santalaceae ピャクダン科

Santalum album L. ピャクダン

Aristolochiaceae ウマノスズクサ科

Aristolochia liukiuensis Hatusima リュウキュウウマノスズクサ

Polygonaceae タデ科

Antigonon leptopus Hook. & Arn. ニトベカズラ

Polygonum chinense L. ツルソバ

P. longisetum de Bruyn イヌタデ

Rumex japonicus Houtt. ギシギシ

Chenopodiaceae アカザ科

Chenopodium serotinum L. コアカザ

Amaranthaceae ヒユ科

Achyranthes aspera L. ムラサキイノコヅチ

var. *rubrofusca* (Wight) Hook.f ムラサキイノコヅチ

Achyranthes bidentata Bl. ハチジョウイノコヅチ

var. *hachijoensis* (Honda) Hara ハチジョウイノコヅチ

Alternanthera sessilis (L.) DC. ツルノゲイトウ

Amaranthus lividus L. イヌビユ

Gomphrena globosa L. センニチコウ

Portulacaceae スベリヒユ科

Portulaca oleracea L. スベリヒユ

Portulaca pilosa L. マツバボタン

ssp. *grandiflora* (Hook.) Geesink マツバボタン

Basellaceae ツルムラサキ科

Basella alba L. ツルムラサキ

Phytolaccaceae ヤマゴボウ科

Phytolacca dioica L. ヤマゴボウノキ

Nyctaginaceae オシロイバナ科

Bougainvillea spectabilis Willd. イカダカズラ(ブーゲンビレア)

Caryophyllaceae ナデシコ科

Cerastium glomeratum Thuill. オランダミミナグサ

Sagina japonica (Sw.) Ohwi ツメクサ

Stellaria aquatica (L.) Scop. ウシハコベ

Ranunculaceae キンポウゲ科

Clematis grata Wall.

<i>var. ryukyuensis</i> Tamura	リュウキュウボタンヅル
<i>C. okinawensis</i> Ohwi	オキナワセンニンソウ
<i>Ranunculus sieboldii</i> Miq.	シマキツネノボタン

Berberidaceae メギ科

<i>Nandina domestica</i> Thunb.	ナンテン
---------------------------------	------

Menispermaceae ツヅラフジ科

<i>Cocculus laurifolius</i> DC.	コウシュウウヤク
<i>C. orbiculatus</i> (L.) DC.	アオツヅラフジ*
<i>Sinomenium acutum</i> (Thunb.) Rehd. & Wils.	オオツヅラフジ
<i>Stephania longa</i> Lour.	ケハスノハカズラ(コバノハスノハカズラ)

Magnoliaceae モクレン科

<i>Kadsura japonica</i> (L.) Dunal	サネカズラ
------------------------------------	-------

Annonaceae バンレイシ科

<i>Annona glabra</i> L.	ポンドアップル
<i>A. montana</i> Macfad.	ホシババンレイシ(ヤマトゲバンレイシ)

Lauraceae クスノキ科

<i>Cinnamomum camphora</i> (L.) Presl	クスノキ
<i>C. doederleinii</i> Engl.	シバニッケイ
<i>C. pseudo-pedunculatum</i> Hayata	ヤブニッケイ
<i>Laurus nobilis</i> L.	ゲッケイジユ
<i>Lindera communis</i> Hemsl. var. <i>okinawaensis</i> Hatusima	オキナワヤマコウバシ*
<i>Litsea japonica</i> (Thunb.) Juss.	ハマビワ
<i>Neolitsea sericea</i> (Bl.) Koidz.	シロダモ
<i>Persea thunbergii</i> (S. & Z.) Kosterm.	タブノキ

Hernandiaceae ハスノハギリ科

<i>Hernandia nymphaeafolia</i> (Presl) Kubitzki	ハスノハギリ
---	--------

Papaveraceae ケシ科

<i>Corydalis tashiroi</i> Makino	シマキケマン
----------------------------------	--------

Capparidaceae フウチョウソウ科

<i>Crataeva falcata</i> (Lour.) DC.	ギヨボク
-------------------------------------	------

Cruciferae アブラナ科

<i>Cardamine parviflora</i> L.	ヒメタネツケバナ
<i>Coronopus didymus</i> (L.) Smith	インチンナズナ

Lepidium virginicum L. マメグンバイナズナ

Rorippa indica (L.) Hieron. イヌガラシ

Droseraceae モウセンゴケ科

Drosera spathulata Labill. コモウセンゴケ

Crassulaceae ベンケイソウ科

Kalanchoe pinnata (Lam.) Pers. セイロンベンケイ

K. tubiflora (Harvey) R.Hamet キンチョウ

Pittosporaceae トベラ科

Pittosporum tobira (Thunb.) Dryand ex Aiton トベラ

Hamamelidaceae マンサク科

Distylium racemosum S.& Z. イスノキ

Liquidambar formosana Hance フウ

Rosaceae バラ科

Eriobotrya japonica (Thunb.) Lindl. ピワ

Prunus campanulata Maxim. ヒカンザクラ

P. persica (L.) Batsch モモ

P. zippeliana Miq. バクチノキ

Pyracantha angustifolia (Franch.) C.K.Schneid. タチバナモドキ

Rhaphiolepis indica (L.) Lindl.ex Ker オキナワシャリンバイ

ssp. umbellata (Thunb.ex Murr.) Hatusima シャリンバイ

Rosa centifolia L. セイヨウバラ

R. chinensis Jacq. コウシンバラ

Rubus parvifolius L. ナワシロイチゴ

R. sieboldii Bl. ホウロクイチゴ

Leguminosae マメ科

Acacia confusa Merr. ソウシジュ

Albizia lebbek (L.) Benth. ビルマネム

Alysicarpus vaginalis (L.) DC. マルバダケハギ

Bauhinia blakeana Dunn アカバナハカマノキ

B. japonica Maxim. ハカマカズラ

B. purpurea L. ムラサキソシンカ

Cajanus cajan (L.) Huth キマメ

Calliandra haematocephala Hassk. オオベニゴウカン

<i>Canavalia cathartica</i> Thouars	タカナタマメ
<i>Cassia coluteoides</i> Colladon	コバノセンナ
<i>C. fistula</i> L.	ナンバンサイカチ
<i>C. surattensis</i> Burm.f.	モクセンナ
<i>Clitoria ternatea</i> L.	チョウマメ
<i>Delonix regia</i> (Bojer ex Hook.) Raf.	ホウオウボク
<i>Desmanthus illinoensis</i> (Michx.) Macm.	ハイクサネム(アメリカゴウカン)
<i>Desmodium canum</i> (Gmel.) Schinz & Thellung	タチシバハギ
<i>Erythrina × bidwillii</i> Lindl.	サンゴシトウ
<i>E. orientalis</i> (L.) Murr.	デイゴ
<i>Kummerowia striata</i> (Thunb.) Schindl.	ヤハズソウ
<i>Leucaena leucocephala</i> (Lam.) de Wit	ギンネム
<i>Medicago lupulina</i> L.	コメツブウマゴヤシ
<i>Melilotus suaveolens</i> Ledeb.	シナガワハギ
<i>Pithecellobium dulce</i> (Roxb.) Benth.	キンキジユ
<i>Pongamia pinnata</i> (L.) Pierre	クロヨナ
<i>Pueraria montana</i> (Lour.) Merr.	タイワンクズ
<i>Rhynchosia volubilis</i> Lour.	タンキリマメ
<i>Trifolium repens</i> L.	シロツメクサ
<i>Vicia angustifolia</i> L. var. <i>segetalis</i> (Thuill.) Koch	ヤハズエンドウ
<i>V. hirsuta</i> (L.) S.F.Gray	スズメノエンドウ
<i>V. tetrasperma</i> (L.) Schreb.	カスマグサ

Geraniaceae フウロソウ科

<i>Geranium carolinianum</i> L.	アメリカフウロ
---------------------------------	---------

Oxalidaceae カタバミ科

<i>Averrhoa carambola</i> L.	ゴレンシ
<i>Oxalis corniculata</i> L.	カタバミ
<i>O. corymbosa</i> DC.	ムラサキカタバミ

Trapaeolaceae ノウゼンハレン科

<i>Trapaeolum majus</i> L.	ノウゼンハレン
----------------------------	---------

Rutaceae ミカン科

<i>Citrus depressa</i> Hayata	ヒラミレモン(シイクワシャー)
-------------------------------	-----------------

<i>Glycosmis pentaphylla</i> (Retz.) Correa	ハナシンボウギ*
<i>Murraya paniculata</i> (L.) Jack	ゲッキツ
<i>Toddalia asiatica</i> (L.) Lam.	サルカケミカン
Simaroubaceae ニガキ科	
<i>Picrasma quassoides</i> (D.Don) Benn.	ニガキ
Meliaceae センダン科	
<i>Melia azedarach</i> L.	センダン
Malpighiaceae キントラノオ科	
<i>Malpighia glabra</i> L.	バルバドスチェリー
<i>Tristellateia australasiae</i> A.Rich.	コウシュンカズラ
Daphniphyllaceae ユズリハ科	
<i>Daphniphyllum glaucescens</i> Bl.	
ssp. <i>teijsmannii</i> (Zoll.ex Teijsm.& Binn.) Huang	ヒメユズリハ
Euphorbiaceae トウダイグサ科	
<i>Acalypha australis</i> L.	エノキグサ
<i>Acalypha wilkesiana</i> Muell.-Arg.	
var. <i>marginata</i> Moore	ヘリトリアカリファ
cv. <i>Musaica</i>	ニシキアカリファ
<i>Aleurites moluccana</i> (L.) willd.	ククイノキ
<i>Antidesma pentandrum</i> (Blanco) Merr.	シマヤマヒハツ
<i>Bischofia javanica</i> Bl.	アカギ
<i>Breynia vitis-idaea</i> (Burm.f.) C.E.C.Fischer	オオシマコバンノキ
<i>Codiaeum variegatum</i> (L.) Juss.	
var. <i>pictum</i> (Lodd.) Muell.-Arg.	クロトン(ヘンヨウボク)
<i>Croton cascarilloides</i> Raeusch.	グミモドキ
<i>Drypetes matsumurae</i> (Koidz.) Kanehira	ツゲモドキ
<i>Euphorbia chamaesyce</i> L.	ハイニシキソウ
E. <i>helioscopia</i> L.	トウダイグサ
E. <i>hirta</i> L.	シマニシキソウ
E. <i>hyssopifolia</i> L.	セイタカオオニシキソウ
E. <i>makinoi</i> Hayata	コバノニシキソウ
E. <i>mili</i> Ch.des Moulinus ex DC.	
var. <i>splendens</i> (Boj.ex Hook.) Utrecht & Leandri	ハナキリン

E.	<i>pulcherrima</i> Willd.ex Klotzsch	ショウジョウボク(ポインセチア)
E.	<i>supina</i> Rafin.ex Boiss.	コニシキソウ
E.	<i>tirucalli</i> L.	ミドリサンゴ
	<i>Glochidion acuminatum</i> Muell.-Arg.	ウラジロカンコノキ
G.	<i>lanceolatum</i> Hayata	キールンカンコノキ
G.	<i>obovatum</i> S. & Z.	カンコノキ
G.	<i>zeylanicum</i> (Gaertn.) A.Juss.	カキバカンコノキ
	<i>Jatropha hastata</i> Griseb.	ティキンザクラ
	<i>Macaranga tanarius</i> (L.) Muell.-Arg.	オオバギ
	<i>Mallotus japonicus</i> (Thunb.) Muell.-Arg.	アカメガシワ
M.	<i>philippensis</i> (Lam.) Muell.-Arg.	クスノハガシワ
	<i>Pedilanthus tithymaloides</i> (L.) Poit. cv.Variegatus	リュウホウボク
	<i>Phyllanthus amarus</i> Schum.& Thonn.	キダチコミカンソウ
P.	<i>urinaria</i> L.	コミカンソウ
	<i>Sapium sebiferum</i> (L.) Roxb.	ナンキンハゼ
	<i>Vernicia montana</i> Lour.	カントニアブラギリ

Buxaceae ツゲ科

	<i>Buxus liukiuensis</i> (Makino) Makino	オキナツゲ
B.	<i>sempervirens</i> L.	セイヨウツゲ

Anacardiaceae ウルシ科

	<i>Mangifera indica</i> L.	マンゴウ
	<i>Rhus succedanea</i> L.	ハゼノキ
	<i>Semecarpus gigantifolius</i> Vidal	タイトウルシ

Aquifoliaceae モチノキ科

Ilex	<i>integra</i> Thunb.	モチノキ
------	-----------------------	------

Celastraceae ニシキギ科

	<i>Celastrus punctatus</i> Thunb.	テリハツルウメモドキ
	<i>Euonymus japonicus</i> Thunb.	マサキ
E.	<i>tanakae</i> Maxim.	コクテンギ
	<i>Maytenus diversifolia</i> (Maxim.) Ding Hou	ハリツルマサキ

Staphyleaceae ミツバウツギ科

	<i>Turpinia ternata</i> Nakai	ショウベンノキ
--	-------------------------------	---------

ア) Aceraceae カエデ科

Acer oblongum Wall.

ssp. *itoanum* (Hayata) Hatusima

クスノハカエデ

Sapindaceae ムクロジ科

Dimocarpus longana Lour.

リュウガン

Litchi chinensis Sonn.

レイシ

Balsaminaceae ツリフネソウ科

Impatiens wallerina Hook.f.

アフリカホウセンカ

Rhamnaceae クロウメモドキ科

Rhamnus liukiuensis (Wils.) Koidz.

リュウキュウクロウメモドキ

Vitaceae ブドウ科

Ampelopsis brevipedunculata (Maxim.) Trautv.

var. *hancei* (Planch.) Rehd.

テリハノブドウ

Cayratia japonica (Thunb.) Gagnep.

ヤブカラシ

Parthenocissus heterophylla (Bl.) Merr.

アマミヅタ

Tetrastigma formosanum Gagnep.

ミツバビンボウカヅラ

Vitis ficifolia Bunge

エビヅル

Elaeocarpaceae ホルトノキ科

Elaeocarpus sylvestris (Lour.) Poir.

ホルトノキ

Malvaceae アオイ科

Hibiscus mutabilis L.

var. *spontanea* (Makino) Hatusima

サキシマフヨウ

H. rosa-sinensis L.

ブッソウゲ

H. schizopetalus (Mast.) Hook.f.

フウリンブッソウゲ

H. syriacus L.

ムクゲ

H. tiliaceus L.

オオハマボウ

Hibiscus × hybridus Hort.

ハワイブッソウゲ

Malvaviscus arboreus (L.) Cav.

var. *penduliflorus* (Moc. & Sesse ex DC.) Schery

ウナズキヒメフヨウ

Sida rhombifolia L.

キンゴジカ

Thespesia populnea (L.) Soland.ex Correa

サキシマハマボウ

Bombacaceae パンヤ科

Chorisia speciosa St.Hil.

トックリキワタ

Sterculiaceae アオギリ科

<i>Firmiana platanifolia</i> (L.f.) Marsili	アオギリ
<i>Heritiera littoralis</i> Dryand.ex W.Ait.	サキシマスオウノキ
<i>Pterospermum acerifolium</i> (L.) Willd.	シロギリ
<i>Sterculia nobilis</i> Smith	ピンポンノキ

Theaceae ツバキ科

<i>Camellia japonica</i> L.	ヤブツバキ
<i>Eurya emarginata</i> (Thunb.) Makino	ハマヒサカキ*
<i>Ternstroemia gymnanthera</i> (Wight & Arn.) Beddome	モッコク

Guttiferae オトギリソウ科

<i>Calophyllum inophyllum</i> L.	テリハボク(ヤラボ)
<i>Garcinia subelliptica</i> Merr.	フクギ
<i>Hypericum monogynum</i> L.	ビヨウヤナギ

Violaceae スミレ科

<i>Viola yedoensis</i> Makino	
var. <i>pseudo-japonica</i> (Nakai) Hashimoto	リュウキュウコスマレ

Caricaceae パパイア科

<i>Carica papaya</i> L.	パパイア
-------------------------	------

Begoniaceae シュウカイドウ科

<i>Begonia cucullata</i> Willd.	
var. <i>hookeri</i> (DC.) Smith & Schub.	シキザキベゴニア

Cactaceae サボテン科

<i>Hylocereus undatus</i> (Haw.) Br.& R.	サンカクサボテン
--	----------

Elaeagnaceae グミ科

<i>Elaeagnus glabra</i> Thunb.	ツルグミ
<i>E. thunbergii</i> Serv.	タイワンアキグミ

Lythraceae ミソハギ科

<i>Cuphea hyssopifolia</i> H.B.K.	メキシコハナヤナギ
<i>Lagerstroemia flos-reginae</i> Retz.	オオバナサルスベリ
<i>L. indica</i> L.	サルスベリ
<i>L. subcostata</i> Koehne	シマサルスベリ

Lecythidaceae サガリバナ科

<i>Barringtonia racemosa</i> (L.) Spreng.	サガリバナ
---	-------

Combretaceae シクンシ科

Terminalia catappa L.

モモタマナ(コバティシ)

Myrtaceae フトモモ科

Callistemon rigidus R.Br.

マキバヅラッソノキ

Eugenia grandis Wight

セイタカフトモモ

Psidium guajava L.

バンジロウ

Syzygium buxifolium Hook.& Arn.

アデク

S. cumingii (L.) Alston

ユーカリフトモモ

S. jambos (L.) Alston

フトモモ

Melastomataceae ノボタン科

Tibouchina grandifolia Cogn.

オオバシコンノボタン

Onagraceae アカバナ科

Oenothera rosea L'Herit ex Aiton

ユウゲショウ

O. speciosa Nutt.

ヒルザキツキミソウ

Araliaceae ウコギ科

Kalopanax septemlobus (Thunb.ex Murray) Koidz.

var. *lutchuensis* (Nakai) Ohwi

リュウキュウハリギリ

Polyscias guilfoylei (Bull ex Cong.& March.) L.H.Bailey

アラリア

Schefflera arboricola (Hayata) Hayata ex Kanehira

ヤドリフカノキ

S. octophylla (Lour.) Harms

フカノキ

Tetrapanax papyrifer (Hook.) K.Koch

カミヤツデ(ツウダツボク)

Umbelliferae セリ科

Angelica japonica A.Gray

ハマウド

Apium leptophyllum (Pers.) F.Muell.ex Benth.

マツバゼリ

Centella asiatica (L.) Urban

ツボクサ

Hydrocotyle dichondroides Makino

ケチドメ

H. maritima Honda

ノチドメ

H. sibthorpioides Lam.

チドメグサ

Peucedanum japonica Thunb.

ボタンボウフウ

Torilis scabra (Thunb.) DC.

オヤブジラミ

M e t a c h l a m y d e a e 後生花被区

Ericaceae ツツジ科

Rhododendron × pulchrum Sweet ヒラドツツジ

Rhododendron scabrum G.Don ケラマツツジ

Myrsinaceae ヤブコウジ科

Ardisia elliptica Thunb. セイロンマンリョウ

A. sieboldii Miq. モクタチバナ

Maesa montana A.DC. シマイズセンリョウ

Primulaceae サクラソウ科

Anagallis arvensis L.

f. caerulea (Schreb.) Baumg. ルリハコベ

Androsace umbellata (Lour.) Merr. リュウキュウコザクラ

Lysimachia japonica Thunb. コナスピ

L. sikokiana Miq. モロコシソウ

Sapotaceae アカテツ科

Planchonella obovata (R.Br.) Pierre アカテツ

Ebenaceae カキノキ科

Diospyros egbert-walkeri Kosterm. リュウキュウコクタン

D. kaki Thunb. カキ

D. maritima Bl. リュウキュウガキ

Oleaceae モクセイ科

Ligustrum japonica Thunb. ネズミモチ

Osmanthus marginatus (Champ.ex Benth.) Hemsl. リュウキュウモクセイ

Loganiaceae フジウツギ科

Buddleja lindleyana Fortune ex Lindl. リュウキュウフジウツギ

Apocynaceae キヨウチクトウ科

Allamanda cathartica L. cv. Hendersonii オオバナアリアケカズラ

A. nerifolia Hook. ヒメアリアケカズラ

Cascabela thevetica (L.) G.Don キバナキヨウチクトウ

Catharanthus roseus (L.) G.Don ニチニチソウ

Cerbera manghas L. ミフクラギ

Ervatamia divaricata (L.) Burk. cv. Gouyathua ヤエサンユウカ

Nerium indicum Miller キヨウチクトウ

Plumeria rubra L.

f. *acutifolia* (Poir.ex Lam.) Woodson

インドソケイ

Trachelospermum asiaticum (S.& Z.) Nakai

var. *liukiuense* (Hats.) Hatusima

リュウキュウテイカカズラ

Asclepiadaceae ガガイモ科

Hoya carnosa (L.f.) R.Br.

サクララン

Marsdenia tinctoria R.Br.

var. *tomentosa* Masamune

ソメモノカズラ

Stephanotis floribunda (R.Br.) Brongn.

アフリカシタキヅル

Tylophora tanakae Maxim.

ツルモウリンカ

Convolvulaceae ヒルガオ科

Dichondra repens Forst.

アオイゴケ

Ipomoea acuminata (Vahl) Roem.& Schult.

ノアサガオ

I. cairica (L.) Sweet

モミジヒルガオ

Boraginaceae ムラサキ科

Argusia argentea (L.f.) H.Hein

モンパノキ

Bothriospermum tenellum (Hornem.) Fisch.& Mey.

ハナイバナ

Carmona retusa (vahl) Masamune

フクマンギ

Ehretia acuminata R.Br.

var. *obovata* (Lindl.) Johnston

チシャノキ

Trigonotis peduncularis (Trevir.) Benth.ex Baker & Moore

キュウリグサ

Verbenaceae クマツヅラ科

Callicarpa japonica Thunb.

var. *luxurians* Rehd.

オオムラサキシキブ

Clerodendrum japonicum (Thunb.) Sweet

ヒギリ

Clerodendrum × speciosum Teijsm. & Binn.

ベニガククサギ

Clerodendrum trichotomum Thunb.

var. *esculentum* Makino

ショウロウクサギ

C. wallichii Merr.

クラリンドウ

Duranta erecta L.

タイワンレンギョウ

Lantana camara L.

var. *aculeata* (L.) Moldenke

ランタナ(シチヘンゲ)

L. hybrida Hort.ex Neubert

キバナランタナ

<i>L. montevidensis</i> (Spreng.) Briq.	コバノシチヘンゲ
<i>Phyla nodiflora</i> (L.) Greene	イワダレソウ
<i>Verbena bonariensis</i> L.	ヤナギハナガサ
<i>V. litoralis</i> H.B.K.	ハマクマツヅラ
<i>V. officinalis</i> L.	クマツヅラ
<i>Vitex trifolia</i> L.	ミツバハマゴウ

Labiatae シソ科

<i>Clinopodium gracile</i> (Benth.) O.K.	トウバナ
<i>Leucas mollissima</i> Wall.ex Benth.	
var. <i>chinensis</i> Benth.	ヤンバルクルマバナ
<i>Salvia splendens</i> Ker-Gawl.	ヒゴロモソウ
<i>Scutellaria rubropunctata</i> Hayata	アカボシタツナミソウ

Solanaceae ナス科

<i>Brugmansia arborea</i> (L.) Lagerh.	ピンクダチュラ
<i>B. suaveolens</i> (Humb.& Bonpl.ex Willd.) Bercht & Presl	オオバナチョウセンアサガオ
<i>Cestrum nocturnum</i> L.	ヤコウカ
<i>Lycianthes biflorum</i> (Lour.) Bitt.	メジロホウズキ
<i>Solandra maxima</i> (Sesse & Mocino) P.S.Green	ウコンラッパバナ
<i>Solanum americana</i> Mill.	テリミノイヌホウズキ
<i>S. erianthum</i> D.Don	ヤンバルナスピ
<i>S. seaforthianum</i> Andrews	ルリイロナス(フサナリツルナスピ)
<i>S. spirale</i> Roxb.	キダチイヌホウズキ
<i>Solanum × stoloniferum</i> Tawada	キダチワルナスピ

Scrophulariaceae ゴマノハグサ科

<i>Mazus pumilus</i> (Burm.f.) v.Steenis	トキワハゼ
<i>Russelia equisetiformis</i> Schlecht.& Cham.	ハナチョウジ
<i>Veronica peregrina</i> L.	
var. <i>xalapensis</i> (H.B.K.) St.John & Warren	ムシクサ

Bignoniaceae ノウゼンカズラ科

<i>Campsis grandiflora</i> (Thunb.) K.Schum.	ノウゼンカズラ
<i>Cybistax donnell-smithii</i> (Rose) Seibert	オウゴンジユ
<i>Radermachera sinica</i> (Hance) Hemsl.	センダンキササゲ
<i>Spathodea campanulata</i> P.de Beauv.	カエンボク

<i>Tabebuia avellanedae</i> Lorenz ex Griseb.	イッペイ
<i>T. chrysotricha</i> Mart.ex DC.	コガネノウゼン
<i>T. rosea</i> (Bertol.)DC.	キダチベニノウゼン(ピンクテコマ)
<i>Tecomaria capensis</i> (Thunb.)Spach	ヒメノウゼンカズラ

Acanthaceae キツネノマゴ科

<i>Codonacanthus pauciflorus</i> (Nees)Nees	アリモリソウ
<i>Lepidagathis formosensis</i> C.B.Clarke	ウロコマリ
<i>L. inaequalis</i> C.B.Clarke ex Elm.	リュウキュウウロコマリ
<i>Odontonema strictum</i> (Nees)O.K.	ベニツツバナ
<i>Pseuderanthemum carruthersii</i> (Seem.)Guill. var. <i>atropurpureum</i> (Bull)Fosb.	エランセムムモドキ
<i>Ruellia brittoniana</i> Leonard	ヤナギバルイラソウ
<i>R. squarrosa</i> (Fenzl)Cufod.	ケブカルイラソウ
<i>Strobilanthes glandulifer</i> Hatusima	セイタカスズムシソウ
<i>Thunbergia affinis</i> S.Moore	ツンベルギア
<i>T. grandiflora</i> (Roxb.ex Rottb.)Roxb.	ベンガルヤハズカズラ

Plantaginaceae オオバコ科

<i>Plantago asiatica</i> L.	オオバコ
-----------------------------	------

Rubiaceae アカネ科

<i>Borreria laevis</i> (Lam.)Griseb.	ナガバハリフタバ
<i>Galium aparine</i> L. var. <i>echinospermon</i> (Wallroth)Cufod.	ヤエムグラ
<i>G. gracilens</i> (A.Gray)Makino	コバノヨツバムグラ
<i>Gardenia jasminoides</i> Ellis <i>f. grandiflora</i> (Lour.)Makino	クチナシ
var. <i>fortuniana</i> (Lindl.)Hara	オオヤエクチナシ
<i>Lxora chinensis</i> Lam.	サンダンカ
<i>L. coccinea</i> L.	ベニデマリ
<i>Lasianthus trichophlebus</i> Hemsl.ex Forb.& Hemsl.	オオバルリミノキ
<i>Mussaenda parviflora</i> Miq.	コンロンカ
<i>Paederia scandens</i> (Lour.)Merr.	ヘクソカズラ
<i>Psychotria manillensis</i> Bartl.ex DC.	ナガミボチョウジ
<i>P. serpens</i> L.	シラタマカズラ

<i>Tarennia gracilipes</i> (Hayata) Ohwi	ギヨクシンカ
Caprifoliaceae スイカズラ科	
<i>Lonicera affinis</i> Hook. & Arn.	ハマニンドウ*
<i>Sambucus chinensis</i> Lindl.	ソクズ(タイワンソクズ)
<i>Viburnum odoratissimum</i> Ker	サンゴジュ
<i>V. suspensum</i> Lindl.	ゴモジュ
Cucurbitaceae ウリ科	
<i>Diplocyclos palmatus</i> (L.) C.Jeffrey	オキナワスズメウリ
<i>Trichosanthes ovigera</i> Bl.	ケカラスウリ
<i>T. tricuspidata</i> Lour.	オオカラスウリ
<i>Zehneria liukiuensis</i> (Nakai) Jeffrey ex Walker	クロミノオキナワスズメウリ
Compositae キク科	
<i>Ageratum conyzoides</i> L.	カッコウアザミ
<i>Artemisia indica</i> Willd.	
var. <i>orientalis</i> (Pamp.) Hara	ニショモギ
<i>Aster subulatus</i> Michx.	ホウキギク
<i>Bidens pilosa</i> L.	
var. <i>radiata</i> Sch.-Bip.	シロノセンダングサ
<i>Blumea lacera</i> (Burm.f.) DC.ex Wight	ヤエヤマコウゾリナ
<i>Cirsium brevicaule</i> A.Gray	シマアザミ
<i>Conyza bonariensis</i> (L.) Cronq.	アレチノギク
<i>Conyza canadensis</i> (L.) Cronq.	ヒメムカシヨモギ
var. <i>pusilla</i> (Nutt.) Cronq.	ケナシヒメムカシヨモギ
<i>C. japonica</i> (Thunb.) Less.ex DC.	イズハハコ
<i>C. sumatrensis</i> (Retz.) E.H.Walker	オオアレチノギク
<i>Crassocephalum crepidioides</i> (Benth.) S.Moore	ベニバナボロギク
<i>Crepidiasstrum lanceolatum</i> (Houtt.) Nakai	ホソバワダン
<i>Eclipta prostrata</i> (L.) L.	タカサブロウ
<i>Emilia sonchifolia</i> (L.) DC.	ウスペニニガナ
<i>Eupatorium luchuense</i> Nakai	シマフジバカマ
<i>Farfugium japonicum</i> (L.f.) Kitam.	ツワブキ
<i>Hemistepta lyrata</i> Bunge	キツネアザミ
<i>Ixeris debilis</i> A.Gray	ジシバリ

<i>Kalimeris indica</i> (L.) Sch.-Bip.	インドヨメナ
<i>Lactuca indica</i> L.	アキノノゲシ
<i>Lagenophora</i> sp.	コケセンボンギクモドキ
<i>Siegesbeckia orientalis</i> L.	ツクシメナモミ
<i>Sonchus arvensis</i> L.	タイワンハチジョウナ
<i>S. asper</i> (L.) J.Hill	オニノゲシ
<i>S. oleraceus</i> L.	ハルノノゲシ
<i>Stenactis annuus</i> (L.) Cass.	ヒメジヨオン
<i>Tagetes erecta</i> L.	センジュギク
<i>Taraxacum officinale</i> Weber	セイヨウタンポポ
<i>Tithonia diversifolia</i> (Hemsl.) A.Gray	ニトベギク
<i>Wedelia trilobata</i> (L.) Hitchc.	アメリカハマグルマ
<i>Youngia japonica</i> (L.) DC.	オニタビラコ

Monocotyledoneae 単子葉植物

Pandanaceae タコノキ科

<i>Pandanus boninensis</i> Warb.	タコノキ
<i>P. odoratissimus</i> L.f.	アダン
<i>P. utilis</i> Bory	ビヨウタコノキ

Gramineae イネ科

<i>Bambusa dolichoclada</i> Hayata	チヨウシチク
<i>B. glaucescens</i> (Lam.) Sieb.ex Munro	ホウライチク
<i>Brachiaria mutica</i> (Forsk.) Stapf	パラグラス
<i>B. paspaloides</i> (Pr.) C.E.Hubb.	ニクキビモドキ
<i>Briza minor</i> L.	ヒメコバンソウ
<i>Chloris barbata</i> Sw.	ムラサキヒゲシバ
<i>C. divaricata</i> R.Br.	ヒメヒゲシバ
<i>C. gayana</i> Kunth	アフリカヒゲシバ
<i>Coix lacryma-jobi</i> L.	ジュズダマ
<i>Cynodon dactylon</i> (L.) Pers.	ギョウギシバ
<i>Dichanthium annulatum</i> (Forst.) Stapf	ヒメオニササガヤ
<i>Digitaria ciliaris</i> (Retz.) Koel.	メヒシバ
<i>D. henryi</i> Rendle	ヘンリーメヒシバ

<i>D. radicosa</i> (Pr.) Miq.	コメヒシバ
<i>D. violascens</i> Link	アキメヒシバ
<i>Echinochloa colonum</i> (L.) Link	ワセビエ
<i>Eleusine indica</i> (L.) Gaertn.	オヒシバ
<i>Elymus tsukusiensis</i> Honda var. <i>transiens</i> (Hack.) Osada	カモジグサ
<i>Eragrostis tenella</i> (L.) Beauv. ex Roem. & Schult.	ヌカカゼクサ
<i>Imperata cylindrica</i> (L.) Beauv. var. <i>major</i> (Nees) C.E.Hubb.	チガヤ
<i>Isachne globosa</i> (Thunb.) O.K.	チゴザサ
<i>Leptochloa panicea</i> (Retz.) Ohwi	イトアゼガヤ
<i>Microstegium ciliatum</i> (Trin.) A.Camus	オオササガヤ
<i>Misanthus sinensis</i> Anderss.	ススキ
<i>Oplismenus compositus</i> (L.) Beauv.	エダウチヂミザサ
<i>Panicum repens</i> L.	ハイキビ
<i>Paspalum conjugatum</i> Bergius	オガサワラスズメノヒエ
<i>P. dilatatum</i> Poir.	シマスズメノヒエ
<i>P. notatum</i> Flugge	アメリカスズメノヒエ(オニスズメノヒエ)
<i>P. urvillei</i> Steud.	タチスズメノヒエ
<i>Pennisetum purpureum</i> Schumach.	ナピアグラス
<i>Phyllostachys aurea</i> (Sieb. ex Miq.) Carr. ex A. & C. Riv.	ホテイチク
<i>P. makinoi</i> Hayata	ケイチク
<i>Pleioblastus linearis</i> (Hack.) Nakai	リュウキユウチク
<i>Poa annua</i> L.	スズメノカタビラ
<i>Pogonatherum crinitum</i> (Thunb.) Kunth	イタチガヤ
<i>Polypogon fugax</i> Nees ex Steud.	ヒエガエリ
<i>Rottboellia exaltata</i> (L.) L.f.	ツノアイアシ
<i>Sacciolepis indica</i> (L.) Chase	ハイヌメリ
<i>Setaria palmifolia</i> (König) Stapf	ササキビ
<i>S. verticillata</i> (L.) Beauv.	ザラツキエノコロ
<i>S. viridis</i> (L.) Beauv.	エノコログサ
<i>Sorghum halepense</i> (L.) Pers.	セイバンモロコシ
<i>Sporobolus diander</i> (Retz.) P. Beauv.	フタシベネズミノオ

<i>S. fertilis</i> (Steud.) W.D.Clayton	ネズミノオ
<i>Stenotaphrum secundatum</i> (walt.) O.K.	イヌシバ
<i>Zoysia matrella</i> (L.) Merr.	コウシュンシバ

Cyperaceae カヤツリグサ科

<i>Carex breviculmis</i> R.Br.	
<i>f. aphanandra</i> (Fr.& Sav.) Kukenth.	メアオスゲ
<i>Carex brunnea</i> Thunb.	コゴメスゲ
<i>C. sociata</i> Boott	タシロスゲ
<i>Cyperus alternifolius</i> L.	
var. <i>obtusangulus</i> (Böckel.) T.Koyama	シユロガヤツリ
<i>C. brevifolius</i> (Rottb.) Hassk.	アイダクグ
<i>C. compressus</i> L.	クグガヤツリ
<i>C. kyllingia</i> Endl.	オオヒメクグ
<i>C. polystachyos</i> Rottb.	イガガヤツリ
<i>C. rotundus</i> L.	ハマスゲ
<i>Fimbristylis dichotoma</i> (L.) Vahl	
var. <i>floribunda</i> (Miq.) T.Koyama	クグテンツキ
<i>Scirpus ternatanus</i> Reinw.ex Miq.	オオアブラガヤ

Palmae ヤシ科

<i>Archontophoenix alexandrae</i> (F.v.Muell.) H.Wendl.& Drude	ユスマラヤシ
<i>Areca catechu</i> L.	ビンロウ
<i>Arenga pinnata</i> (Wurmb.) Merr.	サトウヤシ
<i>A. tremula</i> (Blanco) Becc.	
var. <i>engleri</i> (Becc.) Hatusima	クロツグ
<i>Caryota mitis</i> Lour.	コモチクジャクヤシ
<i>Chamaedorea elegans</i> Mart.	テーブルヤシ
<i>Chrysalidocarpus lutescens</i> (Bory) H.Wendl.	ヤマドリヤシ(アレカヤシ)
<i>Cocos nucifera</i> L.	ココヤシ
<i>Dictyosperma album</i> (Bory) H.Wendl.& Drude ex Scheffer	プリンセスヤシ
<i>Livistona chinensis</i> (Jaq.) R.Br.ex Mart.	
var. <i>subglobosa</i> (Hassk.) Becc.	ビロウ
<i>Mascarena lagenicaulis</i> (Mart.) L.H.Bailey	トックリヤシ
<i>M. verschaffeltii</i> (H.Wendl.) L.H.Bailey	トックリヤシモドキ

<i>Phoenix dactylifera</i> L.	ナツメヤシ
<i>P. reclinata</i> Jacq.	カブダチソテツジユロ
<i>P. roebelenii</i> O'brien	シンノウヤシ
<i>Rhapis humilis</i> Bl.	シュロチク
<i>Roystonea regia</i> (H.B.K.) O.F.Cook	ダイオウヤシ
<i>Satakentia liukiuensis</i> (Hats.) H.E.Moore	ヤエヤマヤシ
<i>Veitchia merrillii</i> (Becc.) H.E.Moore	マニラヤシ
<i>Washingtonia robusta</i> H.Wendl.	イトヤシ(オキナヤシモドキ)

Araceae サトイモ科

<i>Alocasia odora</i> (Lodd.) Spach	クワズイモ
<i>Alocasia × okinawensis</i> Tawada	アイノコクワズイモ
<i>Monstera deliciosa</i> Liebm.ex Kjoeb	ホウライショウ
<i>Pistia stratiotes</i> L.	ボタンウキクサ
<i>Rhaphidophora aurea</i> (Lind.ex Andre) Birdsey	オウゴンカズラ
<i>R. pinnata</i> (L.) Schott	ハブカズラ
<i>Syngonium auritum</i> (L.) Schott	オオミツバカズラ
<i>Typhonium divaricatum</i> (L.) Decne.	リュウキュウハンゲ

Commelinaceae ツユクサ科

<i>Commelina auriculata</i> Bl.	ホウライツユクサ
<i>Zebrina pendula</i> Schnizl.	ハカタカラクサ

Pontederiaceae ミズアオイ科

<i>Eichhornia crassipes</i> (Mart.) Solms-Laub.ex DC.	ホティアオイ
---	--------

Liliaceae ユリ科

<i>Aletris spicata</i> (Thunb.) Franch.	ソクシンラン
<i>Aspidistra elatior</i> Bl.	ハラン
<i>Chlorophytum comosum</i> (Thunb.) Baker	オリヅルラン
<i>Dianella ensifolia</i> (L.) DC. f. <i>recemulifera</i> (Schiffner) Liu & Ying	キキョウラン
<i>Hemerocallis fulva</i> (L.) L. var. <i>semperflorens</i> (Araki) M.Hotta	トキワカンゾウ
<i>Heterosmilax japonica</i> Kunth	カラスキバサンキライ
<i>Lilium longiflorum</i> Thunb.	テッポウユリ
<i>Liriope muscari</i> (Decne.) L.H.Bailey	ヤブラン

<i>Ophiopogon jaburan</i> (Kunth) Lodd.	ノシラン
<i>O. japonicus</i> (Thunb.) Ker-Gawl.	ジャノヒゲ
<i>Scilla scilloides</i> (Lindl.) Druce	ツルボ
<i>Smilax china</i> L.	
var. <i>kuru</i> Sakaguchi ex Yamamoto	オキナワサルトリイバラ
<i>S. sebeana</i> Miq.	ハマサルトリイバラ
<i>Tulbaghia violacea</i> Harv.	ルリフタモジ
Agavaceae リュウゼツラン科	
<i>Cordyline fruticosa</i> (L.) A.Cheval	センネンボク
<i>Furcraea foetida</i> (L.) Haw.	オオマンネンラン(モリシアスヘンプ)
<i>Sansevieria nilotica</i> Baker	チトセラン
<i>S. stuckyi</i> Godefr.	ツツチトセラン
Amaryllidaceae ヒガンバナ科	
<i>Allium grayi</i> Regel	ノビル
<i>Crinum asiaticum</i> L.	
var. <i>japonicum</i> Baker	ハマオモト
<i>Hippeastrum</i> × <i>hybridum</i> Hort. ex Valenovsky	アマリリス
<i>Hymenocallis americana</i> Roem.	サクヤガニユリ
<i>H. littoralis</i> (Jacq.) Salisb.	ササガニユリ
<i>Lycoris traubii</i> Hayward	ショウキズイセン
<i>Zephyranthes candida</i> (Lindl.) Herb.	タマスダレ
<i>Z. grandiflora</i> Lindl.	サフランモドキ
<i>Z. rosea</i> (Spreng.) Lindl.	コサフランモドキ
Iridaceae アヤメ科	
<i>Gladiolus</i> × <i>gandavensis</i> v. Houtte	トウショウブ(グラジオラス)
<i>Iris tectorum</i> Maxim.	イチハツ
<i>Sisyrinchium rosulatum</i> Bickn.	ニワゼキショウ
Musaceae バショウ科	
<i>Musa balbisiana</i> Colla	リュウキュウバショウ
<i>Musa</i> × <i>sapientum</i> L.	バナナ
Strelitziaceae オウギバショウ科	
<i>Heliconia rostrata</i> Ruiz & Pavon	ウナズキヘリコニア
<i>Ravenala madagascariensis</i> J.F.Gmel.	オウギバショウ

<i>Strelitzia alba</i> (L.f.) Skeels	シロゴクラクチョウカ
<i>S. reginae</i> Banks ex Ait.	ゴクラクチョウカ
Zingiberaceae ショウガ科	
<i>Alpinia zerumbet</i> (Pers.) Burtt & Smith	ゲットウ
Cannaceae ダンドク科	
<i>Canna indica</i> L.	ダンドク
Orchidaceae ラン科	
<i>Bletilla striata</i> (Thunb.) Reichb.f.	シラン
<i>Spiranthes sinensis</i> (Pers.) Ames var. <i>australis</i> (R.Br.) Hara & Kitamura	ナンゴクネジバナ

(2) オリイオオコウモリの餌植物

表2に示したように、本地域でアカギ、ハマイヌビワ、シマグワなど8種の植物に採食が確認された。これらの植物の中で、特にショウベンノキとリュウガン、タイワシクズの3種は、これまでに採食確認されておらず、初めての確認になるものと思われる。

表3は、嵩原（1995）によって作成された南西諸島に生息するオオコウモリ類の餌植物として知られる48種に、その後採食の確認されている種や今回の調査で採食確認された種を加味し、59種の餌植物としてまとめたものである。

本地域からは前述したように526種の種子植物が確認されたが、その中でこれまで餌植物として報告されている種を抜粋すると、41種の植物が本地域に生育していた。そして、前述したようにその内8種に採食が確認された。したがって、今回採食の確認された植物以外に、本地域では他に33種の植物が利用されている可能性が考えられる。今回採食確認種数が少數であることは、調査不足の面があり、おそらく、今後調査がすすむことで餌植物の確認種数は増加するものと思われる。

一方、沖縄県公衆衛生協会（1999）は、那覇市全域を対象した生物環境調査報告書の中で、ボランティア調査の一環として実施された採食痕によるオオコウモリの一斉調査結果を示し、市内96カ所の調査地の内、73カ所で採食痕が発見されたことを報告している。また、採餌された餌植物として、コバティシ、ガジュマル、アコウ、オオイタビ、グアバの5種が報告され、特にコバティシなど街路樹や公園の緑化木として植栽された餌植物への依存的利用の傾向が指摘されている。

本地域においても、コバティシやリュウガンなど植栽された樹種に餌植物としての利用も見られたが、大部分が残存する自然林に出てくるハマイヌビワやショウベンノキなどの自生種であった。しかしながら、前述したオオイタビやアコウ、ガジュマル、パンジロウなども本地域に生育しているので、採食されているものと思われる。

本地域においては、1999年4月17日の昼間、モクマオウの木立に45頭におよぶ集団化したオオコウモリの休息地が観察された。このことは本地域が600余種の植物が生育し、うつそうとした自然林がまとまって残存していることで、オオコウモリの餌の供給地だけでなく、さらに昼間の休息地としても利用されていた。したがって、本地域は那覇市内における本種の生息地として良好な環境を提供していることが考えられ、今後本地域の公園整備を考える場合、できるだけまとまった残存する自然林を残し、オオコウモリを含む多様な野生生物の生息地として保全し、野生動物との共存を図っていくことが望まれる。

表2. 末吉公園内で確認されたオリイオオコウモリの餌植物

種名	採食部位	採食確認時期(月)	備考(確認場所等)
クワ科			
オオバイヌビワ	果	11.12.1.2	公園内中央通路そば自生木
シマグワ	果	11	公園内中央安謝川そばの自生木
ハマイヌビワ	果・葉	12	滝見橋近く自生木
マメ科			
タイワンクズ	葉	1	公園内東側通路そば
トウダイグサ科			
アカギ	果	10-12.1	公園内東側通路そばの自生木
ムクロジ科			
リュウガン	果	8	末吉宮近くの拝所内植栽木
ミツバウツギ科			
ショウベンノキ	果	11	滝見橋近くの自生木
シクシン科			
コバティシ	果	10-12.1	遊具場砂場近くの植栽木

備考：果は果実

表3. 南西諸島におけるオオコウモリ類の餌植物 (嵩原, (1995) を参考に作成)

凡例：亜種の区別；Eはエラブオオコウモリ、Oはオリイオオコウモリ、Yはヤエヤマオオコウモリ、Dはダイトウオオコウモリ

餌植物の生息状況：Iは自生及び在来種、Cは移入種及び栽培種、(C)は緑化木として栽培される自生種

+ : 採食確認

植物名	採食部位*	採食時期(月)	採食確認状況				末吉公園	
			E	O	Y	D	生息状況**	内生育
ソテツ科								
ソテツ(1)	果	8	+ +				I (C)	O
イチョウ科								
イチョウ	葉	7-2	+ +				C	
マキ科								
イヌマキ	果	9	+ +				I (C)	O
ブナ科								
イタジイ	芽・葉	8,1	+ +				I	
ニレ科								
クワノハエノキ	葉	1	+ +				I	O
クワ科								
カジノキ(2)	果実	7	+ + + +				C	O
ガジュマル	果・葉・皮	周年	+ + + +				I (C)	O
アコウ	果・芽・葉	周年	+ + + +				I (C)	O
コニシイヌビワ	果	周年	+ + +				I	
オオバイヌビワ	果	周年	+ + +				I (C)	O
ケイヌビワ	果	6	+ + +				I	O
イヌビワ	果	6	+ + +				I	O
オオイタビ	果	4,10-1	+ + +				I	O

表3. 続き

植物名	採食部位*	採食時期(月)	採食確認状況				生息状況**	内生育	末吉公園
			E	O	Y	D			
シマグワ	果・芽	3,9,10	+	+		+	I (C)	○	
イチジク	果	1				+	C		
アカメイヌビワ	果	9		+			I		
ハマイヌビワ	果・葉	11		+			I	○	
<hr/>									
バラ科									
ヤマザクラ	果	5	+				I		
カンヒザクラ	花	1		+			I (C)	○	
シャリンバイ	花	5	+				I (C)	○	
<hr/>									
マメ科									
デイゴ	花	4		+	+		C	○	
タイワンクズ	葉	1		+			C	○	
タイハイヨウグルミ	果	11				+	C		
<hr/>									
ミカン科									
ヒラミレモン	果	12		+			I (C)	○	
<hr/>									
センダン科									
センダン(2)	果	11		+			I (C)	○	
<hr/>									
トウダイグサ科									
アカギ	果	12-2		+			I (C)	○	
<hr/>									
ミツバウツギ科									
ショウベンノキ		10		+			I	○	
<hr/>									
クロウメモドキ科									
リュウキュウクロウメモドキ(2)	果	10		+			I	○	
<hr/>									
ムクロジ科									
リュウガン	果	8		+			C	○	
<hr/>									
ホルトノキ科									
ホルトノキ	果	10	+	+			I (C)	○	
<hr/>									
ツバキ科									
ハマヒサカキ	果	8-2	+				I (C)		
<hr/>									
オトギリソウ科									
テリハボク	果・花	9		+		+	I (C)	○	
フクギ	果・花	7,8		+	+	+	I (C)	○	
<hr/>									
ムラサキ科									
チシャノキ	芽	2		+			I	○	
<hr/>									
シクシン科									
コバティシ	果	10,11,12		+	+	+	I (C)	○	
<hr/>									
グミ科									
マルバグミ	果・葉	12,1	+				I		
<hr/>									
フトモモ科									
バンジロウ	果・花	1,9,3,4		+	+	+	I (C)	○	
フトモモ	果	9		+			C	○	
レンブ(マレーフトモモ)	果	7,8		+			C		
<hr/>									
モクセイ科									
リュウキュウモクセイ(2)	果	11		+			I	○	

表3. 続き

植物名	採食部位*	採食時期(月)	採食確認状況				末吉公園 生息状況**	内生育
			E	O	Y	D		
ヤブコウジ科								
モクタチバナ 果		1,2	+			+	I	○
カキノキ科								
リュウキュウガキ 果・花		3			+	+	I	○
カキ 果		11,5	+	+			C	○
アカネ科								
クチナシ 果		1				+	I	○
タコノキ科								
アダン 花・果・芽		6				+	I	○
カバノキ科								
タイワンハンノキ 葉・花		1		+			C	
パパイヤ科								
パパイヤ 果		6,11	+			+	C	○
リュウゼツラン科								
アオノリュウゼツラン 花・果		7	+			+	C	
バショウ科								
バナナ 果・花		3,4,9-12.		+	+	+	C	○
リュウキュウバショウ 果			+				C	○
パインナップル科								
パインナップル 果				+			C	
ヤシ科								
ヤエヤマヤシ 花		3		+			I	○
ダイトウビロウ 果・花		3			+		I	
ビロウ 果・花		3		+	+		I (C)	○
コミノクロツグ 花					+		I	
ココヤシ 花・果		10				+	C	○
ワシントンヤシ 花		6				+	C	
イネ科								
サトウキビ 茎					+		C	

合計57種

41(8)

<備考>

◎は採食確認種、○は生育確認種。

*: 花は花または花序・花粉、果は果実、芽は新芽または幼葉、葉は成熟した葉、皮は樹皮。

**: 生息状況の種別は初島・天野(1994)にしたがった。

(1)は上門清春私信、(2)嵩原(1998)を引用。

引用文献

- 阿部永他 1994. 日本の哺乳類. 東海大学出版会. 195pp.
- 天野鉄夫 1989. 図鑑 琉球列島有用樹木誌 470pp. 沖縄出版. 沖縄
- 船越公威 1989. エラブオオコウモリの食性について. 自然愛護. 15:2-7.
- 古木達郎・水谷正美 1994. 日本産タイ類ツノゴケ類チェックリスト, 1993. 日本蘚苔類学会会報 6 (5) : 75-83
- 古木達郎・水谷正美 1994. 日本産タイ類及びツノゴケ類の分類体系. 日本蘚苔類学会 6 (6) : 103-108
- 初島住彦・天野鉄夫 1994. 琉球植物目録 393pp. 沖縄生物学会 沖縄
- 初島住彦・天野鉄夫 1975. 琉球植物誌(追加・訂正) 沖縄生物教育研究会 1002pp 沖縄
- 初島住彦・天野鉄夫 1976. 日本の樹木 879pp. 講談社 東京
- 池原貞雄 1973. 大東島の陸産脊椎動物. 52-63. 大東島天然記念物特別調査報告. 文化庁
- 池原貞雄他 1981. 北部山地の特殊脊椎動物, 51-57. ケナガネズミ実態調査報告書. 沖縄県天然記念物調査シリーズ第22集, 沖縄県教育委員会.
- 池原直樹 1979. 沖縄植物野外活用図鑑 第1~9巻 新星図書 沖縄
- 岩月善之助・水谷正美 1972. 原色日本蘚苔類図鑑 405pp. 保育社 大阪
- 海洋博覧会記念公園管理財団 1997. 沖縄の都市緑化植物図鑑 399pp. 海洋博覧会記念公園管理財団. 沖縄
- 牧野富太郎 1989. 牧野新日本植物図鑑 1453pp. 北隆館 東京
- 宮城朝章 1979. 那覇市内の主な社寺・御嶽の植生 沖縄県社寺・御嶽林調査報告Ⅱ 沖縄県天然記念物調査シリーズ 18:145-168 沖縄県教育委員会 沖縄・
- 宮城朝章 1982 沖縄の島じまをめぐって, 末吉公園の植物, 日曜の地学. 14:188-192 築地書館 東京
- 丸山勝彦 1992. 飼育条件下におけるオリイオオコウモリの生態的研究. 257-269. ダイト オオコウモリ保護対策緊急調査報告書, 沖縄県教育委員会. 沖縄.
- 長田武正 1972. 日本帰化植物図鑑 254pp. 北隆館 東京
- 野口 彰 1976. 日本産蘚類概説 306pp. 図鑑の北隆館 東京
- 大城さつき 1994. 地域の自然環境の教材化に関する研究 67pp. 琉球大学教育学部卒業論文.
- 沖縄県環境保健部自然保護課編 1996. 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物, レッドデータおきなわ. 9-243

- 太田英利 1992. ダイトウオオコウモリを含むクビワオオコウモリの分類学的・生物地理的研究の歴史と問題点. p.91-98. ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書, 沖縄県教育委員会.
- 沖縄県公衆衛生協会編 1999. 那覇市域生物環境調査報告書. 那覇市環境保全課.
- 佐久本敏・島袋 日廣・新島義龍・宮城朝章 1978. 地域植生の教材資料、末吉の森林 理科教育資料 43: 29-43 沖縄県立教育センター. 沖縄
- 下謝名松榮 1978. 南・北大東島および沖縄南部地域の洞穴動物相. P.75-111. 沖縄県洞 穴実態調査報 I. 沖縄県教育委員会.
- 嵩原建二 1994. 沖縄県立博物館周辺地域におけるオリイオオコウモリの食性と餌植物 の季節変化について（予報）. 博友. 8: 11-25. 沖縄県立博物館友の会.
- 嵩原建二 1995. 南西諸島に生息するオオコウモリ類の餌植物について. 博友. 9: 73-79. 沖縄県立博物館友の会.
- 嵩原建二 1998. 読谷村の鳥類と哺乳類. 読谷村. pp. 93.
- 高良鉄夫 1975. 動物. 115-121. 自然保護のためのおきなわの自然. 沖縄県, 沖縄.
- 高良鉄夫. 1981. 於茂登岳および周辺地域の動物相. 143-159. 沖縄県自然環境保全地域 指定候補地学術調査報告 於茂登岳及びその周辺地域. 沖縄県.
- 多和田真淳 1965 琉球植物見聞録II 沖縄生物学会誌2 :25-29
- 横田昌嗣・宮城康一・西平守孝・嵩原建二・宮城邦治 1992a. 北大東島におけるダイト ウオオコウモリの餌植物相と食痕の地理的分布からみた場所利用. p.161-182. ダイト ウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書. 沖縄県教育委員会.
- 横田昌嗣・宮城康一・丸山勝彦. 1992b. 南・北大東島の植物季節—ダイトウオオコウ モリの餌植物を中心にして. 183-190. ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書. 沖縄県教育委員会.
- Zennosuke Iwatsuki 1991. Catalog of the Mosses of Japan 182pp. Hattori Botanical Laboratory Nichinan, Miyazaki, Japan
- Zennosuke Iwatsuki & Tadashi Suzuki 1982 A Taxonomic revision of the Japanese species of Fissidens (Musci) J. Hattori Bot.Lab. 51:329-508

図版1. 末吉公園で確認された植物(1)



ホソバムクイヌビワ (クワ科)



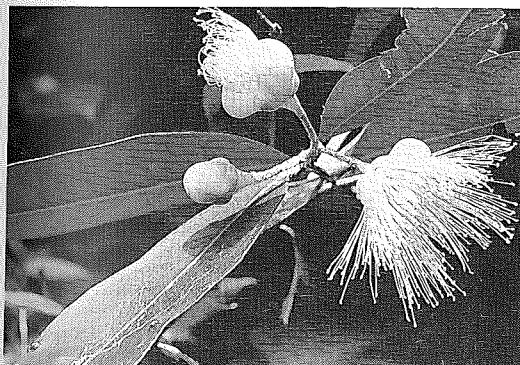
ヤブニッケイ (クスノキ科)



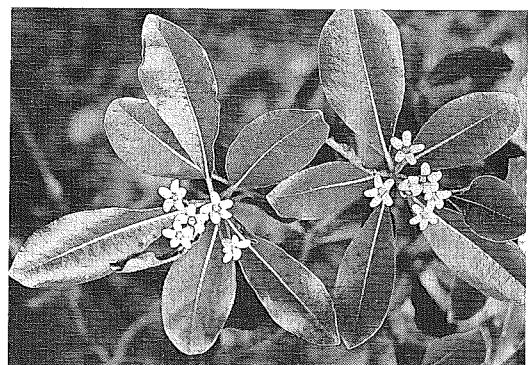
ホルトノキ (ホルトノキ科)



ギョクシンカ (アカネ科)



フトモモ (フトモモ科)



トベラ (トベラ科)

図版2. 末吉公園で確認された植物(2)



アリサンミズ (イラクサ科)



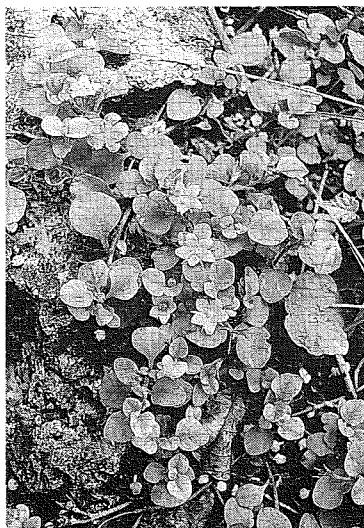
シマニシキソウ (トウダイグサ科)



クロミノオキナワスズメウリ (ウリ科)



タカサブロウ (キク科)



コナスビ (サクラソウ科)



ナンゴクネジバナ (ラン科)

教育普及の実践：高等学校の取り組みを通して

伊 波 悅 子

(沖縄県立博物館)

The Practices of the Educational Activity for the
Students of Senior High School

Etsuko IHA

(Okinawa Prefectural Museum)

はじめに

沖縄県立博物館は1945年東恩納博物館が設立されてから54年たった。平成8年には50年のあゆみが編纂されている。その中に教育普及の歩みを詳しく見る事ができる。1期は戦災を免れた文化遺産収集時代（1946年～1965年）、2期は講堂活用時代（1966年～1973年）、3期は講堂活用から積極的な事業拡大への転換の時代（1974年～1987年）、4期は教育普及活動の多面的な展開の時代（1988年～）である。二千年を目の前に博物館の教育普及活動事業が大きく変化していることに気が付く。その状況の変化は2002年に新学習指導要領が実施される事に起因している。すなわち小学校低学年における生活科学習、中高学年における総合学習、中学校・高等学校での総合学習の導入である。今までにその過渡期であり、学校の先生方は指導案の研究に余念がない。その手がかりの一つに博物館活用が挙げられる。そうすると5期は開かれた博物館の学校とのタイアップ時代（1998～）と言えるかも知れない。

1 学校訪問

平成10年度は総合学習を見込んで博物館を利用してもらうために小学校・中学校・高等学校を訪問した。館長をはじめとして教育普及課長、小中学校担当の学芸員、高校・大学担当の学芸員の四人で訪ねた。

- 6月2日 伊良波小学校・伊良波中学校・座安小学校
- 6月5日 豊見城小学校・豊見城中学校・上田小学校
- 6月16日 東風平小学校・東風平中学校・白川小学校
- 6月17日 新城小学校・具志頭小学校・具志頭中学校
- 6月18日 船越小学校・玉城小学校・玉城中学校
- 7月1日 宮城小学校・仲西小学校・仲西中学校

7月3日	神森小学校・神森中学校・内間小学校
7月14日	真嘉比小学校・興南中学校・興南高校・安岡中学校
7月15日	前島小学校・那覇中学校・上山中学校
9月30日	真和志高校・沖縄工業高校・首里高校
10月1日	普天間高校・中部商業高校・西原高校
10月15日	首里東高校
10月22日	浦添工業高校・浦添高校
10月27日	那覇工業高校・那覇国際高校・那覇高校
10月28日	南風原高校・豊見城高校・小禄高校

以上小学校16校、中学校11校、高校16校を訪問した。記録から分かる様に6、7月の暑い日中であったが、学校側は校長・教頭先生や学年担当、事務長が対応してくれた。

2 児童生徒の博物館利用状況

平成10年度の児童生徒の団体見学は県内小学校が150校あった。これは全県282校の内53%を占めることになる。学習内容は小学校3年生の民俗の学習と体験教室、5年生の沖縄の工芸の学習、6年生の琉球の歴史の学習である。加えて離島・遠隔地の修学旅行が主である。中学校は19校あるが2校のぞいては県外である。博物館までの学習は時間的にゆとりがないのであろうか。高等学校も77校あるが県内は8校に止まっている(12%)。

3 学校訪問後の変化

高等学校で博物館を毎年利用しているのは南部農林高校で、沖縄の文化を学ぶのは勿論であるが、それ以上に見る態度・いつでも誰にでも挨拶が出来るマナーを身につけるためもある。そして陽明高等学校は歴史の授業で利用する。ここで学校訪問後に変化のあった事例を上げてみよう。

① 中部商業高等学校の事例

学校訪問を終えて一番に連絡が入ったのは中部商業高校であった。国際流通科の2年生35人がオーストラリアへ研修に行く、その事前学習として「大交易時代の琉球」を学びたいという内容である。早速歴史担当の萩尾学芸員と日程を調整し返事をする。当日12月16日学校の講堂でスライドを使って2時間の講演をした。

② 首里高等学校の事例

10年度の特別展は11月17日～12月20日の「包むこころ ふろしき展」であった。その展示の一部紅型のウチュクイーの製作工程見本を染織デザイン科の生徒に協力して

作ってもらった。展示室のアプローチに長い伸子張をした90センチ四方の風呂敷の製作見本は人目を引いた。そして会期中染織デザイン科の生徒120名の見学があった。

③ 首里東高等学校の事例

11年1月16日17日はセンター試験が行われ首里東高校は会場校となった。すると1、2年生は校外授業になりその場所に博物館があげられた。720名の来館で、一度での収容は無理なので30分ずらして入館してもらう。一般の来館者もあるので大へんな混みようあった。充分に博物館見学が出来たかどうかは疑問であるが、博物館へ行ったことがあるのと無いのとでは本人の自覚に「差」が生じる。

④ 浦添高等学校の事例

夏休みを控え理科担当の教諭より調べ学習をしたいとの連絡があった。大歓迎であるが入館形態が問題である。まず団体で入館料免除申請の手続きをすれば無料で学習できる。20人まとまれば団体割引、バラバラに入館すると100円要る。また8月3日より特別展「三線のひろがりと可能性」展になるので特別料金の200円にはねあがってしまう。結局自由に学習する事になった。生徒は三々五々連れ立って学習した。

4 県外高校生の受け入れの実践

これまでの修学旅行は観光が主で博物館もその一部分でドッと入館して40~50分程度で見学してサッと帰ってしまうというのが定番であったが最近4, 5年は変化してきた。

- ①沖縄をテーマに学習する ②7~8名のグループ学習でそれぞれテーマを持って来る
- ③調べ学習聞き取り調査をする ④1~2時間の講演をお願いする

それぞれの希望に叶うよう教育普及課は鋭意努力している。

事例 千葉県立国府台高等学校の例

(I) 事前調査

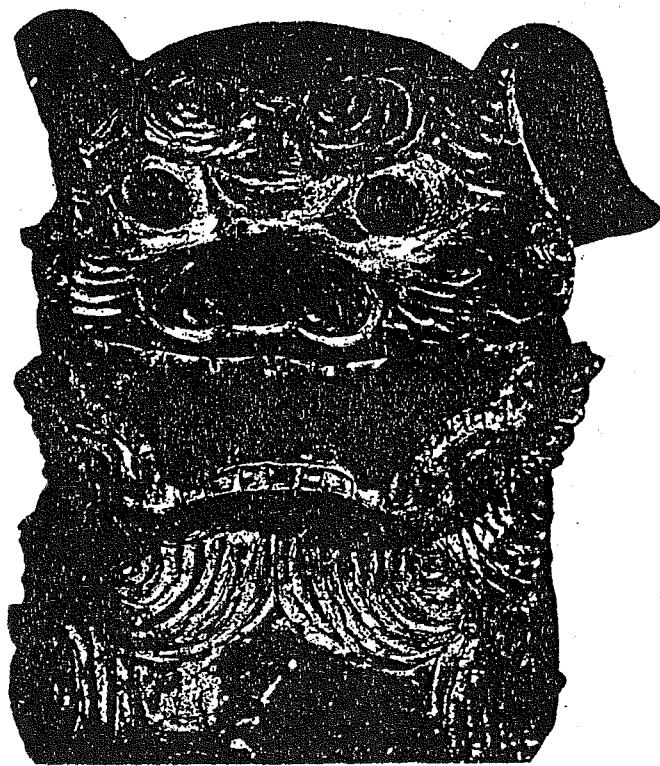
1999年3月、2学年沖縄郊外学習旅行の担当教諭が博物館を訪れた。萩倉先生と川勝先生である。生徒は事前学習に取り組んでいることで11年10月に受け入れを承諾した。

そして生徒の事前レポートが届いた(参照1, 2)。参照2を見ると パイナップル・サトウキビ・泡盛・沖縄の料理・沖縄特有の料理・沖縄の食文化・長寿食を訪ねて・そば・製糖についてと食に関する物が多い。食べて学習出来ると言う安易さがあるのではと一見思えた。勿論伝統工芸や基地問題・動植物・城・祭・言葉に関する事もある。レポートの中にはテーマ設定の理由や調査地・モデルコース・図書館などで調べた図書名や現地での聞き取り調査の項目など細かく記入されている(参照3)。

そして6月24付けの、次のような(参照4)日時調整の連絡があった。

参照 1

1999年3月作成



校外學習
事前レポート集

千葉県立国府台高等学校

参照2

目次

- 1 沖縄の海
- 2 沖縄の食文化～泡盛～
- 3 沖縄の食文化
- 4 沖縄の海
- 5 沖縄の自然
- 6 沖縄の製糖について
- 7 沖縄の伝統工芸
- 8 シーサー
- 9 珊瑚について考える
- 10 沖縄の言葉
- 11 沖縄料理と食文化
- 12 沖縄のパイナップルについて
- 13 パイナップルの栽培について
- 14 沖縄の長寿と料理の関係を探る
- 15 沖縄の戦争と平和
- 16 サンゴ礁について
- 17 豚
- 18 沖縄の長寿食をたずねて
- 19 サンゴについて
- 20 沖縄の料理
- 21 琉球ガラス
- 22 城
- 23 さとうきび
- 24 パイナップル産業の現場
- 25 沖縄料理
- 26 沖縄の伝統音楽
- 27 戦後の沖縄の復興について
- 28 祭り（ハーリー祭）
- 29 沖縄の植物について
- 30 泡盛
- 31 サンゴ
- 32 沖縄の家の造り
- 33 伝統工芸品
- 34 沖縄の自然について
- 35 沖縄と米軍基地
- 36 沖縄の食べ物について
- 37 海
- 38 琉球ガラス
- 39 沖縄の郷土料理と日常食～そば～
- 40 シーサーの歴史
- 41 サトウキビとパイナップル
- 42 沖縄の料理
- 43 沖縄特有の食材
- 44 琉球ガラス
- 45 沖縄の動植物
- 46 建築物の歴史について
- 47 沖縄の長寿について
- 48 沖縄の自然（サンゴ）

参照3

校外学習事前レポート集 提出用紙 1年 6組 4班

班長／石部 書記／竹本、渡部
班員／石部、牧野、平澤、小形

藤間、竹本、渡部

テーマ／沖縄の自然について

1.はじめに
(テーマの選定理由やまとめの見通し)

沖縄には本州にない自然がたくさんありますから沖縄の自然とふれ合いたい。やっぱり自然は大きいしその分感動も大きいと思うから。

2.現地調査の訪問先の候補(3ヶ所以上)

①名称／ネオパークオキナワ
住所／名護市名護 4607-41
備考／TEL(0980)52-6348

②名称／沖縄フルーツランド
住所／名護市糸文 1220-71
備考／TEL(0980)52-1588

③名称／玉泉洞王園村
住所／玉城村前川 1336
備考／TEL(098)949-7421

3.現地調査のモデルコース
(宿舎からの交通手段・時間・費用など)

那覇バスター・ミナル → ひめゆりパーク
9:00 10:45

→ 玉泉洞文化村(昼食含む) → 知念海洋センター
11:30 13:45

→ 首里城跡公園 → ホテル
15:30 17:00

(事前レポートや現地調査で役に立つ本や資料(4つ以上))

書名・出版社名	著者名	入手先	<input type="checkbox"/>
オキナワ体験ガイド ユーラン	地原寅雄 他		<input type="checkbox"/>
沖縄のしまガイドブック 岩波ビニア美術館	照屋林賀 他	図書館	<input type="checkbox"/>
ニューブルーガイドブックス沖縄 実業之日本社	原田興一郎	本屋	<input type="checkbox"/>
JTBの旅レポート 沖縄、奄美	岩田光正 他	本屋	<input type="checkbox"/>
JTB印刷			<input type="checkbox"/>

(事前レポートに使った本や資料には○をつける)

4.事前レポートの内容

◆本・資料で調べてわかったこと

沖縄の陸上生物は、陸地面積が狭いので、特定地域のみ生息の「種」(固有種)が多いことが特徴である。また、亞熱帯性気候に属するので、植物の種類が豊富で、中でも八重山諸島や西表島などの「ヤング」では、日本最後の秘境ともいわれている。このようなことから琉球列島は、「東洋のガラパゴス」と呼ばれるようになつた。

◆現地で聞き取り調査すること
(訪問先での質問の内容など)

- ・昔と今はどううちかうか。
- ・本州と沖縄のちがいをたくさん見つける。
- ・めずらしい物は現地の人へ聞いてみる。
- ・米軍基地がたくさんあるけれど、自然に影響はないか。
- ・サンゴを観察したい。
そしていろいろ聞く。

参照4

1999年6月24日

沖縄県立博物館

前田 真之 様
仲底 善章 様
伊波 悅子 様

拝啓

3月に本校校外学習の下見でお訪ねした際には、貴重なお話を聞かせていただき、大変ありがとうございました。

既にお願いしましたように、10月28日(木)・29日(金)に生徒達が聞き取り調査を行う予定であります。生徒達は聞き取り調査のテーマと訪問希望先を決定したところですが、現在までのところ、6つの班が貴館の訪問を希望しております。

つきましては、生徒達の訪問を受け入れてくださるよう、よろしくお願ひ申し上げます。

なお、訪問日時と質問内容の詳細については、2学期になって相談させていただければと考えております。お忙しいところ恐縮ですが、よろしくお願ひ致します。不明な点がありましたら、ご連絡ください。

希望日	クラス班	テーマ	伺いたいこと
10月28日(木)午後	3組1班	伝統工芸と織物	首里織り ミンサー
10月28日(木)午後	3組2班	沖縄の音楽	沖縄の音楽の歴史、特色、現状
10月28日(木)午後	3組6班	石敢当	石敢当
10月28日(木)午後	5組4班	沖縄特有の動物 (陸上動物)	どんな動物がいるか、それぞれの動物の特徴、生息地域、その他(陸上動物に関するこ)
10月29日(金)午後	1組2班	歴史的建造物	沖縄の民家の特徴 シーサーについて
10月29日(金)午後	4組2班	紅型	紅型のルーツ、紅型という技法・制作方法、他の染め物との違い

千葉県立国府台高等学校

2学年主任 萩名 良

TEL 047-373-2141

FAX 047-373-7902

(II) 事前調整

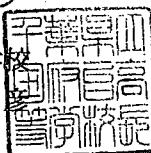
実施日は10月28日、29日と組まれている。同時に学校長の修学旅行（生徒の聞き取り調査）の依頼文と生徒からの手紙が届いた（参照5、6）。早速7月1日の学芸員会議で受け入れて良いか審議し、そしてその分野の担当学芸員にお願いをして協力を得る。7月5日の学芸員会議で再び担当学芸員の承認を決定し、各担当より承諾の葉書を出してもらう（下図参照）。そのテーマの中に「沖縄の音楽」があり調査項目に沖縄の音楽の歴史、特色、現状があった。当館には、音楽分野の学芸員がいないので沖縄県立芸大を紹介した。

<p>郵便はがき</p> <p>50</p>  <p>日本郵便 NIPPON</p> <p>行</p> <p>□□□□□□</p>	<p>2720827</p> <p>千葉県市川市国府台2の4 千葉県立国府台高等学校 2年5組</p>	<p>A) 訪問可 第1希望</p> <p>___月 ___日 ___時</p> <p>第2希望</p> <p>___月 ___日 ___時</p> <p>B) 訪問不可</p> <p>C) 御要望があればお書き下さい</p> <p>御住所 御名前 TEL: FAX:</p>
--	---	--

沖縄県立博物館 様

1999年6月23日

千葉県立国府台高等学校
校長 山崎 哲



修学旅行（生徒の聞き取り調査）についてのお願い

本校では、修学旅行を下記の要項のとおり、校外における学習活動（調査研究）として実施しております。千葉県も修学旅行に航空機を利用できるようになり、沖縄を検討した結果、本年10月27日（水）より30日（土）まで次の二点に重点を置き実施することとなりました。

A 10月27日および28日午前中の平和学習

南部戦跡（県立平和祈念資料館、ひめゆり平和祈念資料館など）の見学と読谷村での体験。

B 28日午後および29日の午前・午後班別調査研究活動

6～7人の班毎に研究テーマを設け、現地で聞き取り調査を実施し、報告書にまとめる。

つきましては、Bの調査研究活動の一環として、下記の日時に生徒が訪問させていただき、ご指導を賜りたいと希望しております。ご多用中、一方的なお願いであり誠に恐縮ですが、何卒趣旨をご理解いただき、ご高配のほどお願い申し上げます。

お手数ではございますが、今回のご返事は、7月13日頃までにいただければ幸甚に存じます。

記

希望日時：本年10月 28 日（木）、

3組 1班 7名・班長 柳下 夏穂

『第2学年校外学習』要項抜粋

- ◎ 地域に学ぶ「調査・研究」活動を通じて、社会を見る視点を養い、今後の学習に活かす。また、こうした活動を通して自主性・自律性を身につけ、実り豊かな高校生活を共に築いていく力とする。
- ◎ 6～7名の班に分かれ、班ごとの調査・研究を中心とする。
- ◎ 地域性を形づくるもの、その地域のかかえている問題・課題を選び、それが人々の暮らしとどうかかわっているのかを考える。調査した内容などはレポートにまとめる。

拝啓

沖縄では梅雨も明け、本格的な夏の到来となりましたと存じます。突然で失礼ではございますが、

お手紙をさせていただきます。

私達は千葉県市川市の県立国府台高校の2年生です。

本年10月27日(水)～10月30日(土)校外学習で沖縄を

訪れ沖縄の伝統工業と織物の聞き取り調査を行

いたいと考えております。この校外学習は別紙の通り

沖縄の歴史や文化を現地での聞き取り調査などにより
知りうる所を主なところとして、お忙しいところ恐縮ですが、首里城とミンサー
についてお話を伺えないでしょうか。

10月28日午後にお願いできたら、と思っております。どちらで
都合の良い日時があれば返信はせきでお知らせください。
詳細な日時につけば10月中旬に手紙にて確認
させていただきます。

7月13日頃までに同封のハガキでお返事ください。
よろしくお願ひします。

敬具

国府台高校 2年3組 1班 代表

柳下 夏穂

(III) 二学期の調整

二学期に入り9月21日付けの微調整のFAXが届いた（参照8）。いよいよ近づいて来たなと緊張する。検討した結果を次の事を9月30日2学年主任の萩倉先生に電話をする。

- ①音楽グループは受け入れが出来ない
- ②研修室が無いので3グループ分テーブル・椅子を設置する
- ③質問の内容が少し変わっている
- ④学芸員は午後の1時から対応出来る

①については手違いで訂正してなかったようだが、生徒とは連絡済みとのことであった。

(IV) 校長による正式依頼書

来館日のちょうど一週間前の10月21日千葉県立国府台高校の校長 山崎 哲彦氏より公文が届いた（参照8、9）。受け入れをもう一度チェックする。対応場所は講堂を使う計画であったが、第51回市町村新採用職員研修の講演が入ってしまった。10月25日の学芸員会議で対応場所をロビーに移す事を承認してもらう。ロビーは狭く来館者に邪魔になるが仕方ない。

(V) 直前学習レポート

校長の依頼書と共に生徒からの直前レポートがとどいた（参照10～11、他は割愛）。そこにはテーマ設定の理由、調査内容、質問事項、参考文献などが細かく記されていた。すぐ各学芸員に渡し調査日に備えてもらう。

私も早速目を通して必要な資料を準備する。

日本の伝統織物	富山弘基	徳間書店
歴史をひらく・琉球文化秘宝展		那覇市制70周年記念企画展実行委員会
読谷山花織基本単位集		読谷山花織事業共同組合
染織と生活	富山弘基	染織と生活社
沖縄の美	水尾比呂志	沖縄県立博物館
沖縄の染織		沖縄県教育委員会
久米島紬～あゆみとわざ～		仲里村教育委員会
染織の美	吉岡幸夫	京都書院

そしてそれらの中から説明用のレジメ、沖縄の織物の種類、沖縄の織物分布図を作る。それに合わせて織物実物見本も準備する（首里織の着尺、ロートン織の帯地、絣の反物、紅型訪問着など）。それでも質問に答えられないものもある。首里織りの技術を持っている人は何人いるか？というのは、どこで統計をとっているのだろう。

参照 7

1999年9月21日

沖縄県立博物館 前田真之様
伊波悦子様

千葉県立國府台高等学校
2学年主任 萩原 良
TEL 047-373-2141
FAX 047-373-7902

拝啓

10月に実施する予定の本校校外学習（修学旅行）での生徒の訪問を受け入れてくださり、大変ありがとうございます。

既にお願いしましたように、10月28日(木)・29日(金)に生徒達が聞き取り調査を行う予定であります。本年は、6つの班が貴館の訪問を希望しております。

現在、生徒達は、調査テーマについての事前調査や訪問の交通手段と時間等について検討しているところです。

さて、3月に私と川勝が貴館でお話しを伺った際、次のようなアドバイスをいただきました。

1. 質問事項を前以てお伝えする。
2. 2年前にお世話になったときは、一度に3グループまで説明をいただいたが、班の数が多い場合は、訪問時間をずらす。
3. 訪問予定時間にあまり遅れないように。また、依頼の際に訪問予定時間を○時～△時のように記す。

1と3については生徒の検討が整理できた段階で、正式の訪問依頼文書に併せてお知らせしたいと思っております。

2についてですが、10月28日の午後に訪問予定の班が4つあるのですが、どのようにしたらよろしいでしょうか。生徒達は、1時半以降には貴館に訪問可能ですが、数が多いので時間をずらした方がよろしいでしょうか。お伝えいただければ、生徒に伝えたいと思います。

お忙しいところ大変恐縮ですが、お電話かFAXでお知らせいただけますでしょうか。よろしくお願ひ申し上げます。

希望日	クラス班	テーマ	伺いたいこと
10月28日(木)午後	3組1班	伝統工芸と織物	首里織り ミンサー
10月28日(木)午後	3組2班	沖縄の音楽	沖縄の音楽の歴史、特色、現状
10月28日(木)午後	3組6班	石敢当	石敢当
10月28日(木)午後	5組4班	沖縄特有の動物 (陸上動物)	どんな動物がいるか、それぞれの動物の特徴、生息地域、その他(陸上動物に関する事)
10月29日(金)午後	1組2班	歴史的建造物	沖縄の民家の特徴 シーサーについて
10月29日(金)午後	4組2班	紅型	紅型のルーツ、紅型という技法・制作方法、他の染め物との違い

参照 8

国府台 第 253号
1999年10月21日

沖縄県立博物館長 大城将保様

千葉県立国府台高等学校
校 長 山崎 哲



修学旅行受け入れのお願い（依頼）

過日、本校職員が貴館を訪問の際は、多忙な時期にもかかわらず、あたたかい心遣いと丁重なご案内をいただき、誠にありがとうございました。また、2年前の修学旅行では本校生徒職員が大変お世話になり、感謝申し上げます。

さて、本校では、20年来、修学旅行を聞き取り調査を主体とした「調査研究活動」と位置付け、「校外学習」として通常の授業では得られない学習を行ってまいりました。

2年前には、この「校外学習」を、沖縄県において実施し、その際貴館を訪問させていただきましたが、今年度も沖縄県において、右記の計画概要で実施する準備を進めております。

沖縄県における「校外学習」の目的として

- ①初日および2日目午前中の平和学習
- ②2日目午後および3日日の班別調査研究活動
の2点を重点項目として設定しております。

②に関し、5つの班の生徒達が貴館への訪問と聞き取り調査を希望しております。つきましては、2日目（10月28日）午後及び3日目（10月29日）午後、貴館での班別調査研究の実施をお願いし、生徒の貴重な学習体験と致したく、受け入れをご依頼申し上げる次第です。

担当の方（前田真之様、伊波悦子様）とは、下記の実施概要で調整をしております。

訪問日時	クラス班	テーマ	伺いたいこと
10月28日(木)午後1時半 (聞き取り調査2時~)	3組1班	伝統工芸と織物	首里織り ミンサー
	3組6班	石敢当	石敢当
	5組4班	沖縄特有の動物 (陸上動物)	どんな動物がいるか、それぞれの動物の特徴、生息地域、その他(陸上動物に関する事)
10月29日(金)午後1時半 (聞き取り調査2時~)	1組2班	歴史的建造物	沖縄の民家の特徴 シーサーについて
	4組2班	紅型	紅型のルーツ、紅型という技法・制作方法、他の染め物との違い

お忙しいところ誠に恐縮ですが、何卒宜しくお願ひ申し上げます。

連絡先 272-0827 千葉県市川市国府台2-4-1 千葉県立国府台高等学校 電話 047(373)2141 FAX 047(373)7902 第2学年主任 萩倉 良

参照 9

1999年度修学旅行（校外学習）計画

1. 1999年度沖縄校外学習の視点

- ①沖縄の歴史を学び風土・気候・生活を体験する。
(異文化体験)
- ②沖縄戦の戦跡と軍事基地の現実を直視し、戦争と平和、本土との関係について考える。
(平和学習)
- ③異文化体験と平和学習の視点を踏まえて、歴史・自然・産業・技能・芸能等を調査研究する。
(調査研究活動)

2. 参加者 生徒320名 職員15名

3. 日程

10月27日(水) 羽田発 8:20 - 那覇着 10:30

午後-読谷村での全体講話とガマ体験と役場周辺見学

1. 全体講話

2. ガマ体験・役場周辺見学(2クラスないじは3クラスで行動)

- a. 2(3)クラス シムクガマーチビチリガマ及び役場周辺-座喜味城跡
- b. 2(3)クラス 座喜味城跡-シムクガマーチビチリガマ及び役場周辺
- c. 2(3)クラス チビチリガマ及び役場周辺-座喜味城跡-シムクガマ

10月28日(木)

午前-戦跡資料館等見学

a. 2クラス ひめゆり平和祈念資料館-白梅の塔

b. 2クラス 白梅の塔 -県立平和祈念資料館

c. 2クラス 県立平和祈念資料館 -旧海軍司令部壕跡

d. 2クラス 旧海軍司令部壕跡 -ひめゆり平和祈念資料館

午後-フィールドワーク（班別調査研究活動）

10月29日(金)

1日-フィールドワーク（班別調査研究活動）

10月30日(土)

クラス別見学（インブビーチ 東南植物楽園 玉泉洞）

那覇発14:10 - 羽田着16:30

4. 宿泊先

10月27日(水)・28日(木)-那覇

那覇セントラルホテル（3クラス）

ホテルサンパレス（2クラス）

ホリディ・イン・エクスプレス那覇（3クラス）

10月29日(金) -読谷村

残波岬ロイヤルホテル（全クラス）

参照10

1999 校外学習班別調査[直前学習レポート]

3組1班

テーマ（沖縄の伝統織物）

班長 柳下夏穂	岡井 裕介	皆川 哲也	松本英朗
井上 牧鬼	鶴野裕未	西塙 理恵	

1. 伝統織物をテーマに選んだ理由

きっかけは、沖縄の工芸品について書いてある本をめくっていた時に、カラーページの色あざやかな織物を見た時である。ただ美しいだけではなく、その織物の中に様々な歴史が刻まれているように思えたので、是非、これらの伝統織物について調べたいと思った。

2. 琉球の伝統織物には、どんなものがあるか。

沖縄の織物には、首里織、与那国織、芭蕉布、琉球絣、紅型、読谷山ミンサー、久高糸ぬなど、実に様々な種類がある。

首里織は、南方諸国や中国の影響を受けた、琉球王朝の古都として栄えた首里の織物で、絣、花織、道毛織、花倉織、ミンサーなど「独特の織物」が織られている。王朝風の洗練された「サイン」と「織り」で珍重されている。

3. 伝統織物の歴史的背景

明治5年(1872年)、日本の行政地域に包含されるまで、琉球は一小王国であった。資源の乏しい離島の集合である琉球国は、古くから中国や、日本、韓国や東南アジアの諸国と交易を行ってきた。

日本や韓国の物品を中国や東南アジアへはこび中継貿易を行うことによって、王国の経営を成り立たせていたが、14世紀中ごろ、中国に明王朝が成立してからは、明の招きによつて貿易貿易をするようになつて、琉球は王国に繁榮をもたらした。

優雅な絣の花倉織や花織、色鮮やかな紅型などは、王族の繁榮をもたらしたものである。絣の技術も、どうして東南アジアとの交流の中で生まれたものと考えられる。

慶長(4年)(1609年)には、日本の薩摩藩の侵寇

によって、薩摩とも従属関係を結びこじつけられた。

中国との朝貢、冊封關係や直接的な統治主体としての王府はそのまま存続していたが、薩摩藩を介して、三江戸幕府にも従属することとなる。たゞだ。

租税として徴収された米や麦、粟の代わりに、官古やハリ山では布の上納を命じられ、一定の年齢になると女性たちは機械的に従事せられてきた。官古やハリ山の上布も派遣や品質の向上は、貢納布に対する厳しい検査などといもたらしたものだが、それが陰に多くの女性たちの辛苦があり、たことを、忘れてはいけない。

4. 「花織」について

現在花織には2種の技法がある。その1つは、白、赤、黄、緑の絹糸を用いて、幾何学的な文様を「さす」として表現した可憐な趣をもった絣織物で、読谷山花織が代表的だ。

他の1つは、土糸または土色糸の一部を浮かせて、幾何学的な文様を織り出した浮織物で、首里花織がよく知られている。

首里の花織は、主に絹糸または綿糸をさすことで、つまり組織の変化により文様を構成する浮織物であり、片面は絹糸でも、その裏は綿糸となり、両面どちらでも使える。リバーシブルにできる。絹糸の一部を段に浮かして、綿糸の輝きで「段文」を表した織物で、特にロート(直糸)と呼んでいた。この技法が「中国から琉球に伝えられたのは1659年のこととされているが、この織物の段は士族以上の人達だけに着用されてきた。

綿糸によるものと、綿糸によるものと2種あるが、綿糸の輝きは絹の方が勝っている。また、首里の花織りと綿組織の紹介併用して、市松文様を表出した織物を「花倉織」というが、これは半綿の絹を用いて、引張りのあま流しが「アマ織」の物で、かつては王家の人々しか着用できなかつたということもあり、大変上品な織物だ。

参照11

5. 首里織の種類

・首里花織

絹浮花織、絹浮花織、両面浮花織、手花織の四種類がある。士族以上の人々が着用していた。

・首里花倉織

沖縄の織物のうち、もっとも格式の高い織物で、王家の妃、王女が着用していた夏衣。

花織と組織、紗織を市松文様、又は菱形文様に織っている。

・首里道地織

平織地の中に部分的に糸の密度を濃くして織られるもので、両面使用できる。男物官衣として使用されていた。

・首里ミニサー

変化平織の1種で、縞糸を引きを入れて太く横の前人織と、両面浮花織を組み合わせた織物。「ミニ」は中国語で「綿」を表し、「サー」は「狭」と「窄」で、綿狭帶といふ小巾物の帶のことをいう。

・首里糸

「中小（ハバクナーエイ）」と呼ばれる首里独特の「手結」の手織法で、糸の原形とも言わゆる。

6. 琉球の織物（首里織以外の物）

— 紅型 —

紅型は琉球に花咲いた独特の美しい染め物である。紅型とは、糸糊を防錆に用いて、顔料や染料で色差し、せき染めをして文様を染めること。

型紙を用いる型染めと、糊筒による筒描き染めの2種類がある。

「紅型」は「ひんかいた」と発音する。古文書には、「黄赤青3色の紅を差し…」とあることから、紅(紅)色型は文様の意味であるとも言われている。起源には「はつきりしない」が、現在のような製作様式が確立したのは、琉球文化のさかだたる発展をみた18世紀頃だといわれている。

一般に女性の着用品で、元服前の王族、士族の少年や王府に仕える小姓たちは、これを着用した。王府では中国より舶載した綿子を最高の礼服として用いてきたが、国賓を迎えるような場合、女性は紗綿

綿衣と呼ばれた紅型の打掛を着用したといふ。王妃は黄地雲竜大文様、王女や王子妃は黄地や、上級士族夫人はピンク地にとんでもれ模様を垂れた牡丹に鳳凰(ハゲウ)文様で、一般士族の女性は水色地に花鳥山水文様で、稍々打掛が着用された。このように、当時の女性の着衣は身分なりを表していた。

このように紅型の染め方や文様、配色などには、灰津染めなどとよく似たところがあるといい、亞熱帯の力強い日射しに負けぬよう、彩色に主として顔料(カレ)を使われ、またコントラストの強い配色をしている点、あるいは黄地色を上位に置いたり、雲竜や牡丹、鳳凰の文様を貴人の恵正に用いていた点などには、琉球の風土や、日中両属の歴史の証しからもうますます示されていく。

— 上布 —

上布は通常上質な麻織物を指しているが、琉球では上質というだけでなく、上納、貢納されたという意味も含まれている。宮古島の平良市荷川取の海岸には、今も人頭税石と呼ばれる1,438トントルの岩があり、これがかつて、身長がこの石の高さに匹敵し、人前の労働力を挡住、たとえとして、税を課せられたらしい。つまり、中学生ごろから税を收めねばならなかつたのだ。

薩摩の支配を受けて、貢租は一層厳しくものになり、1659年には先島の貢租は上布で代納するとか定められた。見事な技術によって上布の出現は、このような過酷な人頭税によつてもたらされたものだった。

宮古上布の明確な起源は不明だが、細かい糸の上布が「穂(ス)」や「糸」のように、たのほは、と山か貢納布となつてからだと言われている。

7. 質問したいこと。

- 現在、首里織の技術者と手草、た人は、何人ほどいるのか。
- 貢租を納めていたのは、実際には何歳くらいの女性だつたのか。
- 糸の图案は、「御絵図帖」以降、新しいものが生み出されたたりしていいのか。

(VI) 学校長来館

いよいよ聞き取り調査の日がきた。午前中にわざわざ学校長が挨拶にみえ、1999年校外学習のしおりを持参された。その巻頭言は次の様な素晴らしいあいさつ文がある。

沖縄のこころ

千葉県立国府台高校 学校長 山崎 哲彦

私は近頃、40年以上前の高校時代の修学旅行を懐かしく思い出す。蒸気機関車の牽く夜汽車に揺られて行った初めての遠出、見聞するもの全てが感動の連続であった。しかし、現在は手軽にどこへでも行けるし、メディアによって世界のできごとが瞬時に分かる時代である。今年の県下の公立高校では46%が航空機を利用、もはや集約専用列車は19%の高校が利用しているにすぎない。来年からは海外へも解禁になる。このように時代とともに修学旅行も大きく様変わりしてきた。

しかし、明治19年（1886）からはじまった世界でもあまり例をみないこの学校行事は、不要論も根強くあるものの、行事を精選しても廃止する学校はほとんどないであろう。本校ではかつての修学旅行のありかたを抜本的に見直し、今日のような事前準備を重視した校外学習形式になったものであり、その意義を充分ふまえて実践し実り多いものにしてほしいものである。

『沖縄のこころ』は前県知事大田昌秀氏の著書であるが、私たちはまさにこの沖縄のこころを理解するための校外学習でなければならぬ。大江健三郎氏はその著『沖縄ノート』の中で「日本が沖縄に属する」とまでいい、第二次世界大戦から今日までこの地の犠牲によって平和日本が成り立っている実状を報告し洞察している。また、沖縄は15世紀以降、中継貿易国家として隆盛を極めた琉球王国をはじめとして、独特の歴史と文化をもつ土地であり、柳田国男が『海上の道』で分析しているように、日本人および日本文化のルーツの主要なひとつでもある。このことの前提なくして沖縄のこころを理解することは到底不可能であるといつてもいい。私たちの「聞き取り調査」する態度も、そのことを充分わきまえておくべきである。

しかし、しりごみする必要は少しもない。沖縄は亜熱帯気候のため異国と見まがう程自然が美しくまばゆい。同様に、人々も温かく優しく人情味にあふれている。私たちはそこに礼をもって溶け込めばいいのだ。

自己の健康管理をしっかりと固め団体行動としての規律を守り、みんなで協力して思いでに残る楽しい安全な旅を祈らずにいられない。そして、沖縄のこころを少しでも深く理解し、大きな学習成果をあげることをこころから期待している。

(VII) きめ細かな調査項目

校外学習のしおりをめくると、各クラス6班に分かれそれぞれのテーマがある。8クラスあるので48のテーマとなる。調査場所も日時も違いスケジュールを組むだけでも大変な事である。しかし、これは他の学校の参考にすべくあえて紹介しよう。(参照12~15)

参照12

1組

1 班	班長 石橋 齋史				⑤ A F	
	調査1 蜂谷 奈々江	ルート 沖田 直樹	テーマ：沖縄の言葉			
	調査2 朝倉 岬	報告集 橋 龍平	28日 pm 沖縄言語文化研究所 098-887-2177 那覇市首里赤平町1-46 29日 am 沖縄市観光協会(沖縄市民小劇場あしびなーコーリングザ3F) 沖縄市中央2-28-1 098-934-8487			
	調査3 中谷 真実	会計 竹本 勝平	pm 球球大学・国際文化学科琉球方言学 中頭郡西原町字千原1番地 098-895-8285			
2 班	班長 藤岡 健太郎				① E	
	調査1 高橋 美智子	ルート 本田 雄史	テーマ：沖縄の歴史的建造物			
	調査2 山本 裕子	報告集 井上 友人	28日 pm 中村家 098-915-3500 北中城村字大城106 29日 am 首里城公園 098-886-2020 那覇市首里当蔵町3-1 pm 県立博物館 098-884-2243 那覇市首里大中町1-1			
3 班	班長 深井 香穂				⑧ C	
	会計・調査1 根津 明日香	ルート・調査2 松尾 崇史	テーマ：沖縄の楽器			
	ルート・調査2 及川 大輔	報告集 岡部 翔	28日 pm 琉球楽器またよし 098-861-3484 那覇市安里67 29日 am 松田三味線店 098-868-7767 那覇市辻2-2-17 pm ちんだみ工芸 098-869-2055 那覇市牧志1-2-18			
4 班	班長 小熊 渉				③ C	
	調査1 上田 貴知子	ルート 笠原 潤	テーマ：レジャーについて			
	調査2 阿部 真紀子	報告集 遠藤 絵美	28日 pm 知念海洋レジャーセンター 098-948-3355 知念村字久手堅676 29日 am 那覇マリーナ 098-866-0919 那覇市港町4-5-1 pm わしたショップ本店 098-864-0555 那覇市久茂地3-2-22			
5 班	班長 蔡崎 尚弘				④ H	
	調査1 高松 あずさ	ルート 松原 彰吾	テーマ：サンゴショウ			
	調査2 加藤 良子	報告集 森永 由布美	28日 pm さんごセンター 098-868-3583 那覇市西2-4-17 29日 am 那覇マリーナ 098-866-0919 那覇市港町4-5-1 pm 真栄田岬 読谷村			
6 班	班長 小松 千晴				⑧ G	
	調査1 石井 俊太	ルート・会計 漢本 依子	テーマ：沖縄の料理			
	調査2 小林 直樹	報告集 高橋 奈美	28日 pm 牧志公設市場 098-861-3732 那覇市松尾2-10-1 29日 am レストラン王国村 098-949-1334 大城村字前川1336 pm 首里そば 098-884-0556 那覇市首里赤田1-7			

2組

1 班	班長 下村 韶				⑥ B J	
	調査1 三代川 俊介	ルート・報告集 大屋 りえ	テーマ：沖縄の植物			
	調査2 高野 唯史	ルート・報告集 望月 ゆかり	28日 pm 東南植物楽園 098-939-2555 沖縄市知花2146 29日 am やんばる亜熱帯園 0980-53-0007 名護市中山1024-1 pm ビオスの丘 098-965-3400 石川市嘉手丸961-30			
2 班	班長 塩路 佳子				⑦ K	
	調査1 藤田 裕之	ルート 野呂 幸世	テーマ：闘牛			
	調査2 山田 環	報告集 中村 韶	28日 pm 沖縄タイムス 098-860-3557 那覇市久茂地2-2-2 29日 am 沖縄横綱牛 佐久原好助氏宅 098-897-7036 宜野湾市真栄原1-11-9 pm 愛牛家・登川氏宅 098-965-1737 石川市字嘉手丸142			
3 班	班長 市原 智子	会計 田村 翔自				
4 班	班長 河崎 真希子				② B K	
	調査1 大塚 宏志	ルート・会計 栗賀 明香	テーマ：沖縄の魚			
	調査2 米川 瑛平	報告集 手嶋 雄太	28日 pm 牧志公設市場 098-803-6186 那覇市松尾2-10-1 29日 am 本部漁協組合 0980-47-2500 本部町字茶谷28 pm 国営沖縄記念公園 0980-48-2743 本部町字石川424			
5 班	班長 青木 朝枝				⑥ B K	
	調査1 小形 悠介	ルート 畠山 友敬	テーマ：海洋生物			
	調査2 木村 太郎	報告集 岩田 明子	28日 pm 環境教育横井氏(残波岬ロイヤルホテル) 読谷村字宇座1575 29日 am 国営沖縄記念公園 0980-48-2743 本部町字石川424 pm 国営沖縄記念公園 0980-48-2743 本部町字石川424			
6 班	班長 斎木 朋子				① E	
	調査1 桑原 麻衣子	ルート・会計 池澤 弦	テーマ：首里織			
	調査2 栗原 一樹	ルート ピーク・M・ソルト	28日 pm 大城織物工場 098-889-4581 烏房郡南風原町喜屋武6番地 29日 am 那覇市伝統工芸館 098-858-6655 那覇市當間1-1 pm 那覇伝統織物事業協同組合 098-887-2746 那覇市首里桃原町2-64			
	調査3 大地 香奈子	報告集 湯浅 晓生				
	班長 泰 誠志				② H	
	調査1 大原 理絵	ルート 太田 健一	テーマ：沖縄特有のだがし			
	調査2 延原 直香	報告集 荒牧 拓	28日 pm 末廣製菓本店工場 098-863-5630 那覇市松尾2-7-20 29日 am おきなわ屋・国際通り店 098-868-5252 那覇市松尾2-8-5 pm 黒糖工場 098-958-4005 読谷村字座喜味			
	調査3 黒木 まや	会計 山下 智嗣				

参照13

3組

1班	班長 柳下 夏穂 調査1 岡井 裕介 調査2 鴻野 裕未 調査3 西塙 理恵	ルート 井上 牧恵 報告集 皆川 哲也 会計 松本 英朗	テーマ：伝統工芸・織物 28日 pm 沖縄県立博物館 098-884-2243 那覇市首里大中町1-1 29日 am 里工芸館・那覇伝統織物事業協同組合 098-887-2764 那覇市首里桃原町2-64 pm 跳谷村伝統工芸総合センター 098-958-4674 跳谷村字座喜味2974-2	(2) H
	班長 本郷 新 調査1 船橋 崇宏 調査2 小早川 裕介 調査3 弓場 智喜	ルート 細瀬 恵 報告集 安居 智恵子 会計 庄田 明日香	テーマ：沖縄の音楽 28日 pm 金城三味線製作所 098-868-1525 那覇市松山1-19-19 29日 am 沖縄コンベンションセンター 098-898-3000 宜野湾市真志喜4-3-1 pm 沖縄県立芸術大学 098-831-5000 那覇市首里当蔵町1-4	
	班長 伊藤 康二朗 調査1 高崎 由紀子 ルート調査2 堀内 亜矢子 調査3 田代 美亜	報告集 木村 健太 会計 貝瀬 雄太	テーマ：沖縄の海(サンゴ以外) 28日 pm 牧志公設市場 098-803-6186 那覇市松尾2-10-1 29日 am 国営冲縄記念公園 0980-48-2743 本部町字石川1424 pm いんぶーピー 098-967-8222 恩納村字名嘉真2173	
	班長 平澤 佳明 調査1 今川 美奈 調査2 高田 幸子	ルート 高橋 隆寛 報告集 福島 弘二	テーマ：豚について 28日 pm 牧志公設市場 098-803-6186 那覇市松尾2-10-1 29日 am 料理研究家・喜屋武マサ 098-878-5179(喜屋武宅) ホテルサンパレスにて pm 沖縄市立郷土博物館 098-932-6882 沖縄市上地235-3	
4班	班長 笠松 哲光 調査1 佐藤 寛弘 調査2 渡辺 倫子 調査3 櫻井 梨乃	会計 大橋 純子	テーマ：シーサー 28日 pm 玉泉洞王国村 098-949-7421 玉城村字前川1336 29日 am 波上宮(神社) 098-868-3697 那覇市若狭1-25-11 pm 興南高校(長嶺操先生) 098-884-3292 (高校) 那覇市字古島160 (高校)	(2) B K
	班長 平山 友暁 調査1 鈴木 翔 調査2 吉本 亜紀子 調査3 主山 直美	ルート 中川 岳人 会計 報告集 早坂 藤乃	テーマ：三叉路に棲まる魔物たち～石敢当～ 28日 pm 沖縄県立博物館 098-884-2243 那覇市首里大中町1-1 29日 am 那覇市内 (ひめゆり通り方面) pm 那覇市内 (ひめゆり通り方面)	

4組

1班	班長 近藤 ゆず 調査1 倉田 博之 調査2 島川 悠太 調査3 橋 宏幸	ルート 風間 千明 報告集 長山 愛 会計 篠田 覧大	テーマ：泡盛 28日 pm (資)比嘉酒造泡盛まさひろギャラリー 098-994-8080 糸満市西崎町5-8-7 29日 am 泡盛館 098-885-5681 那覇市首里寒川町1-81 pm 瑞泉酒造 098-884-1968 那覇市首里崎山1-35	(4) E
	班長 加地 淳平 調査1 吉田 まゆみ 調査2 山本 深雪 調査3 田代 祥一	ルート 田村 健 報告集 鹿俣 清華 会計 龍谷 公精	テーマ：紅型 28日 pm 喜友名琉球紅型工房 098-884-7181 那覇市首里金城町1-54 29日 am 那覇市伝統工芸館 098-858-6655 那覇市字當間1-1 pm 県立博物館 098-884-2243 那覇市首里大中町1-1	
	班長 小林 一美 調査1 田口 麻樹 調査2 山岸 天平 調査3 片瀬 陽平	ルート 大石 清香 報告集 今井 希 会計 川井 雅史	テーマ：紅型 28日 pm 那覇市伝統工芸館 098-858-6655 那覇市字當間1-1 29日 am 喜友名琉球紅型工房 098-884-7181 那覇市首里金城町1-54 pm 那覇市ショッピングセンター 098-862-7474 那覇市西2-4-17	
	班長 黒瀬 零 調査1 小野 紗子 調査2 松井 雅広 調査3 尾崎 美輪	ルート 雲藤 直美 報告集 岡崎 佐和子 会計 大澤 一寿	テーマ：べにいも 28日 pm ユンタンザ 098-958-1391 中頭郡読谷村字波平1070-1 29日 am 読谷村役場 098-982-9215 中頭郡読谷村字波平37 pm お菓子のボルシェ 098-956-3335 中頭郡読谷村大木459-7	
5班	班長 真鍋 高野 調査1 大久保 秀一 調査2 藤目 英美 報告集 調査3 藤野 真梨	ルート 古瀬 敏展 会計 調査3 壱井 直子	テーマ：サンゴと海の生物の関わり 28日 pm サンゴセンター(珊瑚教室) 098-868-3583 那覇市西2-3-12 29日 am 国営冲縄記念公園 0980-48-2743 本部町字石川1424 pm いんぶーピー 098-967-8222 恩納村字名嘉真2173	(4) B K
	班長 北本 篤史 調査1 郡司 木綿子 調査2 渋谷 俊輔 調査3 吉田 幸恵	ルート 石原 久美 会計 報告集 久保内 肇	テーマ：そばを極める 28日 pm 牧志第一公設市場 098-867-6560 那覇市松尾2-10-1 29日 am 御殿山 098-885-5498 那覇市首里石嶺町1-121-2 pm 沖縄市立郷土博物館 098-932-6882 沖縄市上地235-3	

参考14

5組

1 班	班長 手塚 達也			テーマ : 沖縄の屋食における栄養学的な生活様式による関連を調べる
	調査1 中村 純平	ルート 国常 圭	28日 pm 沖縄調理師専門学校 098-861-7100 那覇市久米1-18-7	
	調査2 原 健策	報告集 河合 宏子	29日 am 渔港 : 渔協(糸満商工会) 098-992-2816 糸満市字糸満625	
	調査3 増井 美帆	会計 梅津 祐子	pm 沖縄県庁(長寿社会対策室) 098-866-2214 那覇市泉崎1-2-2	
2 班	班長 遠藤 勇太		テーマ : 沖縄の山羊料理	
	調査1 大岩 敦	ルート 井戸 智佳子	28日 pm 牧志公設市場 098-867-6560 那覇市松尾2-10-1	
	会計・調査2 松坂 麻美	報告集 齊藤 祐嗣	29日 am 山海 098-863-5199 那覇市東町19-12	
	調査3 佐藤 麻衣子		pm 世名畜産 098-998-8013 東風平町世名城620-2	
3 班	班長 小城 和歌子		テーマ : 食文化と健康	
	調査1 富川 莉奈	ルート 飯塚 徹	28日 pm 沖縄キリスト教短大・友利知子 098-885-3589 那覇市大道35-5	
	調査2 宮館 莉沙	報告集 座間 富美彦	29日 am ふみや 098-868-3309 那覇市前島3-17-9	
	調査3 堀越 真理子	会計 下保 貴志	pm 那覇市牧志第一公設市場(市役所) 098-862-6560 那覇市松尾2-10-1	
4 班	班長 谷岸 示現		テーマ : 沖縄の動物	
	調査1 河内 辰也	ルート 丸山 亜由美	28日 pm 沖縄県立博物館 098-884-2243 那覇市首里大中町1-1	
	調査2 栗林 雅人	報告集 佐々木 亮太	29日 am 子供の国 098-933-4190 沖縄市胡屋5-7-1	
	調査3 荒間 亜希子	会計 阿部 友美	pm 沖縄動物愛護センター 098-945-3043 大里村大里2000	
5 班	班長 杉浦 清信		テーマ : 琉球ガラス	
	調査1 松本 香織	ルート 林 弘樹	28日 pm 琉球エッチング夢工房 098-885-7773 那覇市松川3-17-1-B-1F	
	会計・調査2 中野 良美	報告集 小林 学	29日 am 琉球共栄ガラス工房 098-965-3090 国頭郡恩納村字富着85	
	調査3 高柳 万里		pm 宙吹ガラス工房 虹 098-958-6448 中頭郡読谷村座喜味2748	
6 班	班長 若菜 真理子		テーマ : アセロラ	
	調査1 菊川 和哉	ルート 佐藤 愛美	28日 pm 沖縄県農林水産部園芸振興課 098-866-2266 那覇市泉崎1-2-2	
	調査2 濱屋 圭	報告集 根本 知香	29日 am アセローラフレッシュ 0980-47-2505	
	調査3 布施 裕司	会計 中村 わか菜	pm 国頭郡本部町字並里517セローラフレッシュ グリーンホテル 0980-48-3211 国頭郡本部町字古島404	

6組

1 班	班長 櫻井 伸幸		テーマ : 沖縄のお菓子を味わおう
	調査1 北條 茜	ルート 福井 隆一	28日 pm 沖縄県黒砂糖工業会 098-862-6140 那覇市久茂地3-20-5
	調査2 佐藤 あい子	報告集 金子 由香理	29日 am 未廣製菓 098-863-5630 那覇市松尾2-7-20
	調査3 森 健	会計 尾坂 一會	pm 沖縄有成堂 098-893-8680 宜野湾市長田320
2 班	班長 長野 翔伍		テーマ : さとうきび
	調査1 川野 篤史	ルート 川原 奈々美	28日 pm 日本分蜜糖工業会 098-869-0417 那覇市奥久茂地2-9-1
	調査2 山本 哲也	報告集 高岡 麻梨亞	29日 am 沖縄県農林水産部糖業農産課 098-866-2275 那覇市泉崎1-2-2
	調査3 桑子 由樹	会計 飯川 貴子	pm JAやいな農協読谷支所経済課 098-958-4106 読谷村字波平1696
3 班	班長 台場 久美子		テーマ : バイナップル
	調査1 田代 一之	ルート 報告集 斎崎 広大	28日 pm 沖縄中央卸売市場 098-868-2060 浦添市勢理客555-27
	調査2 新橋 英里子	会計 澤柳 奈津子	29日 am JAやんばる・營農販売部特産課 0980-54-0015 名護市伊差川327-1
	調査3 近藤 慎也		pm ナゴバイナップルパーク 0980-53-3659 名護市為又1195
4 班	班長 佐藤 純子		テーマ : 沖縄でよくとれる魚図鑑
	調査1 三上 喬之	ルート 吉田 徹	28日 pm 那覇市沿岸漁業組合 098-861-2707 那覇市港町3-1-17
	調査2 米山 創一郎	報告集 長谷川 陽子	29日 am 寄宮フィッシングセンター 098-832-7149 那覇市寄宮3-19-11
	調査3 鈴木 一誠	会計 渡部 奈己	pm 松本料理学院 098-861-0763 那覇市泉崎1-9-13
5 班	班長 高田 学		テーマ : 沖縄の民家について
	調査1 石川 友香	報告集 石井 麻美	28日 pm 琉球村 098-965-1234 恩納村山田1130
	調査2 野口 展正	会計 渡辺 真也	29日 am 中村家 098-935-3500 北中城村大城106
	ルート調査3 西崎 奈保		pm 読谷村立歴史民俗資料館 098-958-3141 読谷村座喜味708-6
6 班	班長 川島 直		テーマ : 琉球ガラスについて
	調査1 河口 真理子	ルート 中野 知徳	28日 pm 那覇市伝統工芸館 098-858-6655 那覇市字当間1-1
	調査2 佐藤 彩	報告集 岡部 凉	29日 am 沖縄工芸村 098-966-2859 国頭郡恩納村字恩納6208
	調査3 渡邊 千尋	会計 能登谷 彰恒	pm 共栄ガラス工房 098-965-3090 国頭郡恩納村字富着85

参照15

7組

⑦ F ⑧ G ⑨ F ⑩ A G ⑪ A H ⑫ B	1班	班長 桑田 英俊		テーマ：豚料理(長寿について)	③ F
		調査1 大山 知春	ルート 黒崎 夕介	28日 pm 総合給食 098-948-7034 知念村字久手堅275-1	
		調査2 三谷 麗	報告集 牧野 訓久	29日 am 上原ミート 098-863-6186 那霸市松尾2-10-1	
⑦ F ⑧ G ⑨ F ⑩ A G ⑪ A H ⑫ B	2班	調査3 藤間 典子	会計 林 篤宏	pm 九市ミート(牧志公設市場) 098-861-4294 那霸市松尾2-10-1	
		班長 鈴木 正泰		テーマ：ゴーヤーについて	
		調査1 茂木 隆明	ルート 酒井 梨紗	28日 pm jef与那原店 098-945-3501 烏尻郡上与那原町字与那原467	
⑦ F ⑧ G ⑨ F ⑩ A G ⑪ A H ⑫ B	3班	調査2 山岸 ゆり	報告集 水越 浩人	29日 am 牧志第一公設市場 098-826-8452 那霸市松尾2-10-1	
		調査3 竹本 麻衣子	会計 平塚 聖香	pm ゴーヤーパーク 0980-54-1158 名護市字中山894-9	
		班長 守田 貢輔		テーマ：琉球音楽	
⑦ F ⑧ G ⑨ F ⑩ A G ⑪ A H ⑫ B	4班	調査1 久保田 晴子	ルート 二口 徹也	28日 pm 沖縄市立郷土博物館 098-932-6882 沖縄市上地235-3	⑥ J
		会計2 清水 香理	報告集 佐野 遼太郎	29日 am 沖縄県ロック協会 098-932-1638 沖縄市諸見里1320-B-4	
		調査3 水口 万里子		pm 沖縄県立芸術大学 098-831-5000 那霸市首里当蔵町1-4	
⑦ F ⑧ G ⑨ F ⑩ A G ⑪ A H ⑫ B	5班	班長 神 健太郎		テーマ：そば	⑤ D
		調査1 村山 真樹子	ルート 宮川 純一	28日 pm 信ちゃんそば 098-998-5932 東風平町字東風平1418-2	
		調査2 塩崎 由布子	報告集 齊藤 玲子	29日 am 沖縄製粉 098-868-3141 那霸市通堂町1-1	
⑦ F ⑧ G ⑨ F ⑩ A G ⑪ A H ⑫ B	6班	調査3 菅原 紫織	会計 桜井 伸一	pm 沖縄製粉 那霸市通堂町1-1	
		班長 丸茂 妙子		テーマ：沖縄の動物	① A J
		調査1 牧野 珠比太	ルート 金井 星也	28日 pm 球大学(熱帯生物圏研究センター) 098-895-8036 中頭郡西原町字千原1番地	
⑦ F ⑧ G ⑨ F ⑩ A G ⑪ A H ⑫ B	7班	調査2 岩瀬 純子	報告集 川原 朋	29日 am 野鳥の森自然公園 098-974-3111 具志川市みどり町1-1-1	
		調査3 倉地 昇	会計 大石 卓央	pm 沖縄こどもの国 098-933-4190 沖縄市胡屋5-7-1	
		班長 石部 卓		テーマ：泡盛	③ E
⑦ F ⑧ G ⑨ F ⑩ A G ⑪ A H ⑫ B	8班	調査1 雨海 将樹	ルート 渡邊 沙織	28日 pm 南都酒造所 098-949-7421 烏尻郡玉城村字前川1367	
		調査2 湯田 紗子	調査2・報告集 中嶋 理紗	29日 am 酒造連合 098-885-2178 那霸市港町2-8-8	
		調査3 山口 実穂	調査1・会計 山田 崇史	pm 瑞泉酒造 098-884-1968 那霸市崎山町1-35	

8組

⑦ G ⑧ J ⑨ B K ⑩ D ⑪ H ⑫ A J	1班	班長 橋本 勉		テーマ：鍾乳洞	③ F
		調査1 渡邊 清嵩	ルート 皆川 奈津子	28日 pm 玉泉洞王国村 098-949-7421 烏尻郡玉城村字前川1366	
		調査2 坪野 優紀	報告集 村山 千尋	29日 am さんごセンター 098-868-3583 那霸市西2-3-12	
⑦ G ⑧ J ⑨ B K ⑩ D ⑪ H ⑫ A J	2班	調査3 長谷部 渉	会計 並木 一仁	pm 球大学 098-895-8566 中頭郡西原町字千原1番地	
		班長 千葉 曜		テーマ：陶器	⑤ D
		調査1 及川 純一	ルート 大森 美緒	28日 pm 那霸市立壺屋焼物博物館 098-862-3761 那霸市壺屋1-9-32	
⑦ G ⑧ J ⑨ B K ⑩ D ⑪ H ⑫ A J	3班	調査2 石井 大輔	報告集 大崎 実	29日 am 那霸市伝統工芸館 098-858-6655 那霸市字當間1-1	
		調査3 織戸 淳	会計 飯塚 みさ	pm 壺屋陶器事業協同組合 098-866-3284 那霸市壺屋1-21-14	
		班長 二階堂 智美		テーマ：沖縄の植物・花	⑧ A K
⑦ G ⑧ J ⑨ B K ⑩ D ⑪ H ⑫ A J	4班	調査1 竹内 司	ルート 小野崎 容子	28日 pm 豊見城跡公園 098-850-0031 豊見城村字豊見城863	
		調査2 佐藤 寛史	報告集 濑楽 夏希	29日 am ナゴパラダイス 0980-52-6262 名護市幸喜1774	
		調査3 山内 正彦	会計 高貝 亞希子	pm 沖縄フルーツランド 0980-52-1568 名護市為又1220-71	
⑦ G ⑧ J ⑨ B K ⑩ D ⑪ H ⑫ A J	5班	班長 原子 紀康		テーマ：豆腐	③ C
		調査1 小川 見弘	ルート 楠崎 桂子	28日 pm なかむら食品 098-948-2228 知念村志喜屋574	
		調査2 花岡 恵子	報告集 下道 彩	29日 am 松本料理学院 098-863-0763 那霸市泉崎1-9-13	
⑦ G ⑧ J ⑨ B K ⑩ D ⑪ H ⑫ A J	6班	調査3 金子 あぐり	会計 河島 創	pm ひろし屋食品(株) 098-861-0421 那霸市安附617-49	
		班長 小林 崇志		テーマ：海と観光	③ C
		調査1 青木 優美	ルート 伊藤 温海	28日 pm 知念海洋レジャーセンター 098-948-3355 知念村字久手堅676	
⑦ G ⑧ J ⑨ B K ⑩ D ⑪ H ⑫ A J	7班	調査2 長谷川 麻衣	会計・報告集 賀茂 俊皓	29日 am ひめゆりパーク 098-997-3111 糸満市真栄平1300	
		調査3 山本 恵梨子		pm 首里城公園管理センター 098-886-2020 那霸市首里金城町1-2	
		班長 渡部 清美		テーマ：沖縄の染め物	
⑦ G ⑧ J ⑨ B K ⑩ D ⑪ H ⑫ A J	8班	調査1 大谷 知寛	会計 ルート 浦野 鉄平	28日 pm 球紅型事業協同組合(那霸市伝統工芸館) 098-857-4149 那霸市字当間1-1	④ G
		調査2 浜本 るり	報告集 多湖 克彦	29日 am 首里琉染工房 098-886-1131 那霸市首里山川町1-54	
		調査3 太田和はるか		pm 球の館(紅型教室) 098-992-1000 糸満市西崎町5-11-2	

(VII) 調査隊受け入1日目 (10月28日 木曜日)

国府台高校の生徒は約束の時間より30分も早く来館した。学芸員も1時から準備して待っていたので、すぐ対応できた。秋陽のさしこむロビーにテーブルを並べた臨時の学習室である。担当は「石巖当」を神谷厚昭学芸員、「沖縄の動物」を与那城義春学芸員、「沖縄の伝統織物」は私、伊波である。

私の担当した「織物」班は男生徒3人、女性徒4人で落ち着いた感じの仲良しグループである。まず、なぜこのテーマを選んだのか聞いた。

- * 沖縄の本を見て色鮮やかな織物が目についた
- * 紋のイメージがとてもつよかった
- * 織物の種類が多い
- * 花蔵織がすばらしい
- * 昔の人は芭蕉布を着ていた
- * 人頭税などで苦しめられたいた

と返事がきた。しっかり下調べはやってあるようだ。私は一つ一つに解説を加えた。原材料について、王朝文化について、貢納布について、織物の種類がなぜ多いのかなど。そして、私の手織の首里花織の着尺、ロートン織りの帯、服地などを見せた。实物に触ることが出来たので生徒達は感激してみんなで記念撮影をした(写真1)。学習風景は(写真2, 3, 4,)のようである。

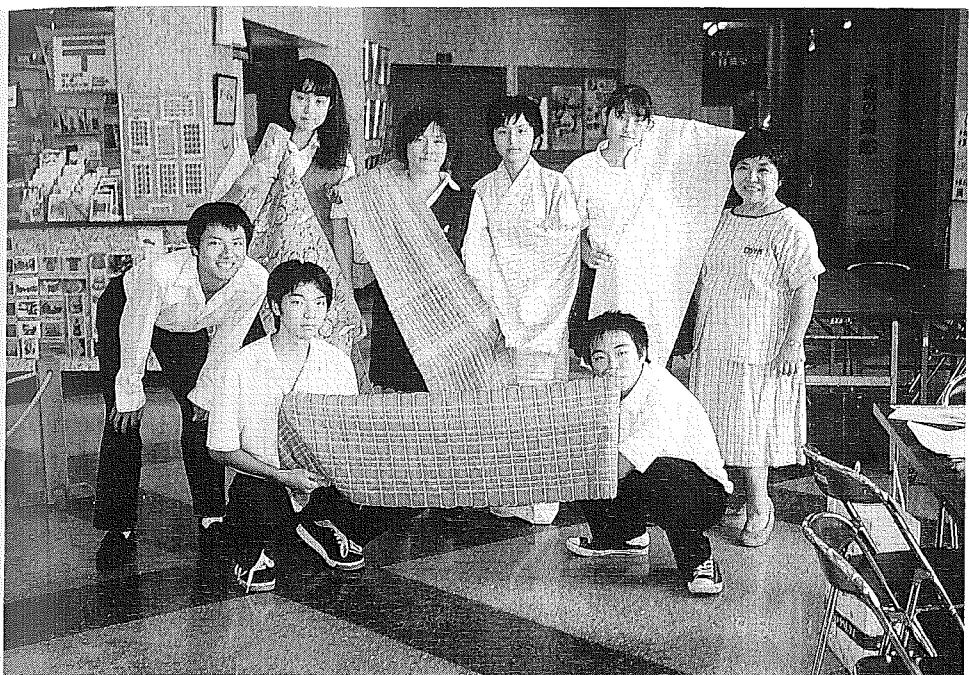
聞き取り調査がすんで館内の展示物を見るにすることにする。折しも企画展「日本の技～伝統のかたち～」という第七回重要無形文化財保持団体の秀作展示会をしていた。そこには宮古上布、喜如嘉の芭蕉布、久留米絣、結城紬の素晴らしい織物が展示されていた。参考になったことであろう。

(IX) 調査隊受け入れ2日目 (10月29日 金)

2日目は「紅型」と「歴史的建造物」で担当は与那嶺一子学芸員と太田健一学芸員、多良間利絵子学芸員が担当した。場所は博物館講堂で対応したが、学習室ではないので少々暗く不便である。

(X) 聞き取り調査を終えて

半年間学校と博物館が連絡調整をしながら一つの事業を終えた。2時間という限られた時間で充分だっただろうか。私の担当の「織物」は適当であった。他の学芸員の感想ではテーマが学校から示され、その中から選んだもので、「自分は他のテーマをやりたかった」ともらした生徒もいたという。320人の中にはこういう事も2, 3起こり得るだろ。



(写真1) 沖縄の織物を手に（沖縄県立博物館ロビー）



(写真2) 聞き取り調査の様子（沖縄県立博物館ロビー）



(写真3) 真剣な聞き取り調査（沖縄県立博物館ロビー）



(写真4) 民族室見学の様子（沖縄県立博物館民族室一）

(XI) お 礼

11月9日学校長、2学年主任と各班の生徒より各担当の学芸員に丁寧なお礼状がとどいた。お礼と共に、沖縄の青い空や海、なじみのない虫、色とりどりの大きい花も新鮮だったと感想を述べている（参照16～18）。早く校外学習報告書を見たいものである。

(XII) 今後の課題

沖縄を取り上げて学習する事は素晴らしいことで、歴史の教科書に載っていない部分を埋める事が出来るし、第二次世界大戦の唯一住民を巻き込んだ地上戦の島を高校生の目で、足で確かめる事は大切だと思う。大きなテーマでなくても、じっくり学習して欲しい。そしてリピーターとして訪れて欲しいのである。

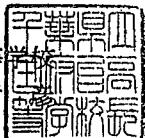
参照16

（参照16）

平成 11 年 11 月 9 日

県立博物館 様

千葉県立国府台高等学校
校長 山崎哲



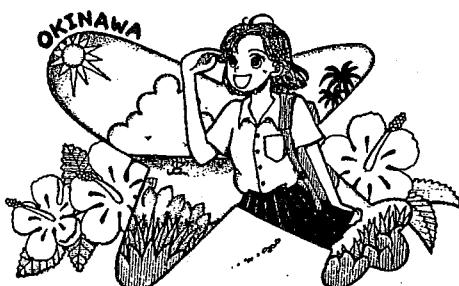
修学旅行（生徒の聞き取り調査）についてのお礼

暮秋の候、益々ご清祥のこととおよろこび申し上げます。

さて、過日実施いたしました本校生徒による調査・研究に際しましては、ご協力、ご指導を賜り、誠に有り難うございました。この体験から、生徒は、学習を深め、貴重な思い出を残したことと思います。

また、礼儀作法、応対の仕方など事前に指導をしましたが、高校生のことで、ご無礼の段がございましたら、ご寛恕の程お願ひいたします。

取り急ぎお礼を申し上げます。



校 外 学 習 沖 縄

1999年10月27日(水)～30日(土)

参照17

拝啓

先日は、本校校外学習での生徒達の聞き取り調査に際し、懇切丁寧な案内をしてくださいり、大変有り難うございました。また、お忙しい中、生徒達のために時間を割いてくださり、感謝申し上げます。

生徒達はそれぞれのテーマについて、貴重な学習体験ができました。また、親切にご教示いただいたことに感激していました。

現在生徒達は、班別調査研究等のまとめに取り組んでいるところです。来春までには報告集が完成する予定ですが、できあがりましたらお送りします。

伊波さんには、特に聞き取り調査全体の連絡調整をしていただき、大変お世話になりました。感謝しております。

それぞれの学芸員の方に、くれぐれも宜しくお伝えください。

健康に留意され、ますます活躍されますようお祈り申し上げます。

敬具

1999年11月10日

沖縄県立博物館

伊波悦子様

千葉県立国府台高等学校

2学年主任 萩倉 良

参照18

伊波 悅子 様

拝啓

ニカラ千葉イハ、北から響きが訪ねて來、朝は咲く花が百々なりつゝ
ある今日二日ニテアリ。

昨日は、私の方の調査に付し、お忙しい中ご協力いただきまし

本当にありかへうニシテ、お忙ちの便り御用意の千葉は
陸奥が浅く伝統工芸に觸れる機会がござつた。展示の
ものには佐く、生イ見たり、振ふるせやいた御事、ヒヤモ感動
レインます。私たちにレーベ、最初、訪問した。イ、

緊張してまいり、戸惑いもあつたのが、丁寧にニ説明
して下さり、次の後の調査もより深くものになりました。

また、質問事項にお答えいたり、資料も用意していただき、
到着一同、大変恐縮しいあります。

沖縄は、空を青く、海をとくもきれいイ、私の方とはないけん
花の虫や、色とりどりの大きの花も新鮮イでした。また、お、あと、
首里城にも足を運んだの、イカ、トイも美しく、織物ナリ
中国から伝わ。いたのと同様に、中国の太城を見た。三
様でした。私の方にレーベ、沖縄訪問は、伝統に觸れる
ことかいたり、沖縄の暗い過去、そして現在を語る方
よ、木綿会になります。

いたたたニ、厚意を賜ふたは、よう、今回学んだことを
記録にまとめて役立つたと思つてます。

これから、気候が変わろと思いますが、お体に
気をつけ、ますますニ活躍くださいますよう、

到着一同、お祈りいたしております。このたんじは、

本当にありかへうニシテ、まつた。

敬具

千葉県立國府台高校 2年3組 | 班 代表 柳下 賀穂

5 さいごに

前述の県外高校生受け入れ（国府台高校の班別学習への対応）の実践に見るようすに、博物館活動と教育普及活動とは今や切り離して考えることは出来ない。

その他にも、11月18日名古屋大学教育学部附属高等学校の「古琉球の歴史」の解説、12月19日の神奈川県立総合高校の民俗に関する講座などうけいれた。何れも班単位のフィールドワークによるものであった。

昭和26年博物館法ができ、昭和48年に望ましい基準として見直しがなされ現在に至っている。行革、地方分権が唱えられて久しくなるが、博物館法に関しては依然として変わらず、この現法規も博物館の激動期にあって社会情勢に合っているか見直しが必要となっている。文部省は新しい博物館の望ましい基準を作るよう48年度版の現法規の見直しを打ち出した。社会教育審議会の中で ①博物館 ②図書館 ③公民館 の検討委員会が発足されている。そのため平成10年から12年にかけて、欧州、アメリカ、アジアへの調査が行われている。マルチメディアの発達する今日、情報を如何に駆使するか。そのためには20代、30代の若い人も委員に加えての検討が必要だとされている。

その検討の中でこれから博物館は教育普及活動が大きな役割を担うことになると思われる。（検討委員長：茨城県自然博物館長 中川志郎 の講演「博物館ボランティアの可能性と課題」より）その教育普及をきめ細かく行うために、ボランティアの応援が必要になってくる。

沖縄県立博物館も新館建設に向け、展示、保存、研究の活動に加えて、さらに教育普及も活動しているのである。

謝 意

本報告をまとめるにあたり、資料提供に協力していただいた千葉県立国府台高等学校校長 山崎哲彦氏、2学年主任 萩倉良先生に感謝申し上げます。また2学年担任の先生方、2学年の生徒の皆様には、事前レポートから細かい修学旅行のしおりを提供していただき、心より感謝申し上げます。

参考文献

沖縄県立博物館50年史	沖縄県立博物館
沖縄県立博物館年報（1971年～1999年）	沖縄県立博物館
第3回全国博物館ボランティア協議会基調講演	国立科学博物館
《開かれた学校》研究報告書	那覇市立城西小学校
校外学習～事前レポート集	千葉県立国府台高等学校
校外学習～沖縄～	千葉県立国府台高等学校

沖縄県の文化財保護史

—昭和初期から琉球政府時代までの活動を中心に—

園 原 謙

(沖縄県立博物館)

A Concise History of the Protection of Cultural Properties by the Okinawa Prefectural Government: Covering the Preservation Activities from Showa Era to the Government of Ryukyu Islands Period

KEN SONOHARA

(Okinawa Prefectural Museum)

1. はじめに

沖縄県は沖縄戦で多くの尊い人命とともに約400年の琉球王国時代の歴史の中で築いてきた多くの貴重な文化財を消失してしまった。その中には、王国のシンボルであった首里城正殿をはじめとする国宝23件が含まれていた（表1 戦前に指定された国宝）。すべてが灰塵と化した県土の中で、王国の偉業を偲び、自らの文化のアイデンティティを求めるかのように、文化財を指定し保存・保護を図る目的で琉球政府文化財保護委員会が発足したのは、戦後9年を経た1954年（昭和29）のことであった。

これに先行すること4年前、1950年（昭和25）5月日本政府は議員立法により文化財保護法を制定し、同年8月から施行していた。この立法化の背景には、戦中、戦後の社会的、経済的混乱から多くの文化財が荒廃の憂き目にあい、文化財保護法制度の根本的な検討が求められていたことがある。とくに1949年1月の法隆寺金堂壁画の焼失は、文化財保護のための立法化の機運を加速させることになった。この法律は、有形文化財に関しては1929年（昭和4）の「国宝保存法」と1933年（昭和8）の「重要美術品ノ保存ニ関スル法律」を基礎にするものであった。また、記念物に関しては1919年（大正8）の「史蹟名勝天然紀念物保存法」を参考にしている。この動産と不動産に関する文化財を保護する総合的体系的な法律として文化財保護法は誕生したのである。琉球政府はこの法律を模して1954年（昭和29）6月29日に自らの文化財保護法を制定し、同日付けで施行させた。

戦後の廃墟の中から、住民や多く人々に支援されて「沖縄の文化」の番人としての文化財保護委員会が発足することになる。破壊された有形無形の文化財を通して沖縄文化の価値の普及啓発に努めたのが、琉球政府文化財保護委員会であったといつても過言ではない。したがって、異民族支配の中の「文化の番人」としての文化財保護委員会の活動は大変興

味深いものがある。

沖縄県教育庁文化課編の『平成11年度版文化行政要覧』によると、沖縄県の指定文化財は国指定が113件、県指定が255件ある。その合計は368件を数える。さらに県内市町村指定の785件を含めると、国・地方公共団体の指定文化財は1,153件にのぼる。復帰直前の琉球政府文化財保護委員会が指定した文化財の件数は182（180）件であった^(注1)。この中に

表1 国宝保存法等に基づいて国宝に指定された沖縄の文化財

	種 別	指 定 名 称	指 定 年 月 日	所 有 者
1	建造物	首里城正殿 「沖縄神社拝殿」	大正14年4月24日	首里市
2	〃	首里城守礼門	昭和8年1月23日	〃
3	〃	首里城歓会門	〃	〃
4	〃	首里城瑞泉門	〃	〃
5	〃	首里城白銀門	〃	〃
6	〃	円覚寺総門	〃	尚家
7	〃	円覚寺左掖門	〃	〃
8	〃	円覚寺右掖門	〃	〃
9	〃	円覚寺放生橋	〃	〃
10	〃	円覚寺三門	〃	〃
11	〃	円覚寺仏殿	〃	〃
12	〃	円覚寺龍淵殿	〃	〃
13	〃	円覚寺鐘樓	〃	〃
14	〃	円覚寺獅子窟	〃	〃
15	〃	崇元寺第一門	〃	〃
16	〃	崇元寺左掖門	〃	〃
17	〃	崇元寺右掖門	〃	〃
18	〃	崇元寺本堂	〃	〃
19	〃	園比屋武御嶽	〃	首里市
20	〃	弁ヶ嶽	昭和13年8月26日	〃
21	〃	沖宮本殿	昭和13年7月4日	真和志市
22	〃	末吉宮本殿	昭和11年9月18日	首里市
23	〃	沖宮本殿	昭和13年7月4日	真和志市
24	工芸品	波之上宮所蔵朝鮮鐘	明治41年5月27日	官幣小社波之上宮

は今帰仁城跡、中城城跡のように史跡、名勝、建造物による三重指定の他に史跡と建造物、史跡と名勝の二重指定が5件含まれている。文化財の種別ごとの内訳は、表2のとおりである（特別重要文化財と重要文化財を「特重文」と「重文」、特別史跡を「特史」に略す）。

表2 琉球政府文化財保護委員会の文化財指定状況

種 別		特 重	重 文	特 史	史 跡	合 計
有形文化財	建 造 物	9	1 8			2 7
	彫 刻	6	4			1 0
	絵 画		1			1
	工 芸	4	1 3			1 7
	古文書・典籍	3	6			9
史 跡				6	3 8	4 4
名 勝						9
天 然 記 念 物						4 3
埋 藏 文 化 財						1 8
重 要 民 俗 資 料						1
重 要 無 形 文 化 財						1
計		2 2	4 2	6	3 8	1 8 0

本稿では、戦前・戦後の文化財保護の歴史を概観することを目的とする。1つめに、昭和初期の文化財保護に係わる諸活動から戦後異民族支配の特殊な政治状況の下で琉球政府文化財保護委員会の活動の足跡を追ってみようと考えている。2つめに、戦後の廃墟の中から当時の沖縄の英知ともいべき文化財保護委員会がどんな文化財を指定したか、その傾向を検証してみたいと考えている。3つめに、廃墟の中のゼロから出発に際し、東恩納博物館や首里市立博物館など博物館と文化財保護の係わり、文化財に対する沖縄の人々の世論、それを集約した行政側の対応も視野に入れて、その社会的な意味についても考えてみようと思っている。それは、廃墟の中から立ち上がり、王国時代の残欠文化財の保護に奔走した沖縄における文化財保護に係わった人々の功績をきちんと把握する必要があるからである。

2. 文化財保護委員会発足以前の文化財保護

文化財の保護を考えるとき、文化財としての価値を調査研究する学会や研究会などの団体、博物館のような展示公開に係る社会教育施設は不可欠な存在として考えられる。そこで、まずははじめに戦前・終戦直後における文化財保護に係わる団体や機関について概観することにする。

(1) 戦前の文化財保護

①沖縄史蹟保存會^(注2)

貴重な史跡を住民に知らせる目的で、真境名安興ら郷土史研究家たちによってつくられた民間団体で、1922年（大正11）に発足した。顯彰碑などの建立や史跡に標柱を立てて一般に紹介する活動を行った。羽地朝秀之墓碑（首里末吉）や尚巴志王遺蹟碑の石碑や、源為朝の上陸地と伝えられる今帰仁村運天の上方にある運天森の「鎮西八郎源為朝上陸之址」の標柱や「北谷長老南陽紹弘禪師の墓」の標柱などがある。

戦後、1949年（昭和24）10月30日に官民合同の自主的団体として史蹟名勝古文化財並びに天然記念物の保存を目的に同名の団体が発足したが、文化財保護法の制定によって解消される。戦後の沖縄史蹟保存会については後述することにする。

②沖縄博物學會

1927年（昭和2）8月に「沖縄博物學會」が結成される。この学会は任意団体で沖縄の自然史研究の先駆け的な組織である。

同年7月の新聞記事「篤学の士を網羅し博物学会生まれる沖縄の動植物研究」^(注3)を引用して学会員募集概要をみてみる。この当時の「博物學」という用語は、natural historyを意味し、動物学、植物学、鉱物学、地質学などの総称として規定される。もともとは天然物の記載を主目的とする意味の語である。新聞記事にはつぎのとおり会員募集案内等が掲載された。

「県下中学校の博物学担任の教師は今月初めに第二中学校に集合し博物研究の機関を設置すべく協議を凝らしたが今回いよいよ機運熟し沖縄博物學會を設立することになり会員を広く募集し来る八月中旬創立総会を開くこととなった。」と記される。

この会は沖縄における植物、動物、地質鉱物の研究を目的として61人の会員によって設立された。会長は古堅宗昌があたり、毎年2回の例会を開き、採集会・講演会・座談会などを開いたとされる。1935年（昭和10）10月には『沖縄博物學會々報』第1巻第1号を創刊したが、以後活動がほとんどなく自然消滅したとされる。沖縄の豊かな自然を研究対象にした沖縄博物學會は、現在の文化財保護法でいう天然記念物的なものが研究の対象とされ、その意味においては天然記念物に係わる文化財保護の基礎的な資料を提供した学会であったといえる。

③沖縄郷土研究會

同じく1927年（昭和2）年には文化系の研究会も誕生した。沖縄縣教育會^(注4)の提唱で設立された団体で、沖縄郷土研究會がそれである。初代会長には当時県立図書館長であつ

た真境名安興が就任した。この会には島袋源一郎や奥野彦六郎、宮城真治らが参加している。設立理念には郷土を深く理解し、愛郷心を育て、もって愛国心を培うことが謳われた。教育会本部や各群島教育会の中にも、それぞれの地域に即した郷土研究会を設立し、地域の郷土的教材を各教科内容に織り込む学習指導要領を作成している。

また、「郷土教育と郷土研究は不即不離なもの」との認識から1931（昭和6）年には郷土研究座談会を結成し、真境名安興、島袋全発（二高女校長）、比嘉重徳（当会幹事）を主幹として、座談会のたびにテーマを設定し、発表者を中心に活発な座談や討論が行われた。この郷土研究座談会は7回も開催されたという。

このようにこの時期は全国的に郷土教育や郷土研究が奨励され、盛んな時期であったことと軌をひとつにする。沖縄博物學會や沖縄郷土研究會では、学校教師や研究者たちが中心になり、沖縄の歴史文化に関するテーマで活発な調査研究が行われたのである。

④沖縄縣教育會教育参考館

そのような流れの中で1929年（昭和2）12月29日には「教育参考館設立に関する協議会」が開催された。この「教育参考館」は、沖縄縣教育會が構想する施設名で、沖縄の自然及び文化の紹介、研究のためのものとされた。この施設の目的について同会主事島袋源一郎がつぎのように指摘している。

「置県以来50年有余郷土文化の価値を認識せざりし為これら貴重なる資料も或は県外に流出し或は散逸湮滅しつつあるの現況にありき、本会即ち茲に鑑みる所あり」^(注5)と。教育参考館の建設計画は大正14年（1925）頃に立案され、資金造成には毎年の小学校児童ノートの印税数百円を蓄積し基金造成がはかられた。

1929年（昭和2）2月には、建設委員が嘱託されている^(注6)。また、5つの部会が組織された。第1部は書画、書籍、写真、版木、彫刻、第2部は漆工、陶磁器工、染織工、木竹工、金石工、牙角工、紙皮工、建築、第3部を政治、経済、宗教、産業、交通、風俗の部、第4部動物、植物、鉱物、そして第5部はその他教育参考品の部としてである。展示計画や収集する資料などがそれぞれ調査されてきたと考えられる。その流れの一環として同年暮れの教育参考館の設立に関する協議会が開催されることになったわけである。

昭和7年度に造成基金が5千数百円になったことから、この年から資料（参考品）の収集が開始され、書画をはじめ藩制時代の製作に係わる漆鬆器琉球紅型衣類調度家具陶器石器博物資料など1千数百点を収集し昭和會館内^(注7)に仮陳列して一般観覧に供された。

この教育参考館は郷土博物館へ移行する母胎となる。昭和11年7月30日の沖縄縣教育會代議員会において「沖縄縣教育會教育参考館は之を沖縄縣教育會附設郷土博物館と改称し、博物館の経費は参考館の予算を以て充つ」と昭和11年沖縄縣教育會附設郷土博物館歳入歳

出追加予算書の備考欄に記される^(注8)。

教育参考館が入居している昭和會館（那覇市旭町）から郷土博物館のある首里城内への大移転作業が開始されることになった。仲吉朝宏による「開館するまで」と題する隨筆にそのあたりの作業内容等が詳細に記されている。

「いよいよ六月十八日に昭和會館から北殿に移転することに決定し、十九、二十日の二日で荷造りをすまし、二十二日より二十四日まで県のトラックで運搬を始めたのである。 トラックを運搬すること十二回、木挽御門よりは第一小学校の職員生徒と、第二小学校の上級生の奉仕により運搬され、六月二十五日より陳列にかかり七月四日の開会式当日午前まで館員は大立ち回りで休む暇もなかった。漸く陳列が終わりかけた頃、特に尚順男爵の御来館を願ふて御批判を仰いだ。係員に対しては軸物の取扱いや、陶磁器の持ち方などいろいろと御注意があった。開館に際して、尚侯爵家を初めとして、尚順男爵家、浦添家、平尾家、儀間家、図書館、男師校、首里市等から貴重な御品を御貸出しになり、錦上更に花を添えて下さったことは博物館の光榮であり、且つ感謝する所である。（中略）其迄昭和會館で一つ屋根の下で、教育會、博物館、郷土協會、奨學會など寄合所帯で賑やかだったが、（中略）世帯を別にするといろいろと道具が要るが、館内での火の使用は許されていないのでお湯の如きはいつも第一小学校のお世話になっているのである。」

昭和7年11月の昭和會館の設置に伴い、同施設には縣教育會をはじめ郷土参考館、縣郷土協會や奨學會などが入居していた。同居していた沖縄郷土協會は郷土博物館の設置に重要な役割を演じることになる。

⑤沖縄郷土協會

この協会は、沖縄郷土研究會同様に真境名安興、島袋源一郎を主幹として昭和2年に設立される。その設立の契機になったのが、昭和2年にレニングラード大学教授兼博物館長のシュミット博士が来島して開催された講演会であったといわれる。通訳は山城篤男が行った。その中で同博士は「沖縄という貴重な文化を持つ島々に統一的研究団体や博物館がないのは遺憾であり、是非その設立が急務である」と提唱した。そのことが郷土研究者の心中に強い印象として残ることになる。そのような機運に促されて同協会は設立されることになった。

1934年（昭和9）4月からは郷土協會の中で「蔡温を研究する会」同人が組織され、蔡温の著書である『御教条』、『自叙伝』、『家内物語』、『獨物語』、『農務帳』などをテキスト版として発行し、同人に配布している。「蔡温に帰れ」を合言葉に産業、経済、教育・文化の振興策の勉強会も開催された。郷土教育および郷土研究がもっとも高揚した時期だけに同会の事業は多彩であったといわれる。

昭和會館内の教育参考館から移転し、首里城内北殿の大改装を経て独立した博物館施設づくりが行われた背景には、縣教育會主事であり、またこのプロジェクトのプロデューサー的存在であった島袋源一郎の意向が大いに反映されていたと考えられる。

同協會幹事真榮田義厚の「北殿修理工事報告」ではつぎのように報告される。箇条書きで摘記する。

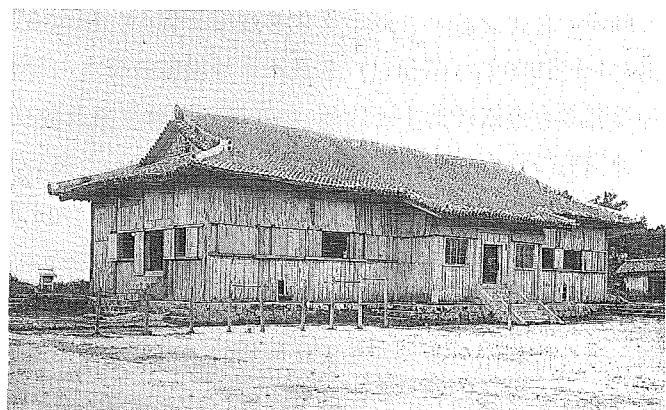
- 昭和9年3月31日 第1回郷土博物館建設実行委員会開催（昭和會館にて）
5月4日 寄付金募集願いを縣へ提出
7月7日 縣から寄付金募集認可証おりる
7月12日 首里城北殿建物使用契約を首里市と締結
10年8月31日 縣内主たる工事請負師拾貳名を指名し、外部の工事入札
金5,260圓で山口森清氏に落札
9月12日 外部の工事着工
11年1月4日 外部の工事竣工
1月13日 外部工事の第1回竣工検査済む
1月15日 外部工事の第2回竣工検査済む
内部陳列棚新設工事を金1,800圓で山口森清氏と契約
3月31日 内部陳列棚新設工事竣工

首里城北殿は1934年（昭和9）

7月博物館設置の目的で首里市から同協會に無償貸与されたのである。それを受け、翌年から修理され、同11年に完成了。その修理費用7,060圓を寄付金で賄った同協會の功績は特筆されるものである。参考までにこの時の寄付金の総額は9,444.71圓である。その内寄付金が9,406.83圓、銀行預金利子が37.88圓となっている。支出総額は9,362.33圓で差引き残高82.38圓と報告されている。

生まれ変わった北殿は沖縄縣教育會に委譲され、博物館として使用されることになる。仕掛け人の島袋の考えと古都首里に博物館を誘致したいと考えていた首里市の思惑が一致していたことを指摘しなくてはならない。

実は、それよりも30年余りも以前、首里市は博物館構想を持っていたのであった。1903



首里城北殿（大正14年頃）

年（明治36）に首里城内の博物館設置構想がそれである。当時首里区は、首里城の払い下げを請願していた。そして6年後の1909年（明治42）4月に首里城跡（18,831坪）が払い下げられることになったのである。当初の請願書に添付された意見書には首里城全体を公園化し、建物は博物館に充てるべく計画され、一大遊覧拠点としての構想が示されていた。しかし、当時の首里区の財政能力では修理費の捻出はおろか、保存することすら不可能な状況にあったのである。その後は伊藤忠太博士などの尽力により、大正14年に国宝に指定されるまで首里城は荒廃と消滅の危機にさらされることになったことは周知のとおりである。

30年来の悲願を達成した首里市の思いは格別であったであろう。郷土博物館開館の首里市長の祝辞からこのことが判読される。すなわち、「カカル貴重ナル文化施設ガ首里ニ選定セラレ、教育都市遊覧都市トシテ面目ヲ躍如タラシメルコトデアリマシテ、首里市發展ノ上ニ寔ニ慶祝ニ堪エザル次第デ、市民ガ齋シク感謝ト欣快トヲ深ウスル所以デアリマス。」

首里市は博物館に対して運営費の4分の1程度に相当する5百圓の補助金を支出している。首里城内北殿の無償貸与や補助金の支出など物心両面の補助に首里市の思い入れの深さがよみとれよう。

⑥沖縄縣教育會附設郷土博物館

既述の経緯を経て、郷土文化の理解を促し、学習することのできる本格的な展示公開の場として1936年（昭和11）7月4日沖縄縣教育會の付属機関で沖縄初の博物館というべき沖縄縣教育會附設郷土博物館（130坪）が首里城北殿に開館することになった。

沖縄縣教育會には『沖縄縣國頭郡志』を著した島袋源一郎（1885～1942）がいた。島袋は北部の小学校の校長を歴任したのち、1920年（大正9）沖縄縣の初代社会教育主事に、24年には沖縄縣視学となった。1927年（昭和2）には再び教育現場にもどり名護小学校長に就く、31年（昭和6）9月退職した後、翌32年（昭和7）10月沖縄縣教育會の主事となり、郷土博物館の開館とともに博物館主事も兼務することになる。

島袋は生涯を通して教育畑を歩み、郷土教育の重要性を認識し、自らもその研究に努めた。この博物館の創設には、郷土史に造詣が深く、郷土文化に対する高い識見と郷土の文化財を後世に伝えたいという島袋の情熱と意欲に負うところが大きいといわれる。島袋は「沖縄百科全書」とも称されるほど博学の人であった。58歳で逝った島袋の追悼の辞を東恩納寛惇はつぎのように寄せている^(注9)。島袋の人となりが十分に語られており興味深い。

「岐路に迷わず大筋を押へていくだけの円満な常識と明敏な判断とを有っていた為であろう。彼の学問もいづれかといえば常識的である。一つの事を詮索に生涯を没頭するを辞しない学究ではない。恰もヒトラーの近代戦法と同様、小面倒な所は自然に解体するまで

釘付けにして置いてドシドシ対局を推進して行くという遺口であった。凡そ社会大衆の教育啓蒙と云うものは、準備の出来るまで中止して置ける筋合いのものではない。現在判っているだけの事でグングン指導して行く事がコツであろうも知れぬ。」

また、「博物館のことだけはどうしても触れないといけない」とし、つぎのように詳述している。

「郷土博物館として、恐らく日本一であろうと思われるこの事業が殆ど源一郎君独力の経営であったとは驚く外はない。この博物館の特色は、歴史、地理、民俗、産業殆ど文化の全部門に亘ってムラがなく網羅されている点である。彼は郷土を知れる事自分の家庭と同様で、何処に何が在り、誰が何を有っていると云う事を袋の物を探る如く知って居た。そればかりでなくそれ等の物を鑑定し、またそれを手に入れるについて驚く可き才能を有していた。本来それ等の品物には全然公定の相場と云うものはないのであるが、彼は即座にそれを買い取った。その鑑識の的確な事は感嘆に値するものであったが、なほそれよりも一層驚く可き事は、その費用の捻出で、彼の一言で悦んで大金を投出す人がこのせち辛い世の中に実際いたか不思議である。彼はドコに何が在ると知っていたばかりでなく、ドコを押せば何がでると云う事をも心得ていたのである。」また、島袋の性格については、「源一郎君くらい人見知りをしない人を私はあまり見たことがない。ドコにでも行き、ダレにでも会い、ナンとでも云う而してドコでも、ナンでもその言い分が大方通る。徳な性分であったろうが、その実は私心なかったからである。」

行動と信念を兼ね備えた人・島袋源一郎の面目躍如といえる。実は彼は敬虔なクリスチャンであった。キリスト教信者としての行動規範が彼の行動のバックボーンであったと指摘することも可能かもしれない。

島袋が心血注いだ郷土博物館は開館から7年後、そして島袋の死後1年を経て、維持が困難となり閉館寸前となった。太平洋戦争突入後は参観者も少なくなったことが原因である。参考までに昭和16年度の観覧者数は、23,385人で収入が1,881.21圓となっている。1944年（昭和19）の十・十空襲後は、資料の本土疎開を陳情したが許されず、止むなく城内の洞窟を探して避難させたという。時代は軍靴の足音が日常的に響き渡る臨戦体制にあり、琉球文化を論じるような悠長な時期ではな



沖縄戦により廃墟と化した首里城の一角

かったのである。

同館の資料目録によると、資料件数は総数で1,430件である（表3 沖縄縣教育會附設郷土博物館収蔵資料件数^(注10)）。これら文化財の大半が沖縄戦で消失することになった。

その後の管理者であった仲吉朝宏が、戦後避難された文化財をかき集めようとしたが、一物も無かったという。

また、尚家私邸であった旧中城御殿で所蔵していた文化財についても、同様に敷地内の避難壕に隠していたものの行方が戦後不明になった。そのうちのいくらかは、1953年（昭和28）に米軍によって返還されることになる。

表3 沖縄縣教育會附設郷土博物館収蔵資料件数（昭和11年7月開館・首里城北殿）

(一) 圖書及版本之部	87件
(二) 圖表之部	19件
(三) 書畫、寫眞及彫刻文房具之部	192件 書畫92件、寫眞50件、彫刻34件、文房具16件
(四) 金石文拓本之部	191件 石碑拓本143件、銘鐘拓本13件、扁額拓本11件、古琉球彫刻拓本24件
(五) 染織之部	243件 古琉球服装類46件、絣及縞物類37件、花織紹織ヤシラミ類15件 染型手本及紙類2件、風呂敷及覆紗3件、琉球紅型類140件
(六) 漆器之部	63件
(七) 風俗資料之部	246件 家具68件、金属製品32件、木竹器及藁細工51件、玩具16件、身装具29件、度量衡器7件、石製器具4件、貨幣6件、舞楽器11件、武具19件、葬具3件
(八) 陶磁器之部	378件
(九) 石器之部	6件
(十) 標本之部	5件
	合計 1,430件

(2) 戦後の文化財保護の契機をつくった博物館活動

①米軍による米軍人に対する沖縄文化の紹介—沖縄陳列館・東恩納博物館

日米の壮絶な戦闘と国内で唯一の住民を巻き込んだ地上戦の犠牲者の総数は20万人余の生命を奪う結果になった。中でも琉球王国時代の古都首里は壊滅的な打撃を受けることになった。琉球王国400年の歳月を経て築きあげられた歴史的文化的遺産は近代兵器の前に、見るも無惨に灰燼と化したのである。

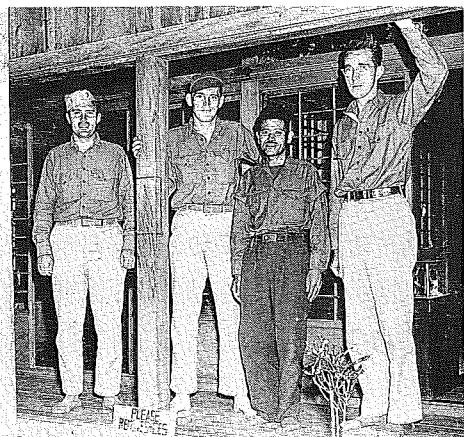
そのような悲劇の中で、米軍の沖縄戦終結宣言前の45年8月には戦後の沖縄文化再興の胎動が見られた。米国海軍軍政府の指示よって、石川市では沖縄陳列館が設立されたのである。その設立に主要な役割を演じたのが米国海軍軍政府に所属する少佐ワトキンスIV政治部長（James T. Watkins IV・1907～1982）と少佐ハンナ教育部長（Willard A. Hanna・1911～1993）であった。沖縄陳列館の設立に係わった二人の少佐は、その設立意義についてつぎのように語っている。

「米軍人に沖縄を認識させるには、博物館を作つて昔の沖縄の文化の高さを知らしめる以外にない」とし、当時の米軍人の沖縄の文化に対する認識の甘さを嘆いている。さらに、当時の米軍人に頒布した印刷物の中でハンナ少佐は「米国軍政府沖縄陳列館」と題して次のような一文を寄せている。

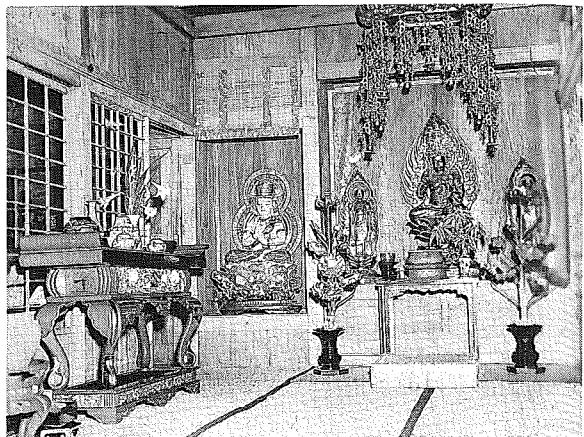
「この陳列館は、沖縄人の建築様式、家具造作、造園技術及び被服織物、陶器その他日常生活並びに芸術文化の何れにも関するすべての事象を展示する目的を以つて、海軍政府によって設立され維持されるものである。」と陳列館の展示物の概要を述べ宣伝に努めた。

米国海軍は軍政府のスタッフに博士クラスの学者軍人を抜擢するとともに、第一線の戦闘部隊に配属される軍政要員も訓練学校で8週間の特訓を受けさせ、日本語や沖縄の歴史・風俗・住民意識等についても必要な予備知識を身につけさせていた。占領地区における軍政官の任務は、一般的には戦時国際法の定める軍の権利と義務に基づき救助活動、収容所の設置運営、食料や医薬品の供給などを通じて非戦闘員の保護管理にあたり、もって実戦部隊の作戦行動を補佐することにあったとされる。が、沖縄作戦における軍政員たちはこのほかに特別な任務をもっていたといわれる。彼らの任務は避難民の救済活動や宣伝活動のほかに、在来の農業・漁業・工業・商業の復旧から地方行政機関の設立まで含まれていた。このことは、米軍が沖縄作戦の計画立案の時点から沖縄の長期占領を計画していることを示すものと指摘される。ハンナ少佐の博物館設立の背景には、ハンナ少佐の沖縄文化に深い理解と敬愛があることは指摘されているとおりであるが、穿った見方をすると、それと同時に米軍の長期駐留のしたたかな戦略を垣間見ることができる。その理由のひとつを後年ハンナ少佐が語った証言に求めることができる。ハンナ氏は沖縄を離任するあたり、「History of Okinawa」（沖縄の歴史）のエッセイを書いた理由として、次のように述べられている。「なぜこれを書いたかというと、陸軍のフランキーズ（flunkys：落第野郎）どもが少しでも沖縄を理解してくれる手だてになつたらと思ってね。沖縄に駐屯させられた陸軍の軍人たちは、島流しになったような者たちばかりで、彼ら自身も沖縄をロック（rock：刑務所）と呼んでいたからね。」沖縄の行く末を案じたハンナ少佐の沖縄に対する思いの深さを感じことばである。また、同氏が戦後沖縄における米軍の長期占領について大いなる不安を抱いていたことも伺える。

ハンナ少佐の片腕として沖縄人の大嶺薰もその収集に携わった一人である。彼らを中心に石川市に沖縄陳列館が設立された。教育部長のハンナ少佐の任務は、戦災を免れた琉球の文化財を最大限保全することにあった。旧首里城正殿鐘をはじめ、旧円覚寺前鐘、仏像、祭壇類、花瓶、嘉瓶、厨子甕など収蔵資料は367点、うち陶器類179点、漆器類61点などが収集されたのである。



ハンナ少佐と東恩納博物館



東恩納博物館内で展示された収集文化財

1946年（昭和21）4月22日の沖縄民政府（海軍軍政本部指令第156号「沖縄民政府創設に関する件」に基づく）の設立に伴い、この陳列館は海軍軍政府から移管した。名称も石川市東恩納の地名に因んだ東恩納博物館に改称されることになった。

この施設設立の趣旨は、米軍の長期支配の礎にするための沖縄住民とのトラブルを回避するために、沖縄の人々の考え方を米軍人に教育する機関としての役割を担わせた一面があったと考えられる。沖縄の人々は決して野蛮ではなく、沖縄には王国時代からの重厚な歴史があり、独特の文化があることをアピールしたかったのであった。米軍支配の長期戦略の中では、沖縄の人々の心を理解し、その文化を尊重することが米軍人たちに求められた。この博物館は、米軍人に対して沖縄文化を紹介する役割を担った戦後最初の博物館的施設であった。

②沖縄人による文化復興の拠点

—汀良の首里市立郷土博物館・沖縄民政府立首里博物館

1945年10月現在の沖縄諮詢会の調査では、石川、辺土名、田井等、漢那、宜野座、古知屋、久志、瀬嵩、前原、古謝、知念、平安座の12市に約32万5千人の人口が集中し、那覇と南部の殆どの地域から住民は避難生活を強いられ、移動の自由を奪われ、収容所の狭苦しいアバラン生活をおくっていた。テント小屋、家畜小屋合わせてタタミ1枚に2人が

住んでいた計算になつたという。沖縄側の移動の懇願に対して、米海軍政府は飛行場などを施設するので当分はむづかしいので、早く移動できないから、無断で越境したりすると、軍部の感情を逆撫ですることになって、かえって実現が遠のくだろうという趣旨の発言をしている。

そのような中で北部の収容所ではやっと住民の旧居留地への移動が実現した。45年10月29日の中城村安谷屋区民を皮切りに開始され、翌46年4月までに一段落した。県都那覇の住民については、何にもなくなつたゼロ生活からの出発に際し、真っ先に食べ物を入れる容器と敷物などが必要であった。そこで諮詢会では壺屋と兼城の関係者をまず最初に移動させ、これらのものを生産させる計画で軍政府関係者に移動要請を行つた。そこで壺屋の一角が指定され、男だけ30人で1組を結成し、城間康昌を隊長に移動させた。仲宗根源和のメモには、「45年12月5日、那覇壺屋に特殊業者（陶工職人）125人が移動」と記されている。安谷屋正量（諮詢会工業部長）の話によると、同年12月15日には、大城鎌吉を隊長とする製瓦業設営隊130人余が乗り込み、12月20日ごろに窯の火入れ式を行つたとされる。戦後の食器生産と住居の瓦の生産が行われたのだ。

一方南部の収容所でも、戦時中に首里市長であった仲吉良光らの粘り強い陳情に対し、糸満米軍司令部隊長ブランナン大尉の心も大いに揺れたといわれる。首里移動は12月14日から開始された。仲吉らの先遣隊が首里に乗り込み、建築、遺骨収集、農作物の種子収集など各作業班を組織して計画的に復興が着手されることになった。現在の鳥堀付近からバラックが建ちはじめた。遺骨は首里の万松院に安置された。仲良の新生首里構想は、「首里城を元の姿に復元し、弁ヶ嶽、虎頭山一円と結んで公園化する。住宅地は戦前同様とする。神社仏閣など文化財を復旧する」というものであった。

文化財保護の面から首里市について特筆されることは、文化部を設けたことである。文化部には豊平良顕ら首里の有志が集まって、文化復興に乗り出し、首里城跡など遺跡のなかで破壊を免れた文化財など残欠文化財の収集活動が行われたのである。46年3月頃から収集された主な文化財は、旧首里城正殿（龍柱か？）や旧円覚寺の礎盤、放生池橋の花鳥彫刻羽目、世持橋勾欄羽目の残欠、玉陵の石彫獅子、旧円覚寺の羅漢像、白象、欄間羽目などとされる。これらの資料を整理し、解説をつけて5月頃から首里汀良に首里市立郷土博物館がオープンし、収集資料の公開が開始された。同館の設立に尽力した豊平良顕博物館長が廃墟の中の文化財を収集した模様や終戦直後の首里城下の模様を『沖縄の証言（上）』から少し長いが引用してみたい。私たちは誇り高き首里人の復興への情熱と労苦を心に留めなければならないであろう。

「終戦の翌年の暮れ、見る影もなくくずれかけた旧首里城下の綾門大通りを、カタコト心細い音をたてながら、古びた1台の荷車が、グルグル大繩を巻きつけた巨大な石塊を積

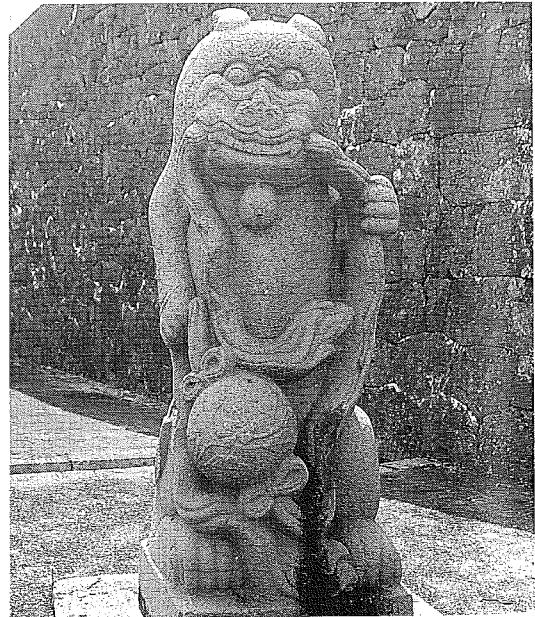
んで登っていく。あたりは、まだ身の丈もある大きな石ころゴロゴロ転がり、伸びるにまかせた雑草は路面をおおいかくしてしまうかと思われた。荷車をかこむ一群の人たちは、身の危険よりも積んだ荷物のことを案じて、極めて注意深く、小刻みに足を運んでいた。事情を知らぬ人々は、ただ、荷物の一群を一べつして通り過ぎた。

1946年12月3日、靈御殿の怪物（石獅子）2体、奉仕作業隊14人の協力で運搬—と博物館備え付けの収集録に記録されている。当日は気持ちよく晴れあがった絶好の天気になつた。朝から職員たちに準備をいいつけていた当時の首里博物館長豊平良顕氏は、みずから先に立って歩き出した。教会堂の裏を流れる小川を渡って当蔵大通りにでると、ポツリポツリ民家が建ちはじめていた。セメントの舗装路は、くずれおちた石や土でところどころおおわれ、幾折りにも曲がりくねっていた。ハンタン山の一帯には、弾痕が痛々しく目にうつった。豊かだった緑陰は陰も形もなくどこかへ吹っとび、弁財天堂の建っていた池の真ん中に、砲弾にえぐられたあとが大きな水たまりになって、子ども2、3人釣り糸をたれていた。樹齢5百何十年の名木「あかぎ」が虚空に裸にされて立っているほかは、一本の立ち木も見えず、力強く芽を吹き出そうとした「あかぎ」の根株までが、心なき人々によって執念深く掘り返されていた。たきぎにするためである。

園比屋御嶽のくずれかけた石造門の前を通りすぎると、一行4人は目的地である靈御殿境内へ踏み入った。かつて濃いみどりの奥深く死の静寂の中に横たわっていた庶民禁制の幽境は、なんと変わりはてた姿になつていただろう。外郭の築堀は欠けくずれ、三つならんだ墓陵の右側は屋根の上から痛々しく大きな穴が打ち抜かれ、墓庭にちらばる鉄片、瓦



玉陵石彫獅子（左）



玉陵石彫獅子（右）

磔一いいようのない惨状をきわめていた。しかし先人の残した並々ならぬ仕事の跡は、くずれ残った石扉や敷石のつぎ目、石段の稜線、石垣の滑らかな面など、細かい部分にもありありとしのばれた。この光景の中に、琉球古代石造美術品“御靈物の怪物”もあった。その一個は、うつぶせにころがり、1個は上からすべり落ちたまま半ば土に埋まっていた。

(中略)しかし重量何千斤もあるうというこの石の運搬は、とうてい4人の手に負える業ではなかった。(中略)ちょうど近くを芋掘り作業隊の一群が通りかかった。年長の作業員に聞くと、末吉町の作業隊だという。さっそく。その石造物が如何に貴重なものであり、それを博物館に収集することが、どんなに皆のために有益な仕事であるかを、豊平氏はことばやさしく話して助力を乞うた。(中略)まず転んだ1つが抱き起こされた。彫刻の面に少しの傷をつけてはならないという心づかいから、布団でくるみ、太いロープを縦横にまきつけ、棒を差しこんでいよいよかつぎ出す前、背丈の高さ低さが慎重に吟味された。」

結局、この玉陵石彫獅子はマチ棒を使用して無事汀良の博物館まで運搬されることになった。当時失意の中で生きていくという最低限の生活状況の中で、廃墟の中からの文化財収集を行った意義は文化財を保護しようという気持ち以前の首里人の文化に対する潜在意識いや先人に対する畏敬の裏返しかもしれないが、誇り高き首里人の誉れとして特記されねばならないことである。この首里人の誇り高い博物館も東恩納博物館同様に47年(昭和22)12月に沖縄民政府に移管され、沖縄民政府立首里博物館と名称を改めることになる。

1951年6月現在の琉球群島政府文教局社会教育課の調べによると、首里及び東恩納博物館の重要美術品の総数は851点となっている。種別は表4のとおりである。資料の多い順から琉球陶器の257点、石造彫刻185点、木彫95点、漆器89点などとなっている。ここでいう「重要美術品」とは説明用語として解される。大半の収蔵資料が戦災を免れたという意味で重要美術品として取り扱われていたのであろう。

なぜなら、民政府立首里博物館の1951年の記録によれば、合併前の首里博物館の収蔵資料点数は639点(石造彫刻155、木彫95、琉球陶器117、その他陶磁器47、漆器34、軸物6、拓本35、衣類15、織物帳1、写真帳1、博物標本2、銅・金属器25、額・聯20点、雑79)となっている。東恩納博物館の367点を単純に加えると、51年当時で両館で合計1千点余の収蔵資料があったことになる。拓本、写真などの二次的資料や、雑類資料は「重要美術品」としてカウントされていないことがわかる。

表4 首里及び東恩納博物館所蔵の重要美術品点数 (1951.6.末現在 社会教育課調)

名 称	所 在 地	数
総 数	首里及東恩納博物館	851
石 造 彫 刻	〃	185
日本及中国其の他の陶器	〃	44
琉 球 陶 器	〃	257
木 彫 器	〃	95
漆 器	〃	89
銅 其 の 他 金 属 額	〃	58
並 聯	〃	17
衣 類	〃	32
軸 物	〃	3
曲 玉 及 其 の 他	〃	56
書 画	〃	15

③二つの博物館の統合

—首里当蔵の新生沖縄民政府立首里博物館・ペルリ記念館から琉球政府立博物館へ

沖縄民政府は首里博物館を汀良町から龍潭近くの当蔵町への移転を計画し、軍の資金援助により1953年（昭和28）5月26日に完成させた。一方、米民政府ではこの年にペルリ来琉百年祭を計画し、その事業の一環として沖縄民政府立首里博物館（110坪）に隣接するペルリ記念館（30坪）を建築し贈呈することになっていた。また、石川市東恩納にある東恩納博物館もこの首里博物館の新館に合併され、資料の充実が図られることになった。

さらに、この記念日にはもう1つのビッグなプレゼントが用意されていた。1950年に沖縄に勤務していたウイリアム・デービス軍曹が米国政府の高官らと協力して、流失（盜難された）文化財の琉球への返還に尽力し、公式の米国政府代表として「おもろさうし」や聞得大君黄金簪などの文化財を携えてやってきたのであった。

1953年5月26日の琉球新報の記事によれば、返還された文化財の内容は、「おもろ草紙22巻、琉球貴族の使用したカンザシ1本、彩色ガラス製、硬石製、貝ガラ製勾玉各一連、王族の位牌60、琉球の古代史についての記録60冊」とある。これらの文化財は旧中城御殿から戦後行方不明になっていた貴重な文化財であった。



龍潭側から民政府立首里博物館を望む（後方には琉球大学の校舎がみれる）

1953年のペルリ来琉100周年の記念式典の一連の行事の中でクライマックスの一大イベントがペルリ記念館の献呈であり、そしてアイゼンハワー米国大統領の特命でこの文化財返還の最大の功労者とされたウィリアム・デービス軍曹に託された琉球の貴重な文化遺産の返還セレモニーであった。一度は消失した文化財が再び世に出現したのである。一度は消失した王国遺産の返還によって、人々の琉球文化に対する思いは大いに盛り上がったであろうと推察される。

表5 沖縄民政府立首里博物館の観覧者及び収蔵品状況

首里博物館

1954年12月現在

收 藏 品 内 訳												觀 覧 状 況						收 藏 品 数	職 員	現 況							
雜 器	土 器	石 器	繪 畫	書 籍	額 與	金 屬	其 他	陶 器	博 物	寫 真	托 盤	軸 物	織 物	衣 類	漆 器	陶 器	木 彫	石 造	琉 球 人								
																			日 本 人	外 國 人	琉 球 人	成 人	現 況				
																			計	生徒兒童	女 生	男 生	女 成 人	男 成 人			
一	一	一	五	四	二	九	二	一	三	五	三	三	八	五	四	一	四	一	九	六	三	三四、九四九	七、一七六	七、九九〇	六、五一二	八、六二六	
五	一	二	五	四	二	九	二	一	三	五	三	三	八	五	四	一	四	一	九	六	二	三四八七	七	七	七	七	
四	八	一	二	五	四	二	九	二	一	三	五	三	三	八	五	四	一	四	一	九	六	二	三四八七	七	七	七	七

1953年5月28日付け沖縄タイムス紙は、尚家の近親者代理人として尚家文化財を受け取った立法院議長護得久朝章氏の談話をつぎのように紹介している。

「デイヴスさんの二年ちかくの苦心がアイゼンハワー大統領の好意にまで発展し今ここで先祖の貴重な品々を受け取ることが出来たのは何とお礼の申しようもない。戦時中これらの財宝は尚家の防空壕に保管されていたもので、戦後私がいった時にはなくなっていた。おもろでも只一冊表紙が僅かの傷を認めるだけで殆ど原形そのままであるが、ただ一つ私の心残りは壕に入れてあった王冠の行方でこれもデイフエンダーファー氏に捜査をご依頼してある。デイヴスさんをはじめ米国の人々のこうした厚意が今後永く沖縄の人々の間に記念されることを祈って止まない。」と記される。

表6 博物館収蔵品数の推移表（51年と54年）

資料の内訳	51年	54年	増減
総 数	851	1,400	549
石 造 彫 刻	185	148	△ 37
日本及中国其の他の陶器	44	138	94
琉 球 陶 器	257	426	169
木 彫 器	95	76	△ 19
漆 器	89	115	26
銅 其 の 他 金 属	58	92	34
額 並 聯	17	23	6
衣 類	32	145	113
軸 物	3	8	5
曲 玉 及 其 の 他	56	—	
書 画	15	—	
織 物 帳		5	5
拓 本		23	23
写 真 帳		3	3
博 物 標 本		5	5
書 籍		4	4
絵 画		5	5
石 器		12	12
土 器		18	18
雜		154	154

このような華々しい門出の沖縄民政府立首里博物館は、1952年の琉球政府が創立されて3年を経た55年（昭和30）9月に沖縄民政府立から琉球政府立博物館に改称されることになる。

1954年（昭和29）12月現在の沖縄民政府立首里博物館の収蔵資料と観覧者状況は表5のとおりである。51年当時の収蔵資料と比較すると549点も増え、1,400点^(注11)になっている。

51年と54年の博物館収蔵資料の種別毎の点数を比較してみると表6のとおりになる。石造彫刻、木彫が減っている以外は増加していることがわかる。石造彫刻、木彫はどうして減少したかは不明である。一方、資料の増加については原田館長をはじめ館員の積極的な収集活動の成果があらわれはじめた。

3. 琉球政府文化財保護委員会の発足

（1）文化財保護法制定の契機

文化財保護法制定の背景を考えるとき、1953年5月26日のペルリ来琉百年祭事業の一環として設置された龍潭湖畔の新生沖縄民政府立首里博物館と返還された琉球の古文化財の存在はもっとも大きな契機を提供したといえるかもしれない。有識者を中心とする文化財保護に関する団体が文化財保護法制定の機運を社会運動として高めていった点も見逃すことができない。これら団体は残された琉球の文化財の収集や修復、復元について尽力している。保護法制定に係わる2団体を紹介する。

①沖縄史蹟保存会

沖縄史蹟保存会は本部を琉球成人教育課内におき支部を各市町村役所におくと会則に記されている。史蹟名勝、古文化財並びに天然記念物の保存を目的とする団体で、1949年（昭和24）10月31日に設立された。会則の組織規程には、「本会の趣旨に賛同する者が組織する」とされ、経費は民間篤志家の寄付金や軍民政府の助成金などによるものとされる。会費は年間費50円。初代会長には、志喜屋孝信沖縄知事、副会長に山城篤男文教部長、屋部憲、常任委員に島袋全發、豊平良顯、原田貞吉、大嶺薰など10名から構成されている。

具体的な活動は、史蹟、名勝、天然記念物の復旧、修理、保存活動を基に、史蹟、名勝地に標識板の建立し、さらに崇元寺石門修築などの大きな事業の実績をつくり、修復事業の竣工時に琉球文化財保護会へと発展的解消がされた。

②琉球文化財保護会

1952年（昭和27）10月10日に戦前国宝に指定された崇元寺石門の修復工事が竣工し、落成式典が挙行された。落成式の終了後その敷地内にあった琉米文化会館で「琉球文化財保

護会」が結成された。それまでの琉球文化研究会とか沖縄史蹟保存会などの団体が、発展的に解消されて結成された団体である。会長に島袋全發、副会長に原田貞吉、豊平良顕、常任委員に志喜屋孝信や護得久朝章、山里永吉ら21人が選出された。同会の設立の目的のひとつは、「文化財保護法を早期に立法化するよう琉球政府に陳情すること」であった。

この団体の設立の背景には、戦後の混乱が収まらず、米軍による沖縄の重要な文化財の持ち出しや住民による文化財の破壊が露骨に行われ、そのまま放任されると、戦災で残った貴重な沖縄の文化遺産が喪失する危機感があったとされる。

琉球文化財保護会らの文化財保護法の早期立法化の陳情や首里博物館の改築など文化的話題が多くなりつつあった社会状況の中で53年5月26日付けの琉球新報の社説には「親善記念日と首里博物館」と題する一文が掲載された。博物館の役割と文化財保護の関連性について卓越した見識が読みとれるので紹介したい。

「1853年5月26日ペルリ提督が琉球を訪れたと云うので、五月廿六日をもって米琉親善日と定められていたが、今年はちょうど百年目に当たるので、特にペルリ来琉百年祭を催し、記念と親善との諸行事が数日前からいすれも盛況裡に多大の効果を収めて挙行された。そして、その5月26日の本日は、かねて建築中の首里博物館の落成式とペルリ記念館の落成式を行うことになったのは、最も適当にして意義深い行事と云わなければならない。

ペルリ記念館には首里城正殿と守礼門との、ほとんど間然するところなき立派な模型が備えられたことになったのも、極めて適當な措置であつて、よく本日までに竣工することが出来たことについては、百年祭行事委員会を初め関係者諸氏の労を多として住民として感謝するところである。（中略）戦前の文化財中の重要なものは漸をおうて機会あるごとにこれを保存または修復して、われらの祖先の遺業をしのび、これによってわれわれに伝えられた文化的素質を自覚し、さらに新文化の創造における原動力たらしめ、かねて世界の文化に寄与する意欲を持たなければならぬ。その有形文化財にして収拾の出来る物は出来るだけ博物館に収拾すべく、博物館をを展観することによって琉球文化の全貌をうかがい知ることのできるようになるのが理想であろう。（中略）今回民政府（米民政府の意味）や琉球政府によって、昔国学のあった松崎の形勝の地に立派な建物が出来たのはまさに祝福に堪えない。

それにつけても、速やかに文化財保護法を制定して、首里博物館を日本々土の国立博物館に準じた性格にし重要文化財の保存収集の任務を帯びしめるようにしたいものである。また文化財保護法によって博物館に収集出来ないものでもよく保存利用の途を講じ得べく、とくに特別に重要な文化財が散逸して軽々しく海外に輸出されたりすることがないような措置をとるべきである。またその保護は単に有形物にとどまらず、無形文化財についても政府の適當な保護の手をさしのべることが出来るようになるから、この際文化財保護法

の制定についての当事者の仕事に、いま一段の拍車をかけてもらいたいものである。普通一般の博物館法のごときは後廻しにしてもいいではないか。文化財保護法の首里博物館における関係は龍をえがいて点睛するようなものである。」（下線部は筆者による）

文化財保護法制定と首里博物館の関係を画竜点睛にたとえ、保護法のない博物館は晴（ひとみ）のない龍であるという着眼は鋭いものがある。また、無形文化財の保護に対する考えはきわめて先見性があり、文化財保護法制定が急務であることを強調している。

また、1953年5月30日の琉球新報紙には同様の論調で「文化財保護法の制定を急げ」と世論を喚起する社説が掲載された。当時の人々の考え方を反映しており、文化財保護法成立の背景を知る上で貴重な資料である。

「ペルリ提督来琉百年祭にあたって、一たび米国に渡っていたおもろさうし二十二巻外数種の文化財が、琉球に返還されたのは親善行事の白眉というべく、各新聞紙が事を揃えて特報したのも当然であった。（中略）今回返還されたおもろさうしの外の史料の何たるかはいまだに知る由もないが、伝えるところによれば、なお玉冠なども米国に渡っているとのことである。果たしてどうであろうか。重要文化財と目すべきものが、海外に渡っているものなおありとすれば、願わくは今後それらも返還するような措置に出すべく内外とも配意して貰いたいものである。それにつけても琉球政府は速やかに文化財保護法を制定すべく、立法要請をなすべきである。おそらく今回のこともあるってのことであると思うが、民政府当局では文教局に対し文化財保護法の制定をすべく勧告し、文教局においてもその参考案を作製して中教委の議に附したと云う段取りまでは聞いているが、その後の成行きはどうなったであろうか。

文化財保護法によって重要文化財を指定すればその所有者または占有者を知り得べく、その所有権の移転に当たりても届出を要する代わりに、その保存につき必要ある場合には政府の補助をもなし得べく、売却に当たりては政府が買上げの優先権を有しその他必要に応じて展覧に供せしめ得べく、その国宝級の特別重要なものは輸出を禁ぜられる等保存の上において遺漏なきを期し得るものである。かくの如き措置をとることがまた琉球文化に理解あるデビス氏その他の米国の友人たちの儘力にこたえるゆえんであろう。」（下線部は筆者による）

文化財保護法の網を被せることによって、数少なくなった琉球の文化財を保護しなくては、将来に禍根を残すことになるという危機意識が読みとれる。文化財保護法の早期制定は、文化財の国外（琉球外）流出に対する防止を一義的な目的とするものであった。

(2) 琉球政府文化財保護委員会の発足

① 諮問機関としての文化財保護調査会

今や文化財保護法の制定は時間の問題になった。琉球政府文教局内部では日本政府の文化財保護法の研究が行われ、立法の準備作業に着手していた。琉球政府の中央教育委員会では1953年（昭和28）6月10日開催の委員会会議でつぎのことを決議した。

一、早急に文化財保護法を制定実施し、文化財の調査、指定、保護等を図ること。

二、文化財保護委員会は文教局の外局として設置すること。

琉球政府では、これらの要望に応えるために、1954年3月9日付けで行政主席の諮問機関として「文化財保護調査会」を発足させ、委員11人が任命された。会長には真栄田義見文教局長が兼任し、会の幹事及び書記も文教局職員が兼任した。また、会の経費は文教局予算に計上された。その他構成員には副会長山田有幹（文化担当）、城間朝教（生物）、仲座久雄（建造物）、大嶺薰（史跡）、源武雄（民俗）、名渡山愛順（美術）、山里永吉（工芸）、豊平良顕（古文化財）、仲宗根政善（言語）、多和田真惇（天然記念物）、原田貞吉（古文化財）の総勢11人が任命された。

この調査会の目的は、文化財の保存活用、文化財の調査研究、文化財の顕彰などとなっていた。文教局職員が兼任した文化財保護調査会の事務局では日本政府の保護法を参照し、沖縄における文化財保護法の研究及び草案作成を行った。当時の沖縄の政治機構は特殊であり、琉球政府行政主席の上には、米国政府任命の琉球米国民政府の高等弁務官が沖縄統治の最高機関として位置づけられていた。したがって、立法の手続きは、まず琉球政府の行政府案がつくられ、立法院に送付され、立法院で可決したものを高等弁務官へ裁可を求めなければならなかったのである。

この琉球政府行政主席の諮問機関であった文化財保護調査会は、文化財保護法が立法されるまでの暫定的機関で、約4ヶ月で所期の目的を達成し、解消されることになった。

② 文化財保護委員会の発足

米軍から返還された沖縄の遺宝を収蔵する機関としての沖縄民政府立首里博物館の存在は人々の文化や文化財に対する保護意識を高揚させる契機を与えたことを既述の新聞社説は物語っている。

表面的には戦の傷痕が幾分薄められ、新生琉球の文化の鼓動が響き渡りつつある社会状況があった。人心の一定の安堵感が文化財指定という行政的行為を推進させる状況を整えさせたといつていい。

人々は文化財保護法の制定を待ち望んでいた。文化財保護調査会で作成されてきた文化財保護法の行政府案は1954年6月上旬に立法院で審議され、可決されたあと、高等弁務官

の裁可を得て、1954年（昭和29）6月29日に琉球政府文化財保護法として制定され、同日付けて公布されることになった。9月8日には委員長に首里博物館長原田貞吉、副委員長に美術家山里永吉、仲宗根政善琉球大学教授、城間朝教琉米文化会館長、真栄田義見文教局長の合わせて5人の委員が任命された。委員の任期は3年。その任命には、立法院の同意を経て、行政主席によって任命されるものであった。

同法によると委員会の権限は7つある。文化財専門審議会委員の任免や文化財保護における国家的又は国際的関心のある題目についての会議、研究会、討論会等を主催すること。文化財の保護及び保存に関する法令案を作成することなどが主要のものであった。

文化財保護委員会の諮問機関として文化財専門審議会が置かれた。同審議会は委員会の諮問に応じて文化財の保存及び活用に関する専門的及び技術的事項を調査審議し、且つ、これらの事項に関し必要と認める事項を委員会に建議することが求められた。このように琉球政府文化財保護法はまだ傷痕の癒えぬ世にあって、時代の要請により制定されることになったのであった（表7 琉球政府文化財保護委員会委員一覧）。

表7 琉球政府文化財保護委員会委員一覧

◎は委員長

期数	任期期間	委員氏名
1期	54年～57年	◎原田貞吉、山里永吉、城間朝教、仲宗根政善、真栄田義見 ※55年5月に原田貞吉死去に伴い山里永吉が委員長に就任、仲座久雄委員が補任される
2期	57年～60年	◎山里永吉、山田有幹、城間朝教、仲座久雄、小波藏政光
3期	60年～63年	◎山城善三、島袋俊一、当銘由金、新垣義常、小波藏政光
4期	63年～66年	◎宮里栄輝、真栄田義見、徳田安周、豊平良顕、金城英浩
5期	66年～69年	◎真栄田義見、山里永吉、安谷屋正義、川平朝申、赤嶺康成
6期	69年～72年	◎源武雄、新屋敷幸繁、高良鉄夫、川平朝申、中山興真

③文化財保護法の日琉対照について

この法律は章立てで6章からなり、51の条文から構成されることになった。

施行当初の日本の文化財保護法（「日本法」、琉球の文化財保護法「琉球法」と便宜上略す。）との相違点があるのかを確認しておきたい。日本法の骨子を採用したといわれるが、一体どの程度の模倣なのか比較する必要がある。施行時の条文を比較してみたい。実際どの部分を模したのか。琉球の法律の独自性があったのだろうか。表8の琉球政府と日本政府の文化財保護法対照表（抄）を参照いただきたい。

まず確認できることは、指摘されるとおり琉球政府の文化財保護法は日本政府のそれに

表8 琉球政府と日本政府の文化財保護法対照表（抄）

※ 下線は筆者による

項目	琉球政府 文化財保護法（抄） (1954年6月29日立法第7号)	日本政府 文化財保護法（抄） (1950年5月30日法律第214号)
条文構成	第1章 総則（第1条～4条） 第2章 文化財保護委員会（第5条～18条） 第3章 有形文化財（第19条～36条） 第4章 無形文化財（第37条、38条） 第5章 史跡名勝天然記念物（第39条～47条） 第6章 罰則（第48条～51条） 附則	第1章 総則（第1条～4条） 第2章 文化財保護委員会（第5条～26条） 第3章 有形文化財（第27条～66条） 第4章 無形文化財（第67条、68条） 第5章 史跡名勝天然記念物（第69条～84条） 第6章 補則（第85条～105条） 第7章 罰則（第106条～112条） 附則（第113条～130条）
目的	第一条 この立法は、文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もって住民の文化的向上に資することを目的とする	第一条 この法律は、文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もって国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的とする。
文化財の定義	第二条 この立法で「文化財」とは、左に掲げるものをいう。 一 建造物、絵画、彫刻、工芸品、古文書、典籍、筆跡、書跡、民俗資料その他の有形の文化的所産で歴史上又は芸術上価値の高いもの及び考古資料（以下「有形文化財」という）。 二 演劇、音楽、舞蹈、工芸技術その他無形の文化的所産で、歴史上又は芸術上価値の高いもの（以下「無形文化財」という。） 三 史跡、名勝、及び天然記念物（以下「史跡名勝天然記念物」という）	第二条 この法律で「文化財」とは、左に掲げるものをいう。 一 建造物、絵画、彫刻、工芸品、書跡、筆跡、典籍、古文書、民俗資料その他の有形の文化的所産でわが国にとって歴史上又は芸術上価値の高いもの及び考古資料（以下「有形文化財」という。） 二 演劇、音楽、舞蹈、工芸技術その他無形の文化的所産で、わが国にとって歴史上又は芸術上価値の高いもの（以下「無形文化財」という。） 三 史跡、名勝、及び天然記念物（以下「史跡名勝天然記念物」という）
任務	第三条 政府及び市町村は、文化財が琉球の歴史文化等の正しい理解のため欠くことのできないものであり、且つ、将来の文化の向上発展の基礎をなすものであることを認識し、その保存が適切に行われるよう、周到の注意をもってこの立法の徹底に努めなければならない。	第三条 政府及び地方公共団体は、文化財がわが国の歴史、文化等の正しい理解のため欠くことのできないものであり、且つ、将来の文化の向上発展の基礎をなすものであることを認識しその保存が適切に行われるよう、周到の注意をもってこの法律の徹底に努めなければならない。
文化財保護委員会の設置	第五条 行政事務部局組織法（一九五三年立法第九号）第二条第二項の規定に基いて、行政主席の所轄の下に、文化財保護委員会（以下「委員会」という。）を設置する。	第五条 国家行政組織法（昭和23年法律第百二十号）第三条第二項の規定に基いて、文部省の外局として、文化財保護委員会（以下「委員会」という。）を設置する。 2 委員会は独立してその職権を行う。
委員会の任務	第六条 委員会は文化財の保存及び活用、文化財に関する調査研究その他第一条の目的を達成するため必要な事務を行うことを任務とする。	第六条 委員会は文化財の保存及び活用、文化財に関する調査研究その他第一条の目的を達成するため必要な事務を行うことを任務とする。
委員会の权限	第七条 委員会は、その所掌事務を遂行するため左に掲げる权限を有する。但し、その权限の行使は、立法（これに基く規則を含む。）に従つてなされなければならない。 一 予算の範囲内で所掌事務の遂行に必要な支出負担行為をすること。 二 収入金を徴収し、所掌事務の遂行に必要な支払いをすること。 三 文化専門審議会委員の任免に関すること。 四 所掌事務の周知宣伝を行うこと。	第七条 委員会は、その所掌事務を遂行するため左に掲げる权限を有する。但し、その权限の行使は、立法（これに基く規則を含む。）に従つてなされなければならない。 一 予算の範囲内で所掌事務の遂行に必要な支出負担行為をすること。 二 収入金を徴収し、所掌事務の遂行に必要な支払いをすること。 三 所掌事務の遂行に直接必要な事務所等の施設を設置し、及び管理に関すること。 四 所掌事務の遂行に直接必要な業務用資材、図書その他研究用資材、事務用品を調達すること。 五 職員の任免及び賞罰を行い、その他職員の人事を管理すること。 六 職員の厚生及び保健のための必要な施設をなし、及び管理すること。 七 所掌事務の監察を行い、法令の定めるところ従い、必要な措置をとること。 八 所掌事務の周知宣伝を行うこと。 九 委員会の公印を制定すること。

	<p>五 所掌事務に関する国家的又は国際的関心のある題目について会議、研究会、討論会等を主催すること。</p> <p>六 文化財の保護及び保存に関する法令案を作成すること。</p> <p>七 前各号に掲げるものの外、立法（これに基く規則を含む。）に基き委員会に属せしめられた権限</p>	<p>十 広く利用に供する適当な記録を整備すること。</p> <p>十一 所掌事務に関する法人の設立を認可すること。</p> <p>十二 所掌事務に関する国庫支出金を割り当て、配分すること。</p> <p>十三 所掌事務に関する物資の確保について援助すること。</p> <p>十四 所掌事務に関する統計調査の資料及び結果を収集し、解釈し、及び刊行頒布すること</p> <p>十五 所掌事務に関する国家的又は国際的関心のある題目について会議、研究会、討論会等を主催すること。</p> <p>十六 文化財の保護に関する法令案を作成すること。</p> <p>十七 前各号に掲げるものの外、法律（これに基くを命令含む。）に基き委員会に属せしめられた権限</p>
委員会の構成	第八条 委員会は五人の委員をもって組織する。	第八条 委員会は五人の委員をもって組織する。
委員の任命	第九条 委員は、文化に関し高い識見を有するもののうちから <u>立法院</u> の同意を経て、 <u>行政主席</u> が任命する。	第九条 委員は、文化に関し高い識見を有するもののうちから <u>両議院</u> の同意を経て、 <u>文部大臣</u> が任命する
委員の任期	第十条 委員の任期は、三年とする。但し、補欠の委員は前任者の残任期間を在任する。 2 委員は再任されることができる。	第十条 委員の任期は、三年とする。但し、補欠の委員は前任者の残任期間を在任する。 2 委員は再任されることができる。
会 議	<p>第十四条 委員会は、委員長が招集する。二人以上の委員から請求があるときは、委員長は、委員会を招集しなければならない。</p> <p>2 委員会は、委員の半数以上の出席がなければ会議を開くことができない。</p> <p>3 委員会の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。</p>	<p>第十四条 委員会は、委員長が招集する。二人以上の委員から請求があるときは、委員長は、委員会を招集しなければならない。</p> <p>2 委員会は、委員の半数以上の出席がなければ会議を開くことができない。</p> <p>3 委員会の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。</p>
事 務 局	第十六条 委員会の事務は、 <u>文教局</u> で処理する。	第十六条 委員会には、 <u>その所掌事務を遂行するため、国家行政組織法第七条第四項の規定に従い、事務局を置き、事務局に、その内部組織として総務部及び保存部を置く。</u>
諮問機関・附属機関	第十七条 委員会の諮問機関として、文化財専門審議会を置く。	第二十条 委員会の附属機関として、文化財専門審議会、 <u>国立博物館</u> 及び <u>研究所</u> を置く。
文化財専門審議会	<p>第十八条 文化財専門審議会は、委員会の諮問に応じて文化財の保存及び活用に関する専門的及び技術的事項を調査審議し、且つ、これらの事項に關し必要と認める事項を委員会に建議する。</p> <p>2 委員会は、左に掲げる事項については、あらかじめ文化財専門審議会に諮問しなければならない。</p> <p>一 特別重要文化財又は重要文化財の指定及びその解除</p> <p>二 重要文化財の管理及び修理に関する命令</p> <p>三 特別重要文化財の修理及び滅失又はき損の防止の措置の施行</p> <p>四 重要文化財の現状変更及び輸出の許可</p> <p>五 重要文化財の環境保全ためにする行為の制限、禁止及び必要な施設の命令</p> <p>六 重要文化財の買収</p> <p>七 埋蔵文化財の発掘の施行</p> <p>八 助成の措置を講ずべき無形文化財の選定</p> <p>九 特別史跡名勝天然記念物又は史跡名勝天然記念物の指定及びその解除</p>	<p>第十八条 文化財専門審議会は、委員会の諮問に応じて文化財の保存及び活用に関する専門的及び技術的事項を調査審議し、且つ、これらの事項に關し必要と認める事項を委員会に建議する。</p> <p>2 委員会は、左に掲げる事項については、あらかじめ文化財専門審議会に諮問しなければならない。</p> <p>一 国宝又は重要文化財の指定及びその解除</p> <p>二 重要文化財の管理及び修理に関する命令</p> <p>三 国宝の修理及び滅失又はき損の防止の措置の施行</p> <p>四 重要文化財の現状変更及び輸出の許可及び許可の権限の都道府県教育委員会への委任</p> <p>五 重要文化財の環境保全ためにする行為の制限、禁止及び必要な施設の命令</p> <p>六 重要文化財の買収</p> <p>七 埋蔵文化財の発掘の施行</p> <p>八 助成の措置を講ずべき無形文化財の選定</p> <p>九 特別史跡名勝天然記念物又は史跡名勝天然記念物の指定及びその解除</p>

	<p>十 史跡名勝天然記念物の管理又は復旧に関する命令</p> <p>十一 特別史跡名勝天然記念物の復旧及び滅失、き損又は衰亡の防止の措置</p> <p>十二 史跡名勝天然記念物の現状変更等の許可</p> <p>十三 史跡名勝天然記念物の環境保全のためにする行為の権限、禁止及び必要な施設の命令</p> <p>十四 前各号に掲げるものの外、文化財の保存及び活用に関する重要事項</p>	<p>十 史跡名勝天然記念物の管理又は復旧に関する命令</p> <p>十一 特別史跡名勝天然記念物の復旧及び滅失、き損又は衰亡の防止の措置の施行</p> <p>十二 史跡名勝天然記念物の現状変更等の許可及び許可の権限の都道府県教育委員会への委任</p> <p>十三 史跡名勝天然記念物の環境保全のためにする行為の権限、禁止及び必要な施設の命令</p> <p>十四 前各号に掲げるものの外、文化財の保存及び活用に関する重要事項</p> <p>3 前二項の規定により所掌する事項を分掌させるため、文化財専門審議会に分科会を置く。</p> <p>4 文化財専門審議会及びその分科会の組織及び所掌事務並びに専門委員、臨時専門委員その他の職員については、他の法律（これに基く命令を含む。）に特別の定がある場合を除く外、政令で定める。</p>
国立博物館・研究所	(該当規程なし)	<p>第二十二条 国立博物館は、有形文化財を収集し、保管して公衆の観覧に供し、あわせてこれに関連する事業を行う。</p> <p>2 国立博物館を東京都に置く。</p> <p>3 国立博物館に、奈良分館を置く。</p> <p>4 国立博物館の内部組織は、委員会規則で定める。</p> <p>第二十三条 研究所は有形文化財及び無形文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う。</p> <p>2 研究所は、東京都に置く。</p> <p>3 研究所は、支所を置くことができる。</p> <p>4 研究所の内部組織は、委員会規則で定める。</p>
有形文化財の指定	<p>第十九条 委員会は、有形文化財のうち重要なものを重要文化財に指定することができる。</p> <p>2 委員会は、重要文化財のうち世界文化の見地から価値の高いもので、たゞいない住民の宝たるものを特別重要文化財に指定することができる。</p>	<p>第二十七条 委員会は、有形文化財のうち重要なものを重要文化財に指定することができる。</p> <p>2 委員会は、重要文化財のうち世界文化の見地から価値の高いもので、たゞいない国民の宝たるものを国宝に指定することができる。</p>
無形文化財の助成	第三十七条 無形文化財のうち特に価値の高いもので政府が保護しなければ衰亡するおそれのあるものについては、委員会は、その保存に当たることを適當と認める者に対し、補助金を交付し、又は資材の斡旋その他適當な助成の措置を講じなければならない。	第六十七条 無形文化財のうち特に価値の高いもので國が保護しなければ衰亡するおそれのあるものについては、委員会は、その保存に当たることを適當と認める者に対し、補助金を交付し、又は資材のあつ旋その他適當な助成の措置を講じなければならない。
史跡名勝天然記念物の指定	<p>第三十九条 史跡名勝天然記念物は委員会が指定する。</p> <p>2 委員会は、前項の史跡名勝天然記念物のうち特に重要なものを特別史跡名勝天然記念物に指定することができる。</p>	<p>第六十九条 史跡名勝天然記念物は委員会が指定する。</p> <p>2 委員会は、前項の史跡名勝天然記念物のうち特に重要なものを特別史跡名勝天然記念物に指定することができる。</p>
出品勧告	第三十二条 委員会は重要文化財の所有者に対し、一年以内の期間を限って、政府立博物館その他の施設において政府の行う公開の用に供するため重要文化財を出品することを勧告することができる。	第四十八条 委員会は、重要文化財の所有者に対し、一年以内の期間を限って、国立博物館その他施設において國の行う公開の用に供するため重要文化財の出品することを勧告することができる。
刑罰	<p>第四十八条 第二十九条の規定に違反し、委員会の許可を受けないで重要文化財を輸出した者は、二年以下の禁令、若しくは一円万円以下の罰金に処する</p> <p>第四十九条 重要文化財を損壊し、き棄し、又は隠匿した者は、二年以下の禁令若しくは、一万円以下の罰金に処する。</p> <p>2 前項に規定する者が当該文化財の所有者であるときは、一年以下の禁令、若しくは五千円以下の罰金に処する。</p>	<p>第一百六条 第四十四条の規定に違反し、委員会の許可を受けないで重要文化財を輸出した者は、五年以下の懲役若しくは禁令、又は十万円以下の罰金に処する</p> <p>第七百七条 重要文化財を損壊し、き棄し、又は隠匿した者は、五年以下の懲役若しくは禁令又は、二万五千円以下の罰金若しくは科料に処する。</p> <p>2 前項に規定する者が当該文化財の所有者であるときは、二年以下の懲役若しくは禁令、又は一万円以下の罰金若しくは科料に処する。</p>

限りなく相似していることである。ただ文言についてはつぎのように日本法から琉球法への置換が認められる。

「法律」→「立法」、「国民」→「住民」、「わが国」→「琉球」、「文部大臣」→「行政主席」、「両議院」→「立法院」、「国宝」→「特別重要文化財」といった具合である。その中で、決定的な相違点があった。附属機関の規程部分である。

日本法では第20条に附属機関の規程がある。この場合の機関とは、文化財専門審議会と国立博物館及び研究所のことをさす。さらに、第22条と23条には国立博物館や研究所の設置目的が規定される。すなわち、国立博物館は有形文化財を収集し、保管して公衆の観覧に供するためのものであり、また、研究所は有形文化財や無形文化財に関する調査研究、資料の作成及び公表を行うための文化財保護委員会の附属機関と規定されているのである。

一方、琉球法では、附属機関（諮問機関）は文化財専門審議会の設置のみにとどまり、日本法の第22条・第23条の国立博物館・研究所の設置規程は欠落することとなったのである。

53年5月の琉球新報の社説の「速やかに文化財保護法を制定して、首里博物館を日本々土の国立博物館に準じた性格にし重要文化財の保存収集の任務を帯びしめるようにしたい」（下線は筆者による）という思いは実現をみるに至らなかったわけである。なぜその規程をはずしたのだろうか。どのような判断によってその部分だけが削除されたか。その部分こそは、文化財の保存、公開、普及啓発において極めて重要な意味を持つ規程であるが、その真意については不明である。

1957年（昭和32）文化財保護委員会（委員長山里永吉）は従来の文教局社会教育課から独立した事務局設置を勧告（陳情）している。そしてもう1つの要望があった。すなわち、「政府立首里博物館を文化財保護委員会の附属機関にしてもらいたい」との件である。文化財保護委員会の主張は、文化財保護行政と政府立博物館運営とは密接不離の関係にあるので、博物館は文教局社会教育課から文化財保護委員会の所轄にすべきであるという趣旨のものであった。しかしながら、この件については実現することがなかった。

ここでひとつの疑問が生じる。どうして草案時にその規程が採用されなくて、法施行3年後にこのような問題が生じたかということである。1957年、文化財保護委員会は第2期の委員が就任しており、山里、真栄田、山田、仲宗根、仲座の5委員が就任している。いずれの委員も、文化財保護法の制定にあたって準備室的役割を演じた文化財保護調査会の委員であった。当然草案の作成時に日本政府の博物館・研究所附属機関の規程第20条、第22条・23条を他の規程同様にそっくり借用することは可能であったはずである。草案作成時にどのような判断が働いたのだろうか。

そして、保護法施行から3年後に博物館附属機関説が浮上することになったのは何故な

のか。

まず大きな疑問は何故博物館附属機関説が採用されなかつたのかということである。当初で当然想定されたことではないかという疑問である。日本政府の文化財保護法を拠り所としたわけであるから、法案として当該条文を盛り込めたはずである。

ここで推測できることは、2点ある。1つは米軍民政府側の意向が働くいたせいであったかということ。もう1つは、文教局側の行政的対応にあったのかということである。

現実的な回答は、後者の方だと筆者は考えた。消去法ではあるが、米軍民政府がこの条文のみを削除させる理由を探すことができないからである。その理由として、米側は1953年のペルリ来琉百周年記念祭で琉球政府にペルリ記念館を贈呈したり、沖縄の文化紹介には極めて積極的であったことである。また、戦後間もない頃ハンナ教育部長らによって沖縄陳列館を創設した実績などもある。沖縄文化に対する理解は占領政策上重要な施策だと位置づけられていた。文化財保護委員会の附属機関に博物館を位置づけることにより、これまで以上に文化財の保存、公開、普及啓発事業のより一層の推進が可能となるはずである。したがって、この規程の挿入された文化財保護法が米民政府にとって、マイナス要因になるとは考えにくい。

そうなると、もう1一つの理由しか考えられない。つまり、琉球政府文教局側の行政的な判断によって、この規程が準用されなかつたということである。その理由をつぎのように考えてみた。

この規程が負担であるということである。なぜなら、当時の民政府は政府立博物館を2館有していた。1つは石川市の東恩納博物館であり、もう1つは汀良にあった首里博物館であった。53年に両館を統合した施設を当蔵町の龍潭の湖畔に移転する計画があった。しかしながら、建設資金の目処が立たず、ペリー記念館を計画していた軍政府の資金援助を仰ぎ建設されたという苦い経験があった。博物館の職員体制や資料収集など旺盛な財政事情に対して予算的に支出する余裕がないという政策的判断があつたのではないかということである。発足当初の文化財保護委員会は法律上は独立した行政委員会であるにも係わらず、その事務局は文教局社会教育課に置かれ、指定業務については同課の社会教育主事1人が兼ねていたほどであった。その後3年間、独自の職員体制を持たずにいたのである。財政的な措置など文教局側の強い意向がその規程を準用しなかつた理由として考えられる。

④文化財保護委員会と博物館の関係

その真偽について、当時民政府立首里博物館の管理職であった外間正幸氏（元沖縄県立博物館長）に話をうかがったところ、3冊の新聞切抜帳をご提供いただいた。そこには、文化財保護委員会と博物館の所管課であった文教局に係わる切り抜き記事が含まれていた。

当文化財保護委員会（文保委員会）と文教局は博物館の所管をめぐって争議していたのである。文化財保護法の草案が、文化財保護調査会事務局が設置された文教局社会教育課の意向が強く反映されてつくられたため、博物館附属機関説が採用されたかった理由が判然とした。すなわち、私の推測したとおり文教局側の意思が反映されていたのであった。文教局が図書館同様に博物館を社会教育施設として位置づけ所管することが優先されたため、日本法の規程は削除されるしかなかったのである。

1963年（昭和38）7月19日の新聞記事「高等弁務官が書簡文保行政のあり方を指示」と題するもので、当時の米国民政府のキャラウェー高等弁務官が文化財保護行政のあり方について指示した書簡が6月22付けで行政主席にあて渡されたとされる内容である。少し長いが文教局と文化財保護委員会の確執が読みとれるので引用したい。

『書簡の具体的な内容のうち文教局と文保委員会（文化財保護委員会）に共通する問題点はいま文教局社会教育課の主管である政府立博物館を文保委員会に所属させるべきだというもの。博物館を文教局の直属から外局である独立した文保委員会に移すことについてはさる54年に文保委員会が発足した当時から懸案である。当時の山里永吉委員長が60年9月に辞めるまで一貫して文保委員会への所属を関係筋へ訴えていた。ところが、主管の文教局では博物館のもつ社会教育の面から現段階ではあくまで文教局社会教育課の主管である方が望ましいとして文保委員会の要望をいれないと現在にいたったもの。こうした文保委員会の要望については、さきに政府の機構審議会でも検討され、博物館の文保委員会所属を妥当なものとして行政主席へ答申している。いっぽう立法院の本会議でも検討された。つぎは59年（昭和34）2月、当時の文保委員会が「琉球政府立博物館を文化財保護委員会の附属機関とすることについて」関係筋へ要請した内容うちのその理由』（下線部は筆者による）として5つ紹介されている。

- 一、政府立博物館は歴史博物館であって琉球歴史の資料が収集陳列されてある。したがって資料の収集と陳列には文保委員と専門委員の専門的な知識を必要とする。そのうえに予算の編成、収集、保存などはぜひ文保委員会に協力を求めなければならない。
- 一、日本政府文保委員会事務局の職員と国立博物館職員の間には絶えず交流がある。そのなかには月、水、金曜日は文保委員会。火、木、土曜日には国立博物館と両方を兼務して職員もある。それは専門家が少ないためことに沖縄の場合はその面の専門家が極めて少ないので政府立博物館を文保委員会の付属機関にすれば職員の交流連絡が便利になり、両機関の仕事が能率的になる。
- 一、政府文保法第32条（出品）の第1項から4項までは政府立博物館が文保委員会の付属機関であることによって法の運用は可能になる。
- 一、博物館は社会的教育の教材になるが、それは博物館の機構だけであって、放送局、新

聞社、気象台が社会教育の教材になるのと同じようにその内容にある専門知識はすでに、社会教育の範囲をはみ出している。

一、日本政府の国立博物館（東京国立博、京都国立博、奈良国立博）は同政府文保委会の附属機関である。

以上のような理由を掲げにも係わらず、結果的には博物館は文保委会の所属にならなかつた。

しかしながら、懸案の博物館附属機関説は規程上は1965年の文化財保護法の全文の大改正によって、「文化財保護委員会に附属機関として博物館を置くことができる」という規程を得ることになる。1957年（昭和32）3月時点では文化財保護委員会が要望していたもう1つの問題であった事務局設置に関する文化財保護法の一部改正のみが認められた。その改正により、委員長が非常勤から常勤職になり、事務局には事務局長のほかに主事、主事補の3人の専任職員が配置されたのである。その後も事務局の陣容は年々拡充強化され、文化財保護活動が一段と充実することになった。具体的には、1960年（昭和35）には事務局長以下6人体制。翌年には7人。1968年（昭和43）には10人になり、常勤の委員長を含めて11人になった。その中には、有形文化財の専門官3人、無形文化財の専門官2人の計5人の（文化財）専門官である専門職員の配置がなされたのであった。

その後、琉球政府文化財保護委員会は復帰にいたるまで、琉球の文化財保存と開発の間で社会問題にまで発展した「玉陵敷地内の沖縄聖公会学生センターの設置問題（1959～1962）」など世論を喚起する問題を提起しながら日本復帰までに182件の文化財を指定した。

つぎに琉球政府文化財保護委員会の指定文化財の特徴的なものを2、3紹介することにしたい。

4. 琉球政府時代の文化財指定の特徴

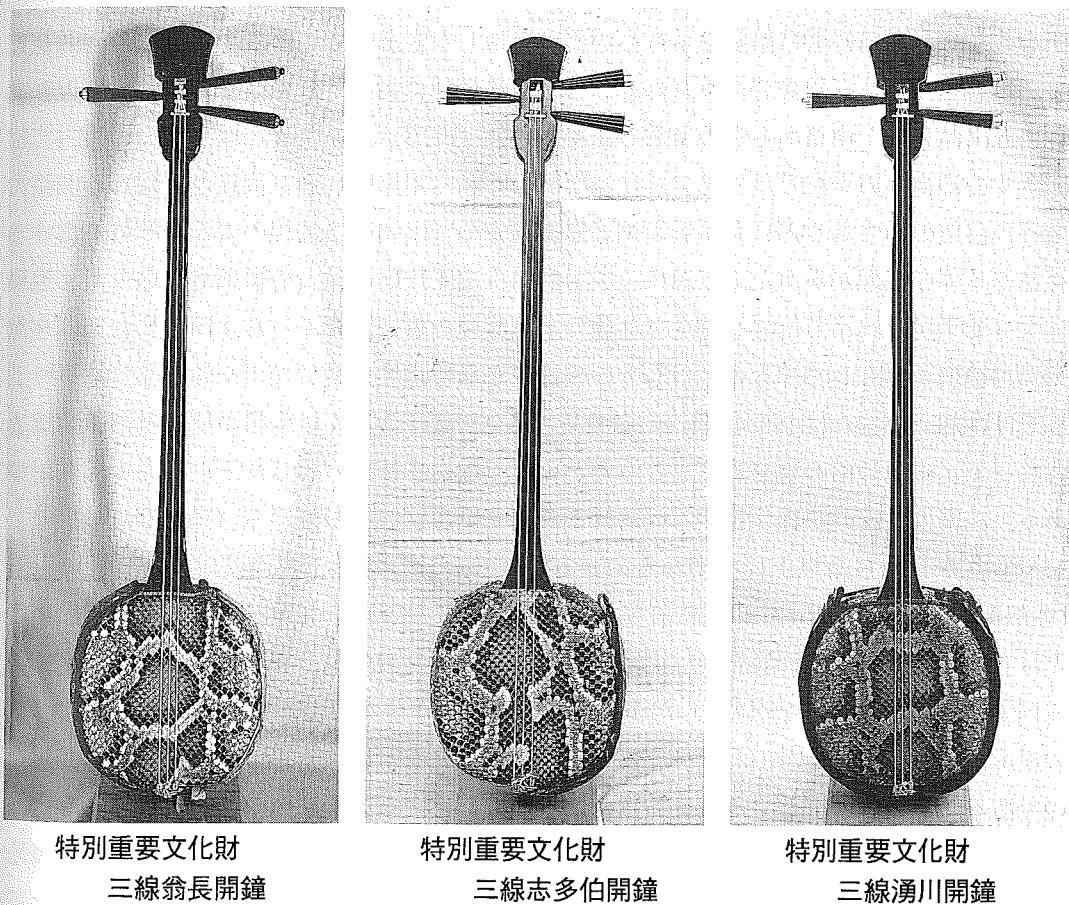
琉球政府文化財保護委員会は1954年の文化財保護法の制定から1972年の祖国復帰までの18年間で182件の文化財を指定した。ここではその中で三線や工芸技術に関する無形文化財を中心に言及することにしたい。

①三線という楽器（工芸品）指定の意義

琉球政府文化財保護委員会は1954年（昭和29）9月に任命され、翌年55年1月から本格業務を開始している。55年1月7日から56年2月20日までの約1年間に42件の文化財を指定している。その種別をみてみると、特別重要文化財11件、重要文化財8件、史跡・名勝14件、天然記念物9件となっている。この数字は同委員会が発足して1年間に精力的に活動したことを意味する。これらの殆どは戦前の国宝保存法に基づいた旧国宝が当然含まれ

ことになった。しかしながら、その中に1種類だけ工芸品の指定文化財が含まれることになった。それも特別重要文化財という指定文化財の中で最高位の扱いのものである。これらが第2次指定の55年（昭和30）1月26日に特別重要文化財として指定された三線翁長開鐘、三線志多伯開鐘、三線湧川開鐘の3つの三線であった。この三線指定は戦後初めての工芸品における指定である。42件の指定文化財の殆どはその所有者が各市町村区の首長であった。しかしながら、工芸品として指定された三線は唯一個人蔵になっている。

通常、指定の順序は保護すべき優先度を勘案することが常である。三線が第2次の指定になった詳細は不明である。それも重要文化財ではなく「特別重要文化財」という破格とも言うべき指定ゆえに、その謎はいっそう深まる。戦前の指定物件であれば、指定される必然性が配慮されるであろうが、三線はいはなれば新参の指定文化財である。



そのような状況を勘案して推論するに、三線が沖縄の人々にとって、楽器や工芸品を越えた存在であり、人々の精神文化に深い関連性をもつ「もの」であることが指定の背景に

あったと考えざるを得ない。

それにしても、三線指定は何か唐突の感が歪めないと指摘がある。筆者の推論は、流出防止の措置として個人蔵のものを最優先して指定したのではないかということである。多くの貴重な古三線の中で戦災を免れ、名器の称号である開鐘とよばれる三線はこの3つの三線しか当時の沖縄では確認できなかったのである。

ここで少しばかり三線指定の背景を考えてみたい。三線は戦後急激に脚光を浴びたわけでは決してない。沖縄の博物館の嚆矢である沖縄縣教育會附設郷土博物館（首里城北殿）では昭和14年8月5日に首里城南殿を特設会場に「江戸与那リ帰り展」と題し、三線供養を兼ねた三線展が開催された。この展示会は東恩納寛惇が東京の古本市で発見した「江戸与那」と呼ばれる三線の里帰りを記念して開催されたものである。池宮喜輝によれば、その時に「島袋源一郎と私が責任を持ち開鐘を始め首里那覇のいわゆる門外不出の名器約50丁を一堂に集め同好者に鑑賞してもらい好評を博した」と記している。それらのうち、15の開鐘と名がつく三線が公開されたという。戦後最初に指定された3つの開鐘は同展においても出品された由緒あるものであった。

多くの沖縄の人々にとって、三線は家宝的な存在であり、これら開鐘と呼ばれる三線の名器は羨望の的であったにちがいない。三線指定の背景には、沖縄の人々の心に共鳴する存在としての三線があった。三線は、歴史的には旧士族層の教養の器楽で用いられ、近世になって平民百姓まで伝播し、琉球芸能に不可欠の花形楽器であった。同時に、楽器を越えた、神聖さをもった「もの」としての個性豊かな琉球文化のシンボル的存在であったことも付け加えなければならない。戦時中、名器を秘蔵する人々は先祖の位牌と三線の棹を背負って、砲煙弾雨の中を逃げまどったという三線にまつわるエピソードがあるぐらいである。沖縄の人々の三線に対する愛着はこれほど凄まじいものがある。三線は命の次に、いやもしかしたら命以上に大切なものかもしれない。旧琉球王家尚侯爵家が秘蔵の三線「盛嶋開鐘」^(注12)を昭和4年に東京府美術館で開催された「日本名寶展覽会」に出品したことは有名な話である。同展覽会は旧公爵諸侯や古社旧刹の名宝古美術の秘蔵品や帝室御物や国宝など150点余が一堂に会したかつてない大規模な展示会であったという。尚家はその展示会で玉冠をはじめ、赤地の唐御衣裳、千代金丸などに加え、2丁の三線を出品したのである。三線を家宝とする考え方とは、旧王家はもとより旧士族層や旧平民たちにも同様の価値意識が共有されていた。さらに、この価値観は故郷から遠く離れた沖縄人の移民地ハワイにおいても同様であった。昭和10年頃首里の人で屋部憲通が首里の名家の三線を買い集め、ハワイに売り込み、そのおかげで貴重な三線が戦災から免れたという歴史のいたずらを当時その所行に立腹していた池宮は指摘している。

既述のように沖縄の人々の三線に対する思いは、文化財保護委員会の委員も同様であつ

た。また、指定の学術的な根拠は池宮喜輝の旺盛なフィールドワークに基づいて1954年に著された『琉球三味線寶鑑』にあった。戦災によって激減した三線の中で戦前、三線展に出品された中から開鐘と呼ばれた三線が重要文化財を越えた「特別重要文化財」に指定されたことは、きわめて当然なこととして受け止められたにちがいない。その後1958年（昭和33）までに8つの三線が重要文化財に指定され、琉球政府時代の三線の指定件数は11丁を数えた。この指定文化財こそは琉球政府文化財保護委員会が指定した沖縄文化のシンボル的文化財であったといつても過言ではない。

②無形文化財の指定・認定は「組踊」が唯一であった

1938年（昭和13）は沖縄の工芸品に対する従来の考え方が一大転換を迎えた年である。日本民芸運動の創始者である柳宗悦が初めて来県し、このような小さな島のなかで多様な工芸技術が息づいていることに感嘆し、工芸技術の高さと多様さに「工芸の宝庫」という賞賛のことばを残したからである。このことは、沖縄の工芸に携わる人々にとって自らの工芸技術の高さを認識させられた記念すべき年であったといえる。

1999年（平成11）末現在、沖縄県は国指定重要無形文化財（工芸技術）を6件有する。その内訳は各個認定いわゆる人間国宝が4件と保持団体認定が2件である。これら無形文化財を支える文化財保存技術として国選定保存技術が1件ある。また、沖縄県指定無形文化財の数は7件である。県指定の数は国指定重要無形文化財に指定されたことにより県指定が解除されたものを除いた数字である。したがって、1999年（平成11）末現在沖縄県にある国・県指定無形文化財（工芸技術）・選定保存技術の件数は14件になる。指定・選定順に列記するところである。

1972年（昭和47）県指定「沖縄陶器」金城次郎（1985年国指定になる）

　　県指定「芭蕉布」平良敏子

1973年（昭和48）県指定「びん型」城間榮喜他3人（沖縄伝統びん型保存会）

1974年（昭和49）国指定「喜如嘉の芭蕉布」（喜如嘉の芭蕉布保存会）

　　県指定「本場首里の織物」宮平初子、大城志津子

　　（沖縄伝統本場首里織物保存会）

1975年（昭和50）県指定「読谷山花織」與那嶺貞

1977年（昭和52）県指定「宮古上布」（宮古上布保持団体）（翌年 国指定になる）

　　県指定「久米島紬」（久米島紬保持団体）

　　国選定保存技術「琉球藍製造」伊野波盛正

1978年（昭和53）国指定「宮古上布」（宮古上布保持団体）

　　県指定「八重山土布」（八重山土布保存会）

- 1985年（昭和60）国指定「琉球陶器」金城次郎
1991年（平成3）県指定「琉球漆器」前田孝允他2人（琉球漆器保存会）
1996年（平成8）国指定「紅型」玉那霸有公
1998年（平成10）国指定「首里の織物」宮平初子
1999年（平成11）国指定「読谷山花織」與那嶺貞

以上のことから気づくように、沖縄県における工芸技術に係わる無形文化財の指定・認定はすべて復帰後なのである。意外ではあるが、琉球政府時代には工芸技術に関する無形文化財の指定は皆無であった。

無指定のひとつの理由がある。文化財保護法における規程自体の問題である。制定当初の日本の文化財保護法には無形文化財に係わる指定規程がなかったのである。制定当初の文化財保護法では、無形文化財に係わる第67条の条文ではつぎのように規程されている。無形文化財のうち特に価値が高いもので国が保護しなければ衰亡するおそれがあるものについて、保存にあたることが適當と認められる者に対して補助金または資材の斡旋その他適當な助成措置を講じなければならない。同法は1954年（昭和29）に一部が改正され、無形文化財については新たに重要無形文化財としての指定及びその保持者の認定制度が設けられることになった。しかしながら、54年に制定された琉球政府の文化財保護法にはこの改正規程が間に合わなかったのか、制定当初のものがそのまま準用されることになったのである。琉球政府の文化財保護法に無形文化財の指定及び保持者の認定制度が組み込まれたのは、11年後の65年（昭和40）6月の全文改正（立法第29号）の時であった。

琉球政府の文化財保護法が制定された翌55年元旦、柳宗悦は「沖縄の文化財保護になすべき仕事が二つある」と題する一文を琉球新報に寄せている。

「今度沖縄の文化財が法的に保護されるに至ることを知つて非常に有難く感じる。戦前も大にその必要があったが、戦後はいよいよその必要を増したといってよい。私は何よりも沖縄の人々が自己の固有の文化財を大事に考へられることを望んで止まない。そうして更にその価値が芸術的に見て、並々ならぬ高度のものだという自覚を強められんことを希って止まない。島は小さく又貧しくともその文化は大きく又富んでいることを誰も信すべきだと思ふ。為すべき仕事は二つある。一つは残された文化財をすべての面にわたって大切に保護することである。一つは伝統として今も伝わる技術や表現を決して棄てずに今後もそれを活かして育てていくことである。前者は過去への守護であり、後者は現在および未来への発展である。（中略）沖縄が輝くことは独り沖縄の名誉のためのみではあるまい。それに私にとって悦びに堪えないことは、この文化財の保護が凡ての島民に自信を与へ、その生活に大きな意義を感じしめることである。之にもましてこの保護の大きな功德はな

い」と結んでいる。

柳の指摘する「伝統として今も伝わる技術や表現」の保存は、指定制度ではなく、実質的に指定に匹敵する助成制度によって技術の保存が図られることになった。ただ、この規程では助成の対象が価値の高いものであっても衰亡するおそれがないものは自ずと除外されるという制約が生じることになった。

助成の措置が講じられた工芸技術に係わる無形文化財は、つぎのとおりである。

1957年度 首里の織物（167弐）

1964年度 喜如嘉の芭蕉布（100弐）

1965年度 久米島紬（210弐）、読谷山花織（60弐）、宮古上布（60弐）、
琉球樂器三味線（150弐）、琉球家具（65弐）、八重山上布（75弐・2件）、
紅型（180弐）、首里の平縞織（40弐）、琉球陶器（120弐）

以上のとおり11件の工芸技術関係の無形文化財が助成された。参考のために一番最初に助成された首里の織物の内容を以下に記しておく。

一、名 称 首里の織物

二、所在地 那覇市首里大中町2-21

三、保持者及び責任者 保持者上里オト（明治28年8月30日）

責任者首里婦人会長嘉数ツル

四、助成金額及び助成年月日

一金式万円^(注13) 1957年5月2日

五、内 容

1 織物の名称 青藍地、手縞（紬）、紹織、花織

2 技術の伝授 個人指導により伝授する。

3 織機の保存 古代からの織機（地ハタ、高ハタ）を保存し、織方の変遷の資料とする。

六、理 由

保持者上原オトは首里の古代からの織物技術を身につけた第一人者で、その技術は他の追随を許さぬものであるので助成をして保護し、子弟に伝授せしめることにした。

備 考

技術保持者上里オトは子弟に技術伝授中、1958年9月24日死亡した。

残念ながら、保持者上里オトは助成された年の翌年63歳で他界した。衰亡のおそれがあることを予期してこの無形文化財が助成対象となったのでなかろうが、一回性の助成によって子弟にどれほどの技術が伝授されたかは甚だ疑問が残るところである。ここが助成制度

の限界といえるかもしれない。伝承者の養成が単年度でできるほど工芸技術の手わざの世界は底が浅いものではない。助成制度は、言うなれば、行政側からの「奨励的一時金」のようなものであったと解した方がよい。

工芸技術に係わる11件の無形文化財の中で、現在の指定文化財になっていないのが、琉球楽器三味線や琉球家具である。とくに、琉球楽器三味線の製作技術が助成対象となったことは、既述の工芸品としての指定文化財になった三線と合わせて考えると大変興味深い。

また、助成を講すべき無形文化財の中には、工芸技術以上に芸能関係が多くあった。その中には現在の文化財保護法で区分する無形民俗文化財が含まれている。以下参考までに年度毎の芸能関係の助成措置が講じられた無形文化財について記すことにする。

1957年度 八重山民謡（83弔）、古典音楽「湛水流」（83弔）、八重山の太鼓（42弔）

八重山の大胴小胴（42弔）

1958年 伊集の打花鼓（167弔）、泡瀬の京太郎（125弔）、

首里汀良の獅子舞（125弔）

1959年度 組踊執心鐘入（250弔）

1961年度 八重山の穂利踊（50弔）、組踊執心鐘入（200弔）

1962年度 沖縄の古武術（150弔）

1963年度 南の島踊（100弔）、沖縄の古武術（100弔）

1964年度 組踊花壳の縁（150弔）

1965年度 組踊手水の縁（150弔）

以上のとおり15件（7団体）の芸能関係の無形文化財が助成された。工芸技術との相違点は、同一の団体に2年継続で助成が講じられたり、組踊のように異なる演目で4回も助成対象となった組踊保存会のような団体もあることは興味深い。

ここで留意しなくてはならないことは、65年に大改正された琉球政府文化財保護法の適用を受けて、唯一重要無形文化財に指定されたものが、組踊「玉城朝薫作五番」（執心鐘入、二童敵討、銘苅子、孝行の巻、女物狂）であったということである。少なくとも復帰の時点まで、文化財保護委員会や文化財専門審議会の委員たちにとっての工芸技術に対する評価は、柳宗悦の評価までには至らなかったということである。

5. おわりに

沖縄県における大正期から復帰以前までの文化財保護の歴史を考えるときに、保護した側に着目すると3つのエポックがみえてくる。

1つは首里城正殿が国宝に指定される大正14年頃から昭和13年までの15年間の時期があ

る。昭和8年に首里城内の主要な門、円覚寺関係、崇元寺関係が指定され、昭和13年に弁ヶ嶽石門が指定された。そのときは主に県外人による文化財保護の啓蒙運動の時期といえる。

2つめの時期は、戦後の廃墟の中からハンナ少佐や首里市文化部などに琉球文化を理解し、その文化の高さを顕わす残欠文化財の保存に努めようと尽力した人々たちが活躍した戦後直後から昭和29年の文化財保護法制定以前までの9年間の期間をさす。

そして、3つめエポックに54年に琉球政府文化財保護法が制定されてから72年の祖国復帰までの18年間の期間である。

これら半世紀の短い期間で、琉球王国時代から築かれてきた琉球固有の文化財は戦争によって大いに翻弄されることになったのである。最後にこの3つの時期の特徴を述べて、昭和初期から復帰前までにおける沖縄県の文化財保護の歴史を概観することにしたい。

まず最初に、県外人によって琉球の文化財が認識された1つめの時期は、琉球の石造あるいは木造の独特の建築様式の美が注目を集め、建造物に係る国宝の誕生を生むことになった。国宝誕生による「自文化認識による保護の時期」といえる。この時期に本土側の琉球の文化財に対する視点が国宝という形で結実することになった。一方沖縄側にとっても文化史の上で画期的な重要な事象が起きた。沖縄側の郷土文化に対する高い認識が生まれたことである。それは、沖縄の美術工芸や歴史資料を中心とする文化財の保護を図る上で記念すべき公開・収蔵施設が誕生したことである。沖縄における博物館の嚆矢となった沖縄県教育會附設郷土博物館がそれで、沖縄の歴史上において特筆されなければならないことである。

この施設づくりに奔走した島袋源一郎の功績は、氏の代表的著作である『沖縄縣國頭郡志』以上に注目される必要がある。教育者でありかつ郷土文化に対する高い識見を持った島袋の熱意と執念が郷土博物館を誕生させたといつても過言ではない。郷土博物館を取り巻く社会状況は決して追い風ではなかったはずである。時代はすでにいわゆる15年戦争に突入し、地域社会における軍事演習は日常的であった時期である。当時県外出身者が大半を占めていた沖縄県当局や軍関係者にとって、琉球文化の殿堂としての郷土博物館に対してどれほどの関心が払われたかは不明であるが、少なくとも良い評価は得られてなかっただように推察される。首里城北殿の改修代や展示資料収集費などの施設づくりの経費約1万圓は、県教育會が小学校ノート販売の印税を蓄えてきたものや、博物館づくりに賛同した企業などからの寄付金で賄われたものであった。沖縄県からの補助は一切なかったと思われる。また運営費についても首里市が補助金を支出しているぐらいで、県の補助金は確認できない。

2つめは「公立博物館の収集活動による保護の時期」とよべる。本島中部の石川市東恩

納に設置された米海軍政府ハンナ教育部長らの提案により設置された沖縄陳列館（東恩納博物館）と首里市文化部の豊平良顕らによって開設された首里市郷土博物館は、沖縄の歴史文化をこよなく愛する人々によって積極的な文化財の収集活動が行われた時期であった。両博物館が龍潭湖畔の民政府立首里博物館に合併し、今日の沖縄県立博物館の礎を築くことになったのである。また、53年のペルリ来琉百年祭時に返還された尚家文化財は、人々の文化財に対する意識の高揚と博物館の存在を社会にアピールする絶好の機会となった。沖縄史蹟保存会や琉球文化財保護会などの官民一致の団体が文化財保護の具体的な方策に従事し、文化財保護法制定の世論を喚起した時期でもあった。

そして、3番目が「文化財保護法による保護の時期」。いよいよ琉球政府文化財保護委員会が54年に設置されることになったのである。戦前が県外人からみて価値の高い文化財の指定であったのに対し、琉球政府文化財保護委員会の指定は沖縄の人々による沖縄の人々にとって価値の高い文化財指定であったという特徴を持つ。その典型例が三線の指定といえよう。工芸品17件のうち11件が三線で占められることになった。また、史跡の文化財指定も44件と多い。その中には、首里城跡、中城城跡、座喜味城跡、今帰仁城跡、勝連城跡、斎場御嶽など2000年に世界遺産に登録予定の「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の城跡がすべて特別史跡や史跡として指定された。当時の指定がなければ、今日の健全な保全はなかつたであろう。

また、琉球政府文化財保護委員会は時代の求める開発と文化財保護の間で苦悩の歴史を背負わざるを得なかった。玉陵問題や円覚寺問題、埋蔵文化財の保存など様々な難問を乗り越えながら、沖縄文化の番人として祖先からの貴重な文化遺産を守ってきたのである。

この約半世紀の時代の流れの中で、沖縄を代表するシンボルとしての国宝のすべてが戦争により破壊、飛散し無に帰してしまった。戦後の文化財保護の歴史は、飛散した文化財のかけらが人々によって再生されようとする躍動の歴史であったといえるかもしれない。

柳宗悦が琉球の文化財保護法制定時に送ったメッセージ「沖縄の人々が自己の固有の文化財を大事に考え、更にその価値が芸術的に見て、並々ならぬ高度のものだという自覚を強められんことを。島は小さく又貧しくともその文化は大きく又富んでいることを誰も信すべきだ」は、現在においても全く色褪せない精神であり、地域主義に基づいた文化財保護法の精神に相通するものがある。琉球政府文化財保護委員会にとって、こんなに心強い餌はなかったのではなかろうか。琉球政府文化財保護委員会は、功罪の罪の部分は別の機会に論じるとして、少なくとも功の部分においては、一国の気概と誇りをもって自分たちの信じる文化財の価値観を大いに推進したことにあるといえる。このことは大いに評価される。

本稿では戦前から戦後の廃墟の中から立ち上がった琉球政府時代までの文化財保護の歴

史の概観を試みた。大まかな流れではあるが、重要と思われるところは紙幅を割くことにした。本県における文化財保護を目指した団体による保護史は70年余のもので、今回は前半の激動期に焦点をあて文化財に係わる人々にまつわる歴史を記したつもりである。沖縄の人々が自らの歴史と文化を理解しようとした意欲的な姿勢を、私たちはこの半世紀の激動の歴史から学ぶことができる。その学びとは、柳宗悦のことばを借りれば、「島は小さく又貧しくともその文化は大きく又富んでいること」を再認識することに他ならない。

謝 辞

元沖縄県立博物館長 外間正幸氏及び故喜久里教達資料に関し、ご遺族の喜久里教明氏のご教示、資料の提供に心から感謝申しあげる。

注 記

1. 琉球文化財保護委員会の指定した文化財の件数は総数で182件であるが、そのうち2件が指定解除されている。埋蔵文化財「仲宗根貝塚」は昭和31年に指定されたが、ホテル建設工事のために指定解除され破壊された。もうひとつは天然記念物「今帰仁街道の琉球松並木」で昭和30年に指定されたが、松食い虫の被害により昭和34年に指定解除された。
2. 沖縄史蹟保存會の説明は沖縄タイムス大百科事典による。
3. 故喜久里教達の新聞記事に掲載されている内容で、新聞社名と厳密な月日は不明である。昭和2年7月の新聞切り抜きで、会員募集を兼ねた内容になっている。当時の学会規約が記され貴重な資料と思われる所以、付録に掲載した。
4. 沖縄縣教育會とは、1886年（明治19）1月25日に沖縄私立教育會として発足した本県最初の組織的な教育団体。教育上の施政を翼賛して本県教育の普及改良及び上申などを図ることを目的とした。会の名称も変遷がある。1891年に沖縄縣私立教育會となり、社團法人沖縄教育會（1898）から沖縄教育會（1904）。さらに1915年には沖縄縣教育會に名称替えを行った。創立時の会員数は、225人で次第に増加していった。
5. 『沖縄教育No.240』（昭和11年8月号）の博物館開館紀年号の中で「郷土博物館建設経過報告」（42—43p）と題して島袋源一郎が記している。
6. 『沖縄教育No.240』（昭和11年8月号）より。
7. 昭和会館は沖縄縣教育會の会館。同会は大正初期から沖縄県庁学務課内に事務所を置いていたが、昭和7年から11月以降事務所を新会館に移転した。同会館は、昭和3年御大典記念事業として県下2千数百の教職員並び男女青年団が協力して記念館建設の計画を立て、資金2万余円を得て、昭和6年起工、昭和7年に竣工し、昭和7年11

月10日に開館式が行われた。

8. 『沖縄教育No.240』(62p)
9. 『沖縄教育No.309』(昭和17年5月号)の故島袋源一郎氏追悼號の中で東恩納寛惇が「源一郎君の事ども」(7—11p.p.)と題して追悼文をよせている。
10. 沖縄縣教育會附設郷土博物館資料目録から資料の件数を筆者がまとめたもの。点数にすると、その数字を上回ることになる。
11. 『琉球教育要覧1955年度版』234pの首里博物館の現況によると、収蔵品は1,387点になっているが、内訳の合計は1,400点になるので、ここでは内訳合計を採用した。
12. 盛嶋開鐘は尚家伝来の開鐘の中の開鐘といわれる三線の名器で、1982年(昭和57)に尚家から沖縄県に寄贈され、現在は沖縄県立博物館で所蔵される。1994年(平成6)3月15日に沖縄県指定有形文化財(工芸品)に指定された。
13. 1957年当時の通貨はB円なので、167\$は1\$=120B円で換算したものである。

参考文献

- 池宮正治「沖縄の三線」「沖縄の三線」沖縄県教育委員会 1993年(平成5)3月
大城将保『琉球政府』ひるぎ社 1992年(平成4年)5月
沖縄縣教育會編『沖縄教育No.240』沖縄縣教育會 1936年(昭和11)8月
沖縄縣教育會編『沖縄教育No.248』沖縄縣教育會 1937年(昭和12)4月
沖縄縣教育會編『沖縄教育No.309』沖縄縣教育會 1942年(昭和17)5月
沖縄県教育委員会編『沖縄の戦後教育史』沖縄県教育委員会 1977年(昭和52)3月
沖縄県教育委員会編『沖縄の戦後教育史(資料編)』沖縄県教育委員会
1978年(昭和53)3月
沖縄県教育委員会編『沖縄教育年報(1972年版)』沖縄県教育委員会
1973年(昭和48)3月
沖縄県教育教育庁文化課編『平成11年度版文化行政要覧』沖縄県教育委員会
1999年(平成11年)9月
沖縄県群島政府統計課編『沖縄群島要覧1950年版』沖縄群島政府1952年(昭和27年)1月
沖縄県立博物館編『沖縄県立博物館50年史』沖縄県立博物館 1996年(平成8)12月
沖縄県立博物館編『特別展甦る沖縄・戦災文化財と戦後生活資料展』
沖縄県立博物館 1995年(平成7)12月
沖縄タイムス社編『沖縄の証言(上巻)』沖縄タイムス社 1971年(昭和46)5月
沖縄タイムス社編『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社 1983年(昭和58)5月
喜舎場静夫「沖縄とハンナ博士—追悼にかえて」沖縄タイムス社

1993年（平成5）10月19日

園原 謙「沖縄県指定有形文化財としての三線」『特別展三線のひろがりと可能性展(図録)』

沖縄県立博物館 1999年（平成11年）8月

園原 謙「県指定無形文化財「久米島紳」」『久米島紳—あゆみとわざ』

沖縄県仲里村教育委員会 1999年（平成11）3月

宮城悦次郎「ワトキンス・ペーパーの背景とその資料的価値」『沖縄戦後初期占領資料

解題』ワトキンス文書刊行委員会 1994（平成6）5月

付 錄

沖縄博物學會会則（昭和2年8月）

第一条 本会を「沖縄博物學會」と称す

第二条 本会の目的は左の諸学科を研究し特に沖縄における事項を調査するにあり

一、植物学 二、動物学 三、地質鉱物学

第三条 本会の事務所を当分沖縄県立第二中学校内に置く

第四条 本会に左の役員を置く

一、会長 一名 本会の事務を総理す 一、副会長 一名 会長を補佐す 一、評議員
若干名 諸種の議事をなす 一、幹事 若干名 庶務会計編集を分掌す イ、庶務係は
記録、通報、集会その他に関する件を掌る ロ、会計係は金銭出納一切を掌る ハ、
編集係は会報の編集出版物の刊行に関する件を掌る

役員は総会に於て会員中より選出す 但し顧問若干名を推戴す

第五条 役員の任期を一ヶ年とす 但再選することを得

総会前に役員中事故ありて欠員を生ずる時は臨時総会に於いて補欠選挙をなすことある
べし

第六条 本会は必要に応じ会長により委員を指名し調査研究を嘱託す

第七条 本会は毎年八月総会を開き会務を報告役員の選挙及議事をなす

第八条 毎年二回例会を開催し研究発表並意見の交換をなす

第九条 隔月一回役員会を開催し事務の打合せその他の研究をなす

第十条 本会の目的を達せんがため左の事業をなす

一、会報 二、出版物の刊行 三、採集旅行 四、講演その他

第十二条 本会に入会せんとするものは会員の紹介を要す

第十三条 退会せんとするものはその旨届け出づべし

第十四条 会費は一ヶ年金二円とし毎年八月之を前納す

金五円以上一時に寄付又は前納したものに対しては以後会費を徴収せず

会計年度は八月一日より翌年七月末日迄とす 但し退会の旨届あるも既納の（不明）
第十四条（不明）

沖縄縣教育會附設郷土博物館規程（昭和11年7月）

第一條 本館は沖縄縣教育會附設郷土博物館と称し当分首里城内北殿に設置す

第二條 本館は郷土古今の美術工芸博物その他教育参考品を収集保存又は委託を受けて公衆の観覧に供しその教養及び学術研究に資するを以て目的とす

第三條 本館は前条の目的を達成するため展覧会講演会又は座談会等を開催することあるべし

第四條 本館に左の職員を置く

館長 一名 教育會長之を嘱託す

主事 一名 教育會長之を任命す

幹事 若干名 全上

助手 若干名 全上

第五條 職員の職掌を定むる k と左の如し

館長は本館の施設経営に関する一切の事務を管理す

主事は館長を補佐し本館施設経営の事務を執掌す

幹事は本館の庶務会計事務に従事し陳列品保管の責に任ず

助手は主事幹事の命を受け本館の事務に従事す

第六條 本館陳列品の観覧料を定むること左の如し

大人 一人 金拾錢

学生 一人 金五錢

小学生 一人 金貳錢

教育會員 一人 金五錢

第七條 本館の観覧時間は左の如し但し時宜に依り伸縮することあるべし

一 自四月一日

至九月卅日 午後八時より午後九時

二 自十月一日

至三月卅一日 午前九時より午後4時迄

第八條 本館の定期休館日は左の如し但し臨時の休館はその都度之を掲示すべし

一 歳首 自一月一日至一月三日

二 紀元節

三 天長節

四 明治節

五 歳末 自十二月廿九日至十二月卅一日

第九條 本館に功労ある者及び館長に於て必要と認めたる者に観覧上特別の便宜を与ふ

第十條 精神病者、醉狂者と認むる者又は伝染性の疾患ある者その他館内の風紀を紊し若しくは静肅を害する虞ありと認むる者及び係員に於て有害と認むる者は登館を許さず第十一條本館規定並観覧に関する提示に違背し若くは係員の指示に従わずその他不都合の行為ありと認むる者は退館を命じ又は登館を禁ず

第十二條 室内に於ては静肅を旨とし喧噪の行為をなすことを禁ず

第十三條 募集資料は館外貸出を為さず

第十四條 本館に物品を寄贈せんとする者は寄贈申込書に品目数量住所氏名を記載して之を提出するものとす

第十五條 寄贈の物品には寄贈者氏名及寄贈年月日を標記し感謝状を贈呈して永くその厚意を表するものとす

第十六條 公衆の観覧に供する目的を以て本館に物品を委託せんとするものは其品名数量住所氏名等を記載せる委託書を差出し館長の許諾を得たる上現品を送付するものとす

前項の委託物品に対しては館長より保管証を交付す

第十七條 委託品は本館収蔵の物品と同一の取扱をなす

第十八條 委託品は委託者の請求に依り隨時之を返納す

第十九條 委託及辯付に要する費用は総て委託者の負担とす但し事情に依り本館に於て之を負担することあるべし

第二十條 委託品にして天地地変等不可抗力に依り亡失又は毀損したる場合は本館其責に任ぜず

第二十一條 本館は毎月五日迄に前月分日々観覧人員調並観覧料金調書を作製して県教育会長へ報告すべし

第二十二條 本館の経費は県教育會が定むる所による
本則は昭和十一年七月より之を施行す

※ 本文のひらがなは、原文ではカタカナ表記である。

博物館における三線づくり

～ 体験学習教室「三線づくり」の実践より ～

仲底善章

(沖縄県立博物館)

Museum Workshop : making a Sansin

yosiaki NAKASOKO

(Okinawa Prefectural Museum)

I. はじめに

これまでに、当博物館では子供たちを対象にした「体験学習教室」を開催してきた。

その間に、『大人を対象にした体験学習教室』の実施の要望もあり、今回特別展「三線の広がりと可能性展」の一環として「三線づくり」を計画・実施することになった。受講対象者は大人を予定し、中学生については保護者同伴を応募条件とした。

本講座、実施の1年前から棹の材料を確保し、乾燥・保管して備えた。通常、棹は粗取りをした後3年～5年以上寝かし、十分に乾燥させたのち製作にあたること。

講座の内容としては、(1) 桧づくり
(2) チイガづくり (3) 皮張り (4) 組み立ての4つの作業工程を実践することである。「桟の漆塗り」については今回は省いた。

今回の講座実施にあたっては、三線づくりの指導を 比嘉武光（比嘉三線店店主）、平良浩希（沖縄県立盲学校教諭）、資料提供を上原安敏（那覇市

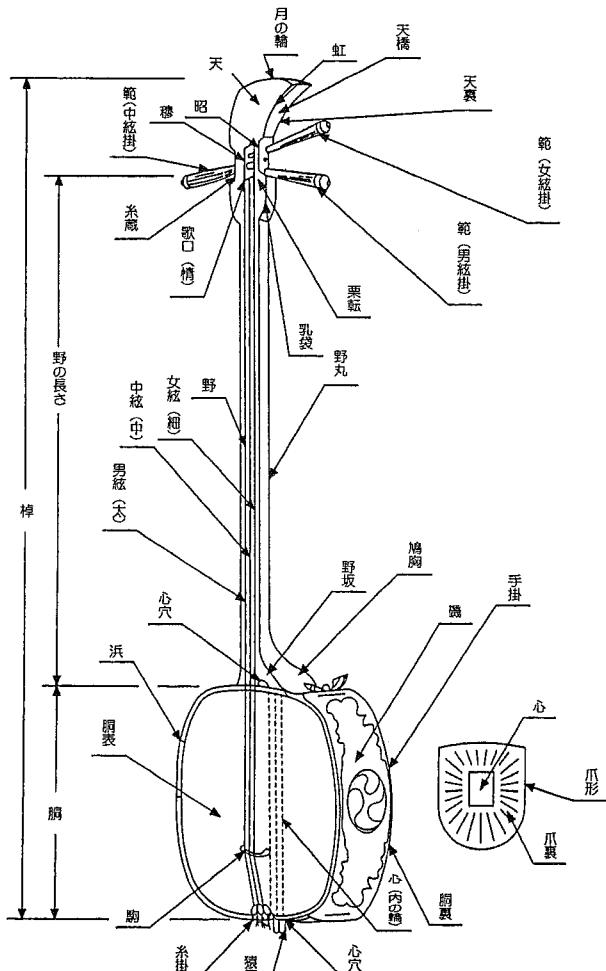


図1 三線の各部の名称

立小禄中学校教諭)、製作会場として、那霸市立小禄中学校の好意により、技術室及び機械・工具を使用させてもらいました。

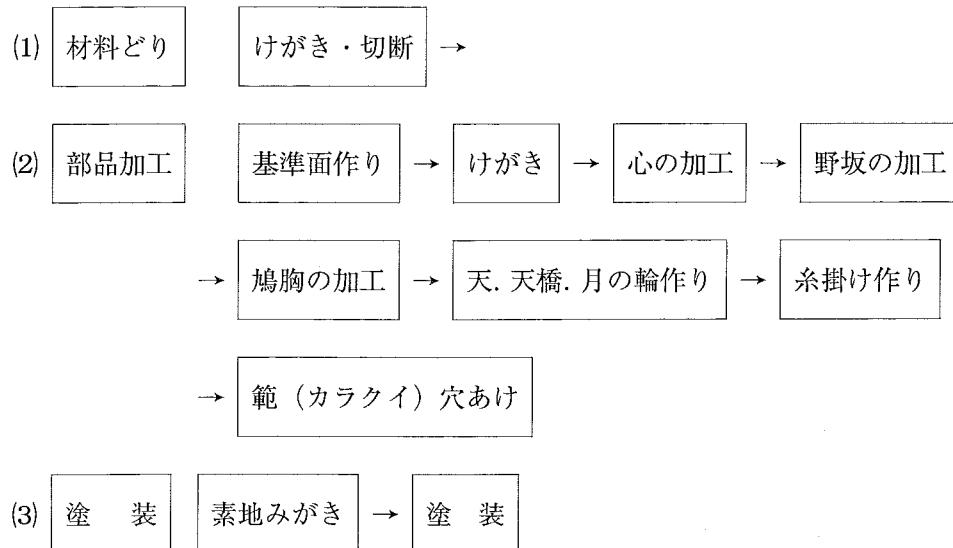
以下、博物館が実施した「三線づくり」の様子を、使用した図面や写真を利用して、報告します。

II. 三線の製作の実際

三線の製作は、①棹の製作 ②チイガの製作 ③チイガの皮ばり ④全体の組み合わせの手順を踏むことになる。今回は博物館での三線づくりの実践を通じた製作過程を報告する。

1 三線の竿（さお）の製作

1 三線の竿（さお）の製作手順



2 製作手順の方法

1 材料の平面、側面をけずり基準面づくりをする。

(1) 基準面をきめる（平面と側面）

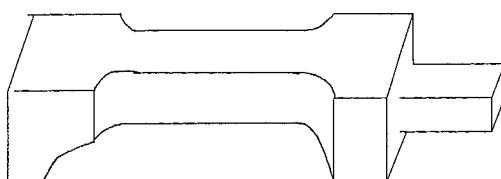
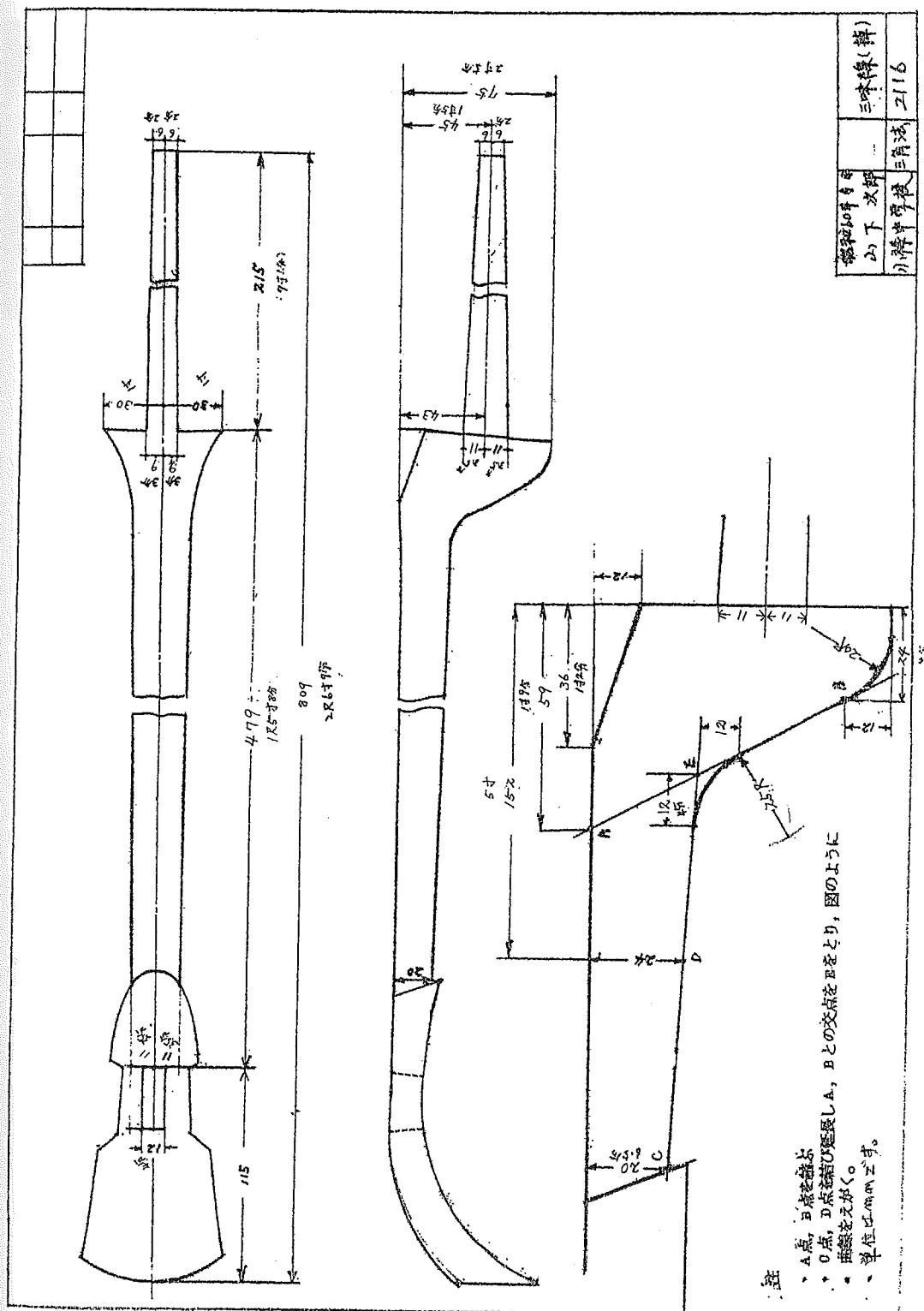


図2 桨の基準面の決定図



写真1 基準面を決める

資料 図3 桿の寸法図



2 材料の平面に中心線を引く

(1) 中心線を引く

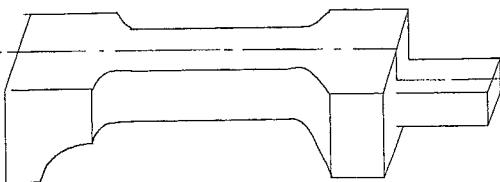


図4 中心線のけがき図

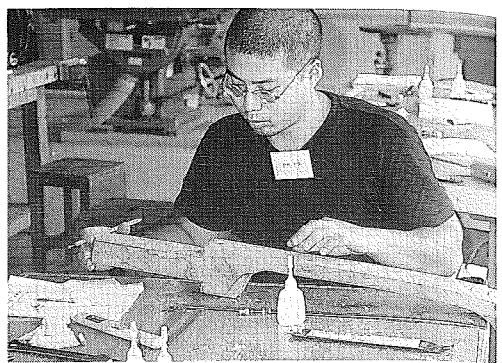


写真2 中心線を引く

(2) 基準面にさし金をあて中心の位置を決めて中心線を引く

※ 使用する工具は「さし金」と「直角定規」・・・使い方は正確に

3 材料の平面に三線のさおの平面図を描く。

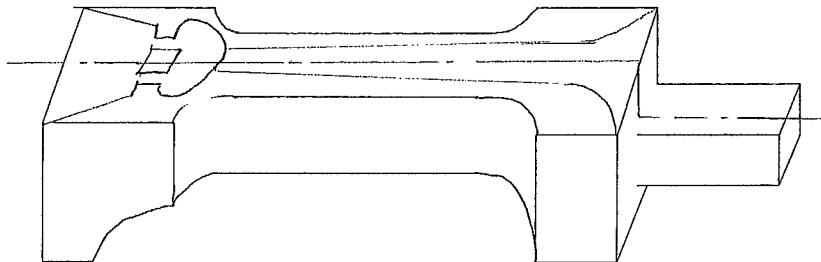


図5 棒の平面へのけがき図

(1) ①②の部分は型紙を利用して描く

※ 材料に引いてある中心線に型紙の中心線を合わせ、○印のついた面を利用して描く。

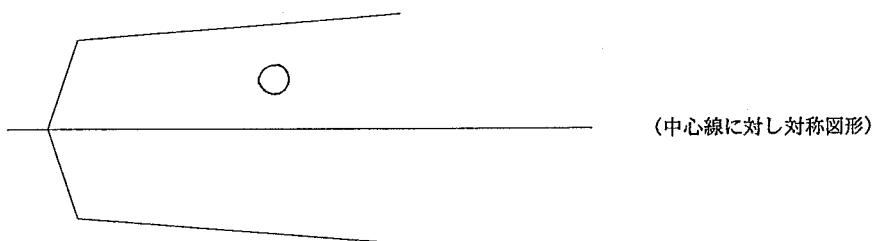


図6 型紙1図

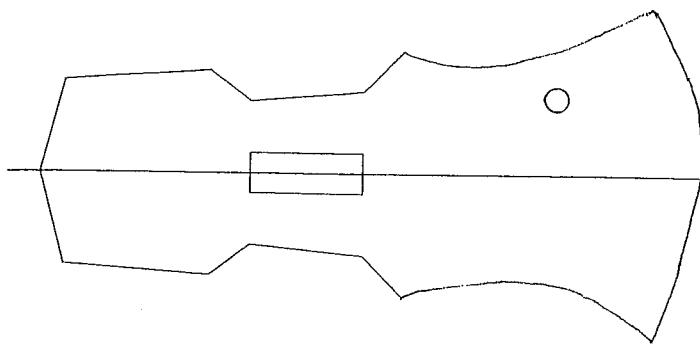


図7 型紙2図 (表)

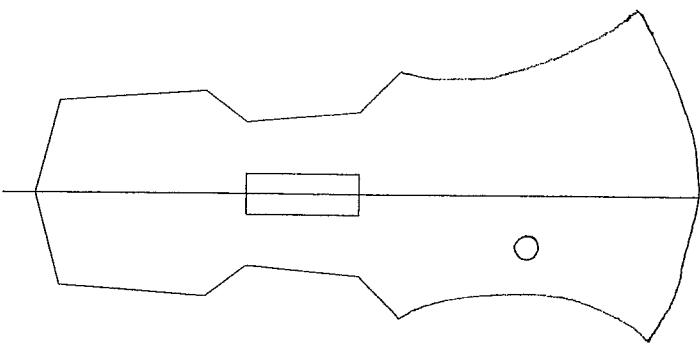


図8 型紙3図 (裏)

4 心の部分（さお）のけがきと製作

- 材料の平面にけがき（三線の平面図）が終わりと、心の部分（材料）の側面に図のように中心線を引いて、側面図を描く。

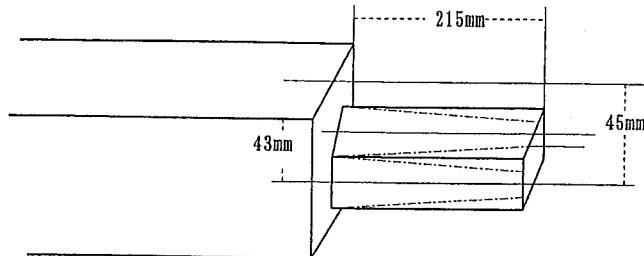


図9 心の部分のけがき

(1) 側面の中心線の引き方

- 中心線の位置を決める。心の付け根で上面から43mm、先の方で45mmの位置で中心線を引く。
- 中心線を引いたら、製作を見て側面のけがきをする。

(2) 心の加工

- けがき線の外側を「帯のこ盤」で切断してする。
- 「帯のこ盤」を使う際には次のことを必ず守るようにすること
 - ① 必ず指導者の指示のもとに使用すること。
 - ② 「帯のこ盤」のしくみを理解して使用すること。
 - ③ 無理に押して使用しないこと
 - ④ 「帯のこ盤」で切ってよいところを必ず指示を受けておくこと。
 - ⑤ スイッチは使用する人で入れること。
 - ⑥ 使用中の「帯のこ盤」のまわりには近づかないこと。

5 野坂、鳩胸のけがきと加工

(1) 野坂のけがきと加工

- けがきの仕方
心の付け根から水平方向に36mm、垂直方向に12mmをとて2点を結ぶ。
※ 加工の仕方、切断は「帯のこ盤」、仕上げはこの目の「やすり」で行う。

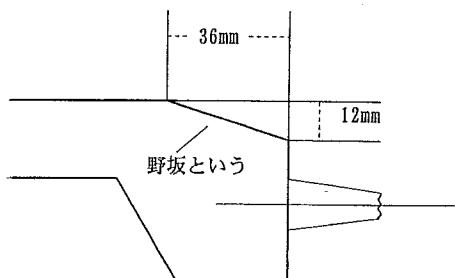


図10 野坂のけがき図

(2) 鳩胸のけがきと加工

- けがきの仕方
 - ① 心（しん）の付け根を基準にして、水平方向の点Aに57mm、垂直方向を下に



写真3 帯のこ盤での切断

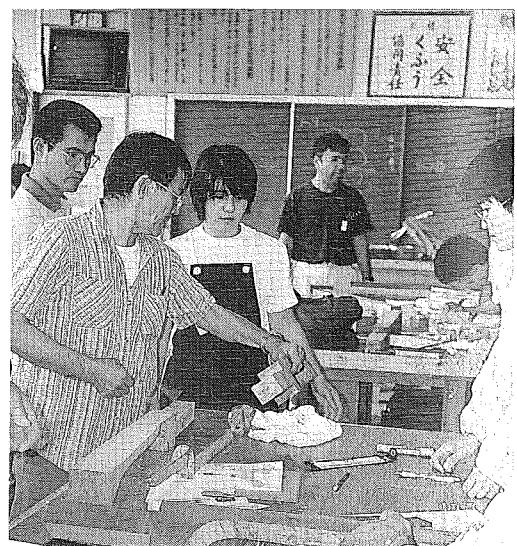


写真4 野坂のけがき

75mmその点から水平方向に24mm、その点から垂直方向に上に12mmの点Bを取る。
点Aと点Bを結ぶ線を引く。

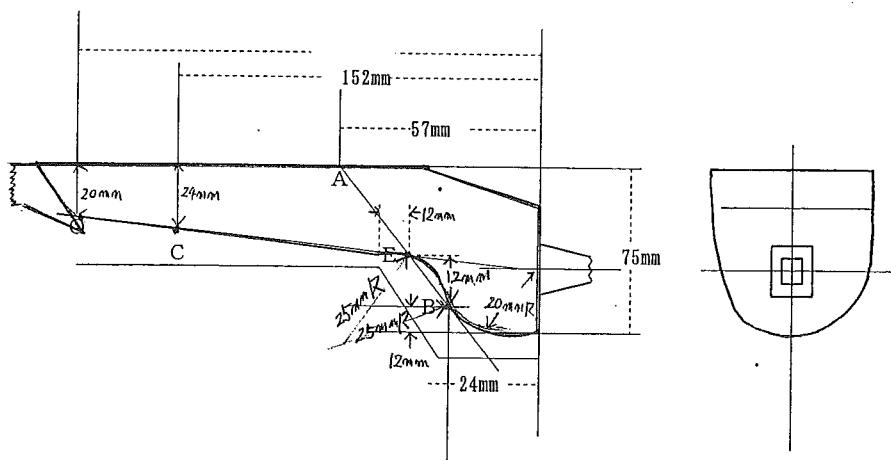


図11 鳩胸のけがき図

- ② 心（しん）の付け根から水平方向に152mmを取り、それから垂直方向の下に24mmの点Cを取り。付け根から水平方向に423mm垂直方向下に20mmの点Oを結び、そこから点Cを通り、直線ABとの交点Eを作る。
- ③ 交点からC点側に12mmB点側に12mmの点を取る。この2点を通る、半径25mmの円弧を引く
※ 通常、棹のけがきは型板を作成して使用している。

6 天、天橋、月の輪の加工

糸ノコ機で粗取りをした後、木工ヤスリや木工ナイフを使用して形を整え、最後はペーパヤスリを使って仕上げる。

7 歌口の加工

歌口は三線の善し悪しを決定する重要な場所なので、最も神経を集中して加工する必要がある。天の方の歌口は、裏と表で切り口にずれがあるので、穴あけの際にはずらして、穴あけをすること。曲



写真5 天、天橋、月の製作

線の部分はヤスリを用いて加工していく。カラクイ穴の穴あけは3mmと5mmのドリル刃を使って穴あけをする。

8 糸掛けの製作

今回は時間的な余裕が無かったので、市販されている「糸掛け」を購入して使用する。

糸掛けは、どの三線店で販売している。

9 範（カラクイ）穴あけ

カラクイも市販の物を使用する。穴あけがドリルを使用する。ドリルの口径は1.2mmを使用する。



写真6 カラクイ穴の穴あけ

10 素地みがき

ペーパーヤスリを使用して行う。最初に粗めのは120番を使用し、その後、細かめの180番使用して行うとよい。

11 塗装

今回は塗装については実施しない。

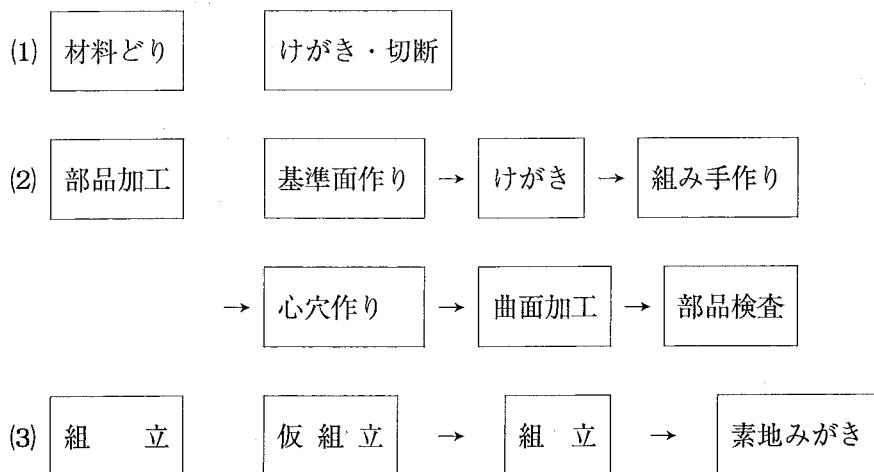
必要であれば、漆塗りの専門の三線店にお願いすると良い。



写真7 素地みがき

2 三線の胴（チイガ）の製作

1 胴（チイガ）の製作手順



2 脇（チイガ）のけがきと切断

(1) 基準面づくり

- 材料の平面（表と裏）と側面を自動カンナ盤や手押しカンナ盤でけずり基準面を作る

※ 基準面は表平面とけずった側面を基準にする。

側面の手押しカンナは慎重に行うこと。講師に応援をお願いしても良い。

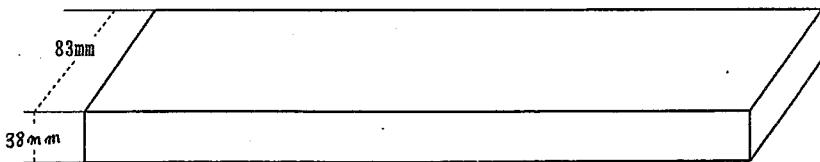


図12 チイガのけがき図

(2) 脇（チイガ）の材料どり

- 基準面を見て、基準面から必要な長さを取る。
- 必ず切りしろを取ってけがきをすること。
- 線を引くときは直角定規か差し金を使うこと。

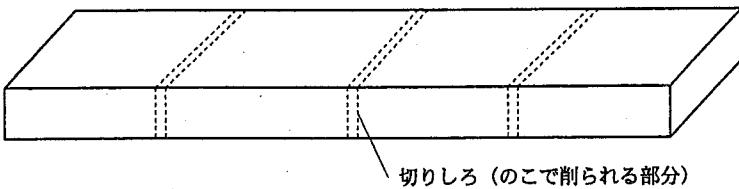


図13 チイガの材料どり図

(3) 切 断

- 丸のこ盤を使います。（使用上の注意をきちんと守ること）
- 中央だけ切っておきます。

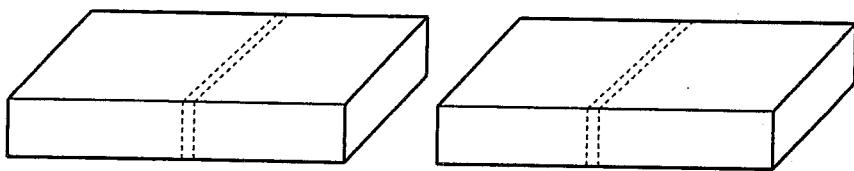


図14 チイガの切断図

(4) 基準面にけがきをする。

- 切った2つの材料に部品図どおりにけがきをかける。
- 長さを測る時は必ず基準面・点からいくら取るというようにして測る。

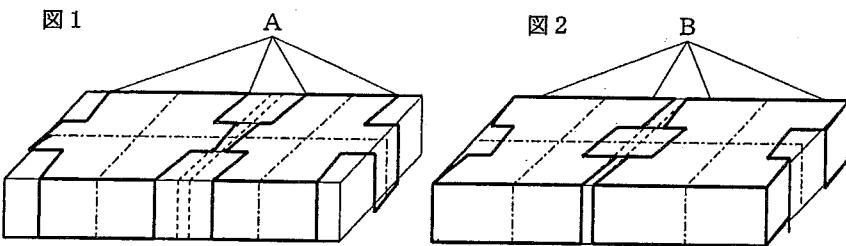


図15 基準面へのけがき図

- ・ 図1には基準面をもとに
縦・横の中心線を引く。
(表も裏も引く)
 - ・ 部品図通りにけがきをする。
 - ・ 図2も基準面を元に縦・横に中心
線を引く。(表も裏も引く)
 - ・ 部品図通りにけがきをする。
- ☆ 図1の心穴は表の裏の両面に描く。
☆ 図1のA、図2のBの線は裏まで引いておく。
☆ 直角定規や差し金は常に、基準面にあてて使う。

* 作業のポイント

- ◎ なぜ、基準面をつくり作業をするのか、理解させること
- ◎ 直角定規やさし金の正しい使い方（基準面への当て方、持ち方）を理解させること。
- ◎ 切りしろの必要性とその大きさについて
- ◎ 自動カンナ盤のしくみと安全な使用法について
- ◎ 手押しカンナ盤の仕組みと安全な使用方法について
- ◎ 中心線の必要性について

3 脇（チイガ）の部品の寸法図

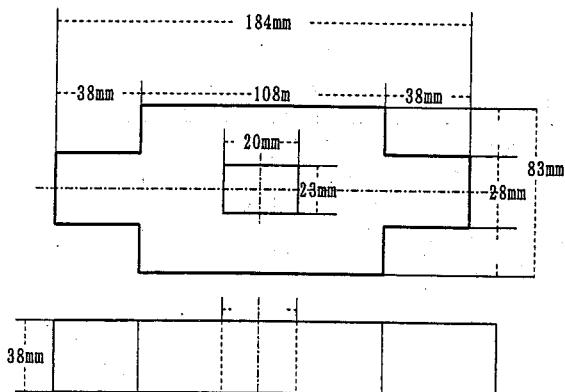


図16

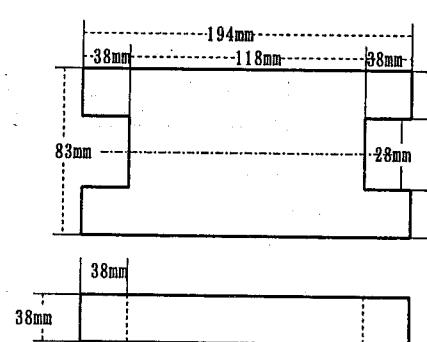


図17

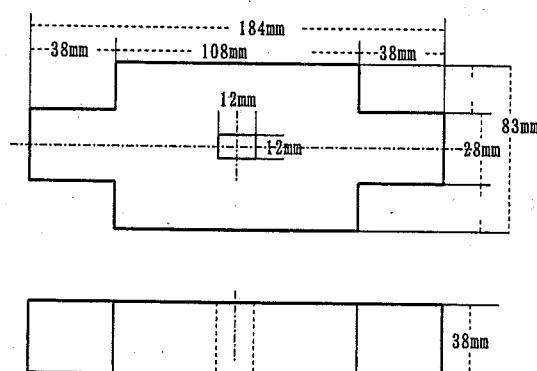


図17

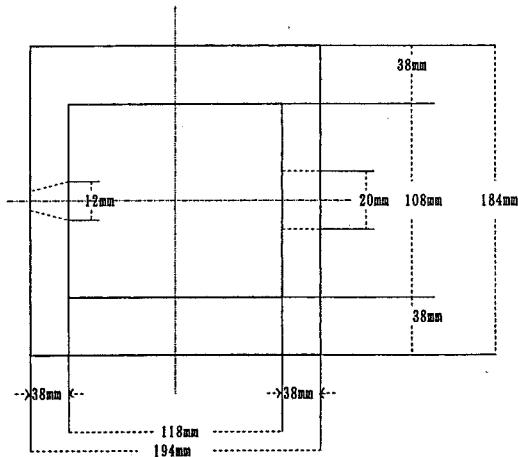


図19

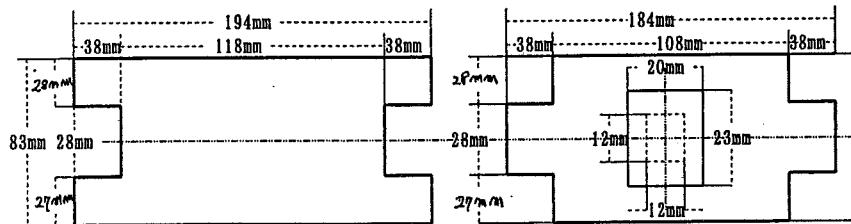


図20

4 脇（チイガ）の加工

(1) 組み手づくりと心穴あけ

① 組み手づくり

- 図1の組み手部分を「帯のこ盤」を使って縫びきをする。
- けがき線の外側を切る。
- 両端の横びきは、「脇つき」のこで切る。真ん中の部分は「角のみ」か「のみ」で切り取る。(角のみを使用する場合は表と裏からけずる。)

※ 作業のポイント

- 帯のこ盤は正しい使い方をする。(材料の入れ方、力の入れ具合、目や足の位置が重要である。)
- 角のみ盤の正しい使い方を充分に理解すること。
(材料の固定の仕方、操作の仕方、穴のあけ方、基準面の利用の仕方)
- のみの使い方についてはきちんと理解しておくこと
- 脇つきのこの使い方についても確実に理解しておくこと。

(のこの持ち方、力の入れぐあい、
目の位置など)

② 心穴づくり

- 図1 心穴の部分を角のみ盤で、穴をあける。
- 表と裏の両面から穴をあける。
- 材料は万力にしっかり固定して穴あけをする。
- 裏面からの穴あけで、材料を裏返すとき、基準面を間違えないようにする。

※ 先に裏面から番号順に心穴づくりを行い、表面（基準面）は後で行うこと。

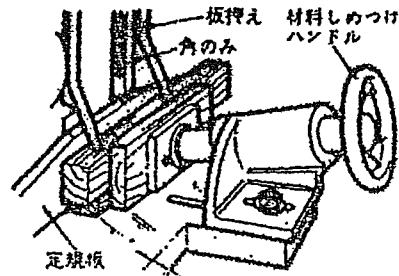


図21 万力での固定の仕方

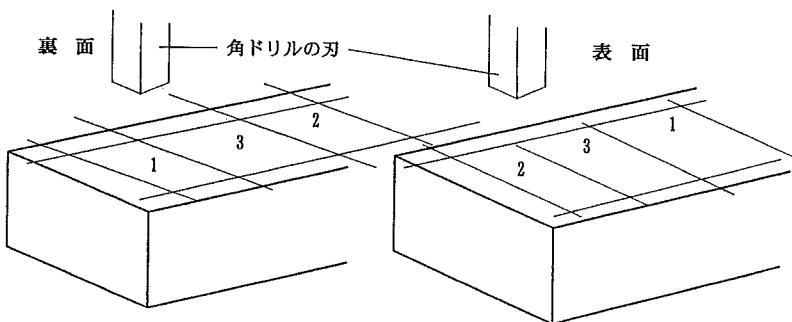


図22 心穴の加工図

(2) 脇（チイガ）の曲線部の加工

- 脇（チイガ）の内側部分の加工
 - けがきの線にそって「帯のこ盤」で切る。（仮組立してから切断すること）。
 - 「帯のこ盤」での曲線部の切断は、注意深く行ってください。
- 脇（チイガ）の外面部分の加工
 - 仮組立したまま、けがき線にそって「帯のこ盤」切っていく。
 - ノコ刃ヤスリで、曲面けずりを



写真8 チイガの加工

する。

(帯のこ盤での曲面加工も注意深く行うこと)

- 接着剤をつけて組立をする。
- のこ刃ヤスリの目のこまかい方で仕上げていく。

5 部品検査

寸法どおり、正確に部品が仕上がっていいるのか点検をする。

6 組立

(1) 仮組立

仮組立を行い、微調整が必要な場所を直していく。

(2) 組立

木工用接着剤（ボンド）を塗り、胴（チイガ）を組み立てる。その後、瞬間接着剠（アルテコ）を使用して、完全に接着させる。

(3) 素地みがき

ペーパーヤスリを使用して行う。
粗めの物 120番と細かめの物
180番を準備して行うとよい。

7 皮張り

皮張りの作業工程は、音の調整しながら、皮張り用に改良したジャッキを（写真参照）使用して行う。

※ この作業によって三線の音色が決定する。完成した胴（チイガ）の音を参考にしながら、音の調整をするとよい。



写真9 チイガの組み立て

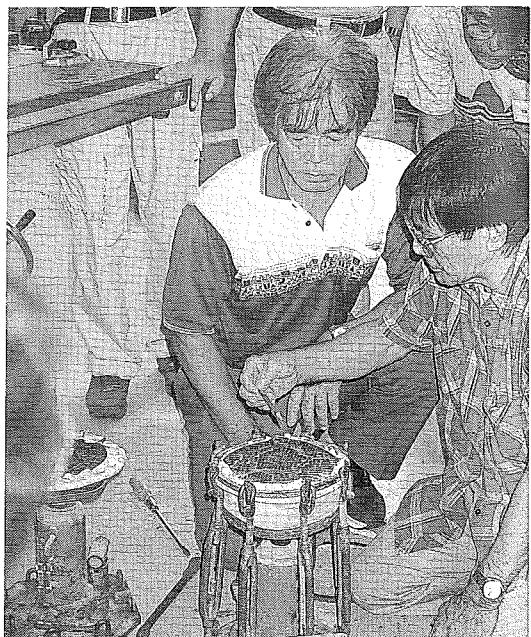


写真10 皮張り作業

3 三線全体の組立作業

これまでに製作した部品 柴とチイガ（胴）の仮組み立てを行い、微調整を行う。微調整が終わると、チイガにテイガー（手皮）を結び付け、柴とチイガを組み合わせる。その後、糸掛けを取り付け、カラクイ（範）に糸（絃）と取り付け、音の調整をして、完成となる。

III. おわりに

今回の「三線づくり」は、8月の毎土日連続6日間の強行スケジュールの中で実施した。当初、定員40名を予定していたが応募者が全体で36名、最終的に講座を受講した方は20名でした。結果的に20名は技術室のスペースの問題、指導者の負担の問題の上から見て、丁度良い人数であった。

応募者が36名にも関わらず実際の受講者数が20名になったのは、1カ月 每土日というスケジュール上の問題が大きなネックであったと思われる。また、材料の調達についても少なくとも3年前から準備し、材料を十分に乾燥させて、製作するともっと「よい三線」に仕上げができるとのことでした。

今回の受講者は全員が、「三線を是非完成させたい。」という強い信念が、わずか1カ月5日間でほとんどの方が「三線」を仕上げることにつながったと思います。

今回の講座で製作した「三線」は受講者の好意により、簡単な三線教室の開催とミニ演奏会の実施、出来上がった作品を2週間お借りし、「作品展示会」まで開催することができました。本当に受講者の熱意に支えられた「三線づくり」の講座でした。ご協力有り難うございました。

次回、「三線づくり」をするのであれば3~6カ月、月2~1回のペースで実施すれば、受講者の負担も少なく、ゆったりした体験講座になると思います。

〈参考・引用文献〉



写真11 自作の三線による演奏会

図録 「特別展 三線のひろがりと可能性展」 平成11年 沖縄県立博物館

第24回全日本中学校「技術・家庭研究収録」昭和60年12月 那覇地区技術・家庭科研究会
中学校 技・家ノート「木材加工2」 昭和60年12月 那覇地区技術・家庭科研究会

ハワイ在の三線について

園 原 謙

(沖縄県立博物館)

In Relation to Sanshin Research in Hawaii

KEN SONOHARA

(Okinawa Prefectural Museum)

1. はじめに

1999年11月29日から12月6日までハワイへ行く機会を得た。目的はホノルル美術館(Honolulu Academy of Arts)からの贈呈される資料の確認及び資料搬出の立会いと、同館主催の資料贈呈式への参加であった。

この贈呈される資料とは、同館が助成したジョージ・H・カー博士の「琉球列島遺跡調査」(1960~1962)の成果品である考古資料約6000点のことである。11月30日に催された贈呈式典には当館から大城将保(沖縄県立博物館長)と通訳として筆者が参加した。

実はこの出張には、もう1つの大きな目的があった。ハワイへの沖縄移民に係わる調査を行うことである。

沖縄から最初のハワイへの移民が那覇港を発ってオアフ島のホノルルに向かったのは、1899年(明治32)12月5日のことであった。一行は当山久三の斡旋によるもので26人のウチナーンチュが翌年1900年1月に新天地ハワイの地を踏んだのである。ちなみに、この年より遡ること32年前の1868年(慶應4)5月、日本人初のハワイ渡航が行われた。

沖縄系移民にとっての1世紀の節目の年は、2000年1月になる。2000年1月8日には沖縄系移民100周年記念の盛大な式典が挙行される計画だと聞く。この式典は、ハワイ沖縄連合会(Hawaii United Okinawa Association)とハワイ州政府による実行委員会の主催によるものだという。

この記念すべき節目の年にあたり、沖縄県立博物館も移民に関する特別展を計画することとなった。99年6月ロスアンジェルスにある全米日系人博物館(Japanese American National Museum)から巡回展受け入れの要請があったことによる。この巡回展は、同館が3年前からハワイやロスアンジェルス、ワシントンD.C.で開催している「弁当からミックストプレイトまで」(原名“From Bento to Mixed Plate”)という展示会である。ハワイへの日系移民初期時代から現在にいたるまでの労苦と栄光の歴史を概観し、今日の日系移民の社会的活躍まで含まれる日系移民たちの1世紀間のプロフィールのような展示会で

あり、世界に向けて彼らの気概を示す展示会でもある。

この巡回展を引き受けるにあたり、当館自身の企画を組み込んだ特別展を計画したいと考えた。題して「日系移民1世紀展—From Bento to Mixed Plate」(仮称)。2部構成の展示を予定している。第1部は米国からの巡回展資料による展示。第2部は当館のオリジナルの展示構成を考えている。この2つめの展示は、当館で開催する以上、「沖縄発の移民」を紹介する展示にしたいと考えたのである。その中で、海外移民地における沖縄文化のシンボリックな存在としての三線を題材に展示コーナーを設ける必要を感じた。

本稿は短時間の調査であったが、沖縄で家宝として扱われる三線が移民地ハワイでも貴重な沖縄文化を象徴する工芸品として大切に扱われている事実に鑑み、ハワイにおける三線や関連調査など三線流出の背景と筆者が調査を行った3名の沖縄系移民者が所蔵する6丁の三線を紹介することにしたい。

2. ハワイに流出した三線とその調査

ハワイに三線が渡ったのは、やはり沖縄移民と時期を同じくする。ハワイ移民1世など、初期の開拓移民にとって、プランテーション労働は大変な労役であった。初期の移民は故郷への仕送りを目的とするための、いわゆる「出稼ぎ移民」であった。一攫千金を狙った移民の夢は現実的には大変厳しいものがあったようである。

当時（明治末期）の労働の日当は10時間労働で男性が約70セント、女性の場合は約50セントであったとされる^(注1)。したがって、1ヵ月26日労働で男性は18ドル、女性は12ドル50セントが基準となっていた。当時の物価の目安がある。50セントで卵が15個買え、鮭缶1個が1ドルの時代であった。そのような中で、心の支えと慰めは故郷に思いを馳せることのできる歌三線に興じることだけであったのだという。

池宮喜輝はその著書『琉球三味線寶鑑』(1954) の中で、昭和10年頃首里人で屋部憲通という人が首里の名家の三線を買い集め、ハワイに売り込んだという話を紹介している。屋部がロスからの帰りにハワイに立ち寄ったころ、同地では三線が大変人気の品になっていたことを知り、そこで沖縄から輸出しようと考えたわけである。そこで、首里の名家などに伝わる三線を買い漁り、高価な値段で売りまくった。ハワイにはその需要が多くあつたのだ。一体どれほどの三線がハワイに渡ったかは不明であるが、後年池宮の調査した時点では約4千丁の三線があったとされる。

当時、池宮は沖縄の貴重な文化遺産である三線の流出について立腹し、屋部に会ってその所行を正そうと考えていたようであるが、その機会を失してしまったようである。しかしながら、池宮も指摘するとおり、結果的には沖縄に所在しないで良かったことになる。ハワイをはじめ米本国や日本本土（東京・大阪地方）の地で大切に守られた（疎開された）

ことによって、多くの貴重な古三線が沖縄戦の戦禍から免れることになったのだ。このことは文化財保存の上で特筆されることである。東恩納寛惇のことばを借りれば、「琉球文化の疎開」がそこにはあった。戦勝国ハワイに沖縄の貴重な文化財が避難されていたことに、歴史の皮肉といいたずらを感じずにはいられない。

戦後ハワイには約4千丁の三線があったと池宮は指摘する。参考までに沖縄本島には5千丁の三線があったという。1952年（昭和27）1月から開始された池宮を中心とした審査委員会による三線調査によると、ハワイにおいて合格品として選別された古三線は、表1のとおりである^(注2)。

表1 ハワイの三線所在状況

島 名	三線 現存数	内審査合格数
オアフ島（ホノルル市）	3, 500丁	105丁
ハワイ島（ヒロ市）	280丁	67丁
カウアイ島（ワイルク市）	200丁	60丁
計	3, 980丁	232丁

その時の審査基準は、つぎのとおりである。

- ①用材が黒木（リュウキュウコクタン）であること。
- ②竿に接ぎがなされていないこと
- ③全体の均整がとれたもの
 - 天（面）、仁（竿）、爪など全体のバランスがとれたもの
 - 野面の波状がないこと
- ④地（心）の削り方、作者のサインの有無を確認

以上の4項目の審査基準に基づき最終的な合否が決定されることになった。その中には、名器であっても心が接がれたことにより、将来狂いが生じる懸念のため惜しくも落とさざるを得なかったものもあったとされる。

この調査はハワイ、ロスアンジェルス、東京方面、大阪方面、沖縄本島の5カ所で実施されており、調査された三線の件数は9,440丁にのぼった。うち、既述の審査基準に則して合格した三線の数は362丁^(注3)で、合格率は2割6分の狭き門になった。合格した三線の地域ごとの数は、ハワイ232丁、ロス2丁、東京方面5丁、大阪方面38丁、沖縄本島85丁となっており、いかにハワイに三線の良器が流れたかを裏付けることになった。

3. ハワイから帰ってきた三線

①健堅与那という三線

1998年（平成10）に当館の収蔵品のひとつに加えられた寄贈の三線がある。この三線は一名「健堅与那」とよばれる。かつてあったとされる由緒書によると、伊江王子が尚育王から拝領したものと伝えられる。この三線は、志多伯開鐘という三線と対をなしていた。伊江家から高安朝常（首里高安殿内）に譲渡され、1936年（昭和11）にはハワイ在の三線師匠の仲真良金にわたり、米本国に渡った仲真からロスアンジェルス在の屋宜盛蒲が譲り受けたものという。屋宜氏は95年に他界したが、琉球三線楽器保存育成会の島袋正雄会長や同会事務局長比嘉常俊氏、ロス在の中谷夏子氏の仲介の労により子息の屋宜盛次氏から当館へ寄贈されることになった三線である。

この三線と対であったといわれる志多伯開鐘は、琉球政府文化財保護委員会によって1955年（昭和30）に本県で初の工芸品として特別重要文化財に指定された3丁の三線のうちのひとつである。したがって、当館は県指定クラスの大変貴重な三線をご寄贈いただいたことになる。

②江戸与那という三線

戦後間もない頃ハワイから帰ってきた三線がある。東恩納寛惇が東京で発見した三線である。この三線は東恩納先生が1939年（昭和14）5月に東京山手の古書市で発見し、後日「江戸与那」として知られる名器であることが判明した。東恩納寛惇の「三味線供養」によると、この三線には付属品としての収納箱がついていた。2丁一対の収納箱には箱書きはないが、奉書にお家流の墨痕鮮やかに記された貼付された詞書があり、そこには「安政三年丙辰（1856）八月廿三日、琉球三味線二挺、浦崎親方進上、玉里大奥」とあったとされる。浦崎親方政種は琉球王府の年頭使者として安政二年五月廿三日、上陸、翌年九月廿四日鹿児島を立って帰国の途についている。玉里御殿（島津邸）で帰国に際しての演奏後に三味線を献上したものであろうと東恩納は推測する。「箱の表に献上品の趣が書記していないだけに、却って臨時の御所望であった事も知られ、従って尋常一様の品物でなかつたことも知られる」と推理する。

薩摩の玉里大奥を出て東京の骨董市に投出されるまでの数奇の運命に思いを馳せ、その三線の靈を慰めようという趣旨で三味線供養祭を営もうという話しになった。多年荒廃のままになっていた首里城南殿に修理を加えて、同年8月5日に南殿において三味線供養を兼ねた三線展が開催されることになった。「江戸与那里帰り」に因んだこの展覧は、当初江戸与那の供養を兼ねることが目的であったが、この際ということになり首里那覇の門外不出の名器約50丁が展示される盛大な三味線祭（展示会）へと発展することになった。こ

の展覧の企画は池宮喜輝と郷土博物館主事であった島袋源一郎によるものであった。展示会終了後、江戸与那は東恩納寛惇から沖縄県に寄贈され、郷土博物館の収蔵資料のひとつに加わることになった。

この話には後日談がある。実はこの三線は戦後行方不明になってしまったのである。ところが池宮喜輝がハワイから米本国へかけて演奏旅行の際、ハワイで江戸与那と邂逅することとなった。沖縄戦の当時、首里城に一番乗りした沖縄出身の二世兵が博物館から持ち出したことによるものであった。沖縄戦当時米軍の一員として参戦した沖縄出身2世たちも、1世から聞かされた三線を戦利品として持ち帰ったのである。この三線はハワイから返還され、1953年（昭和28）に当館の前身の沖縄民政府立首里博物館に寄贈され、1956年（昭和31）に琉球政府重要文化財として指定されることになった。

③富盛開鐘という三線

現在、沖縄県には県指定有形文化財（工芸品）の三線が20丁ある。琉球政府時代の琉球政府文化財保護委員会によって指定された三線が11丁。その後、沖縄県教育庁文化課による1989年（平成1）から1992（平成4）年まで4ヶ年間実施された「県内所在琉球三味線調査」に基づいた612丁^{注4)}の中から厳選された9丁の三線が指定に加えられ、合わせて20丁になった。これら沖縄県指定有形文化財の中にはハワイから渡ってきた三線がもう1つある。

1986年（昭和61）沖縄県立芸術大学へ寄贈する目的で譲渡された「富盛開鐘」とよばれる真壁型の三線がそれである。この三線は沖縄系移民2世でホノルル在の仲宗根盛松氏が戦前那覇で購入し、ハワイに渡った三線という。同氏から首里在の稻嶺盛保氏が執拗に所望し「ウン万ドル」で譲渡されることになった。そのあたりのエピソードについては宜保榮治郎著の『三線のはなし』に詳述されているのでここでは省略する。この三線は仲宗根から稻嶺に県立芸大に寄贈する目的で譲渡されることになった。1994年（平成6）に県指定に指定されたこの三線は旧所蔵者の意志に基づき現在沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館に所蔵されている。

4. 今回調査した三線

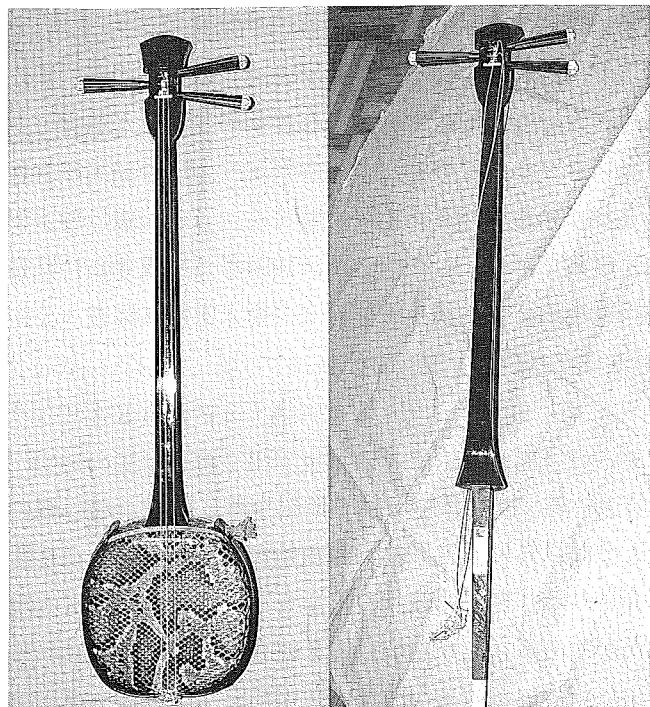
今回2日間しか調査の時間がなかったが、池宮喜輝が約半世紀も前に調査した三線について調査することができた。また、それ以外に「戦災で行方が分からぬのかあまり話題に上らない薄幸の三線」として紹介される「豊平開鐘」の銘をもった三線を調査する機会に恵まれた。この三線の真偽はいかがであろう。6点の三線を紹介することにする。

①三線 豊平開鐘



型 名：真壁型
全 長：77.4cm
心の長さ：21.5cm
糸蔵長さ： 3.3cm
糸 藏 幅： 1.5cm
材 質：リュウキュウコクタン
特記事項：心の右側に「豊平開鐘」
の朱書、後に薄くなっ
たので加筆したという。
心に接ぎあり
所 有 者：Keith K. Nakagane

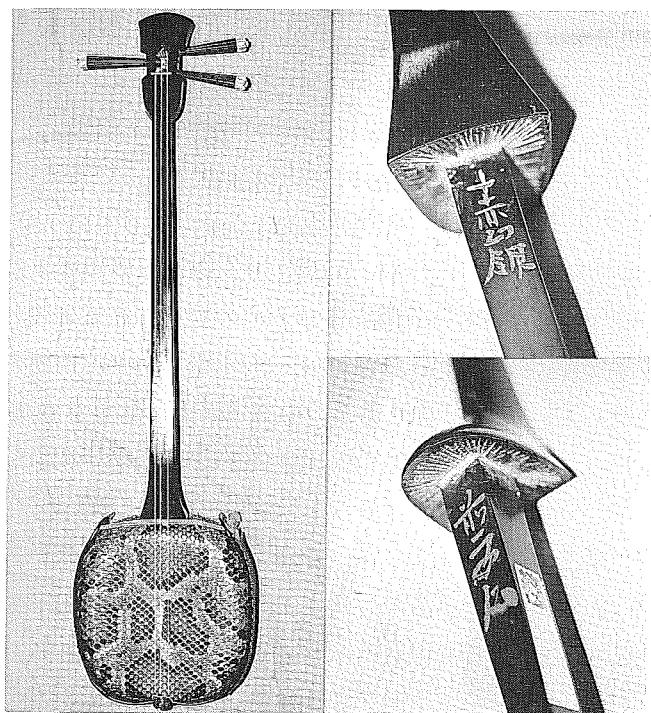
②三線 尾白真壁型



型 名：真壁型
全 長：78.8cm
心の長さ：21.8cm
糸蔵長さ： 3.6cm
糸 藏 幅： 1.4cm
材 質：リュウキュウコクタン
特記事項：幸地亀千代が太鼓判を
押した三線で、開鐘以
上のものであるといわ
れたという。富盛開鐘
の旧所蔵者のもので、
この三線が一番のご自
慢である。

所 有 者：Harry S Nakasone

③三線 真壁型



型 名：真壁型
全 長：78.5cm
心の長さ：22.5cm
糸蔵長さ： 3.2cm
糸 蔵 幅： 1.3cm
材 質：リュウキュウコクタン
特記事項：心の表に「赤嶺」裏に
「前之山」の朱書きが
ある。

所 有 者：Harry S Nakasone

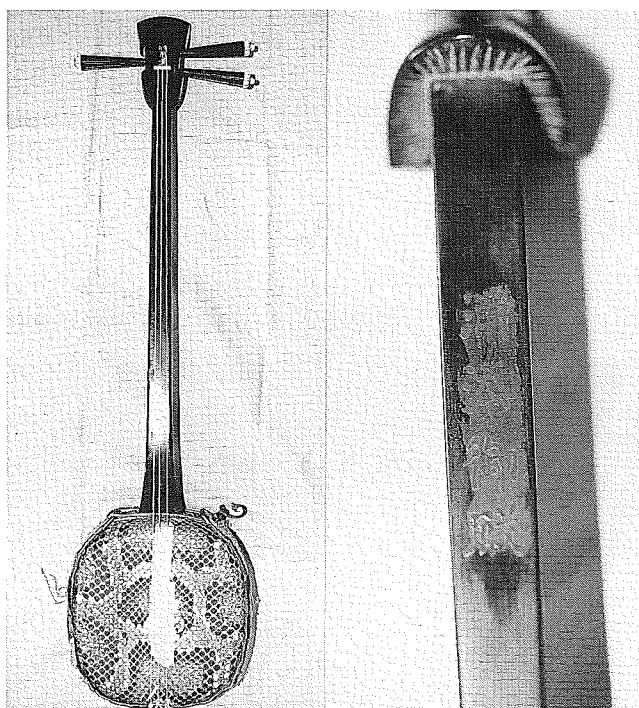
④三線 南風原型



型 名：南風原型
全 長：78.0cm
心の長さ：21.5cm
糸蔵長さ： 3.1cm
糸 蔵 幅： 1.1cm
特記事項：心の表に「南風原」裏
に「浦添御殿」の朱書
きあり。波之上の佐久
本三味線店で50年代に
購入したという。

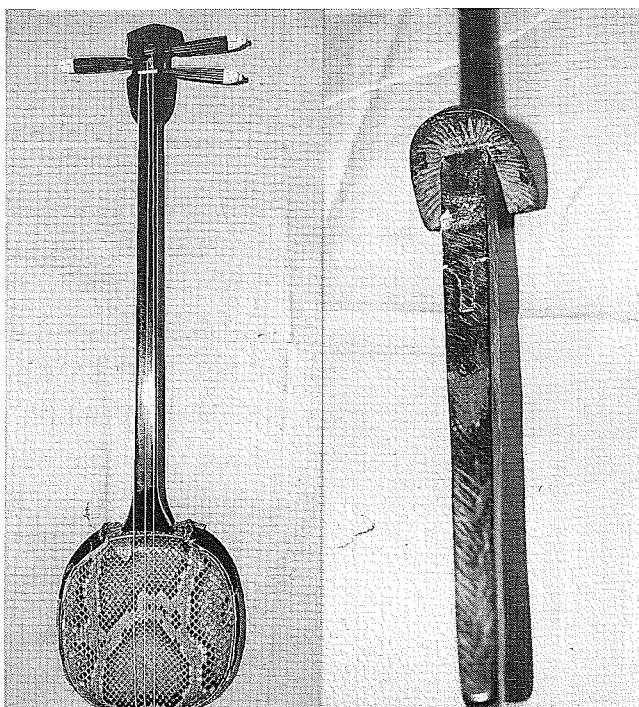
所 有 者：上原政子

⑤三線 南風原型



型 名：南風原型
全 長：77.4cm
心の長さ：21.2cm
糸蔵長さ：3.2cm
糸 蔵 幅：1.0cm
材 質：リュウキュウコクタン
特記事項：心の裏に「浦添御殿」
の朱書きあり。前述の
三線と兄弟三線という。
佐久本三味線店からハ
ワイ・コナの嘉数さん
が購入したものを62年
頃に譲り受けた。
所 有 者：上原政子

⑥三線知念大工型



型 名：知念大工型
全 長：77.5cm
心の長さ：21.8cm
糸蔵長さ： 3.3cm
糸 蔵 幅： 1.3cm
材 質：リュウキュウコクタン
特記事項：心に接ぎたしあり。源
河ウェーキの口直し三
線といわれた三線で良
く鳴る。火事の時に鳴つ
て、家人の命を助けた
という伝承がある。ヒ
ロの呉屋氏（国頭出身）
から購入。
所有者：上原政子

5. むすびにかえて

楽器に係わる文化財指定は国や都道府県では極めて稀である。工芸品としての楽器指定はこの三線以外皆無といってよい。^(注5)

三線の文化財指定の背景には、沖縄の人々の心に共鳴する存在としての三線がある。この楽器は、歴史的には旧士族層の教養の器楽で用いられ、琉球芸能に不可欠の花形楽器になった。近世になって平民百姓まで伝播し、同時に楽器を超えた、神聖さを有する「もの」として扱われることになった。また、個性豊かな琉球文化のシンボル的存在であることも付加しなければならない。戦時中、名器を秘蔵する人々は着のみ着のままにも係わらず、先祖の位牌と三線の棹だけは背負って、砲煙弾雨の中を逃げまどったというはなしもある。不幸をよぶ三線や、夜中にきなり鳴り出す三線、死後も三線を弾きにくる遊女愛蔵の三線のはなし、馬一頭と交換した三線など三線にまつわるエピソードは多くある。

沖縄の人々の三線に対する愛着はこれほど凄まじいものがある。三線は命の次に、いやもしかしたら命以上に大切なものかもしれない。この価値観は故郷から遠く離れた沖縄人の移民地ハワイにおいても同様であった。ボリビアでは、リュウキュウコクタンの代材として現地の鉄木のような堅木が使用されていると聞く。ハワイにも三線同様の撥弦楽器ウクレレがある。その用材として使用されるのがコアの木で、乱獲のため最近では稀少木となっていると聞くが、ボリビア同様に地元で調達できる用材、例えばコア材による三線が作られていれば、文化受容の面から大変興味深いものがあると考えていた。しかしながら、それはなさそうである。移民先では故郷への思慕が強い分、その気持ちは沖縄に居住する人々以上に母県文化への傾倒が凝縮してみられる。コア材の三線なんて一蹴されるかもしれない。疎開された沖縄文化の純粹結晶が移住地には息づき、新たな沖縄文化の創造を行っている。この調査を通して沖縄の文化と心を再認識することができた。

謝 辞

今回の調査ではハワイ滞在中の仲宗根盛松先生と渡具知光子先生に大変お世話になった。また、ハワイ沖縄センターのボニー・ミヤシロさん、ホノルル在のKeith K. Nakaganeku さん、ヒロ在の上原政子とその娘さんKathy Y. Okunamiさんにもお世話になった。とくに、仲宗根・渡具知両先生には、ともにヒロ市まで調査にご同行いただいた。三線に愛着する心と沖縄人としての誇りに敬意を表するとともに心から感謝を申し上げる次第である。両先生は、沖縄の伝統文化である古典音楽と琉球舞踊の伝承に関わっていらっしゃる。先生方の益々のご活躍とご健勝を祈念しつつ、文末ではあるが、心から感謝申し上げ御礼に代えさせていただきたい。

また、仲宗根先生をご紹介いただいた琉球三線楽器保存育成会長の島袋正雄先生には、

お口添えいただいたことに心から感謝申しあげる。

注 記

- 1 明治末期の移民労働者の日当は『沖縄ハイ移民一世の記録』(40p) の記載による。
- 2 池宮喜輝『琉球三味線寶鑑』(35-36p) の「審査報告」の情報に基づき表を作成した。
- 3 各地域で合格した三線の合計は池宮の著作では「363丁」同掲書 (37p) と記載されているが、各地域の合格数の累計は362丁となるので、その数値を筆者は採用した。
- 4 沖縄県教育委員会編『沖縄の三線』の調査概要に記載された数値による。
- 5 園原謙「沖縄県指定有形文化財としての三線」(28p) の「国・都道府県における文化財としての楽器の指定状況」に基づく。

参考文献

- 池宮喜輝『琉球三味線寶鑑』東京沖縄藝能保存會 1954年（昭和29）7月
沖縄県教育委員会編『沖縄の三線』沖縄県教育委員会1993年（平成5）3月
宜保榮治郎『三線のはなし』ひるぎ社 1999年（平成11）7月
園原謙「沖縄県指定有形文化財としての三線」『特別展三線のひろがりと可能性展（図録）』
1999年（平成11）7月
鳥越皓之『沖縄ハイ移民一世の記録』中公新書 1988年（昭和63）11月
東恩納寛惇「三味線供養」『東恩納寛惇全集5』琉球新報社 1978年（昭和53）12月
東恩納寛惇「琉球文化の疎開—三味線の分布と文化的命脈」
『東恩納寛惇全集8』琉球新報社 1980年（昭和55）8月

博物館文化講座考 II —高校生博物館意識調査アンケートより—

多良間 利絵子

喜久川 智子

(沖縄県立博物館)

Evaluation on Research from the students of senior high schools.

Rieko TARAMA and Tomoko KIKUGAWA

(Okinawa Prefectural Museum)

I. はじめに

1974年（昭和49）から始まった文化講座は、2000年（平成12）で26年目を迎える。平成12年度には講座回数が300回となり、記念講演が行なわれる。前紀要では、文化講座参加者アンケートを行ない、その結果を元に文化講座について見なおした。

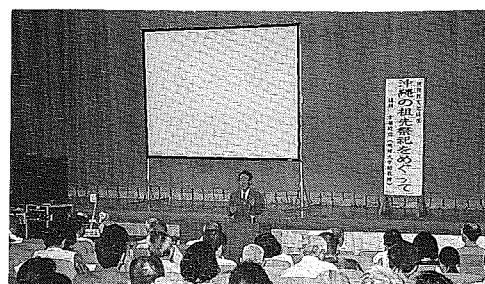
今回も前回と同様に、アンケートの集計を行なった。表II-1-①～⑤からも分かるように、ほぼ同じような結果が得られた。前回でも指摘されてはいるが、いくつかある問題点の一つとして、10代の参加者がほとんどないことが今回の資料からも言える。そこで、高校生の「生の声」を聞きたいということで、文化講座を含めた県立博物館への意識を、県内の高校生を対象に調査をすることにした。

なお、「前回」とは紀要25号を示し、1997年7月から1998年12月までの文化講座参加者へのアンケート結果であり、「今回」とは紀要26号のことである。

「II」では1999年1月から12月まで約1年間の文化講座参加者へのアンケートを、「III」では高校生意識調査アンケートの集計結果をまとめた。

II. 今回の文化講座参加者アンケート調査結果

1 文化講座参加者へのアンケート用紙は前回と同じものを使用した。結果については表II-1-①から⑤の通りである。受講者の年齢、情報入手先、受講回数、内容についての満足度、関心のある分野ごとにまとめた。今回の文化講座参加者の総数は529名で、その内、アンケートへの回答者数は143名であった。



'99 5/15 「沖縄の祖先祭祀をめぐって」
(赤嶺政信 琉球大学助教授)

文化講座参加者アンケート集計

表II-1-① 受講者の年齢

年齢	野鳥観察	グスク	祖先祭祀	まじない	金属文化	工芸技術	合計
10代	0	0	2	1	0	0	3
20代	0	1	8	4	1	5	19
30代	0	0	3	2	5	4	14
40代	1	2	11	8	0	1	23
50代	1	12	8	5	2	3	31
60代	3	5	11	9	3	2	33
70代以上	0	1	6	2	3	0	12
無回答	0	2	1	2	2	1	8
合計	5	23	50	33	16	16	143

表II-1-② 情報入手先

入手先	野鳥観察	グスク	祖先祭祀	まじない	金属文化	工芸技術	合計
テレビ	0	0	0	0	0	0	0
ラジオ	1	3	1	1	0	0	6
新聞	2	13	17	14	3	6	55
雑誌	0	0	0	0	0	0	0
看板チラシ	2	5	25	12	8	4	56
前回の講座	0	1	1	5	0	0	7
その他	1	1	8	4	4	6	24
無回答	0	0	0	0	1	0	1

表II-1-③ 受講回数

回数	野鳥観察	グスク	祖先祭祀	まじない	金属文化	工芸技術	合計
初めて	4	16	23	14	6	8	71
毎回	0	1	6	4	2	0	13
1年に回	1	4	16	6	5	2	34
その他	0	2	4	9	2	5	22
無回答	0	0	1	6	1	1	9

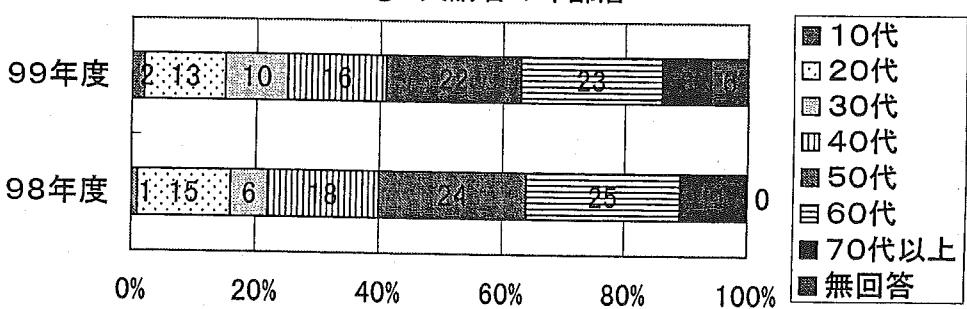
表II-1-④ 内容についての満足度

満足度	野鳥観察	グスク	祖先祭祀	まじない	金属文化	工芸技術	合計
満足	4	15	16	11	8	7	61
やや満足	1	5	17	11	4	4	42
普通	0	1	9	5	2	4	21
つまらない	0	0	2	0	1	0	3
無回答	0	2	6	6	1	1	16

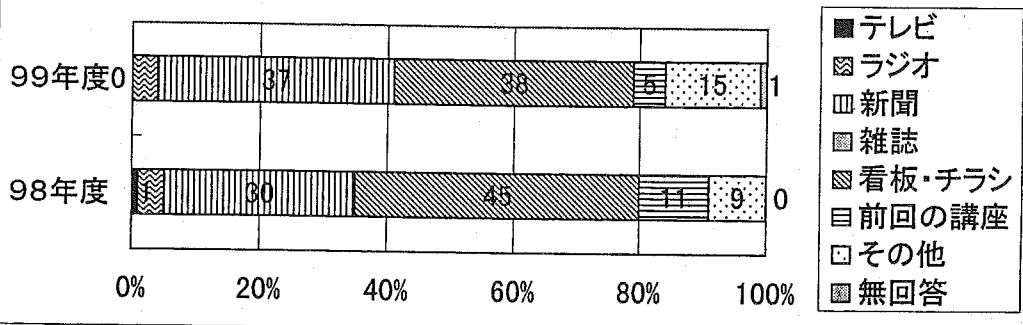
表II-1-⑤ 関心のある分野

分野	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無記入	合計
考古	0	6	4	3	5	15	2	0	35
歴史	0	8	10	12	22	22	9	6	89
自然	2	4	1	8	12	7	1	0	35
美術工芸	0	8	8	3	6	6	1	2	34
民俗	1	14	7	14	13	15	8	1	73
その他	0	1	0	0	0	0	1	0	2
無記入	0	0	0	2	3	1	0	0	6
合計	3	41	30	42	61	66	22	9	274

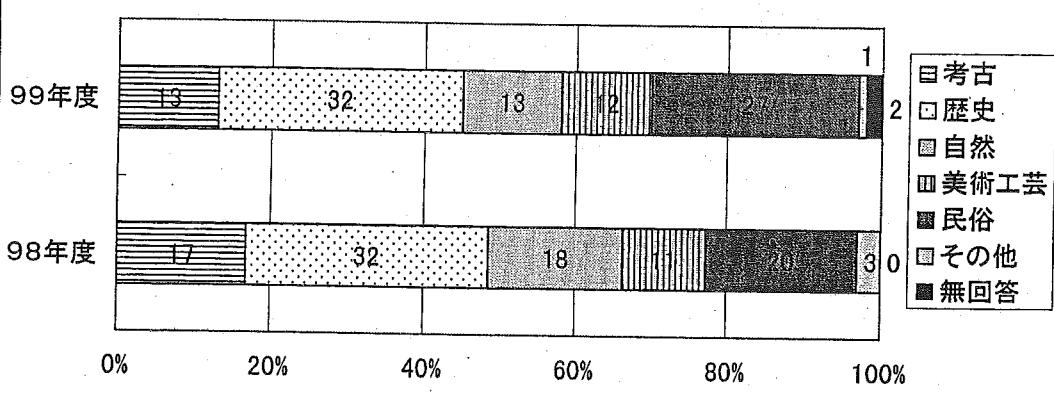
II-2-① 受講者の年齢層



II-2-② 情報入手先



II-2-⑤ 関心のある分野



2 今回のアンケート集計の結果、前回とはほぼ同じような回答が出た。文化講座の問題点として、若い人の参加が少ない、広報不足、文化講座の講演形式について等があげられる。

受講生へのアンケートは強制ではないので、受講した全員がアンケートに答えているわけではなく、講座によって回収率にもばらつきがある。③の受講回数に対する質問で、「初めて」との解答が多いのも、前述の理由が考えられる。

毎回出席している受講者が必ずしもアンケートに協力しているとは限らず、再度アンケート調査の見なおしも必要である。

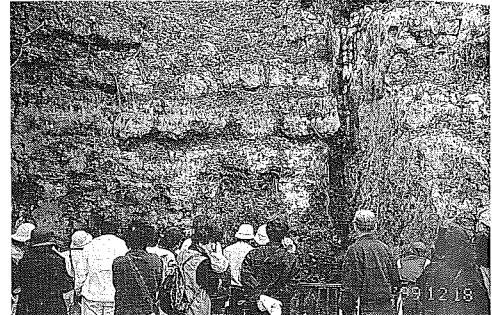
「広報」については前回と同様の結果ではあるが、どのような経路で情報を収集するかは各々異なるので、課題の多い問題である。情報入手先の一つに「県立博物館友の会」が毎月発行している『チャービラ』という意見もみられ、確実な情報入手先の一つになっている。

さて、今回取り上げた文化講座参加者の年齢層についてであるが、結果より10代の参加者が全体のわずか1%ということがわかった。10代の受講者数に注目してみると、前回と今回の参加者数を合わせても5名である。もちろん、アンケート調査は毎回行なっているわけではないので、講座によって参加者の年齢は変わってくるが、やはり、中・高校生の参加はほとんどない。

博物館側で計画する文化講座の内容は、若い世代が興味を示す内容ではないのだろうか。彼らはどのような文化講座に関心があるのだろうか。あるいは、博物館が行なっている行事そのものを、彼らは知らないのではないだろうか。そこで高校生を対象とした博物館意識調査を行ない分析、検討を行なってみた。

III. 「高校生意識調査アンケート」結果

1 まず沖縄本島を地域別に、北部・中部・南部、宮古八重山地域と4区域に分け、各地域ごとに3校を選び、1校1クラスを対象にアンケート調査を実施した（但し、球陽高校のみ4クラスの回答があったので、対象人数が異なる）。アンケート回答者数は566名である。資料III-1のアンケート用紙に回答してもらい、それを集計し、表にまとめた。



'99 12/18 「南部の遺跡めぐり」
(大城慧 県立博物館学芸課長)

資料III-1 高校生意識調査アンケート

1999年 月 日()

沖縄県立博物館 高校生意識調査アンケート

1 あなたは県立博物館に行ったことがありますか

① ある 

② ない 

2 1で「ある」と答えた人のみ、お書きください。最後に行ったのはいつですか

① 小学校 年生ぐらい
③ 高校 年生ぐらい

② 中学校 年生ぐらい



3 1で「ない」と答えた人は、その理由を教えてください



- ① 興味がない・つまらなさそう
② 難しそう
③ 交通が不便
④ 場所がわからない
⑤ その他()

4 県立博物館の行事を知っているだけ、○をつけてください

- ① 特別展
③ 移動博物館
⑤ 博物館シアター
⑦ 全く知らない

- ② 企画展
④ 文化講座・夏休み親子文化講座
⑥ 子ども体験学習教室

5 4の行事の中で興味がある・参加したいと思った番号を下に書いてください(複数可)



6 4の行事中の「文化講座」は、下に書かれている5分野の内容で行なわれています。
あなたならどの分野に興味を持ち、参加したいと思いますか、○をつけてください

講座内容の参考

- ① 考古 (港川人・石器・土器・グスク)
② 歴史 (琉球王国・首里城・沖縄戦・本土復帰)
③ 自然 (動物・恐竜・植物・昆虫・化石・星座)
④ 美術 (陶器・漆器・紅型・織物・絵画・彫刻)
⑤ 民俗 (祭り・信仰・芸能・生活道具・食べ物・農業・漁業・衣服・方言)
⑥ その他 (映画・音楽・演劇)



《特に希望する文化講座》

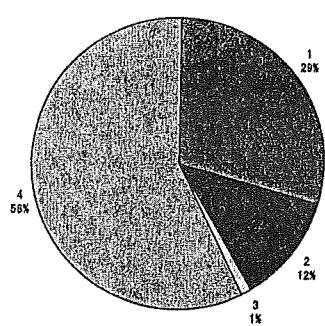
アンケートへのご協力ありがとうございました



表III-2 高校生意識調査アンケート集計表

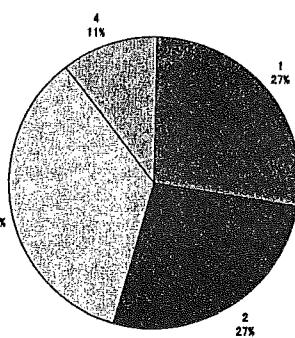
	北部			中部			南部			宮古・八重			合計
	北山	宜野座	北農	球陽	真志川	中部商	開邦	知念	首里	宮古	宮古工	八重山	
	50名	35名	32名	155名	35名	36名	40名	40名	35名	40名	32名	36名	566名
1-① ある	26	22	18	46	13	7	30	26	28	11	6	7	240
1-② ない	24	13	14	109	22	29	10	14	7	29	26	29	326
2-① 小1	0	0	0	0	1	0	0	1	2	0	0	0	4
小2	0	1	0	1	0	0	1	0	1	1	2	1	8
小3	0	0	0	3	1	1	3	3	4	0	1	1	17
小4	0	0	0	5	0	0	8	2	5	0	0	0	20
小5	2	0	2	9	0	3	4	4	1	0	0	0	25
小6	18	18	12	11	0	0	2	8	3	9	0	2	83
小?	2	1	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	8
小・計	22	20	14	30	2	4	18	20	16	10	3	6	165
2-② 中1	1	1	0	3	2	0	5	1	2	0	0	0	15
中2	1	0	0	9	3	0	4	3	3	3	3	1	30
中3	2	1	3	4	4	3	2	1	5	0	0	0	25
中・計	4	2	3	16	9	3	11	5	10	3	3	1	70
2-③ 高1	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	3
高2	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	2
高3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
高・計	0	0	0	1	1	0	1	1	1	0	0	0	5
	北部地域のみ			中部地域のみ			南部地域のみ			宮古・八重山			240
3-① 興味無	5	3	5	15	2	6	7	4	6	5	7	4	69
3-② 難しい	0	1	0	1	0	1	1	1	1	1	0	2	9
3-③ 交通	1	0	4	8	0	1	0	0	1	6	3	4	28
3-④ 場所	17	6	4	60	13	18	1	3	18	15	16	14	185
3-⑤ その他	3	3	2	29	7	6	1	6	6	4	3	8	78
無回答	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	2
4-① 特別展	2	2	1	17	11	4	12	6	4	2	2	1	64
4-② 企画展	0	0	1	7	4	1	4	3	1	1	2	0	24
4-③ 移動博	1	1	0	1	3	0	2	1	0	3	4	0	16
4-④ 文化講	1	1	2	7	4	1	5	3	1	0	1	2	28
4-⑤ シアタ	2	2	1	7	3	3	6	3	3	0	3	6	39
4-⑥ 体験学	1	0	2	5	0	0	3	1	0	0	0	2	14
4-⑦ 知らな	46	32	29	129	22	31	22	31	31	35	25	31	464
5-① 特別展	21	7	6	34	7	4	14	13	4	8	10	5	133
5-② 企画展	7	5	1	14	4	2	5	6	2	1	3	2	52
5-③ 移動博	4	9	5	20	7	5	4	10	5	10	3	4	86
5-④ 文化講	5	3	4	12	4	3	5	4	3	2	1	2	48
5-⑤ シアタ	12	7	13	49	12	7	8	15	7	9	6	4	149
5-⑥ 体験学	5	2	10	17	4	2	2	4	2	6	3	2	59
無回答	15	16	10	52	10	21	17	7	21	16	17	28	230
6-① 考古	7	3	3	10	4	0	4	4	0	2	0	2	39
6-② 歴史	14	11	4	30	4	7	10	9	7	5	3	9	113
6-③ 自然	17	11	7	49	13	5	14	16	5	14	9	6	166
6-④ 美工	10	4	11	35	7	7	13	10	7	8	7	4	123
6-⑤ 民俗	4	6	11	37	7	3	10	5	3	6	6	4	102
6-⑥ その他	16	13	12	60	18	14	12	14	14	17	19	5	214
無回答	2	4	3	14	1	8	2	1	8	4	2	16	65

III-3-① 博物館に来たことがある／ない



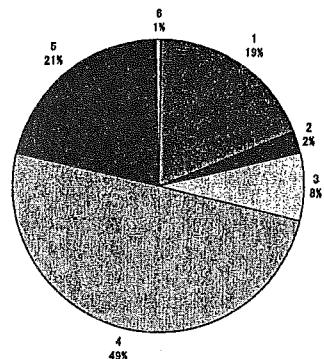
- 1 ある小学生
2 ある中学生
3 ある高校生
4 ない

III-3-② 地域別に見た利用状況



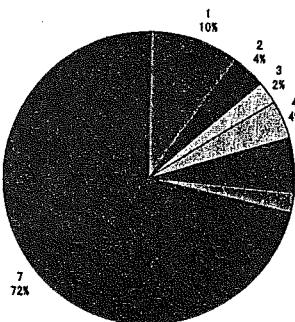
- 1 北部地区
2 中部地区
3 南部地区
4 宮八地区

III-3-③ 博物館を利用しない理由



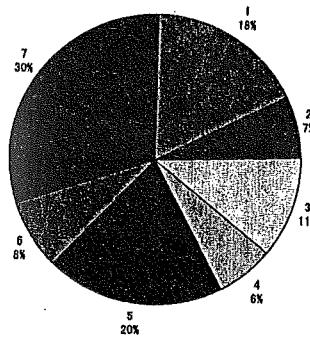
- 1 興味がない
2 難しそう
3 交通が不便
4 場所が分からぬ
5 その他
6 無回答

III-3-④ 博物館の行事を知っていますか



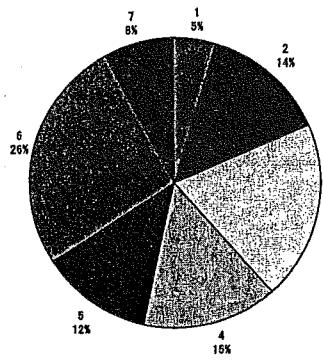
- 1 特別展
2 企画展
3 移動博
4 文化講座
5 シアター
6 体験教室
7 全く知らない

III-3-⑤ 参加してみたい博物館行事



- 1 特別展
2 企画展
3 移動博
4 文化講座
5 シアター
6 体験教室
7 無回答

III-3-⑥ 関心のある分野



- 1 考古
2 歴史
3 自然
4 美術
5 民俗
6 その他
7 無回答

2 集計結果より

(1) 博物館に来たことが「ある」か「ない」かという質問に対して、566名中、「ある」が240名、「ない」が326名で、約半数近くの学生が来たことがないことがわかった。さらに細かくその理由を質問したのが、次の(2)と(3)の項目である。

(2) 「ある」と答えた240名に対し、一番最後に行ったのはいつかという質問をしてみた。「小学生の頃」と解答する人がもっと多く165名、「中学生」が70名、「高校生」が5名の順となっている。最も回答が多くかった「小学生」を地域別にみてみると、北部地域は高学年時の来館が多く、恐らく修学旅行の際に来館したことが予想できる。南部地域は全学年にわたって利用されており、地理的にも来館しやすい環境にあると言える。それに対し中部、宮古・八重山地域は、来館者数が著しく少ないと分かった。

(3) 「ない」と答えた326名にその理由を尋ねてみると、「博物館のある場所が分からない」という答えが最も多く185名であった。もちろん地域別に見る必要があるが、予想外の回答であった。続いて多かった「その他」の78名の中には、とても残念なことに「県立博物館があることさえも知らなかった」という回答もみられた。また「行く機会がなかった」との答えもあり、学校や家庭の中で博物館の教育普及活動が、まだまだ認識されていないことが分かった。最も多いであろうと予想していた「興味・関心が無い」との回答は、3番目で69名であった。

(4) 現在行なわれている博物館行事について全員に質問したところ、566名中464名が「全く知らない」と答え、全体の7割を占めている。博物館を訪れたことがあっても、博物館の活動に対しては知らないという結果がわかった。また、今年「移動博物館」が開催された宮古島では、「移動博物館」を知っていたのは7名であった。

(5) 「参加してみたい博物館行事は?」との質問に対して、一番人気があったのは予想通り「博物館シアター」で、次に「特別展」、「移動博物館」の順であった。この質問に何らかの回答をしたのが7割近くいた。これは(4)の「全く知らない」と答えた7割と同じ割合であった。このことから、博物館行事に関する情報が得られれば、参加しても良いと考えていると、とることができる。

(6) 今回のアンケート調査の主旨でもあった文化講座についてでは、興味のある分野を答えてもらった。最も多かったのが「その他（映画・音楽・演劇等）」で、次に「自然」、「美術工芸」の順であった。特に希望する文化講座のテーマとして以下の講座内容があがっていた。歴史では「琉球の歴史」や「沖縄戦」について、自然では、「星座・宇宙」や「恐竜の化石」について、美術工芸では「絵画」や「陶器」「織物」「紅型」について、民俗では「祭り・芸能」や「沖縄の方言」、「沖縄料理」などがあがっていた。一番希望の多かったその他では、「映画」についての文化講座や、「体験学習」という意見もあがっていた。

資料III－2－②



《特に希望する文化講座》

戦争についてのこと。

〈理由〉現代の若者は真実を知らなすぎたと思うから。小・中学生の頃から毎年学習するけど、インパクトがちょっとずつうすくなっていると思う。



《特に希望する文化講座》

自然。星座とか天文に関する講座。あたらせぬ行きたいです。

他に民俗があもしろそう。沖縄の方言を見たり上げたらおもしろそう。方言をたくさんならしたい。



《特に希望する文化講座》

最後に行つたのが幼ながため、④の文化講座は全く矢印ませんでした。

私は本土から来たこともあります。沖縄独自の文化に非常に興味があります。

①～⑥の全部興味がありますが、やはりライターの祭り、特にエイサーやさんしん等は体験学習もしてみたいし、沖縄戦のことを本土からやわげかくでしょうか、あの本当の事柄よりもやさしく押さえきめて展示するようというのは何故か分かりません。ぜひ眞実をありとま、歴史のまま展示していただきたいと思ひます。

IV. まとめ

今回の「文化講座考Ⅱ」は、高校生への意識調査を行い、博物館に対する状況を把握することにあった。アンケートを行なう前にある程度回答の予想を立てていた。集計の結果はおおよそ予想通りではあったが、博物館行事が全く浸透していない事実には大変驚いた。

文化講座はほぼ毎月開催され、講座回数も300回目を数えるほど、教育普及のなかで最も浸透している行事だと思っていた。講座は一応一般を対象として行なわれてきたが、参加者のほとんどは中高年の世代で占められていた。中・高・大学生の参加者が著しく少ないのも、彼らを対象とした講座内容で企画したことがないからだと思っていた。

しかし、アンケートの結果「希望する文化講座」の内容からも分かるように、現行されている文化講座の内容と大きく異なっているわけではない。恐らく、博物館で行なっている行事を知らないので、情報として得ることがなく、上手く活用されていないのだろう。これまでの「広報活動」を見なおしていく必要性があるのかもしれない。

若い世代に参加してもらうためには、講演形式や、講演テーマ、開催時期等を見直さなければいけない。本年度開催された文化講座「まじないの世界～沖縄の魔除けと呪符の歴史～」の時の話である。参加者の中に下校途中の高校生が二人おり、講演途中で席を立って帰ってしまった。恐らく彼女らは講演のメインテーマから、興味を持ったものの、講演内容が彼女たちの考えたものではなく、あるいは難しくて、等の理由で席を立ったのだろう。このことから、講演テーマや講演内容の難易度等をどう設定するかも重要である。

さらには、講座内容がその時勢や話題性を伴っていることも必要になってくるだろう。映画「タイタニック」が上映されていた時に、アメリカの図書館でタイタニックに関する資料を展示していた。事故当時の新聞記事や文献などが展示されており、多くの観覧者を集めていた。このように世の中の動きにリアルタイムに対応していく柔軟な姿勢が、これから博物館にも必要であろう。

高校生の意見として興味のある分野、参加したい博物館行事に「映画」と答える人が最も多かった。「映画」をテーマとした展示会の実現は難しいが、講演形式で行なう文化講座なら可能であろう。「映画」の中の人物の生き立ちや当時の歴史的背景、社会環境を講演してもらうなど、講座内容を話題性のある映画や演劇等と結びつけることで、高校生のニーズに応えることができるかもしれない。

また「体験学習型」の希望が多く、工芸品を作つてみたい、着物を着てみたい等といった意見もみられた。受身だけの「講演形式」から、参加する「体験学習型」への取り組みも必要だと考えられる。

若い世代が希望する文化講座とは「身近な沖縄の文化や歴史」をテーマにした、より「体験的な」講座であることが分かった。これから文化講座を企画していく上で、その講演形式や内容、テーマ設定、開催時期、話題性等をどう取り入れていくかが課題となってくるだろう。

アンケート調査協力高校

県立北山高等学校	県立宜野座高等学校	県立北部農林高等学校
県立球陽高等学校	県立具志川高等学校	県立中部商業高等学校
県立開邦高等学校	県立知念高等学校	県立首里高等学校
県立宮古高等学校	県立宮古工業高校	県立八重山高等学校

ご協力大変ありがとうございました。

資料紹介 Research Materials

吉濱家文書『紬関係書類』より紬関係史料九題

與那嶺 一子

(沖縄県立博物館)

山田 葉子

(沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員)

Nine Historical Records Concerning *Kumejima-tsumugi*
Included in Documents of YOSIHAMAS

Ichiko YONAMINE

(Okinawa Prefectural Museum)

Yoko YAMADA

(Research Institute of Okinawa Prefectural University of Art)

「吉濱家文書」とは、那覇市在住の伊是名瑞子氏より平成四年に沖縄県立博物館へ寄託された久米島の家文書のことである。この文書は約百件からなり、伊是名氏の祖父に当たる吉濱智改氏によって旧蔵されていたものである。その大半は占いや願文に関するもので、その全貌については、京都大学の横山俊夫教授を中心とした研究グループにより上江洲家、與世永家等の文書を加え「久米島における東アジア諸文化の媒介事業に関する総合研究」として調査整理中であり、平成十二年に目録が刊行される。

その「吉濱家文書」中には織物に関する次の三件の文書が存在する。

- 一、『絢り織物設計方法書取帳』
- 一、『大島紬・結城紬見本』
- 一、『紬関係書類』

吉濱智改氏は、大正十三年に琉球久米島紬織物同業組合の組合長を務めており、この史料はその関連で集められたものと思われる。

『絢り織物設計方法書取帳』は明治四十一年久米島の兩村立女子実業徒弟学校で使われていたものである^(注1)。また『大島紬・結城紬見本』は織物の実物裂を貼り付けた見本帳である。『紬関係書類』には四十四件の文書が合本されており、それらは、1・組合の経理や案件に関する事、2・養蚕技手による講話の資料、3・新聞抜粹の写し、4・紬紹介の文書、5・品評会の受賞者名簿、6・旧記の抜録、7・染色方法に大きく分類され、大凡大正十二年（十五年前後）に書かれたもの或いは写されたものである^(表1)。

教科書、織物見本、紬関係書類中の組合に関する文書、新聞の写しなどは、琉球王国解体後、久米島紬再興の様子を知る最良の史料であるが、その紹介は別の機会としたい。

今回は、『紬関係書類』に所収された文書の内、これまで断片的に紹介してきた旧記あるいは染色方法を記録したものをおさらいすることにした。特に染色に関わることを抜粋した写し紹介することにした。特に染色に関わることを抜粋した写し紹介を進める上で興味深いものである。

- 一、『球陽』から久米島紬に関する写し
- 二、旧家家譜から久米島紬に関する写し
- 三、出典は不明だが御用布の染めに関する写し
- 四、色別の染色方法
- 五、その他

これらの内、一については既に翻刻、読み下しとも出版されている省くことにした。三、四、五の記録については、これまで田中俊雄^(注2)や鎌倉芳太郎^(注3)、辻合喜代太郎^(注4)等によつて、部分的に紹介されてきた。それによると、久米島紬（御用布）の染料に関する文書類の写しが「田中本」、「鎌倉本」、辻合の紹介した「喜久永本」、「仲原本」^(注5)とあることが分かつた。それに今回の「吉濱本」が加わることになる。

喜久永家、吉濱家共に、上江洲家^(注5)の分家にあたる。辻合が紹介した「喜久永本」と「吉濱本」を照らし合わせてみると、「喜久永本」には「吉濱本」に含まれていない記述もあり、より詳しいことが分かった。ただ、残念なことに全文が掲載されておらず、今後「喜久永本」あるいはその写しが発見されるとを期待したい。

「吉濱本」はその記述から史料の大半は「鎌倉本」から写したものと推察できる。「田中本」は久米島織物同業組合写本からと述べており、「吉濱本」を写したものと考えられる。田中はその著書の中で他に『久米島萬御用控帳』と仮称した文書の存在を示しているが、その詳細は今回明らかにできなかつた。

旧記や製造法を記した文章は九件あり、綴られた順に仮に番号を付けると、次のようになる。

- 1 「御用布染物入目并ニ諸例」（表題原文のまま）
- 2 「旧尚泰王代染具例」（仮題）
- 3 「貢布力ナ入目」（仮題）
- 4 「御用布調え綿子績例并ニ色々染過」（表題原文のまま）
- 5 「御用布量目」（表題原文のまま）
- 6 「御用布代付」（表題原文のまま）
- 7 「久米島紬之起源」（表題原文のまま）
- 8 「染色之方法」（表題原文のまま）
- 9 「染具例」（表題原文のまま）

以上九件のうち、1~8までは「久米島紬同業組合」の名入りの原稿用紙に続けて書かれている。9だけは原稿用紙ではなく白紙に書かれていて、前出の項とは離れた場所に綴じられている。（表1）

1 「御用布染物入目并ニ諸例」

康熙二十九年（一六九〇）制定の「御用布染物入目并ニ諸例」

3 「貢布力ナ入目」

特に表題はないが、「以下康熙三十一年壬申八月御檢使之時

及び同三十一年（一六九二）制定の「綿子績例并色々染色例」を乾隆三十七年（一七七二）に記録した写し。なお、康熙三十一年制定の「綿子績例并色々染色例」とは、3「貢布力ナ入目」を指すと思われる。この項には前述の「御用布染物入目并ニ諸例」だけが書かれている。

内容は、御用布を染色する際に必要な染料の量と人員が記されている。

記述された順に色名を並べると以下の通りである。

(1) 香色染^(注6)、(2) 黄染、(3) 柿色染^(注8)、(4) 青色染^(注9)、(5) 江戸茶色染^(注10)、(6) 赤色染、(7) 紫色染、(8) 藍染、(9) ヨシオカ染^(注11)と

以上計九色の、引糸百匁あたりの染色に必要な染料の名称とその分量、及び作業に必要な人夫の人数が箇条書きで色別に記されている。

2 「旧尚泰王代染具例」

特に表題は付いていないが、この部分の始まる欄外に「旧尚泰王代染具例」と書かれていることから、以下はこの題で呼ぶことにする。

明治二十九年（一八九六）に吉本郡技手が調査した「旧尚泰王代染具例」を、大正十五年（一九二六）鎌倉芳太郎氏が所蔵していた記録から抜録したものである。

ここに記述された順に色名を並べると以下の通りである。

(1) 煤竹染^(注12)、(2) 茶色染、(3) ソキ並古銅染^(注13)、(4) 黒染、(5) 黄ガラ茶^(注14)並江戸茶染、(6) 鼠染、(7) 香色染、(8) アマンダ染^(注15)
(9) 青染、(10) 藍染、(11) 黄染、(12) 赤染、(13) 月日色染^(注16)
以上計十三色の、一力ナに対する染材の名称と分量が箇条書きで色別に記載されている。後述するが、9「染具例」の前半部分はこの項とほぼ同じ内容である。

相定候貢布力ナ入目」との導入文書から、以下はこの題で呼ぶことにする。

康熙三十一年（一六九〇）御檢使の時制定された、御用布（貢布）を制作するのに必要な糸量と、長さ、幅の規格の記録の写しである。

御用布の目的、番号、染織の種類、布の長さ、幅、色名、色別に必要なカナ（かせ）数、合計のカナ数等の項目から成る。これが箇条書きで計五十四種類記載されている。

この項に登場する色名は全部で二十種類ある。他の項と共通のものがほとんどだが、赤すす竹（宗呂色）、木の葉鼠、花色、浅黄、水色、灰色の六色はこの項のみで使われている。また、色名の後に「白サ」「赤サ」など「サ」を付ける記述が度々出てくるが、これはこの項と次項4「御用布調」のみに使われていてある。

その他に、色名の後に「フシ」もしくは「ブシ」を付ける記述も多く見られる。これは絣のことを指しているとも考えられるが、詳しいことは不明である。

辻合の著書に「番手貢納布」として紹介された、具志川西銘喜久永家文書「喜久永本」は、内容的に若干異なる部分もあるが、この文書と類似点が多く見られる。

4 「御用布調え綿子績例并ニ色々染過」

始めに「綿子百匁に付き正績綿八十三匁」とあり、その後は「正績綿百匁に付き（色名）染○匁増」という換算が、左記の8色に分けて記載されている。

- (1) 香色、(2) 黄色、(3) 柿色、(4) 青色、(5) 江戸茶色、(6) 赤サ、(7) 藍染、(8) よしをか

三行のみの短い記述で、前後がないため詳しいことは不明。

6 「御用布代付」

5 「御用布量目」

御用布を米を代納としたときの換算表と思われる。

『かそり鳴紬雲かそり一反が一石九斗七合五勺に当たる』といつた記録が合計三種類記されている。

辻合著「久米島紬」には、具志川西銘喜久永家文書「喜久永本御用布代付記」として、二種類同じ記述が出てくるが、この文書と吉濱家文書の関連はよくわかつてない。

この喜久永本は、このほかにも吉濱家文書と同じ様な記述が多數含まれる一方、吉濱家文書に出てこない記述もあるため、吉濱家文書を読み解く上で非常に興味深い内容となっている。

7 「久米島紬之起源」

表題の通り久米島紬の起源を記したもので、家譜からの抜録である。

内容は以下の4項目に分かれている。

- 1 尚寧王代の宗味入道による養蚕技術の導入
- 2 木綿布の伝来（表題原文のまま）
- 3 桑木の植え付け（表題原文のまま）
- 4 藍染法（表題原文のまま）

-1、-2は『美済氏具志川村字西銘屋号石垣上江洲家の家譜を参照』、また、-3、-4は『字西銘屋号西殿内家譜を参照』とある。

-1は、尚寧王代の萬歎四十七年（一六一九年）に、宗味入道が久米島へ養蚕技術と真綿の製法を伝えた経緯と、尚豊王代の崇禎五年（一六三二年）に酒匂友寄が紬織の方法を伝えた経緯が書かれている。

-2は、崇禎年間（一六二八～一六四三）に君南風が儀間親方から木綿布の製法を教わり久米島へ伝えたという経緯が書かれている。

-3は、乾隆十三年（一七四八年）に上江洲智英が在番真玉橋の指示で島内の五ヶ村に桑を植え、その結果養蚕の増産につながり貢布の生産量が上がったという経緯が書かれている。

-4は、藍染の質が低下してきたため乾隆十四年（一七四九

年に藍染の技術者を紺屋に派遣し、同十八年（一七五三年）には研究の成果が出たという記録と、乾隆十九年（一七五四年）に青染の研究をして良い結果が出たため勢頭座敷の位を授かっただという記録が書かれている。

8 「染色之方法」

内容は左記の計7色の色別に、染色に必要な材料の名称と分量、染色の作業手順が、非常に詳しく解説されている。

- (1) 煤竹染 (2) 茶色、黄ガラ茶、江戸茶 (3) 黒染め (4) 黄色染
- (5) アマンダ染、香色染 (6) 赤色 (唐赤) (7) 藍染
- (8) 香色、アマンダ染 (6) 赤色、唐赤トウアカ (7) 藍染

以上7色の必要な染材の名称とその分量、染色の作業手順が色別に詳しく解説されている。所々に前出の「染色の方法」と類似した記述が見受けられる。

欄外の「○正評」と題した書き込みは、本文に反論する記述も見られることから、後になつて調査の結果を書き足したものと考えられる。ただ、それを吉濱が行つたのか、児玉が行つたのかは不明である。

全体としては、作業手順を記しながらも批評や考察を織り交ぜていて、書き手の意見が全面に押し出された内容となつてゐる。

なお、解説に当たつては上江洲均氏（名桜大学教授）、萩尾俊章氏（沖縄県教育厅文化課文化財係長）、木島史雄氏（京都大学助手）からご教授いただいた。ここに記してお礼申しあげます。

（注1）『絹織物設計方法書取帳』について、久米島の染色資料概観『久米島総合調査報告書』（柳悦州・與那嶺一子／沖縄県立博物館／一九九四年）にて既に報告されているが、この時点では、上江洲家と吉濱家の文書の整理がきちんと行われておらず、上江洲家の文書として報告したが、吉濱家の誤りである。

女子実業徒弟学校では、『絹織物設計方法書取帳』を写本して授業が行われていたものと思われ、同じ内容の文書の写しが別に存在する（大城志津子複写本）。

田中俊雄（1914～1953）昭和十二年日本民芸協会に加入。昭和十四年三月～翌年八月までの間、三回にわたり来沖し織物調査を行つてゐる。著書『沖縄織物の研究』（田中俊雄・玲子／紫紅社／昭和五十八年）に所収されている「吉濱本」または「久米島萬御用控帳」から引用したと思われる箇所は次の通りである。

(注3) 106頁、108頁、109頁、112頁、120頁、121頁、144頁、146頁、156頁
鎌倉芳太郎（1898～1983）大正十年東京美術学校図画師範科卒。同年
沖縄県女子師範及び第一高等女学校の教諭として赴任し、琉球古美術
の調査に着手する。大正十三年（財）啓明会の補助を受け伊東忠太と
共同で「琉球芸術調査」を行う。大正十五年、調査継続のため再度来
沖し、この時、久米島まで足を運んでいる。鎌倉ノートには「御用布
染物入め并同諸例」「染具例」が書き留められている。

(注4) 齋合喜代太郎（1908～1993）昭和三六年関西大学文学部卒。琉球大学、
帝国女子大学で教鞭を取る。沖縄に限らず染織に関する多くの著書が
ある。著書『久米島紬』（関西衣生活研究会／昭和四十九年）にて、
「具志川西銘喜久永家文書」を左記の名称でいくつか引用している。

〔喜久永本 御用布代付記〕（24頁）
〔紹調綿子并練算〕（26頁）
〔染具例〕または「御用布染物入め并同諸例」（33頁）

(注5) 「明治二十年頃沖縄県による染色専門技官が調査した「久米島紬染
色取調報告書」（仲里村真謝仲原家所蔵写本）」齋合『久米島紬』35頁
(注6) 上江洲家は、久米島具志川村西銘にあり、王国時代において代々地頭
代を勤めた旧家である。吉濱家は八代智常の頃に、喜久永家は十代智
後の頃にそれぞれ分家している。

【上江洲家】
智英（七世）—智常—智篤 —智俊（十世）—智一（現当主）
〔喜久永家〕 —智長—・・・・・—義一（現当主）

【吉濱家】
智廣—・・・・・—智改—龍夫（現当主）—伊是名氏

凡 例

- 一、本資料は、伊是名瑞子氏が所蔵する「吉濱家文書」の「紬關係書類」から
抜粋したものである。
二、文中の古体・略体文字はなるべく正字とした。
三、判読不明の文字は□で示した。
四、「染色之方法」及び「染具例」の文中には「、」「。」を加え読みやすく
される。
(注1) 「憲法染」ともい、黄みがかった黒に近い焦げ茶色。
(注12) 煙けた竹の色に似た暗い赤黄褐色。
(注13) おそらく煤竹色より赤みの強い色と思われる。
(注14) 黄味がかつた明るい茶色。

(注15) 茶がかつた深い黄赤色。

(注16) ごく淡い水色。おそらく「月白色」の誤りと思われる。「月白色」は
中国の伝統的な色名である。琉球の服に「月白の朝服」（『球陽』尚
寧三十一年条・一六一九）あり。
児玉親徳（1887生）。大正三年沖縄農商課技手として来沖（大正七年
まで）。久米島紬をはじめ沖縄織物の今後についての提言を行って
いる。

参考とした文献

- ◎『久米島における東アジア諸文化の媒介事象に関する総合研究』京都大学人
文科学研究所 平成十一年
◎田中俊雄・玲子『沖縄織物の研究』紫紅社 昭和五十八年
◎祝嶺恭子「鎌倉芳太郎資料について」『沖縄県文化財調査報告書第一二六集
沖縄の染織（II）紅型型紙編』沖縄県教育委員会 平成九年
◎上村六郎 南島文化叢書3『沖縄染色文化の研究』第一書房 昭和五十七年
◎齋合喜代太郎『久米島紬』関西衣生活研究会 昭和四十九年
◎長崎盛輝「日本の伝統色—その色名と色調—」（株）京都書院 平成八年
◎王定理 DICカラーガイド「中国の伝統色」大日本インキ化学工業株式会社
昭和六十一年
◎球陽研究会 沖縄文化史料集成5『球陽 読み下し編』（株）角川書店 昭
和四十九年

『紬関係書類』所収一覧 (表1)

No	名 称	備 考
1	「球陽抜録」(尚寧21年・尚寧31年・尚真24年)	史料抜粹
2	「堂之大親と堂之比屋」	解説文か
3	「御用布染物入目并ニ諸例」	史料
4	「旧尚泰王代染具例」	史料／大正15年抜録
5	「貢布カナ入目」	史料
6	「御用布調べ綿子績例并ニ色々染過」	史料
7	「御用布量目」	史料
8	「御用布代付」	史料
9	「久米島紬之起源 旧記抜録」(家譜2件から)	史料
10	「染色之方法」	史料
11	「陳情ノ理由」(文案か)	組合関係
12	「久米島紬價格並生産費調」(大正12年度～15年度)	組合関係
13	「久米島産業救済施設ニ関スル請願書」(大正15年5月11日)	組合関係
14	「久米島両村ニ六ヶ所ノ共同染色所設置ノ件」	組合関係
15	「久米島紬價格並生産費調」	組合関係
16	「共同染色所費一ヶ所ニ對スル見積」	組合関係
17	「蚕業補助出願ノ理由」	組合関係
18	「久米島蚕業計画案」(6件の計画案)	組合関係
19	「両村補習學校ニ於テ久米島織物研究ニ關スル件」	組合関係
20	「孝行口説」	七五調の歌
21	「古牧養蚕技手講話 養蚕の話 具志川村役場」	講話の資料
22	「琉球特産 久米島紬 同業組合」	琉歌三首
23	「第一回組合主催 両村連合紬品評會受賞者人名表」	受賞者名簿
24	「大正十三年度各字検査成績表」	組合関係
25	「累年紬生産額表」(大正5年～12年)	組合関係
26	「紬検査方針」(1～9)	組合関係
27	「定款ノ一部製造者ノ心得」(7項目)	組合関係
28	「定款改定」(第51条第4号)	組合関係
29	「一般商況 大阪通信」	新聞抜粋か
30	「觀測」	新聞抜粋か
31	「久米島紬」	紬紹介の文書か
32	「紬製造は誠意あれ 未製品は価格を生まず」	
33	「久米島□□□三美」	紬紹介の文書か
34	「命の親 紬の由来」	紬紹介の文書か
35	「紬仲次商人は望む」	
36	「懐述」	組合関係
37	「第四回組合會招集告知」(文案か／議案・理由・報告など)	組合関係
38	「大正十三年度琉球久米島紬織物同業組合経費追加予算」	組合関係
39	「大正十四年度琉球久米島紬織物同業組合経費歳入歳出予算」	組合関係
40	「久米島紬特製品製造研究會會則」(第24条まで)	組合関係
41	「久米島特製品製造研究會々則」(第10条まで)	組合関係
42	「紬品評會並陳列販売會経費決算」	組合関係
43	「陳列販売會終了報告」(経費・出品高及賣上金額等)	組合関係
44	「染具例」	史料

御用布染物入目并二諸例

御用布染物入目并諸例之儀康熙二十九年庚午十月御檢使之時被相定置候右調綿子績例并色々染過例之儀康熙三十一年壬申八月被相定置候二付一張ニ相認如斯候間御印紙被下候様御披露奉願候以上

乾隆三十七年辛卯四月

地頭代さばくり

(読み)

御用布染物入目並びに諸例の儀、康熙二十九年庚午十月御檢使の時相定め置かれ候。右、綿子績み調え例並びに色々染め過ぎ例の儀、康熙三十一年壬申八月相定め置かれ候に付き、一張に相したためかくの如く候間、御印紙下され候様御披露願い奉り候以上

乾隆三十七年辛卯

四月
地頭代さばくり

一、香色染御用布染物入目

一、生薔薇金

四斤五十匁

一、コ一口根

武拾三斤七十匁

一、薪木

拾四束

手叶夫十八人内 男七人 女十一人
右引糸百匁ニ対スル (香色染)

一、黃染 (引糸百匁) 手叶人夫五人 内男一人 女四人

生薔薇金

八斤九十匁

薪木 武束

三、柿色染 (引糸百匁ニ付)

コ一口根

二十三斤七十匁

楊梅皮 二斤三十匁

薪木 二十束
手叶人夫二十八人 内男十四人 女十四人
四、青色染 (引糸百匁ニ付)
山灰 一斗一升
春藍 二斤百二十匁
楊梅皮 二斤三十匁
タロス 三十匁

薪木 六束
手叶人夫十三人 内男四人 女九人
五、江戸茶色染 (引糸百匁ニ付)
楊梅皮 四斤五十匁
薪木 七束
手叶人夫十四人 内男四人 女十人

薪木 四束
手叶人夫八人 内男三人 女五人
六、赤色染 (引糸百匁ニ付)
蘇木 一斤百二十匁
タロス 五十匁
薪木 四束
手叶人夫十二人 内男六人 女六人
七、紫色染 (引糸百匁ニ付)
蘇木 一斤百二十匁
薪木 四束
手叶人夫九人 内男二人 女七人
八、藍染 (引糸百匁ニ付)
春阿い 二斤百二十匁
薪木 四束
手叶人夫九人 内男二人 女七人

九、ヨシヲカ染

タロシ
椎木皮
薪木
手叶人夫
二十人 内男十人 女十人
以上

旧尚泰王時代ノ染具例（仮題）

以下染具例ハ明治二十九年吉本郡技手ノ調査ニ係ル旧尚泰王時代ノ染具例ニシテ大正十五年一月鎌倉芳太郎氏所藏ノ記録ヨリ抜録セリ

一、煤竹染 正一かナニ付以下同シ

薪木 一合二勺四
クロボーグ根 二合六勺三
泥土 三勺一
リ

二、茶色染

薪木 七勺九
クロボーグ皮 三勺六
桃皮 八勺九
泥土 五勺三
二勺一
リ 四

三、ソキ色并古銅染

薪木 一合三勺
コーコロ根 二合九勺
泥土 五勺三
二勺一
リ

四、黒染

薪木 大ツコノ葉 一合五勺
泥土 二合五勺
一合五勺

(クロサ葉ノコト)

五、黄ガラ茶并江戸茶染

薪木 七勺
桃皮 三勺六
八勺九
泥土 二勺一
リ

六、鼠色

墨
下タリ

一ト八リ
四勺ニ完

七、香色染
薪木
コ一口根
鬱金

六勺五リ
式合六勺
九勺六リ

八、アマンダ染
薪木
コ一口根
ウコン

六勺五リ
二合六勺
九勺六リ

九、青染

薪木
春藍
山灰
明礬
揚梅皮

一合五勺
四勺八リ
一合九勺三リ
五ト三リ
三勺八リ

十、藍染

薪木
春藍
山灰

七勺
六勺七リ
一合九勺三リ

十一、黃染
薪木
ウコン

五勺二リ
一合二勺六リ

十二、赤染
薪木

五勺二リ

黒豆ヲ搗漬シタル汁

十三、月日色染

蘇木
明礬
水粉
藍浪

三ト五リ
一リ五毛
武勺九リ八口
五ト六リ

(以上)

貢布カナ入目（仮題）

以下康熙三十一年壬申八月御檢使之時相定候貢布カナ入目

一、御召料一番 かすり鳴紬壹反長七尋幅一尺三寸五分

江戸茶 内 三十二ツ かセ九八 ノキ三八

黄 白ふし 六ツ 二十一ツ 六ツ 二八

計 外色 六十五かナ 六十五かナ

一、二番かすり紬一反 長巾右同

茶色 黒サ 六ツ 四十七ツ 六ツ

計 黑ブシ 六ツ 八ツ 六十一

一、三番かすり鳴紬一反 長巾右同

煤竹 黄 黑サ 六ツ 四十三ツ十八 處分通

白ブシ 黄 黑サ 九ツ二八 九ツ 七ツ四八 茶色三十九 鼠九ツ 外色二ツ

外色

一、四番かすり紬一反長巾右同

灰色 黄 内 五十三ツ 十三ツ

計 白ブシ 六十四

外一ツ色

一、五番かすり鳴紬一反 長巾右同

内 す々竹 黄 四十四ツ

白ブシ 黄ブシ 四ツ

六ツ 六ツ

外色二ツ

一、六番かすり鳴紬一反 長巾右同

内 す々竹 白サ 四十ツ

赤サ 黄 四ツ

三ツ 三ツ 五ツ

とひ色

一、御召料新品七番八番

内 地 茶色 柿色 十七かナ

かセ 白ブシ 六かナ

ノキ 同 同 赤ブシ

白ブシ

黄ブシ

一、同九番十番一反 長巾右同

内

地 茶色 六十八かナ

かセ 白ブシ

ノキ 同 同

白ブシ

青ブシ

黄ブシ 赤ブシ

三かな

二かな

二かな

一、同嶋紬一反 長巾右同

内

鼠 黑サ
計 黄 黑サ
三十三ツ
十三ツ
十三ツ
五十九かな

一、一二番嶋紬一反 長巾同

す々竹 赤サ
計 黄 赤サ
三十三ツ
十三ツ
十三ツ
五十九かな

一、三番嶋紬一反 長巾同

内

赤サ 黄色
計 四ツ 四ツ
五十九
二六六

一、四番嶋紬一反長巾同

内

黒サ 黄
計 四十六ツ
五十九
二七

一、江戸奥一番 かすり紬一反

内

宗呂色 白サ
赤ブシ
四十六ツ
八ツ

一、右同二番 かすり一反

内

柿色 赤サ
青ブシ
三ツツ
十二ツ
カセ
ノキ
白ブシ
三ツツ
外色一ツ

一、ク 三番 かすり一反

鼠 香色 内
白ブシ 黄茶色
四十五ツ
五ツ
四十二八
十四八
十八八

一、タ 四番 かすり紬一反

内
白ブシ 赤す々竹
四十七
四ツ
十一ツ
四十二八
十四八
十八八

一、タ 五番中かすり一反

内
赤す々竹 白サ
白ブシ
四十九ツ
二ツ
八ツ
ソロ色ト同シ

一、タ 六番かすり一反

内
木之葉鼠 白サ
赤フシ
四十八
三ツツ
六十一
一

一、タ 七番かすり一反

二十三ツ

黒サ

白サ

鼠
花色
浅黄
黒サ
赤ブシ

八ツ
六ツ
八ツ
九ツ
八ツ

一、タ 八番中かすり

内

す々竹
黄
白ブシ
九番かすり
四十三ツ
七ツ
七ツ

一、タ 九番かすり

内

木之葉鼠
宗呂色
白ブシ
四十六ツ
六ツ
九ツ

一、御内輪并公儀御殿 嶋紬一反巾一尺三寸五分

内

す々竹
赤サ
黒サ
白サ
計
三十五ツ

す々竹
赤サ
黒サ
白サ
計
三十五ツ

一、タ 二番 嶋紬一反

す々竹
内
赤サ
三十五ツ

外色二ツ
赤す々竹ノコト

七ツ

黒サ

白サ

一、タ 三番 嶋 一反

三十九かナ

す々竹

内

一、タ 四番 嶋紬一反

二十八ツ

す々竹

内

一、タ 五番 嶋一反

十一ツ

す々竹

内

一、タ 六番 嶋紬一反

内

す々竹
赤サ
黒サ
青サ
白サ
計
四十八ツ

す々竹
赤サ
黒サ
青サ
白サ
計
四十八ツ

一、タ 六番 嶋紬一反

内

江戸茶
赤サ
黄
三十四ツ

三十四ツ

半

一、御本丸かすり嶋紬一反	黒サ 三ツツ
江戸茶 内 四十七ツ	赤サ 二ツツ
白サ 二ツツ	黄サ 二ツツ
計 四ツツ	内 四ツツ
一、西丸中かすり嶋紬一反	外色三ツ
内 四十四ツ	赤サ 四ツツ
す々竹 四ツツ	白サ 四ツツ
計 四ツツ	黄サ 四ツツ
一、御台様中かすり一反長七尋巾尺三寸	外三ツ色
内 四十ツ	白サ 七ツツ
鼠 内 六十	黄サ 六ツツ
白サ 七ツツ	赤サ 六ツツ
計 四十八	白サ 七ツツ
一、タ二番 嶋紬壹反	黄 五十七
柿色 三十七	赤サ 八ツツ
白サ 八ツツ	黄サ 八ツツ
内 四ツツ	内 四ツツ
す々竹 四十七	赤サ 三ツツ
一、タ三番 タ壹反	内 四十七
柿色 三十七	白サ 三ツツ
黄サ 三ツツ	黄サ 三ツツ
内 四十七	赤サ 三ツツ
一、タ五番	内 四十七
一、タ四番	内 四十七
柿色 三十六	白サ 三ツツ
黄サ 三ツツ	黄サ 三ツツ
内 四十六	赤サ 三ツツ
鼠 内 五十七	白サ 三ツツ
黄 五十七	黄 五十七
柿色 三十六	柿色 三十六
内 四十六	内 四十六
鼠 内 五十七	鼠 内 五十七
白サ 三ツツ	白サ 三ツツ
赤サ 三ツツ	赤サ 三ツツ

一、タ六番 内

柿色 黄白サ 内
三十八 十三
メ

一、タ七番 御進上内 六番同様

黄がら茶 赤サ 黄白サ 計
三十三 十二
五十七 八ツ 四ツツ
メ

一、タ右八番 ク

江戸茶内 黒サ 赤サ 黄白サ
内
三十四ツ 十二ツ 五ツツ
五十七 五ツツ
メ

一、タ九番 御進上内 四番同様

黒サ 赤サ 白サ
アマンダ 内
五十七 六ツツ 九ツツ
メ

一、タ嶋紬一反 長七尋巾尺三寸

す々竹 黄サ 内
四十三 十四 二八
計

一、タ二番かすり壱反長八尋三寸五分

赤サ 黑サ 黄白サ 黑サ 赤サ
内
四十二 三ツ
四十八 六ツツ 五ツツ
四ツツ
メ

一、タ二番 定寸

白サ 黑サ 黄赤サ 鼠
内
四十二
五十七 四三ツツ
メ

一、タ右三番 嶋紬一反

赤サ 黄黑サ すす竹 内
三十二
八ツツ
メ

十
四三二二七
ハハハハハハ

一、タ 右四番 内 八尋ノ時 五十七

一、タ 右四番 内 八尋ノ時

八尋ノ時

四十二ツ

す々竹 内

黄フシ 白ブシ

三十六 九ツ
五十六 六ツ
二六八

七ツ
六十六

右八番定守

八尋三寸五分ノ時
四十七
五五八

一、タ 右五番 内

阿まんだ
赤サ 黒サ 白サ

三十六 九ツ
五十六 六ツ

十四八

八尋ノ時
五十四ツ

十一ツ

す々竹 内

四十七 三十三ツ
五十八
二六八

八尋ノ時
五十四ツ

一、九番

鼠 赤サ 黑サ 黄サ

四十二
四七二

八尋三寸五分ノ時
四十七
五六五

一、タ

右五番 内

アまんだ
三色入る時ハ
四十七

八尋ノ時
五十四ツ

十一ツ

す々竹 内

白サ 赤サ 黄がら茶

三十三ツ
四ツ
十二ツ
八ツ

十六八
二六八
四八八

八尋三寸五分ノ時
三十七
四四十

一、タ十番阿い嶋紬毫反

す々竹 内

四十一
五七四
四ツツ
五ツツ

二二三六

六十五

八尋三寸五分ノ時
四十七
五六五

一、タ 右同かすり嶋紬八尋三寸五分ノ時

一、タ 右同かすり嶋紬八尋三寸五分ノ時

四十五
五十七

二八八

かすりの時
四十七
十三
六ツ

す々竹 内

四十一
七ツ
三ツツ
三ツツ

十三八

尺時
尺時
尺時
之時
之時
之時
四四四
四四四
四十七

一、
八十一番

御用布調綿子續例并色々染過

メ 赤サ 黄々 す々 竹内

二二八
八八八

一、タ十三番かすり嶋紬

鼠內四十

香色	正績綿百メニ付香色染	十匁二分増シ
黄色	百匁付黄色染	十二匁一分四リ
柿色	百匁付柿色染	十九匁二分
青色	百匁付青色染	十六匁八分
江戸茶	百匁付江戸茶染	二十匁六分
赤サ	百匁付	四匁一分
藍染	百匁付	七匁七分

ママ
マシシママママ
シシシシシ

八十三枚
十二匁二分
十九匁三分
十六匁八分
二十匁六分
四匁一分
七匁七分
二十六匁
以上

御用布疋用

地かせ
百十八匁九リ

白紬壹反百七夕

御用布代付

一、かすり嶋紬雲かすり一反

代米 壱石九斗七合五勺

代米 壱

一
紅嶺青嶺紅嶺地一反

以下ハ七斗ヨリ九斗内外

御召料十番九番	内
さり鳴紬一反長七尋巾尺三寸五分	
臣十番之時ハ茶色九番之時ハ鼠地	
地六百拾弐ハ 茶色三十二かな	
十六ハ 白ふし 一かな	二、五番
三十二ハ 白ふし 二かな	三、四、六番
十八ハ 黄ふし 一かな	
十八ハ 青ふし 一かな	
廿八ハ 白ふし 一かな	
四十八ハ 赤ふし 二かな三中	一、二番
十八ハ 白ふし 一かな	八、九番
四百二十十九ハ 地茶色二十かな	三、七、十、十四番
計 二十七 ぬき	五、六、十一、十三番

一、御召料十番九番
かすり嶋紬一反長七尋巾尺三寸五分
但十番之時ハ茶色九番之時ハ鼠地

鼠赤サ 黄白サ ブシ 四十二

計
六十二
三二八
十八八

（翻刻）

美濟氏具志川村字西銘屋號石垣上江洲家之家譜參照

尚寧王世家 上江洲家三世 首里大屋子
萬歴四十七乙未年 盛氏宗味入道蒙 詔命蚕子飼様并桑植様及
綿子之製法相教候為久米島江被成御渡海候尤も其以前ニ茂當島
堂之大親と申者於唐傳受仕來候付綿子製法為仕由候處未細傳
無之故彼宗味入道より委細ニ致並傳蚕子飼様并桑仕立様專綿子
之製法等段々嶋中え相教格別綿子位能相成候付御両國之御用相
弁世々嶋中之為罷成候

（読み）

美濟氏、具志川村字西銘、屋號石垣上江洲家の家譜、参照

尚寧王世家 上江洲家三世 首里大屋子
萬歴四十七乙未年、盛氏宗味入道詔命を蒙り、蚕子飼様并に桑
植様及綿子之製法相教え候為、久米島へ御渡海成られ候。尤も、
其以前にも、當島、堂之大親と申す者、唐に於て傳受仕來たり
候付き、綿子製法の為、仕りたる由候處、未だ細傳之無き故、
彼の宗味入道より、委細ニ蚕子飼様并に桑仕立様並傳致し、専
ら綿子の製法等、段々嶋中え相教え、格別綿子位能く相成り候
付き、御両國之御用相弁じ、世々嶋中之為罷り成り候。

（翻刻）

尚豊王世家 （堂の大親は察度王世家ノ人也）

崇禎五壬申年、平氏酒白友寄親雲上、紬之織様并びに同下地染
め様御教え候為、言上に及び、久米代官黎氏仲地親雲上宗味ト
與ニ、久米島江御渡海成られ候。尤も、其以前より、大方は
仕りたる事候えども、細傳之無き故、何ぞの御用立ち申さず候
處、彼の友寄親雲上、段々御教えこれ有り。毎年御渡上四ヶ月
づつ、御滞留之有る候故、密細に紬之織様同下地染様傳受致し、
殊に、其時初めて、八丈嶋紬織調え、専ら御両國之御用相立ち、
其れ以前嶋中流布致し、幾百世の為、罷り成り候。

（読み）

尚豊王世家

（堂の大親は察度王世家ノ人也）

崇禎五壬申年、平氏酒白友寄親雲上、紬之織様并びに同下地染
め様御教え候為、言上に及び、久米代官黎氏仲地親雲上宗味ト
與ニ、久米島江御渡海成られ候。尤も、其以前より、大方は
仕りたる事候えども、細傳之無き故、何ぞの御用立ち申さず候
處、彼の友寄親雲上、段々御教えこれ有り。毎年御渡上四ヶ月
づつ、御滞留之有る候故、密細に紬之織様同下地染様傳受致し、
殊に、其時初めて、八丈嶋紬織調え、専ら御両國之御用相立ち、
其れ以前嶋中流布致し、幾百世の為、罷り成り候。

（翻刻）
木綿布の伝来

崇禎年間君南風
上様為 御目見上國之時列登申候 當嶋之儀其以前は木綿花作
様又は同布調様存知不申夏冬共芭蕉宇の衣裳致着候處其時君南
風を始麻氏儀間親方様え相付數月滯留之有細密ニ致傳受帰島仕
り所中之者共江相教候處流布仕永々嶋中之為ニ罷成申候（但此
時より木綿布調様相始り候）

（読み）

木綿布の伝来

君南風

崇禎年間
上様御目見の為、上國の時、列れ登り申し候。當嶋の儀、其れ
以前は、木綿花作り様、又は同布の調え様存知申さず。夏冬共
芭蕉うの衣裳を着致し候處、其の時、君南風を始め、麻氏儀間
親方様へ相付き、數月滯留之有る。細密に傳受致し、帰島仕り、
所中の者共へ相教え候處、流布仕り、永々嶋中の為に罷り成り
申し候。（但此の時より、木綿布調様相始り候。）

（読み）

（翻刻）

木綿布の伝来

君南風

（読み）

（翻刻）

桑木の植付

乾隆十三年戊辰美濟氏地頭代上江洲親雲上智英相談御在番真玉

橋親雲上得御指図村々左之通り桑木新敷相仕立させ候故所中太

粧成為罷成候

一、具志川仲渠村

二ヶ村

まつ口原

うんたツ原

一、仲地村

長たけ原

長さく原

一、上江洲西銘大田兼四ヶ村

たけち原

たけち原

一、山里村

嘉手刈村

嘉手刈村

但當嶋は綿子紬第一之御用物候故御在番御始メさはくり中にも
專出精下知方相済候雖然頃年漸々桑木憔悴虫子飼養統兼毎年御
用物調兼為及御指引事候就夫桑仕立方一廉手替無之者不叶相談
是茂惣山當請込被傳付候然者本桑老木ニ成何分手入候而茂急に
は盛生不致積急き新敷仕立無之者先様猶以及當追候筋申上右之
通り一ヶ村完模合ニ而物坪弐万二千四百五十八坪開地桑苗八万
四千三百本餘植付セ毎度走廻加下知候故漸々致盛生候尤虫子
飼立候節茂模合摘にて無親疎相渡候付與中身分仕立之桑葉取合
せ飼候故拾年成午年よりハ御用物御注文書出來増申候

（読みみ）

乾隆十三年戊辰、美濟氏地頭代上江洲親雲上智英へ相談、御在
番真玉橋親雲上御指図を得、村々左之通り桑木、新敷相仕立さ
せ候故、所中、太粧為め成り罷り成り候。

一、具志川仲渠村

二ヶ村

うんたツ原

一、仲地村

まつ口原

長たけ原

一、上江洲西銘大田兼四ヶ村

長たけ原

長さく原

一、山里村

たけち原

長さく原

但し、當嶋は、綿子紬第一之御用物候故、御在番御始めさはく
り中にも、専ら出精下知方相い済まし候。然りと雖も、頃年、

漸々、桑木憔悴虫子飼養統兼ね、毎年、御用物調え兼ね、御
指し引きに及びたる事候。夫れに就き、桑仕立て方一廉手替わ
り之れ無くは相談叶はず。是も惣山當たい 請け込み傳え付け
被れ候。

然からば、本桑老木に成り、何分手入れ候ても、急には、盛生
致さざる積り、急ぎ新敷仕立て、之無くば、先様猶以て當追に
及び候筋申し上げ右の通り、一ヶ村完つ模合にて、惣坪二万二
千四百五十八坪開け地、桑苗八万四千三百本余植付させ、毎度、
走り廻り、下知を加え候故、漸々、盛生致し候。尤も、虫子飼
い立て候節も、模合摘みにて親疎無く、相い渡し候に付き、與
中、身分仕立て之桑葉取り合せ飼い候故、拾年成る午年よりは
御用物、御注文書より出来増し候。

藍染法

乾隆十八年 紬染候加減之藍居セ様并灰差加候加減等自分造作
を以段々相試之分量取究始めて嶋中江相教永々為ニ相成候
但紬染色ハ段々有之就中藍居セ加減前々より染物役回取覺不出
來ケ間敷度々藍居セ替殊ニ紬かなには取分ケ藍染兼旁失墜多有
之候付乾隆十四乙巳年染物為稽古功者之者差登セ紺屋中頼入稽
古セ且為試紬かな等差登セ染調さセ候處抑も紬に染候加減に
て藍居セ置不申故に而候半染付不申却而洗造作ニ罷成候付無是
非染物役共了簡次第素より仕来候通に染調候故出来不出来為有
之事候依而藍居セ加減並灰差加候分量委細取究相教候故右年よ
り一同ニ宜相成為申事候

乾隆十九年甲戌年青染仕セ加減自分造作を以而段々相試始て嶋
中江相教世之為ニ相成候

但青染之儀此前より藍下地染黒ボ一皮煎上染ニ而色上仕来候
然處クロボハ依所ニ染色相替殊煎加減少し相替候得者段々色相
の善惡為有之事候依之藍下染鬱金上染ニ而相試候處殊の外此中
の青色より一段宜有之其上手隙之費成過半相減申候

以上の事口伝に依ればテカチ、グール、クロボ、桃皮の染法及
灰差加減傳初而究研の上島中紬業の益となる功に依り勢頭座敷

ノ位を授けられしと伝ふ

染色之方法

（読み）

乾隆十八年、紬染め候加減の藍居せ様並び灰差し加え候加減等自分造作を以て段々相試の分量取り究め、始めて嶋中へ相教え、永々為に相成り候。

但し、紬染色は段々之有り就中藍居せ加減前々より染め物役取り覚えがたく不出来がま敷く、度々藍居せ替え殊に紬かなに取り分け藍染め兼ね、かたがた失墜多く之有り候に付き、乾隆十四年、乙巳年、染め物稽古の為、巧者之者差し登せ、紺屋中頼み入れ、稽古させ且つ試しとして紬かな等差し登せ、染め調えさせ候處、抑も紬に染め候加減にて藍居せ置き申さず故にて候。染め付き申さず、却つて徒ら造作に罷り成り候付き是非無く、染め物役共了見次第素より仕来たり候通りに染め調え候故、出来不出来之有りたる事候。依つて藍居せ加減並び灰差し加え候分量、委細取り究め相数え候故、右年より一同に宜しく相成り申し為る事候。

乾隆十九年甲戌年、青染め仕り候加減、自分造作を以て段々相試し、始めて嶋中へ相教え、世之為に相成り候。但し青染めの儀、此の前は藍下地染め黒ボ一之皮煎じ上げ染めにて色上げ仕り來たり候。然る處クロボは所に依り染色相替わり、殊に煎じ加減少し相替わり候らへば、段々色相の善惡之れ有り為る事候。之に依り藍下染め鬱金上染めにて相試し候處、殊の外、此の中の青色より一段宜しく之有り。其の上、手隙の費えも過半相減り申し候。

以上之外、口伝に依れば、テカチ、グール、クロボ一、桃皮の染法及び灰差し加減等初めて究研の上、島中紬業に益したる功に依り、勢頭座敷の位を授けられしと伝ふ。

（媒竹染）
媒竹色ハ、コ一口根ノ根芋ヲ皮ノマ々細碎シ煮タル煎汁、又ハテカチ木ヲ皮共ニ煮タル煎汁、或ハコ一口根、テカチ木ノ混合煎汁ヲ以テ紬糸ノ纖維ニ十分ニ染着セシメ、泥土ニ浸シ、媒竹色即チ帶黑茶褐色ヲ適宜ノ色ニ染色スルヲ云フ。本島ニ於テ本染色ヲ初メタルハ、乾隆年間具志川村字西銘屋拂西殿内上江洲家ノ祖先ニ於テ、藍染方法及一般久米島紬ノ染色方法ヲ研究シ爾後貢布染料トシテ用ヒラレタルハ、染具例其他ノ旧記ニ依リ明瞭ニシテ、染色ノ堅牢ニシテ且ツ美ナルコト、現代ニ於ケル化學染料ヲ凌駕シ、広ク世人ニ嗜好セラレツクアリ。
煎汁ヲ製スルニハ、紬糸百匁ニ対スル染料トシテ、コ一口根ナレバ九斤乃至十二斤ヲ要シ、「テカチ」木ナレバ十五斤乃至二十斤ヲ定量トスルモ、コ一口根テかチ木共、可成年數ノ古キ赤色ヲ呈セルモノヲ撰ビ、多量ヲ尊ブモノニシテ、何レモ煎出ノ前ニ於テ清水ヲ以テ十分ニ附着セル土芥ヲ洗ヒ、定量ヲ四分シ細碎シテ酸化性ノナキ即チ鐵錆ノナキ鐵鍋ニ適量ノ水ト共ニ投ジ、沸騰ヲマチ少量ノ木灰ヲ入レ、二時間乃至三時間程煮タル煎汁ヲ別器ニ移シ、更ラニ水ヲ投ジテ煎出スルコト前後二回乃至三回ニシテ、新シキ残餘ノ染料ヲ四分ノ一ヅク前例ノ如ク煎出スルモノニシテ、定量ノ染料ヲ四鍋ニテ前後十回ヨリ十二回迄ハ煎出シ得ルモノナリ。

而シテ紬糸ヲ染メルニハ、予メ紬糸ヲ熱湯ニ浸シ汚物ヲ十分ニ洗滌シ乾燥シタルモノヲ、染料煎出毎ニ煎汁ヲ適當ナル溫度ヲ取り、二三分間汁ノ中ニ紬糸ヲ浸シ置キ、絞リ出し、乾燥ノ後更ラニ浸染スルコト三十餘回ニシテ恨ミナク、紬糸ノ纖維ニ染着スルヲ認メ、乾燥シタル糸ヲ二回乃至三回程泥土即チ鐵分ノ含有量ノ適當ナル泥土ニ浸シ、所用ノ色ニ染メ上ゲルモノニシテ、泥土ニ浸ス場合モ、泥土ニ浸シタル後、清水ヲ以テ水洗、乾燥ノ後、新シキ煎汁ニ浸シ乾燥ノ後、交互ニ浸染スルモノノナリ（飛白玉ヲ染メルニ糸ノ乾燥ノ度合イ等ハ、技術家ノ技術ニ

依ルモノナレバ、之ヲ略ス)

(二) 茶色、黄ガラ茶、江戸茶ハクロボ皮、桃皮、泥土ヲ以テ染色スルモノニシテ、染料ノ取扱、煮方、染糸ノ準備行為等前記煤竹色染ト同一ナリ。然レトモ本染汁煎出ニハ、桃皮八分、クロボ皮二分ノ割合ニテ混合シタルモノヲ、紬糸百メニ対シ六斤乃至八斤ヲ定量トスルモノナルモ、本染ニ於テ最モ注意ス可キハ、泥浸ノ時ニ用フル泥土ノ水ヲ混ジテ希薄ニスル度ヲ知ルニ意ヲ注ガザル可ラズ。何ントナレバ、混水セル泥土ノ濃度希薄ノ如何ニ依リ、所望ノ色ヲ出ス不能レバナリ。本染ハ往時江戸御用ニ最モ賞セラレシモノナリ。

(三) 黒染ハ、クロサ木ノ葉(大ツコ葉タラシ葉)及泥土ヲ以テ染色シ、烏ノ羽ノ色ノ如キ黒キ光澤ノアル色ニシテ、五倍子ヲ以テ染色セル黒染ヨリハ、一層美麗ニシテ染色ノ堅牢ナルコト貢布染色中最モ信用ヲ得タルモノナリ。本染色ハ、染具例所定ノ時代ニ於テハ、最初ヨリ「クロサ木」ノ葉一品染ナリシ處、貢布製造末代ノ頃明治二十二年ノ頃、貢布染役中ノ究研ニ依リ、染色ノ中途迄ハ煤竹色染ニテ下地染ヲナシ、中途ヨリクロサ木ノ葉ノ煎汁ヲ以テ染メ、後ニ於テ泥土ニ二回乃至四回浸染ス。而シテ「クロサ葉」ノ煎シ方法ハ染具例ニ於テ所定ノ量ヲ示スト雖モ、研究ノ結果黒サ葉ヲ煎スル器物鍋ニ應ジ可成多量ヲ投ジ煎ズルニ不如、泥土ニ浸ス場合ハ十分糸ノ乾燥ヲマチテ投スレバ鉄分ノ吸着力ヲ増スノミナラズ光澤ヲ失セザルモノナレバ、努メテ乾燥シタル糸ヲ泥土ニ浸スモノナリト雖モ黒染飛白ヲ染メル場合ハ餘り乾燥シタルヲ喜バザル場合アリ。何ントナレバ黒サ木葉ノ煎汁ハ鉄分ノ吸着力純々糸ノ纖維ヲ碎弱ナラシメ、秤々モスレバ飛白ノ結ビタル内部迄泥水中ノ鉄分ヲ吸ヒ込み、飛白ノ玉ノ鮮明ヲ欠カシムルコト多キ故、地染糸ヲ泥土ニ浸ス度数ヲ努メテ減ジ、尚ホ糸ノ乾燥ノ度合ニ注意シ、半乾ノモノヲ泥中ニ投ゼバ結ビタル飛白ノ内部迄鉄分ノ侵入ヲ防ギ鮮明ナル玉ヲ見ルナリ。

今日織物同業組合定款ニ、本染黒サ木ノ葉ノ煎汁ヲ妾リニ使用セシメザルハ、前記注意ヲ欠ク處アルノミナラズ、本煎汁染後ハ泥土ニ浸シ鉄分ノ吸收容易ナル為メ、黒染以外ノ煤竹染ヲナス場合ニ地染ヲ不十分ニ所定ノ染法ヲ経ザル間、泥土ヲ染着セシメ手軽ク染メ上げ為メニ変色セシムル等ノ姑息手段ヲ防止セシガ為メニ規定セザルニ止マリ、黒染ヲ為スニハ且ツ鉄分ノ染着ヲ円満ナラシムルニハ、化学染料及植物染料中、本染「クロサ」染ノ右ニ出ズル染料ヲ見出サズ。

四 黃色染ハ、染具例ニ鬱金ノミヲ使用シ、貢布染色時代中モ專ラ鬱金ノミヲ使用シタルモ、黃飛白及黃縞等変色ノ處アリシ為メ、黃飛白ヲ結ブ前、鬱金ノ球根ヲ皮共擦鉢ニ摺リ碎キ、之ヲ漬シ、絞り出シ、陰干ノ後三四回同行程ヲ繰返シタル後、桃皮八分ニクロボ皮二分混シテ煎ジタル汁ニ浸シ、所望ノ色ヲ得タル後、飛白ヲ結ビ煤竹染ニ依リ染メ上げタルモノハ変色ノ處ナク、且ツ色澤ニ於テ鬱金ノミヨリハ美ナルヲ認メタリ。仍チ織物組合ニ於テ研究ノ結果、黃染ハ專ラ前記染法ヲ獎励シツクアリ、但鬱金ヲ栽培スルニ當リテハ、褐鉄分ヲ含有スル純赤色ヲ呈スル土質ヲ撰ビ、肥料ヲ施スコトナク成長セル鬱金ヲ最モ善良ナル鬱金トス。

五、アマンダ染及香色染ハ、初メ鬱金ニテ黄色染ニ於テ記載シタル如キ行程ヲ以テ染色スルモノニシテ、香色ハアマンダ染ヨリモ浸染ノ回数ヲ多カラシメ乾燥ノ後、コ一口若シクバ蘇木ノ煎汁ヲ上染メシ、希薄ナル明礬水ヨリ通ス。

六、赤色(唐赤)ハ、蘇木ヲ以テ染料トス。本染ハ煮煎ズル器物ニ最モ注意シ、鐵器ノ鑄アル酸化作用ヲ起コサザルモノヲ用フルカ、左ナクバ土器ヲ用ユル外、銅器等ヲ用フ可ラズ。尚煎汁ノ熱汁ニ明礬ノ細片ヲ布切ニ抱ミ、輕ク二三回汁ヲ攪拌シタル後、竹切レニテ汁ヲ十分ニ攪拌セバ、水泡ニ帶青赤色ニアラ

ザル純赤色ノ呈スルヲ見テ初メテ糸ヲ浸スモノトスト雖モ、若

シ水泡ニ帶青赤色ヤ純赤色以外ノ色ヲ呈スル場合ハ、何等かノ

化合物ニ侵害セラレタルか、若シクバ明礬ノ強度ナリシかナル

故、注意ス可キナリ。而シテ煎汁ヲ前回モ新シキ煎汁ト取替ヘ、

糸ノ所望色ヲ呈スル迄デ染メルモノトス。

尙ホ本ニ蘇木ハ、蘇枋ト稱シ、其含有スル色素ハ同一ニシテ

「ブラジルウード」「ピーチウード」「サバンウード」蘇枋トア

リテ、其含有スル處ノ色素ハ空氣中ニテ酸化シ吾人ノ使用スル

赤色ヲ呈スルモノニシテ、此ノ赤色素ハ明礬、錫塗類ノ媒染剤

ニ因テ不溶解性ノ赤色物ヲ生シ、クローム塗類ニ依テ紫色乃至

葡萄酒色ヲ、鉄塩類ニ依テ紫紺色、銅塩類ニテ褐色ヲ生ズ故ニ、

其用途多ク種々ナル染色用ニ供ス。尙ホ前記最初ニ於テ明礬水

ヨリ糸ヲ乾燥ノ後通シ、蘇木ノ煎出汁ニ染メ、更ラニ赤色染料

ノ煎出汁ニ染ムルトキハ帶青赤色ヲ得、又第一塗化錫ト酒石英

トヲ以テ媒染スレバ、美麗ナル緋色ヲ生ズ、實ニ用途ノ旁キモ

ノナリ。

七、藍染

初メニ鬱金汁ヲ以テ下染シ、然ル後建タル藍汁ヲ以テ上染スル。

一、茶色染	正一かナニ付	一、煤竹染	正一かナニ付
薪木	七勺九リ	薪木	久米島ニ於テ一かナハ百七十丈ナリ
コ一口根	三勺二リ	即チ竹煤ヲ水ニ洗イタル色ナリ。	コ一口根

染具例

正一かナニ付 久米島ニ於テ一かナハ百七十丈ナリ

煤煙ノ付キタル竹ノ色ヲ云フ。

即チ竹煤ヲ水ニ洗イタル色ナリ。

薪木 売合一勺四リ

泥土 武合六勺三リ

染具例二ハ（田口シ）ト記シアリ以下略ス

正一かナニ付

薪木 七勺九リ

クロボ一皮

桃皮 三勺六リ

泥土 八勺九リ

正一かナニ付

薪木 売合三勺

コ一口根

武合九勺

五勺三リ

一、ソキ并古銅染 正一かナニ付

薪木 売合五勺六リ

大ツ葉式合五勺（クロサ木ノ葉）

黑色ハ飛色トモ烏羽色ト稱シ、烏ノ羽ノ色ノ

如キ光輝アル黒色ヲ呈ス。実ニ美ナリ。他ニ芭蕉芋若干酸化錫少量ヲ用フ。

一、黄ガラ茶并ニ江戸茶染 正一かナニ付

薪木 七勺

三勺六リ

桃皮
泥土

八勺九
式勺一
リ

薪木
ウコン

五勺二
一勺六
リ

一、鼠染 正壹かナニ付

(一名胡染ト稱シ ユーナ灰ノ代品
ニ黒ヲ用フルナリ)

壹ト分八リ完

四勺ニ完

下タリハ黒豆ヲ搗漬シタル汁

一、香色染 正壹かナニ付

薪木
コ一口根

六勺五
武合六勺

一、アマンダ染 正壹かナニ付

薪木
鬱金

九勺六
六勺五

一、正壹かナニ付

薪木
コ一口根

九勺六
武合六勺

一、青染 正壹かナニ付

薪木
春藍

七勺
四勺八

山灰
明礬

壹合九勺三
五ト三リ

正壹かナニ付

楊梅皮

七勺
六勺七

薪木
春藍

壹合九勺三
七勺

一、黃染 正壹かナニ付

一、赤染 正壹かナニ付

薪木
蘇木
明礬

五勺二
一勺六
リ

一、月日色染 正一かナニ付

水粉
藍浪

三ト五
一リ五毛

〔一〕煤竹色 煤竹色ハ、コ一口汁又ハテカ煮汁ヲ以テ、紬糸ノ纖維ニ染揚セシメ、泥土ニ浸シ、煤竹色即チ帶黑茶褐色ヲ淺ク深ク適正ノ色ニ染メ上ゲルヲ云フ。

コ一口根(或ハテカチ) (コ一口テカチハ可成多量ヲ尊ブモノナリ) 混土 本染方法ハ康熙年間茶ノ研究ニ始リテ爾後貢布染料ノ一種トシテ使用し来レルモノナリ。

コ一口根及「テカチ」ニハ各々二種アリ。一ハ俗ニ白ト云ヒ、其コ一口及テカチ特有ノ赤色素ヲ含有セザルモノニシテ、コ一口樹ニ於テハ、其蔓ノ赤黒青色ヲ呈スルニ代ヘ青色ヲ呈シ、テカチ樹ニ於テハ、其葉ノ赤色素ヲ含有スル者ハ、含有セザルモノニ比シ稍々小ナリ。故ニ一見シテ色別セラレトモ、前者ニ比スレバ後者ハ採集ノ容易ナルニ依リ、現時ハ専ラ後者ヲ使用スレトモ、其染上タル色ニ於テハ、後者ヨリ前者ハ稍々黒味ヲ呈ス。又其煤竹色ニハ二種アリ。一ハ赤味ノ多キ煤竹染、一ハ黒味ノ多キ深煤竹色ナリ。賣布ニハ比較的黒味多キ色ヲ使用ス。

*前者ハ赤味ヲ呈シ、後者ハ淺黒味ヲ呈ス

◆十四五回

コーコー根ニ於テ材料ヲ製スルニハ、採集シタル根ノ内赤色

ヲ充分呈シタルモノヲ撰ビ、細ク碎キ鍋ニ投シ、其鍋ニ満ツル迄水ヲ注入シ沸騰スルヲ待チ灰ノ少許ヲ投シ、二三時

間沸騰ヲ持續シテ煮詰メタル汁ヲ別器ニ移シ、又水ヲ注入シテ前操作ヲ返覆スル事三回ニシテ投捨シ、又新シキ根ヲ煮詰ルナリ。

可染紬糸ヲ熱湯ニ浸シ、汚物ヲ洗滌シテ前記ノコーコー根ヲ煮出ス。鍋ノ中に紬糸ヲ置キ、汁ヲ注ギ

二三分間蒸シテ絞リ、又前工程ヲ繰返スコト再三ノ後乾燥スル事五六回ノ後泥土ニ浸シ、水洗乾燥スル工程ヲ十二三回ノ後、所用ノ色ニ染メ上リタルトキハ止ム。此ノ工

程ヲ作ス場合ニハ、煮出シタル汁ニ浸染シ、後ニ泥土ニ浸シテ所用ノ色ニ染メ上リタル時ハ、必ズ最後ニ煮出汁ニ浸シテ乾燥ス。又コーコー根ノ赤色素ヲ含有シタル内ニ土質ニ依リ單仁ノ含有过大ナル故、漸々五六回ノ工程ヲ以テ所用ノ色ニ染メ上ル事アリト云フ。併シコーコー根ハ、採集ノ困難ナルト煮出スルニ少ラザル時間ヲ要スル故ニ、現時ハ採集ノ容易ナル材料ノ豊富ナル使用ノ便利ナルテかチ▲

使用ス。併シ此ノ使用ノ何レノ時ヨリ初マリタルかハ不明ナレトモ、其テかチニ於テハ皮木根何レモ使用セラレ、其内最モ色素ノ含量ト染メ上リタル色ノ美ナルハ根ニアレトモ、其使用ニ於テ島民ノ研究セザルかノ如ク何レモト木トノミヲ使用ス。其煮出シ方法及染方法ハコーコー根皮

テかチ使用ハ二百年前来使用シタルモノニシテ、近代ニ於テハ、二十四五年前大島紬布及ノ為メ後來セシ少事業家ノ大島紬染方法ニヨリ似セルヲ以テ、單ニテかチノミヲ以テ染色シタルモノナリ。往時ハ玉ノ鮮明ナラシムル為メ、テかチコーコー根ヲ併用シ、泥付ヲ田満ナラシメタルモノニシテ、染後蘇木及コーコー根ノ新汁ニテ上染ヲナシ、紬糸ノ光澤ヲ出シタルナリ。

▼テかチハコーコー根ヨリ量少、時間ヲ要スルトアルモ然ラズ。コーコー根ハテかチ染ヨリ量時間ニ於テ、約倍ノ時間ヲ要シ、泥付ニ於テ容易ナラズ。

正評 染料ノ欠乏ハ生産ニ依ルナリ。

一、茶色、黄ガラ茶、江戸茶
二、桃皮
三、クロボ皮

クロボ皮及桃皮ハ、クロボ皮ニ於テハ或ル一ツノ黄色素ヲ含有スレトモ、唯ダクロボ皮ノミヲ煮出シタルモ黄色ヲ呈セズ。其汁ノ色ハ淡黄色ナレトモ、之ニ他ノ皮ヲ投ズレバ鮮明ナル黄色ヲ呈ス。本島ノ福木ノ煎汁ヨリ美麗ナル色ヲ呈シタルナリ。

クロボ皮ニ含蓄シ居ル黄色素ハ、或ハ西印度ニ産スル桑属ノ樹木モラスティンクトアト同種類ニシテ、モーリント稱殆ンド皮ヲ剥キ取ラレ、唯ダ僅かニ該島尻村ノ山ニアルハ根ト他ノ樹木ノ煮出汁ト混合シテ染ムル輩現出セリト雖モ、未ダ精好ナル品ヲ製ス。唯一ツノ姑息手段ニ止マレトモ、今一步ヲ進メテ初メテ染ムルナリ。

併シ其汁ハ熱キヲ用ヒ、煤竹色ニ出セズ。唯一ツノ姑息手段ニ止マレトモ、今一步ヲ進メテ初メテ染ムルナリ。併シ其汁ハ熱キヲ用ヒ、煤竹色ニ購求シタランニハ、或ハ改良ノ端緒トモナラント感ス。

於テ述ベタル如ク可染糸ハ熱湯ニテ操作シ、煮出シ汁ニ浸漫シ、絞リテ乾燥シ、又其工程ヲ繰り返シ、最後ニ泥土ニ浸シ所用ノ色ニ染ムレバ止ム。併シテ前記ノ茶色ハ前ニ述ベシ如キクロボ皮桃皮ノ量ナレトモ、江戸茶ハ茶ヨリモ一層黄色ヲ呈シ、黄ガラ茶ハ茶色ヨリモ黒色ヲ呈セザルニアリ。故ニ江戸茶ニ於テハ茶色ヨリモクロボ皮ノ量ヲ増加シ、黄ガラ茶ハクロボ皮ヲ茶色ヨリモ減ジテ、浸染ノ度ヲ一二回増加シテ、泥土ニハ水ヲ混ジテ希薄ニシテ用フルノ差アルノミ。併シ今日ノ賣布ニ於テハ、黄ガラ茶ヲ染ムル場合ハ又姑息手段ヲ行ヘリ。即チ浸染ノ度ノ重ナリ、時日ヲ要スル為メ、茶色ニ於ケル工程ヲ行ヒ、泥土ニ浸水洗ノ後所用ノ色ニ応ジ鬱金ノ浸出液ニ浸シ、其何ん乾燥ス。此法タルヤ或ハ經濟ノ法ナレトモ、其強度ニ於テハ鬱金ハ元來水洗ニ脱色シ、空氣ニ変色シ安ク、購求者ノ信用ヲ贖フコトハ到底出来ズ。故ニ染色ノ經濟ヨリ云ヘバ、今後研究スペキ価値アルナリ。

正評

黄ガラ茶色ヲ出スニハ、決シテ姑息手段ヲ行ヒテハ色ヲ出スコト能ハザルモノナリ。黄ガラ茶トハ、黃金色ヲ帶ビタル茶色ニシテ、泥土ノ加減ヲ最適度ノ希薄ニスルヲ技術ノ妙ヲ得タルモノニシテ、鬱金ヲ上染ニセバトテ、真ノ黄ガラ茶色ハ得出ザルモノナリ。往時モ今日モ鬱金ヲ初メニ於テ一回位白かナニ染メ、其上ヨリクロボ皮ノ混煎汁ヨリ数回通シ、泥水ノ希薄ナルモノニ浸ス事、実ハアタルナリ。又黄ガラ茶ヲ染メルニハ、最モ希薄ナルモノニ染メルニハ、最モ要領第一ニシテ、他ノ染色ノ如キ手段ヲ要セザルモノナリ。

一、黒染 (正評クロサ葉ノコトナリ)

泥土
タラルサ一葉
該島ニ於テハ大津木葉ト云フ

タラルサ樹ニハ二種アリ。一つハ葉ノ大ナル者。一つハ葉ノ矮少ナル者トアリテ、大ナル者ハ小ナル者ニ比スレバ、單仁ノ含量僅少ニシテ、其色澤ニ於テモ大ナル差アリ。

其染色法及ビ其葉ヲ煮出ス方法ハ、コ一口根或ハテかチヲ煎出ス方法ト異ナル處ナキモ、只煮出ス際ニ灰ヲ混ゼザルノミニシテ、其葉ヲ煎ジタル汁ハ、黄赤帶茶色ヲ呈シ、其味舌ニ触ルノ初メハ渋ラ、後ニ苦味ヲ覺エ。故ニ可染糸ヲ該汁ニ一回浸シテ後其汁ヲ味フニ渋ハ薄ク苦ノ多キヲ覺エ。此レ即チ黑色ヲ呈スル、液ヲ糸ノ吸收シタルニ由於ナリ。標本ニアル即チ是レナリ。此ノ材料ヲ以テ充分ニ黒色ヲ呈スル迄染ムルニハ、先ヅコ一口根等ト同シク煎汁ノ熱キヲ糸ニ注ギ、煮出ス處ノ葉ニ上セテ蒸スコト二三回^{*}ノ後乾燥シテ泥土ニ浸シ、充分水洗シテ乾燥ノ後、又前工程ヲ繰り返ス事二十余回ノ後、所用ノ色ニ染上ゲ故ニ晴天ノ續ク日ニ於テハ五六日ヲ要シ、若シ雨天等ノアランニハ其何ん捨テ置キ、晴天ヲ見極メテ後染メ初メル故ニ、天候ニ於テ十余日ヲ費シ殊ニ冬期中北風ノ吹キ續クトキハ、泥土ハ少シモ効用セズトシテ使用セズ。此レ如何ナル迷信ナルヤハ解セズト雖モ、実驗ノ上ニ於テ斯カン事ヲ唱フルナレトモ、不肖ノ感フル處ニ依レバ、或ル一ツノ作用ニテ泥土中ニ含有スル處ノ鐵分ノ酸化ノ度ノ寒暖ニ依リテ差異アルト寒氣ヲ感スル場合ニハ、其操作ノ鈍クナリテ自然糸上ニ粗略ノ取扱ヲナスナラン。併シ前述ノ染方法ヲ以テ操作ヲ為スヤハ疑問ナレトモ、又其之ヲ使用ス方法ハ、何年以前ヨリ始マリタルヤ、又何處ヨリ来ルヤハ不明ナレトモ、かタル姑息手段ヲ行フハ決シテ彼レ等ノ單純ナル脳臍ヨリ出ズルコトナキコトハ、明瞭ナル故ニ、去ル明治三十四年十一月中、東風平間切ニ於テ、紬泥染ヲ取調べタル際、東風平間切ニ於テ染方法ヲ習得シタハ、久米島ヨリ輸送シ來リタルト同様ニ、或ハ其方法ノ那覇ヨリ輸入シタルヤニアラズヤト感フハ、該當ノ儀間村ニ旁クシテ、他村ニ少キヲ見レバ、寧口下記ノ方法ヲ用ヒザルヲ見レバ、那覇地方ヨリ輸入シタルハ疑ナキ事ト信ス。即チタラロサ一葉ヲ染ジル場合ニ小祿豊見城東風平ノ三ヶ間切ニ於ケル硫酸鉄ヲ少許リヲ混ズルト同様ニ、鍛治職ノ輔ノ爐ノ下部ニ溜

ル所ノ鉄ト砂ノ混合溶塊ノ少許ヲ混ジテ煎ジ其タラルサ一ノ汁ノ黒色ヲ呈スルモ待チテ染メ初ム。故ニ前記三ヶ間切ノ染方法ト殆ンド同様ナレトモ、其染色ニ及ボス害ハ、前者ヨリ後者ハ少ナキトス。併シ此方法ニ於テ操作ヲナシテ染メタルモノハ、其汁ノ色ハ黒色ヲ呈シ居ル故ニ、早ク染上グル様想像シテ染ムルナレトモ、其浸染回数ト云ヒ、其強度ト云ヒ、完全ナル染方法ヨリハ不結果ナルコト明カナレトモ、該島愚民ノ常トハ云ヘ、其迷信ノ度ハ捺辺ニ至リ居ルヤ計リ知ラザルナリ。故ニ市販ノ反布ニ間々使用者ノ蜜柑或ハ酢等ノ汁ノ附着シタルケ所ノ変色スルハ或ハ此レ等ノ反布ナラント感フ。

※正評
二三回ニシテ泥ニ浸ストアルモ、二三回ニテハ泥ヲ吸收セズ。

正評、田泥酢 タロサ一ハ タドロスノ語ニシテ植物名ニアラズ。往古久米島紬ノ各種色合ヲ染色スルニ、烏羽ノ如キ光輝アル黒染ヲナスニハ鐵分ノ最モ旁量ニ含有スル泥中ニクロサ木ノ葉（即チ大ツコ葉）ヲ混入シ一ヶ年以上モ腐ラシタル泥ヲ稱スルモノニシテ、此ノ黒染即チ烏羽染ハ染色最モ堅牢ニシテ且ツ強度ノ光輝アル光澤ヲ有シ、往時ノ貢布中ニモ烏羽染ハ飛色トモ稱セラレ、最モ賞美セラレシ染色ナリ。而シテ往時ハ貢布監督者ノ十分ナル監督ノ下ニ於テ、總テノ染色ヲ營ミシヲ以テ完全ナル染色ヲ見シモ、今日ニ至リテハ昔日ノ如キ注意ヲ拂ハズ。爰少誠意ナキ營業化シ手數ト注意ヲハブキタルニ基因シ昔日ノ如キ染色ヲ見ル能ハザルモノナリ。殊ニ烏羽染ハ稍々モスレバ紬糸ノ線緯ヲ碎キ、又ハ玉色ニ泥色ヲ浸入セシムル處アルヲ以テ、組合ニ於テハ此ノ染色ヲ獎励セザルモノナレトモ、往時ノ如キ方法ヲ以テセバ、久米島唯一ノ染色トモ云フ可キナリ。尚未雨天及冬期中ハ、此ノ染色ヲ中止スルガ如ク然モ無意味ニ

染色中止スルガ如クニ、調書ニ錄セルハ調査者ニ誠意ノ欠キタルヤヲ疑ハシム。要スルニ、久米島紬ノ染色ハ單ニ黒染ノミ冬期中ハ思ハシカラザルモノナルニアラズ。一般染色ニ於テ冬期及雨天ハ夏期及晴天ノ如ク運バザルハ乾燥場設備ノ完全ニ且ツ泥土ノ温度ヲ保ツ可キ製置アル工場ニ於テサヘ、夏期ハ冬期ヨリ染色ニ便ヲ感ズルニ況ンヤ。家庭工業トシ單ニ天候ト自然ヲ相手ニシ染色スル久米島ニ於テラヤデアル。大自然ノ理ニ於テモ冬ハ地氣死シ草木枯眠スト。人工化學ノ力ヲ加フルニアラザレバ氣死セル泥土ト枯眠セル植物ノ染料分ニ要スル變化ト作用ヲ知ル能ハザルモノナリ餘言セズ。

四、黃色染法

鬱金

數年以前迄ハ該島ニ培養セシモノヲ以テ材料ニ供セシガ當時ニ至リテハ製造高ノ嵩マル割合ニ培養ニ意ヲ用ヒザル為メ殆ンド材料ノ不足ヲ告ゲ用地ヨリ那霸ニ、那霸ヨリ該島ニ諭入スルニ至レリ。併シテ其輸入品ハ粉状ニシテ該島産ノモノヨリ色澤惡シク、其水洗ニモ堪エガルモノ多シ。是レ其材料ノ採集製造シテヨリ歲月ヲ経テ空氣ノ為メニ其含有色素ノ酸化セラレタルモノナリ。其染方法ハ何レモ同一ノ方法ナレトモ、該島産ノ物ハ堀取りタル球根ノ外皮ヲ剥ギ擦り鉢ニテ充分碎キ布袋ニ入レテ漉シ、其汁ニ水少許ヲ混ジ熱シテ、予メ湯洗シタル紬糸ヲ其液ニ浸シテ絞リ、又液ニ浸スコト再三繰リ返シテ、日光直射セザル處ニテ乾燥ス。輸入品ニアリテハ粉ヲ熱湯ニ浸シ、其色素ノ浸出シタル後、前述シタル如ク紬糸ヲ染メ陰干トス。元來鬱金ハ木綿、絹、羊毛ニ單純ナル操作ヲ以テ染メ得ラレシトモ、其染色ハ日光ニ觸レテ変シ易ク又石鹼及アルカリ液ニ由リテ直チニ赤褐色ニ変スルノ欠点アリ。又濕氣中ニ永ク放置スルトキハ変色スル性アリ。故ニ該當民ハ學理ニ於テ又其性質ニ於テ欺カソコトノアルヲ解シ得ザレト

モ実地ニ於テ応用シツツアリ。彼ノ紬布ノ黄色ノ飛白ヲ染

ムル場合ニハ、初二紬糸ヲ前方法ニテ染メ乾燥シタル後、

所用ノ模様ヲ糸ニテ絞リ、然ル後木炭灰ニ熱湯ヲ注ギ浸出

シタ汁ニ該糸ヲ浸シ絞ラザル處ノ糸面赤褐色ヲ呈スルニ至

ム。水洗シテ、テカチ汁ニ又タルラサ一汁ニテ黒色ニ染

織シ衣服等ニ仕立て使用スル内ニハ、種々ノ氣候殊ニ本島

ノ如キ濕氣ノ多キ土地ニテハ、益々変色スルハ理ノ當然ナ

リ。例へ該島産ノ球根未ダ空氣等ノ作用ニ侵サレズシテ

紬糸ニ染メ其染上リタル當時ハ黄色ノ鮮明ナルト雖モ、日

月ヲ経ル内ニハ必ず変色シ、水洗ニ堪ヘザル故ニ、今日ノ

不信用ヲ来シタルナラン。又殊ニ該島産ノ材料欠乏ヲ告

ゲ、輸入品ヲ使用スルニ至リ。概シテ色ノ鮮明ナラザル

ハ、濕氣ノタメ害ヲ及シタルモノナレトモ、其袋包等ハ至ツ

テ粗雑ニテ少シモ糸ヲ予防スル手段等ハナク紙包ノ併輸送

シ來レルナリ。故ニ如何ニ該島民ノ苦心シタルトテ、其送

根元ノ改良セラレザラン内ハ手段ナキモノナレトモ、染色

ノ際鮮明ニ染ムル方法ハ該島ニ於テ実験シタリ後記シアリ。

参照アリタシ。

五、香色

アマンダ染

此二色ハ貢布ノ染材料ト同シク、先づ初メニ鬱金ニテ前ニ

黄色染ニ於テ記載シタル如キ工程ヲ以テ染ム。但シ香色

ハアマンダ染色ヨリモ浸染ノ回数多キノミナリ。併シテ乾

燥シタル後、(1)ニ於ケルコ一口根ノ汁ヲ浸出スル方法ニテ

得タル液ニ黄色ニ染メタル紬糸ヲ浸染ス(此ノ方法モ又香

色ヨリハアマンダ染色ハ浸染ノ回数多シ)。所用ノ色ニ

染メ上げ乾燥ス。此染メ色ハ黄色ヨリモ日光ノ作用水洗

ノ脱色等ノ少キハ全クコ一口根汁ノ上掛アル故ナリ。

六、赤色 唐赤 (蘇枋)

明礬

本染ニ使用スル處ノ蘇木ハ黄色ニ於ケル鬱金ト同シク、數年以前迄ハ福州地方ヨリ苗ヲ取寄セ採培シテ染料ニ供シタ

レトモ、黃色ニ於ケル如ク需要ト供給ト相伴ハズ。殊ニ該樹ノ輸入地ヨリ手續キノ容易ナラザル為メ、大阪地方ヘ

輸入シ来ル材料ヲ以テ現今ハ使用スルニ至リ。今日ニテハ全島ニ於テ一本モ得ル事出来ザル有様ナリ。

其染法ハ該島ニ於テ培養シタル物ハ一モナキ故、実地取調フル事ハ出来ザリシガ、輸入品ト同染法ニ付キ爰ニハ輸入品ノミノ使用方法ヲ記載スルコトニセリ。先づ該島民ノ

実地ニ於テ定メラレタル所用ノ紬糸ニ應シテ、蘇木ヲ細片シ鉄鍋ニ投ジ、充分水ヲ満タシ熱シテ、其水ノ濃赤色ヲ呈

シ煮詰マリタル汁ヲ別器ニ移シ以テ染汁トナス。又其鍋ニ水ヲ満タシテ煮詰メタルヲ二番汁トシテ、最初ノ貯蔵シタル染汁ニ合セテ使用ニ供ス。予メ湯洗シタル紬糸ヲ染

汁ニ浸ス前ニ、明礬ノ少塊ヲ以テ其染汁ヲ攪拌シ然ル後、糸ヲ浸シテ絞リスルコト二三回ノ後、乾燥シ又前工程ヲ

反覆スルコト再三ノ後、所用ノ色ニ染上ゲ機織ス。然ルニ其染上リタル糸ノ色ハ黒味ヲ帶ビ少シモ鮮明ナラズ。

又水洗ニ於テモ脱色ス。是レ其黒味ヲ帶ブルハ、再三述ブル如ク含有シタル處ノ單仁分ノ鐵氣ニ觸レテ所謂單仁鐵ヲ生シテ黒色ヲ呈スル為メ、固ヨリ植物性ノ染料ノ光澤ナキ上ニ沈殿シ起シ居ル處ノ汁ヲ以テ染メル故ニ益々鮮明ヲ欠クルナリ。又其水洗ニ堪エザルハ、攪拌スル處ノ明礬ノ為メニ糸ニ固着スル處ノ色素ノ液中ニ於テ、既ニ不溶解性ノ沈殿ヲ起シ糸ニ浸染スル場合ハ、付着シタル物ヲ乾燥シテ染メ上ゲ、寧口塗リ付ク故ニ水染ニ堪ヘザルナリ。

化學上其材料及性質ヲ左ニ記ス。

本蘇枋ニハ其含有スル處ノ色素ハ同一ニシテ種々アリ。

即チ「ブラジルウード」「ピーチウード」「サンバンウード」

蘇枋トアリテ、其含有ス處ノ色素ハ空氣中ニ放置スレバ、

酸化シテ吾人ノ使用スル處ノ赤色ヲ呈ス。而シテ此赤色

ハ明礬錫塩類ノ媒染剤ニ由テ不溶解性ノ赤色物ヲ生ジ、ク

ロム塩類ニ由テ紫色乃至葡萄酒色ヲ、鐵塩類ニテ紫色、銅

塩類ニテ褐色ヲ生ズルガ如ク、故ニ、其用途ハ其レ等ヲ

用シタランニハ種々ナル染色用ニ供スルヲ得タリ。又材

料ヲ以テ化學的ノ染方法ハ、明礬ヲ以テ初メニ絹糸ヲ浸シ、

媒染シタル後、蘇枋ノ浸出液ニテ染ムルナリ。或ハ明礬

ト酒石英トヲ同分量ニ溶解シ、其液ニ絹糸ヲ浸シ、媒染シ

前記赤色染料ノ浸出液ニ少量ノ「タンニン」ヲ加ヘテ染ム

ルトキハ、帶青赤色ヲ得又第一塩化錫ト酒石英トヲ以テ媒

染スレバ美麗ナル紺色ヲ生ス。此ノ方法ヲ以テ該島民ノ

蘇枋ノ浸出液ニ、明礬ヲ以テ攪拌スル代リニ初メニ明礬ヲ

以テ充分濃ク浸シ、然ル後其浸出液ニテ染ムレバ、即チ不

溶解性ノ赤色ヲ紺維ヘ止ムル。故ニ乾燥ノ後水洗スルト

モ脱色ノ憂ナキノミナラズ。其色合モ又鮮明ニナレトモ、

若シ該島ノ如ク初メニ材料ヲ浸出スル際、鍋ニ鐵ヲ用フル

事故決シテ鮮明ナル色ヲ得ルコト能ハザルナリ。現今ハ

内地ニ於テモ、蘇枋ハ割合ニ高価ニテ、且ツ工程ニ時日ヲ

要シ、染メ上リタル色ハ鮮明ナラズ。例令化學的染方法ヲ

以テスルトモ、比較的水洗ニ堪ヘザル故、専ラ人造色素

ノ凡テノ試験ニ堪ユル染色方法ノ容易ナル鮮明ナル物ヲ使

用シ、本材料ヲ顧ミル者無キニ至リタルハ前述ノ理由ナル

ガ該島ノ如ク一日ノ経剤ニ顧慮セザル所ニ於テハ今日ヨリ

獎励スルトモ蓋シ効ナキガ如シ。

◎蘇木ハ住吉来苗ヲ取り寄セタルニアラズ。染料木材ヲ取寄セタルモノナリ。蘇木ハ久米島ニ適セズ、往古試植ヲ試ミシモ成長セズ。

◎久米島ニモ、今尚千斤内外ノ所有者及ビ山ニモ多少個人ノ所有アリ。

●七八回ノ後

◎蘇木染ハ、決シテ水洗ニテ脱色スルニアラズ。

七、藍染 鬱金

ウコンハ、アルカリ性ニヨリテ、赤褐色ニ変ズ

藍

一、初メニ鬱金汁ヲ以テ下染ヲナシ、然ル後ニ建テタル藍

液ニテ上染メヲナスモ、美麗ナル青紺色ニハナラズ。然シ

普之レテ善シ。

一、外國染料ノ塩基性ナルマラカイトグリーンナル染料ヲ

使用スルヲ適當ナラン。紺糸ノ量百分ノ二或ハ百分ノ五

分量ヲ以テ適度トス。

児玉技師ノ調査

五培子ハ黒紋付染用

煎汁ニテ染ム

五培子ハ久米島ニ產生ス。

博物館紀要執筆規定

- 1 誌名：沖縄県立博物館紀要 BULLETIN OF OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM とする。
- 2 目的：本誌は広く自然、歴史、民族、考古、美術工芸、教育普及等に関する原著、短報、資料紹介、論文紹介等の研究成果を公開する事によって県民の博物館についての関心を高め、理解を深める。また、この紀要を通して国内、国外の博物館職員や研究者との交流を深める。
- 3 執筆者：博物館職員及び博物館職員との共著に限る。
- 4 別印：原著については1論文につき30部の別刷を無料で進呈する。それ以上必要な場合の超過分は著者負担とする。

沖縄県立博物館紀要

第26号

2000年3月31日発行

編集・発行 沖縄県立博物館

〒903-0823 那覇市首里大中町1-1

TEL (098) 884-2243

FAX (098) 886-4353

印 刷 (有)ドリーム印刷

BULLETIN OF THE OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM

No. 26

2000

CONTENTS

Masayuki MAEDA : People with Vision Problem and Museum Access	1
Yoshiharu YONASHIRO : Notes on the Breeding <i>Zosterops japonica</i> in Chinen High School of Yonabaru Town, Okinawa Prefecture	21
K. TAKEHARA,H.IKENAGA,M.KINJYO, Y.TOGUCHI,T.KINJYO and M. SHOYAMA: Interesting Birds Records that were Observed recently in the field on Okinawa Prefecture, Given Medical Care by Okinawa Zoo and Specimen Owned by Okinawa Prefectural Museum	27
C.MIYAGI, and K. TAKEHARA, : Flora and Plants of the Flying Fox Sueyoshi Park in Naha - City	47
Etsuko IHA : The practices of the Educational Activity for the Students of Senior High School	85
Ken SONOHARA : A Concise History of the Protection of Cultural Properties by the Okinawa Prefectural Government:Covering the Preservation Activities from Showa Era to the Government of Ryukyu Islands Period.....	113
Yosiaki NAKASOKO : Museum Workshop : Making a Sansin	157
Ken SONOHARA : In Relation to Sanshin Research in Hawaii	173
Rieko TARAMA and Tomoko KIKUGAWA : Evaluation on Research from the Students of Senior High Schools	183
Ichiko YONAMINE and Youko YAMADA : Nine Historical Records Concerning <i>Kumejima-</i> <i>Tsumugi</i> Included in Documents of YOSHIHAMAS	219 (1)